

紀要 第38号

(論文)

- 岩手県沿岸地域の大木8a式土器について
－浜川目沢田I遺跡の資料から－ 17～40
須原 拓

- 東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（4） 17～40
金子 昭彦

- 岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（3） 41～58
米田 寛・高橋 静歩・河本 純一

- 岩手における土師器製作技術の研究 59～78
福島 正和

- 江戸の南部屋敷（2） 79～92
－盛岡藩南部家江戸上屋敷の研究2－ 中村 隼人・滝尻 侑貴・野田 尚志

(研究ノート)

- 県内出土の縄文土器胎土について（5） 93～102
河本 純一

- 竪穴建物に伴う外延溝（3） 103～118
－古代陸奥国和我・稗縫・斯波郡域の在り方－ 山川 純一

- 盛岡松尾神社所蔵「杜氏職由緒」を読む 一一一〇
吉岡 由哲

平成31年3月
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

序

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、出土資料の整理と記録保存を目的として調査報告書を刊行してまいりました。

また、これら資料の活用を図るため普及啓発事業や考古学関連分野の調査研究にも努めています。昭和56年以降、研鑽の成果を広く公開するために紀要を刊行してまいりましたが、このたび第38号を発刊する運びとなりました。

本紀要には、論文等8編を収録いたしました。これらは、職員が野外の発掘調査や室内整理、報告書作成などの諸業務の合間に、個々の研究成果をまとめたものであります。本書が学術研究の基礎資料として、また地域史や社会教育の資料として広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、紀要の作成にあたり、ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例　　言

- 1 この紀要は、埋蔵文化財の調査及び研究事業の一環として、考古学及び考古学関連分野の研究を推奨し、考古学をはじめとする学術振興に寄与するとともに、埋蔵文化財保護思想の普及を図ることを目的として作成したものである。
- 2 本紀要には、論文5編、研究ノート3編を収録している。
- 3 引用図面は、各執筆者がそれぞれ許可を得て掲載している。
- 4 本年度の編集委員は、次のとおりである。

編集委員 主任文化財専門員 阿 部 勝 則

編集委員 文化財専門員 菊 池 貴 広

編集委員 文化財調査員 野 中 裕 貴

岩手県沿岸地域の大木8a式土器について

-浜川目沢田I遺跡の資料から-

須原 拓

山田町に所在する浜川目沢田I遺跡から出土した縄文土器を対象として、岩手県沿岸地域の大木8a式土器の特徴をまとめる。具体的には、深鉢と浅鉢とを器形で細分し、その器形ごとに口縁部文様と胴部文様の特徴を抽出した。その結果、各器形で文様が異なること、また文様を基準として時期変遷をみていくと、器形によって出現時期や盛行する時期が異なることが分かった。

1.はじめに

大木8a式土器（以下、大木8a式）は山内清男氏によって提唱された縄文時代中期前葉の土器型式である。県内では北緯40°以南がその分布域で、1970年代から紫波町西田遺跡、盛岡市大館町遺跡などで、まとめた資料が出土している。土器の特徴については、山内氏以降、『縄文文化の研究』（丹羽1981）、『縄文土器大観』（丹羽1989）、『日本土器辞典』（丹羽1997）、『総覧縄文土器』（中野2008）などに示されているが、分布域の中心である福島県、宮城県から出土した資料で語られることが多い。しかし大木8a式は分布域が広く、器形や文様に地域性があることが多くの研究者により指摘されており、県内資料と上記の文献に示された資料とを比べても、特徴が異なることが見て取れる。岩手県内については主に内陸の遺跡の大木8a式を基に熊谷常正氏（熊谷1989）や、神原雄一郎氏により（神原2004・盛岡市教育委員会2008）、その特徴や時期変遷が提示されている。

2012年以降、岩手県沿岸地域では、東日本大震災からの復興事業に関連した発掘調査が増加した。そしてそれに伴い、沿岸地域でも大木8a式の出土事例が増えている。県内では、沿岸地域で大木8a式がまとまって出土する事例は少なかったので、出土事例の増加は沿岸地域の大木8a式の特徴を知る上で意義が大きい。本稿では、昨年度、報告書が刊行した山田町浜川目沢田I遺跡（岩文振理2018）の大木8a式を資料とし、県内沿岸地域における大木8a式の特徴についてまとめ、またその特徴から時期変遷や地域性の抽出を試みる。

2.浜川目沢田I遺跡について

浜川目沢田I遺跡は山田町大沢字浜川目に所在する。山田湾の北岸から約200m、低い丘陵から続く斜面と低地に立地しており、縄文時代中期の遺跡としては、やや特異な地形に立地する。

平成26年度の発掘調査で、中期前葉から末葉までの堅穴住居跡24棟、土坑43基（一部晩期を含む）を確認した。大木8a式は、1号住居跡と包含層（主にV層）からまとめて出土しており、特に包含層からは膨大な量の大木8a式が出土している。ただしこの包含層は中期前葉から末葉の遺構群の上に堆積しており、そのため出土した土器は原位置をとどめられない可能性が高い。したがって土器については、遺構の埋土一括資料や出土層位による層位学的な方法ではなく、あくまで型式学的な方法で分類している。

3.器種と各器種の器形

浜川目沢田I遺跡では、大木8a式の器種は深鉢と浅鉢がある。また器形の特徴から深鉢は3種（深鉢A類・深鉢B類・深鉢C類）（註1）、浅鉢は2種（浅鉢A類・浅鉢B類）に細分することが

できる（第1図）。

深鉢A類は、所謂「キャリバー形」の器形で、口縁部や胴部の膨らみなどから、さらに細分できる。口唇部形態は波状口縁（2か4単位）と平縁がある。また口唇部に大型突起（把手）が付されることがある。

深鉢B類は、胴部上半が外へと開き、口縁部でさらに大きく外反する器形である。口縁部の外反や胴部の膨らみでさらに細分できる。口唇部形態は波状口縁（2か4単位）と平縁がある。また深鉢A類と同様、口唇部に大型突起（把手）が付されることがある。

深鉢C類は、胴部上半が大きく膨らみ、口縁部は内湾か、内側に屈曲する器形である。口唇部形態は波状口縁と平縁があるが、平縁が主体である。胴部下半のすぼまり具合で器形を細分できる。

浅鉢A類は、逆台形状で、ほぼ直線的に外へと大きく直線的に開く器形である。口唇部形態は、確認できるものは平縁のみである。

浅鉢B類は、胴部は大きく外へと開き、口縁部は内湾か、内側に屈曲する器形である。口唇部形態は平縁である。

文様は、深鉢、浅鉢どちらも、口縁部文様帯と胴部文様帯とに、それぞれ施文される（後述するが、深鉢は頸部文様帯もある）。次に、深鉢、浅鉢の文様を各器形の文様帯ごとにみていく。

4. 深鉢A類について

(a) 口縁部文様（第2図）

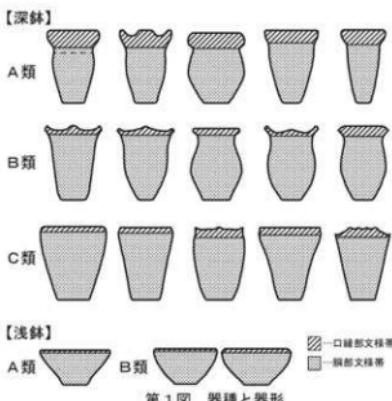
口縁部文様帯の上下端に、横位の隆帯か沈線を巡らせ、文様帯を区画する。地文として単節繩文が施文されるが、文様は地文のみということではなく、地文の上には、繩文原体押圧文（圧痕）、隆帯、沈線のいずれかで加飾される。

繩文原体押圧文による文様には①～⑦がみられる。

①や②は、繩文原体押圧文による、横位の弧状文や横位の梢円形区画を連続する。また③～⑤では繩文原体押圧文に隆帯を加えて、波状文や山形状文が描かれる。⑥は継位の繩文原体押圧文が連続して巡る。⑦は横位の波状に巡る隆帯に繩文が施文される。

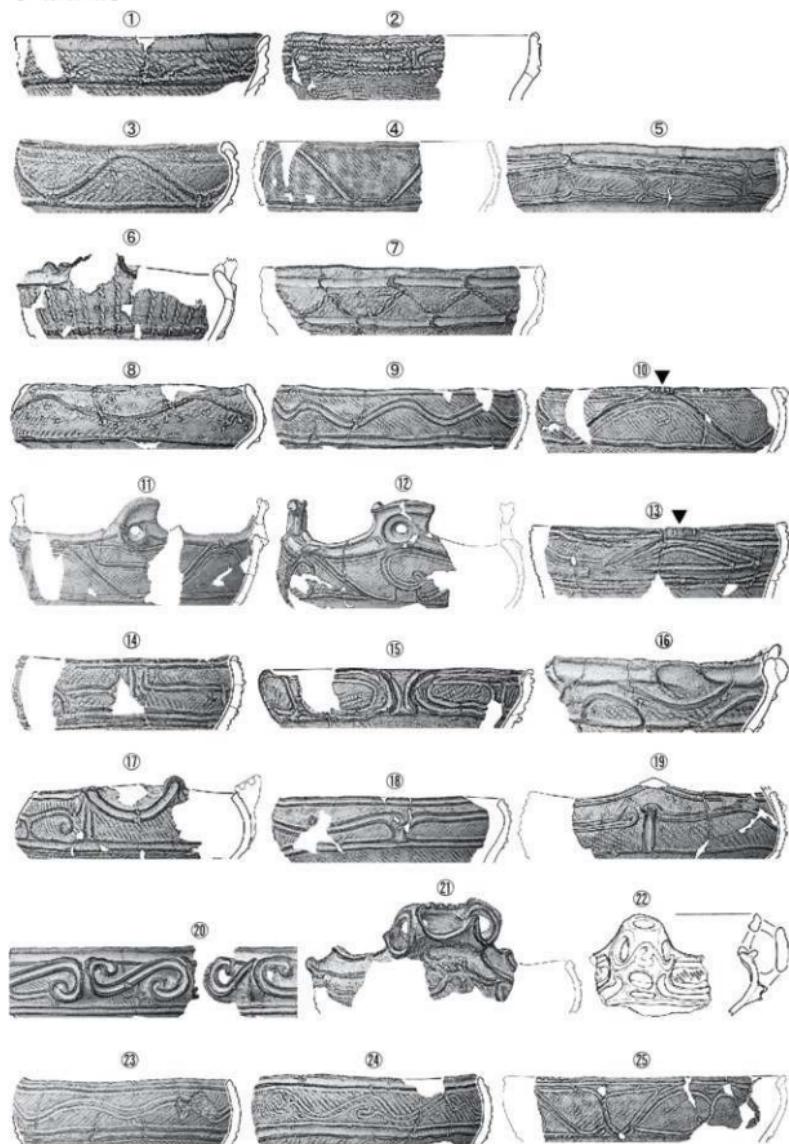
隆帯による文様は⑧～⑯がみられ、非常にバラエティーに富んでいる。なお施文される隆帯は1条か2条平行のどちらかである。

⑧・⑨は隆帯による波状文が横位に展開する。⑩～⑯は山形状文を上下交互に展開し、隆帯の脇には沈線が施文される。また山形状文の上下端には継位の刻みや押圧文を加えた、梢円形の小さな突起（⑩・⑯の「▼」）が付くことが多い。⑭はクランク状文が横位に連続する。⑮は隆帯で、文様帯を4単位に分割した梢円形区画が並ぶ。⑯は短い弧状文が文様帯の上下端に連続する。⑰も⑯と同様な文様であるが、隆帯は2条平行で、また端部は渦巻状を呈している。⑯・⑰は⑨に類似するが、波状文の端部が小さい渦巻文を呈し、その渦巻文から短沈線が垂下している。また深鉢A類には⑯～⑲のような大型の把手や突起が口唇部や口縁部に付くことがある。



第1図 器種と器形

【口縁部文様】



第2図 深鉢A類の文様 1

岩文板埋 2018 第689集を加筆・修正

沈線による文様は㉙～㉝がみられる。沈線は1条か2条平行のどちらかであるが、2条平行が多い。文様の意匠は隆帶による文様とはほぼ同じである。㉙・㉚は沈線による波状文が横位に巡り、文様の意匠は⑨に類似する。㉛は波頂部下で、沈線が曲線状文を描く。㉝は不整な三角形が横位に並ぶ文様である。

(b) 胸部文様（第3図）

地文として単節繩文が施文される。ただし底部周辺にまでは及ばないものが多い。また施文される繩文は、口縁部文様帶の地文とは異なる原体か、また同じ原体でも口縁部とは異なる方向に施文されることが多い。

文様は、地文のみ（㉞）が主体で、地文の上に隆帶や沈線で文様を加飾するものは比較的少ない。文様の種類も口縁部の文様と比べると多くない。

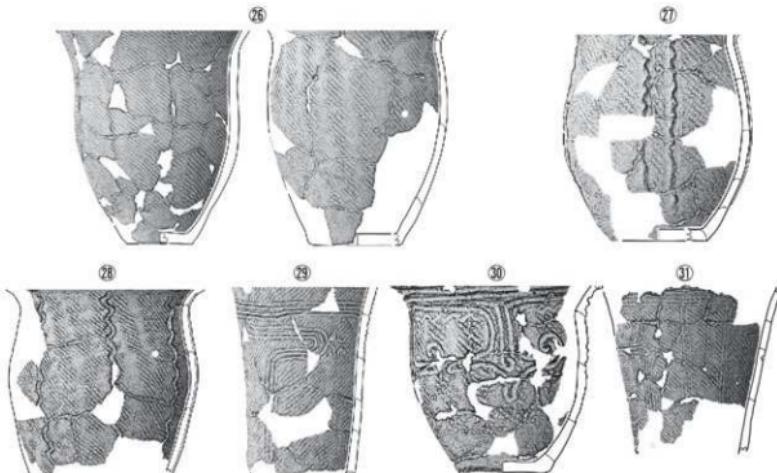
隆帶による文様は㉟のみ確認した。2条平行の波状文を縱位に垂下する。

沈線による文様は㉙～㉛がある。沈線は1条から3条が平行する。また口縁部文様帶との境には複数条の沈線が横位に巡り、両者を区画する（㉝～㉛）。

㉙は文様の意匠は㉚と同じで、隆帶を沈線に置き換えている。㉚は上部に口縁部とを区画する3条平行の沈線が巡り、胸部上半は3条平行の沈線が大きく蛇行しながら、胸部下半で垂下する。㉛は短い楕円形や矩形、波状が連続する。㉝は3条平行の沈線が縱位に施文されているが、胸部中位で沈線による渦巻文と大木8b式の特徴の一つである「有棘文」（高橋1982）に類似する文様が施文されている。

以上の口縁部文様（①～㉙）と胸部文様（㉚～㉛）とが、それぞれ組み合わさせて、深鉢A類の器面全体の文様を構成する。また口縁部文様帶と胸部文様帶との間に「頸部文様帶」がある場合がある。この頸部文様帶は上下端を沈線で区画し、区画内は無文あるいは地文のみである。

【胸部文様】



第3図 深鉢A類の文様2

岩文版権 2018 第689集を加筆・修正

5. 深鉢B類について

(a) 口縁部文様（第4図上）

口縁部文様帯は、深鉢A類と比べて幅がかなり狭くなる。また地文として縄文は施文されない。

文様は、沈線や隆帶が施文されるが、種類は少ない。また波状口縁と平縁で文様が異なる。

㊂～㊅は波状口縁に施文される文様で、口縁部全体が肥厚する。㊃はその肥厚部に幅広の沈線を沿わせ、波頂部下には円形の崖み（円文）が施文される。㊄は口唇部が外側へと傾き、口唇部に円形刺突文が巡る。㊆・㊇は㊃と同様な意匠であるが、波頂部下には円文でなく、渦巻文が描かれる。

㊈～㊊は口唇部形態が平縁を呈するものに施文される文様である。㊉は縄文原体押圧文を加えた隆帶が横位に巡る。㊊は二段に巡らす隆帶に細い刻みが施される。㊋は隆帶による横S字状文が付き、㊌には横S字状文に細い隆帶による波状文や沈線を追加する。㊍・㊎は文様帯の上下端に隆帶を巡らせ、文様帯を区画しており、その下端の隆帶には1単位から4単位で上端へと突起状に肥厚する。そして㊏は隆帶間に縦位の短沈線を充填、㊏は無文である。また大型突起や把手が付くものも見受けられる（㊏）。㊏は隆帶による波状文が口唇部直下に巡る。

(b) 脊部文様（第4図下）

口縁部文様帯が狭いため、脣部文様帯は広くなる。また地文として単節縄文が施文される。

文様は、地文のみ（㊑）もあるが、地文の上に他の文様で加飾するものの方が多い。㊒は隆帶と縄文原体押圧文が施文される。㊓～㊔は沈線で弧状文や波状文などを描いている。またこの場合、沈線は脣部上半のみ施文されるもの（㊑・㊒）と脣部全体に及ぶもの（㊕～㊗）がある。

沈線が脣部上半にのみ施文される文様は、基本的に横位に展開する。複数条の沈線で脣部上半を区画し、その区画内に波状文（㊓）、横位の弧状文（㊔）が連続する。

沈線が脣部全体に及ぶ文様は、脣部上半には文様が横位に展開し、脣部下半は縦位に沈線を垂下するもの（㊏）があり、または脣部全体の文様自体が縦位と横位合わせて展開するものも見受けられる。その場合、沈線は直線や波状文が主体であるが、多重の指円形文（㊏）や渦巻文（㊏）、また「有棘文」のような文様（㊏）が追加されるものもある。また少ないと、隆帶が付くもの（㊏・㊏）もある。

以上の口縁部文様（㊂～㊊）と脣部文様（㊑～㊗）とが、それぞれ組み合わさせて、深鉢B類の器面全体の文様を構成する。深鉢A類と比べて、口縁部文様の種類は少ない。一方、広い脣部文様帯には地文に加え、沈線などが施文されることが多い。

6. 深鉢C類について

(a) 口縁部文様（第5図上）

口縁部文様帯は、深鉢B類と同様に幅が狭い。また地文として単節縄文は施文されない。文様の種類は少なく、また深鉢B類と共通する文様も見受けられる。

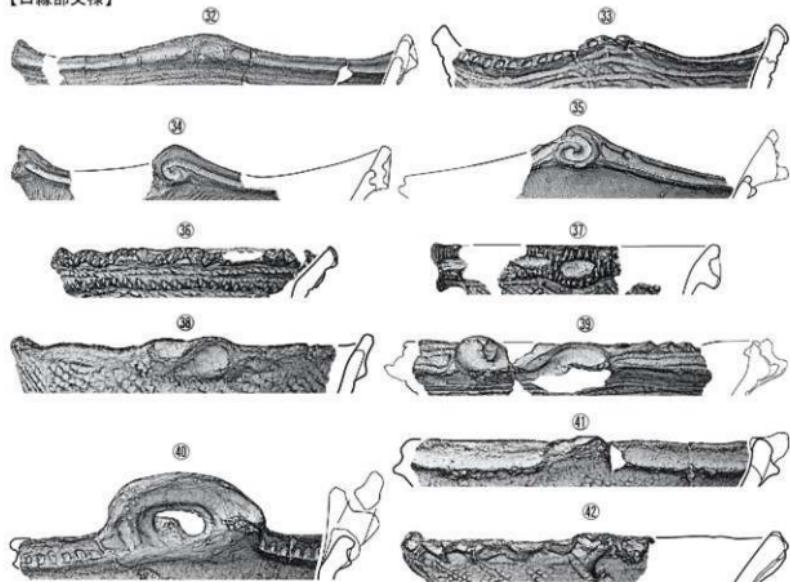
口縁部下端に隆帶や沈線を巡らせ、文様帯を区画するものが多い。そして㊏・㊏は区画内に短い縦位の隆帶を、㊏は半裁竹管状工具による刺突文を充填する。また、口唇部から口縁部にかけて耳たぶ状の突起が付く。

㊏・㊏は深鉢B類の㊏・㊏と共に通する文様である。下端の隆帶から突起状に肥厚させるもの（㊏）、この肥厚部が縦位の把手となるもの（㊏）がある。

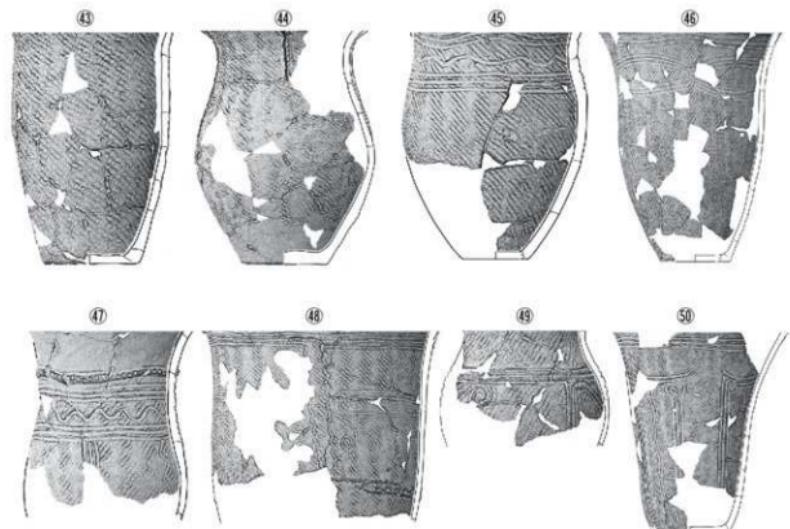
(b) 脣部文様（第5図下）

深鉢B類と同様、脣部文様帯は口縁部文様帯が狭い分、広い。また地文として単節縄文が施文されるが、地文のみというものはなく、沈線か隆帶で加飾される。この場合、沈線が主体で隆帶は少な

【口縁部文様】



【脚部文様】



第4図 深鉢B類の文様

岩文版埋2018第689集を加筆・修正

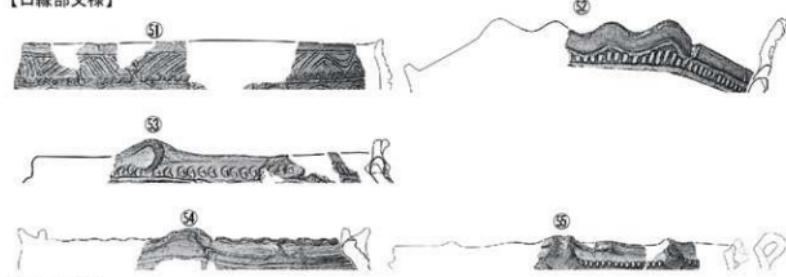
い。また隆帯や沈線による文様は胴部上半のみ（⑤～⑧）と、胴部全体に及ぶもの（⑨・⑩）とに分かれる。

胴部上半のみ隆帯や沈線が施される場合、文様は横位に展開する。そして弧状文（⑥）や梢円形文（⑦）、山形文（⑧）が連続する、また短い沈線が垂下する（⑤・⑧）文様が見受けられる。

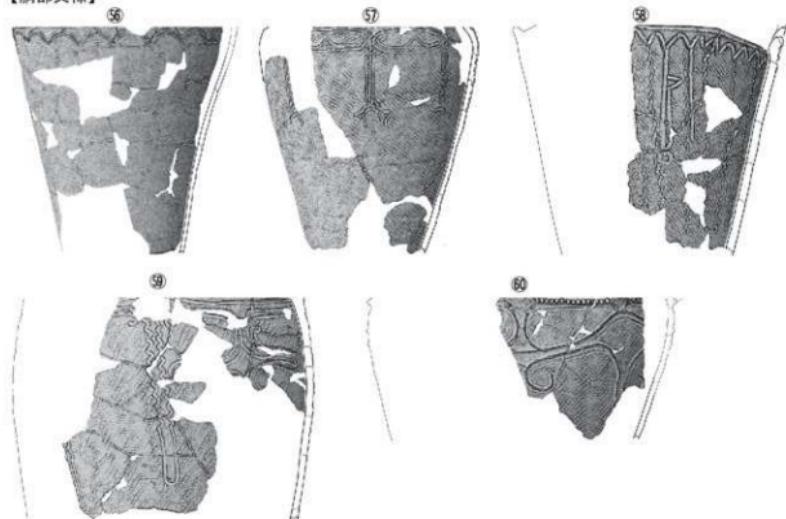
胴部全体に隆帯や沈線が及ぶ文様は、胴部上半の文様が胴部下半まで伸びる（⑨）、また稀に胴部全体で縱位に展開する文様（⑩）が見受けられる。

以上の口縁部文様（⑤～⑩）と胴部文様（⑪～⑭）とが、それぞれ組み合わさって、深鉢C類の器面全体の文様を構成する。口縁部、胴部とともに深鉢B類に共通する文様が見受けられるが、口縁部の耳たぶ状突起や胴部の沈線文様など、深鉢B類にはない文様もある。

【口縁部文様】



【胴部文様】



岩文振理 2018 第689集を加筆・修正

第5図 深鉢C類の文様

7. 浅鉢A類・B類について

(a) 口縁部文様 (第6図上)

口縁部文様帯は、浅鉢A類は口唇部直下、浅鉢B類は内湾ないし内側に屈曲した範囲で、どちらも狭い。地文ではなく、浅鉢B類は隆帯や突起で文様帯が4単位に区画される。

文様は、浅鉢A類は、横位に沈線(⑪)か、2条の隆帯(⑫)を巡らせる。また口唇部に耳たぶ状の突起(⑬)が付くものもある。浅鉢B類は、区画内に繩文原体押圧文を横位に施文する文様(⑭・⑮)、縱位の短沈線を1段(⑯)ないし2段(⑰)に充填する文様、また棒状工具を用いた円形刺突文を列状に巡らす文様(⑯)がある。

(b) 胸部文様 (第6図下)

胸部文様帯は浅鉢A類、B類ともに広い。文様は無文(⑱)か地文(単節繩文)のみ(⑲)が多いが、地文の上に文様が加飾されるもの(⑳～㉓)もある。地文の上に加飾される文様は、隆帯と繩文原体押圧文(㉐)、隆帯と沈線(㉑)と沈線のみ(㉒・㉓)とがある。隆帯による文様は、胸部上半は横位に巡り、胸部下位で垂下する。

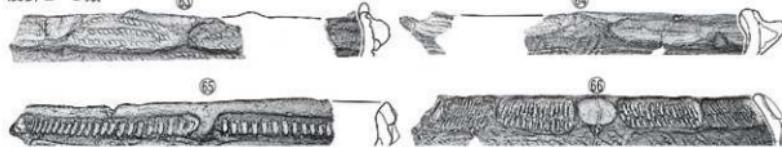
沈線は胸部上半のみで、横位に展開する。文様は弧状文(㉔)や短い波状文(㉕)がある。

以上が浅鉢A類・B類の口縁部文様帯、胸部文様帯、それぞれの文様の特徴であり、口縁部文様(⑪～⑯)と、胸部文様(㉐～㉓)とが組み合わざって器面全体の文様として構成される。文様は深鉢と同様に隆帯や沈線が施文されるが、文様の意匠は異なる。また浅鉢2種の文様には大きな違いがないのも特徴である。

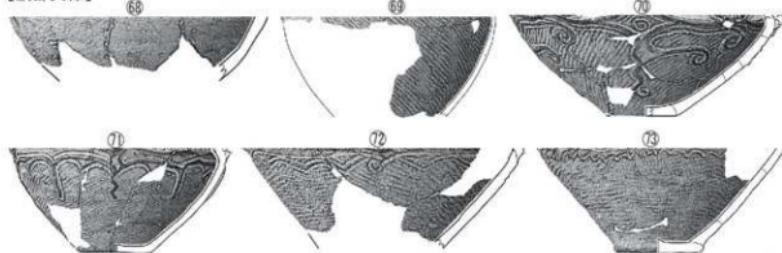
【口縁部文様】



【浅鉢B・C類】



【胸部文様】



岩谷理 2018 第689集を加筆・修正

第6図 浅鉢の文様

8. 文様の変遷

浜川目沢田 I 遺跡から出土した大木 8 a 式について、深鉢、浅鉢の各器形にみられる口縁部文様と胴部文様をみてきた。次にこれらの文様を施文した土器の時期的な位置付けについてみていく（註 2）。大木 8 a 式は時期で 2 細分されることが多く、その際、特定の文様が時期のメルクマールとなっている。

大木8a式の前時期である、大木7b式は、文様に縄文原体押圧文が多用され、この文様をメルクマールとすることが多い（註3）。したがって、大木8a式にみられる縄文原体押圧文は、大木7b式から引き継いだ文様の一つと推定され、その文様が施される大木8a式は古段階に位置付けられる。

また大木8 a式の次時期である、大木8 b式は、隆帶や沈線、または隆沈線による渦巻文を施文するのが特徴である。この渦巻文が、大木8 a式にみられる円形や渦巻状の曲線状文から変化したと仮定すれば、大木8 a式の新しい段階（新段階）にはそれらを含めた隆帶や沈線を施文するものが位置付けられる。このように、大木8 a式の文様は大木7 b式にみられる繩文原体押圧文を引き継ぎ、それが隆帶や沈線による文様へと変化、盛行をし、また渦巻文に変わることで、大木8 b式へと移行したことが想定される（第7図左）。

この他に縄文原体押圧文と隆帯とを両方施文する文様（③～⑤など）や、波状文や曲線状文が主体であるが、部分的に渦巻文や「有棘文」（高橋1982）に類似する文様が付くものがある。すなわち「大木8a式古段階」と「大木8a式新段階」、または「大木8a式新段階」と「大木8b式古段階」両方の文様を施文した土器である。これらの土器は、次時期の特徴となる文様を有していることから、前者は大木8a式新段階、後者は大木8b式古段階に位置付けることができるが、前者はまだ文様の主体が縄文原体押圧文であり、また後者は渦巻文が主体でない上に、器形もまだ大木8a式の特徴を有しているので、どちらも古い時期の特徴が強い。そこでこれらの土器の位置付けを考えるならば、大木8a式の古段階と新段階、それぞれを前半と後半に分け、大木8a式を4段階に時期区分し、上記の前者は大木8a式古段階の後半に、また後者は大木8a式新段階の後半に位置づける。

第7図右にはこれまでみてきた文様の時期的位置づけを示した。文様によっては複数の時期に及ぶものもある。次にこの第7図を基にして、深鉢・浅鉢、それぞれの器形の変遷を概観する。

(a) 深鉢A類の変遷 (第8図)

器形は、大木7 b式にみられる、やや長胴形で口縁部が外へと開く器形（1・2）が、大木8 a式

土器型式	メルクマールとなる文様	浜川目沢田I遺跡にみられる文様
大木 7b 式	縄文原体押圧文	
大木 8a 式 古段階	縄文原体押圧文 + 隆帶、沈線	前半 ①② ⑥⑧ 後半 ③～⑤ ⑥？ ⑦？ ⑯ ⑯ ⑭ ⑫～⑯ ④ ⑩ ⑬ ⑮ ⑯ ⑰？
大木 8a 式 新段階	隆帶、沈線 によるモチーフ (クランク状文、波状文、曲線状文など)	前半 ⑥？ ⑦？ ⑧～⑪ ⑬～⑯ ⑭～⑯ ⑯～⑯ ⑯～⑯ ⑯～⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ ⑯ 後半 ⑫ ⑯～⑯ ⑯ ⑯～⑯ ⑯
大木 8b 式 古段階	隆沈線 による 満巻文	

第7図 文様の時期的な位置付け

古段階に入り、所謂「キャリバー形」（3・5・6）へと変化したと推測する。また古段階には、口縁部が直立気味の器形（4・7）も残る。器形は大木8a式新段階にも大きな変化はなく継続するが、新段階後半で、胴部が顕著に伸びるもの（12）が出現する。これに類似する器形は大木8b式にも見受けられる（16・17）ので、次時期へと器形が引き継がれていることが窺える。

文様は、大木7b式（1・2）にみられる繩文原体押圧文が施文され（3・4）、また文様の意匠も類似する。大木8a式が大木7b式の文様を引き継いでいることが窺える。古段階後半に入り、繩文原体押圧文に隆帯が加わり、文様の種類が増える（5・6・7）。次の新段階前半では、繩文原体押圧文が消え、隆帯や沈線による文様に変わるが、口縁部文様の意匠そのものは、古段階後半と変わらない。（例えば5と8・9、6と10、7と11）。一方で胴部文様は地文のみが多い。新段階後半になると、口縁部文様で、文様の端部に隆帯による渦巻文が付いたり（12）、また主体となる文様の脇に小さく沈線で渦巻文が描かれる（14・15）など、渦巻文が現れるようになる。また胴部文様は、地文のみだけでなく、沈線で加飾され、その一部に渦巻文が描かれるもの（13）も見受けられる。大木8b式になどても、深鉢A類は12と16とを比べても、文様、器形ともに類似する点が多く、また15は大木8b式新段階の17と類似点が見受けられる。したがって大木8a式から大木8b式へと器形や文様が引き継がれ、長く継続していったものと考える。

（b）深鉢B類の変遷（第9図）

器形は、大木7b式にみられる、口縁部が大きく外反するもの（1）や長胴形で口縁部が外へと開くもの（2）から変化したと推測する。1の器形は、大木8a式古段階に入り、口縁部形態は大きく変化せず、胴部は膨らみをもつ。この器形は、新段階に入っても大きく変化せずに継続される。2から引き継いだ器形は、古段階では確認できなかったが、新段階前半で、口縁部はそのままで、胴部が膨らむ器形が見受けられる。それらは新段階後半で胴部下半が膨らむもの（11）や、また直立気味（12）へと変化するようである。大木8b式古段階でも、口縁部文様が㉗や㉘に類似するものがあり、文様が継続するが、胴部の器形は変化する（14・15）。

文様は、大木7b式の文様が古段階後半にまで引き継がれているが、隆帯による波状文（3）や沈線による弧状文（4）が加わり、大木7b式では見られなかった文様に変化する。そして新段階前半になると、文様の種類が増加する。口縁部は㉗・㉘・㉙～㉛の文様が施文されるようになり、また胴部は地文に加え、胴部上半に沈線で文様が描かれる。新段階後半では、口縁部文様に渦巻文が施文され（㉜・㉝）、また胴部は沈線が胴部下半にまで及ぶようになり、その一部に渦巻文が施文される。

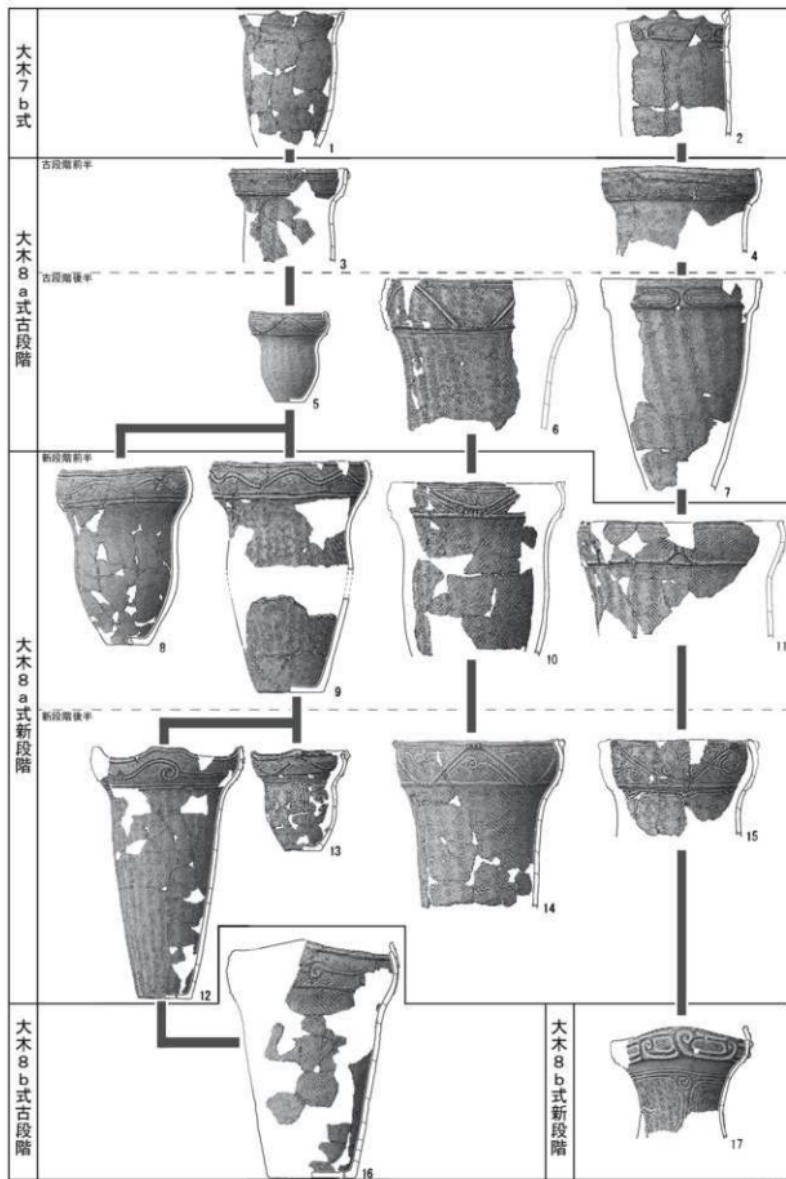
上述の通り、大木8b式古段階では口縁部文様が㉗・㉘・㉝に類似するものがある（14・15）。胴部文様には大きな渦巻文が描かれ、大木8b式に特徴的な文様であるが、口縁部文様には大木8a式の文様が残る。

（c）深鉢C類の変遷（第10図上）

深鉢C類は、大木7b式に類似するものは見受けられず、大木8a式古段階後半が初見である（1）。したがって、系統的には大木7b式から変化したものではない可能性がある。

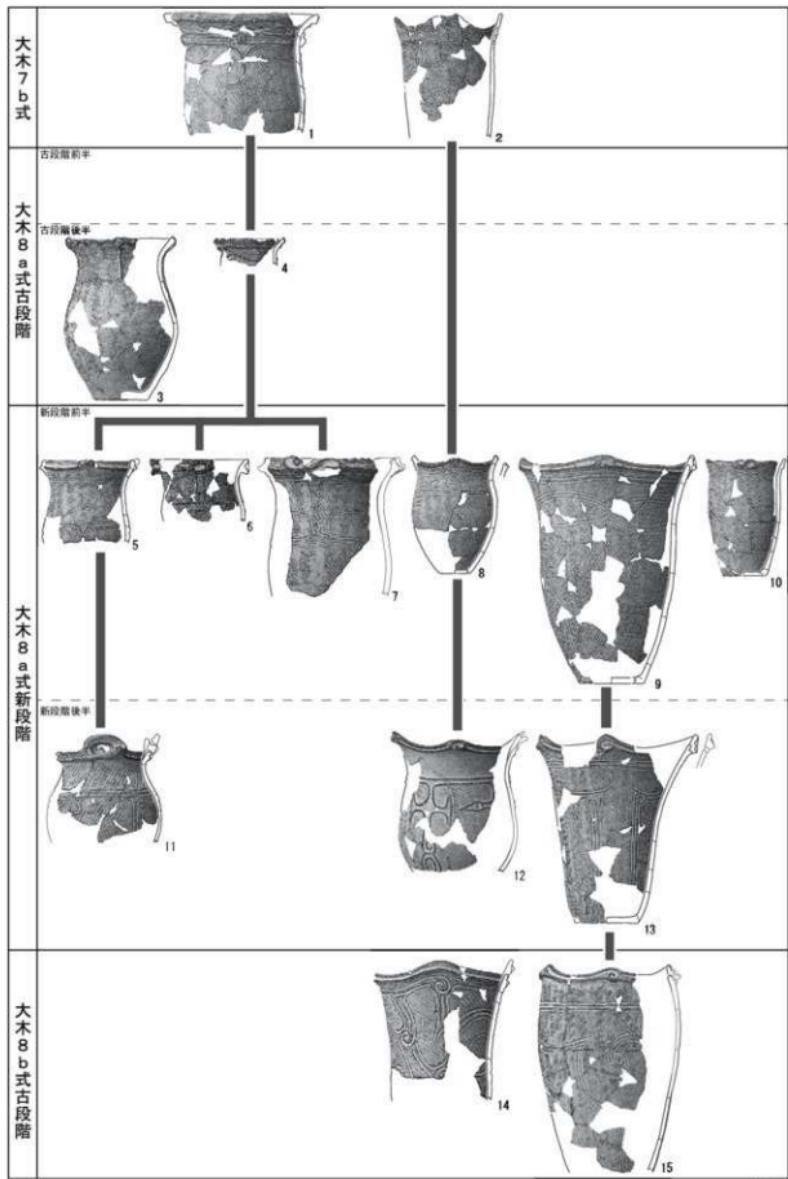
器形では、古段階後半に位置づけた1は、口径が大きく、口縁部が内湾するが、次の大木8a式新段階前半で、この器形は継続されていない。一方、2～4のような器形が現れるが、ただしこれらの器形は新時期後半には継続されず、むしろ1に類似する器形（5）が見受けられる。

文様は、古段階後半では、1は口縁部文様体を隆帯によって区画し、その区画内に繩文原体押圧文が施文されており、深鉢B類に類似する。次の新段階前半では、横S字状の隆帯が口縁部に付くもの（3）があり、やはり深鉢B類の文様に類似するものが見受けられる。一方で口縁部に短沈線を連続



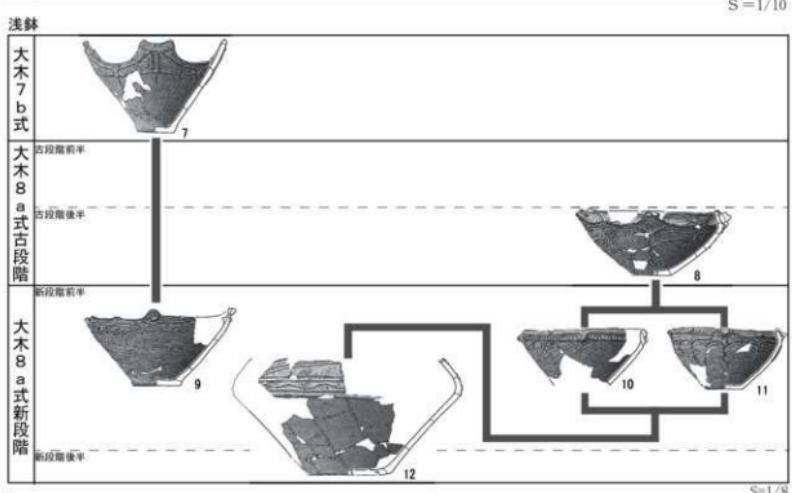
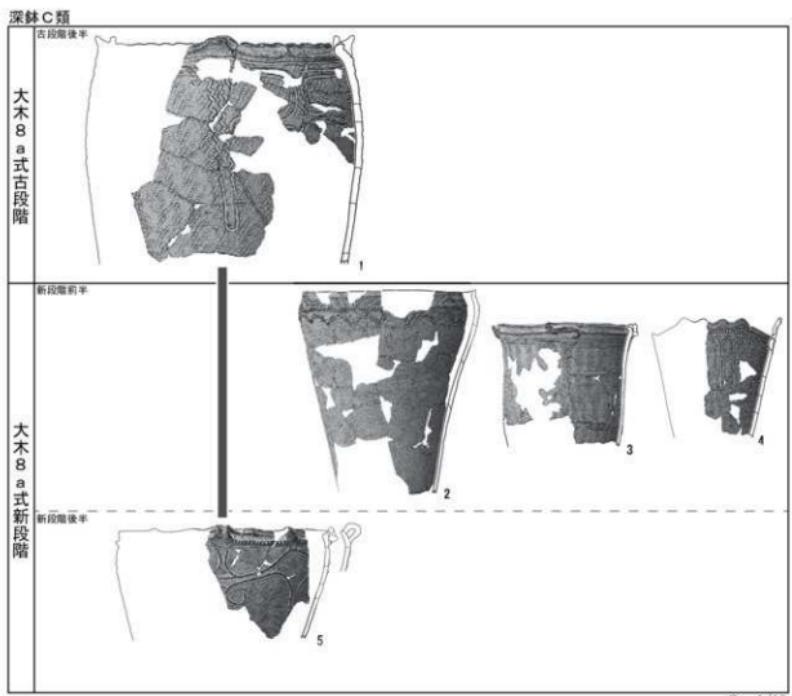
第8図 深鉢A類の変遷

S=1/8



第9図 深鉢B類の変遷

S=1/8



第 10 図 深鉢 C類・浅鉢の変遷

的に充填させる文様（2）は深鉢B類には見受けられず、深鉢C類独自といえる。また胴部文様では新段階前半で、すでに胴部全体に沈線が施文されており、その点は深鉢B類と異なる。また新段階後半では、胴部文様に隆帯による曲線状文が描かれている（5）。

深鉢C類は、文様についてみれば、B類に類似するものも多く、したがって深鉢C類は古段階後半ごろに深鉢B類から派生したもの可能性もある。ただし独自の文様もあり、一概には言えない。また次時期の大木8 b式には、器形は深鉢C類に類似するものが見受けられるが、文様は大きく異なるため、同じ系統とは考えられない。

（d）浅鉢の変遷（第10図下）

浅鉢は出土点数が少なく、推測の域を出ないが、器形は、浅鉢A類は大木7 b式の浅鉢に類似するものがあり（7）、これが大木8 a式古段階に引き継がれ、新段階まで継続すると考える。その際、大木7 b式は花弁状の波状口縁であるが、大木8 a式は平縁であり、変化した可能性が高い。一方、浅鉢B類は大木7 b式ではなく、古段階後半に出現する（8）。そして新段階になると、浅鉢A類よりB類の方が主体となる。さらに口縁部の屈曲が、胴部中位にまで下がり、算盤玉状に変化していく（12）。この器形は大木8 b式にも引き継がれていくようである。

文様は、口縁部文様は4単位に区画されるものが多い。古段階後半では隆帯と繩文原体押圧文が施文され、また胴部にも及ぶ（8）。新段階に入って、繩文原体押圧文は姿を消すが、浅鉢B類については文様のモチーフは大きく変わらないが、隆帯や沈線のほかに、短沈線や刺突文も施文される。浅鉢A類は沈線による文様が施文される。

9. 他地域の大木8 a式の様相

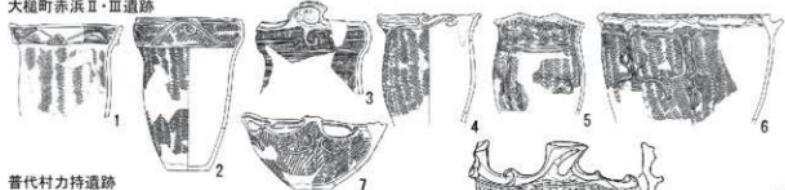
他地域の遺跡から出土した大木8 a式を概観し、浜川目沢田I遺跡の大木8 a式の特徴と比較する。

まず浜川目沢田I遺跡に隣接する遺跡として大槌町赤浜Ⅱ・Ⅲ遺跡（大槌町教育委員会2018）を挙げる。大槌湾に面して立地する遺跡で、1号住居跡から主に大木8 a式新段階に位置付けられる土器が出土している（第11図上）。深鉢はA類（1～3）、B類（4・5）、C類（6）があり、また浅鉢は古段階でB類を確認した。いずれも器形や文様の特徴は浜川目沢田I遺跡と共通しており、したがって浜川目沢田I遺跡の大木8 a式の特徴は、遺跡特有のものではないことがうかがえる。

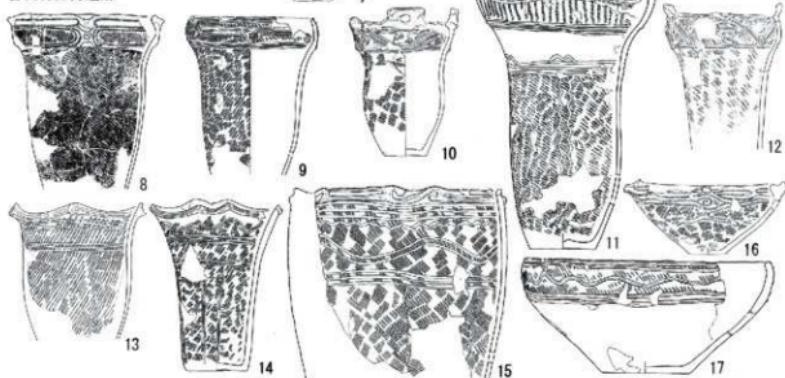
県北沿岸の遺跡として普代村力持遺跡（岩文振研2008）を挙げる。平成13～15年の発掘調査で多数の竪穴住居跡に伴い、大木8 a式土器が多量に出土している（第11図中）。力持遺跡は大木式文化圏の北端に位置し、円筒上層式も多く出土しているので、その影響を少なからず受けているはずであるが、深鉢は、A類（8～12）、B類（13・14）、C類（15）が、また浅鉢はB類（16～18）が見受けられ、また器形や文様の特徴は浜川目沢田I遺跡と共通する。したがって本稿でみてきた大木8 a式の特徴は、大木式土器文化圏の北端にまで及んでいるものと考える。

一方、浜川目沢田I遺跡より南方に位置する遺跡として、県外であるが、宮城県長者原貝塚を挙げる。長者原貝塚は登米市（南方町）に所在する遺跡（南方町教育委員会1978）で、沿岸地域ではないが、竪穴住居内から大木8 a式新段階に位置付けられる一群が出土している（第11図18～24）。器形は深鉢A類のみ（18～23）が見受けられる。浜川目沢田I遺跡と比べて、頸部が太く（20・21）、また口縁部よりも胴部に最大径を持つ（22・23）など、違いが見受けられる。文様では、口縁部文様は共通するものの、頸部に多重の沈線が巡る点、また胴部文様にも多重の沈線が多用されるなど、浜川目沢田I遺跡では見受けられない文様が施文される。一方、浅鉢はB類があり（24）、浜川目沢田I遺跡の浅鉢の特徴と共通する。

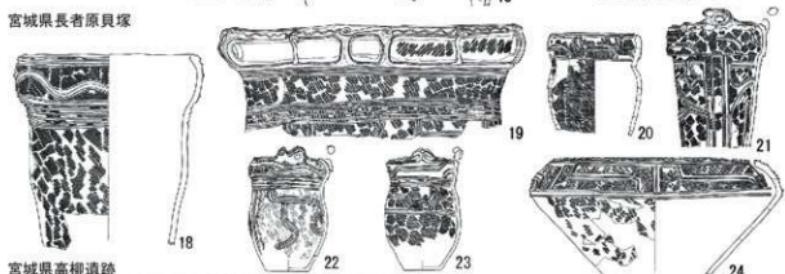
大槌町赤浜Ⅱ・Ⅲ遺跡



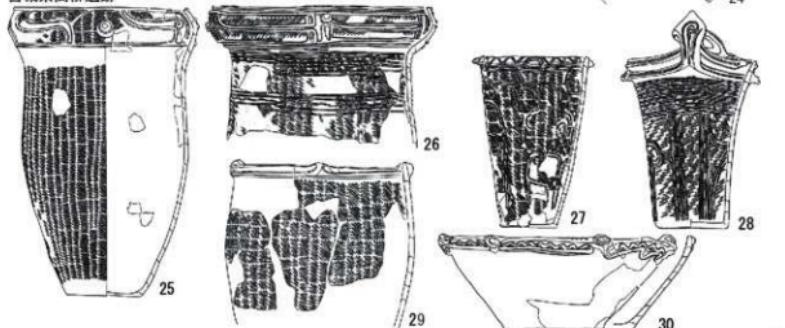
普代村力持遺跡



宮城県長者原貝塚



宮城県高柳遺跡



S=1/8

第 11 図 他地域の大木 8a 式土器

さらに南方へと離れた遺跡として宮城県高柳遺跡（仙台市教育委員会1995）を挙げる。高柳遺跡は仙台市に所在する遺跡で、包含層から大木8a式が多量に出土している（第11図下）。器形は、深鉢A類（25・26）が見受けられるが、特徴は浜川目沢田I遺跡よりも長者原貝塚に近い。文様は浜川目沢田I遺跡に類似するものもあるが、頸部から胴部にかけ多重の沈線が横位に巡っており、長者原貝塚に共通するものが多い。27・28は深鉢B類に類似するが、浜川目沢田I遺跡のものとはやや異なる。ここでも多重の沈線が横位に巡る文様が多用され、また縦位に文様が展開する。深鉢C類（29）は文様は口縁部のみで、胴部は地文のみである。この点も浜川目沢田I遺跡とは異なる。浅鉢はA類・B類ともに見受けられる。口縁部文様が多様であるが、胴部は無文のものが多い。

このように浜川目沢田I遺跡の大木8a式の特徴は、大木式土器文化圏の北端から県内域にかけて共通して広がっており、一方、県外の南方では、器形・文様共に差異が見受けられはじめる。この差異がどの地域から見受けられるようになるかは不明である。

10.まとめ

浜川目沢田I遺跡の資料を対象に、大木8a式の深鉢と浅鉢を器形で細分し、また器形ごとに口縁部文様、胴部文様の特徴を抽出した。文様は、器形ごとに特徴が固有であることが分かり、またその文様の特徴から器形の時期変遷をみると、各器形は、大木8a式のはじまり（古段階前半）では同時に発生していない。またいずれも大木8a式の新段階前半では盛行し、器形や文様のバラエティーが増えるが、次時期の大木8b式古段階まで引き継がれるものもあれば、そこに至らず姿を消すものもあることが分かった。またこの特徴は浜川目沢田I遺跡特有ではなく、大木式土器文化圏北端から県内域の沿岸地方にみられる特徴であり、それが沿岸地域の地域性と捉えられるかもしれない。

本稿の検討は、型式学的な方法での分類、時期変遷であり、今後、沿岸地方に分布する遺跡の大木8a式をもとに、特に層位的な検証が必要であり、今後の課題としたい。

註

- (1)報告書ではキャリバー形（A類）とキャリバー形ではないもの（B類）の2種で分類したが、そのうちB類を細分した。したがって本稿のB類・C類を含んだものが報告書中のB類に相当する。
- (2)本稿において大木8a式の細分の呼称については、報告書（岩文振理 2018）に準じている。
- (3)山内清男氏の編年基準資料（早瀬亮介・菅野智則・須藤隆 2006）で大木7b式をみると、提示された6点中、縄文原体押庄文を施した土器は1点のみである。

引用・参考文献

- <報告書> 県岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを「岩文振理」と略す。「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書」は省略して集数を記載
- 岩文振理 2008 「赤井田・沢田I遺跡発掘調査報告書」第510集
- 岩文振理 2018 「浜川目沢田I遺跡発掘調査報告書」第689集
- 大槌町教育委員会 2018 「赤浜II・III遺跡発掘調査報告書」岩手県大槌町文化財調査報告書第12集
- 仙台市教育委員会 1995 「高柳遺跡」仙台市文化財調査報告書第190集
- 南方町教育委員会 1973 「長者原貝塚」南方町文化財調査報告書第1集
- 盛岡市教育委員会 2008 「柿ノ木平遺跡・坂根遺跡」
- <論文・研究報告>
- 神原雄一郎 2004 「解説 湧巻文様の展開－盛岡の縄文時代中期の土器－」
【盛岡市遺跡の学び館開館記念特別展「縄文の彩華－中期の技と美－」図録】
- 熊谷常正 1989 「北上川中流域における大木8a式土器」[岩手県立博物館研究報告] 7号
- 高橋憲太郎 1982 「縄文時代の遺物について」[柿ノ木平遺跡－昭和50・51年発掘調査報告] 盛岡市文化財調査報告第23集
- 中野幸大 2008 「大木7b～8b式土器」[縄文文化の研究] 4 雄山閣出版
- 丹羽 茂 1981 「大木式土器」「縄文文化の研究」4 雄山閣出版
- 1989 「中期大木式土器様式」「縄文土器大観」1 小学館
- 1997 「大木式土器」「日本土器辞典」 雄山閣出版
- 早瀬亮介・菅野智則・須藤隆 2006 「東北大学文学研究科考古学系蔵品目録」[Bulletin of Tohoku University Museum] 5

東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（4）

金子昭彦

東北地方・縄文時代晩期における土偶関連遺物のデータ・ベース化の続きである。今回は、関連遺物を多出する道路のうち、時期を問違う恐れのある、後期初頭～後葉の土器も多出する遺跡を取り上げた。該当遺跡は福島県が多く、福島県の地域性が幾つか指摘でき、関東地方への回廊としての役割が、初期の美々4型動物形土製品が多いことに見て取れ、土版にも東北地方北部とは異なる地域色が顕著である。

1.はじめに

本稿は、土偶関連遺物（以下、関連遺物）として、“顔・人体らしきものを持つ遺物”、具体的には、土面、人体・人面付土器、岩偶、岩版・線刻縄、土版、正中線中空土版、美々4型中空動物形土製品、動物形土製品、動物形突起を悉皆的に収集することを目的とし、(1)は、『岩手県立博物館研究報告』第33号（2016年）に掲載したが、(2)以降は本誌に掲載していただいている（2017年～）。

(2)まで、短期で時期の特定しやすい遺跡を扱ってきたが、あまりに資料が少なく、時期組成について十分な見通しを得ることができなかつたので、「関連遺物」多数出土遺跡を取り扱うこととした。「関連遺物」の出土数も概ね出土土器の量に比例する場合が多いので、ある程度時期の判断はつき時期組成の傾向を探ることはできるのではないかと考えたからである。(3)（以下前稿と呼ぶ）では、「関連遺物」が区別しにくく混入の恐れがあるので、後期初頭～後葉の土器も多出する遺跡は避け、それ以外の後期末～弥生時代の土器を多出する遺跡のみ扱った。中期以前について考慮しなかったのは、本稿で扱う「関連遺物」に限れば、縄文時代中期以前のものとは容易に区別できる場合がほとんどだからである。そこで、今回扱うのは、後期初頭～後葉にも多出している遺跡となる。

ところが、思った以上に該当する遺跡が少なく、資料収集に苦慮し、その結果“多出”とは言い難いが、3点以上「関連遺物」を出土した遺跡を対象とした。

2.表の見方（補足）

収集要領、記載要綱は、(1)～(3)と同じである。前稿で扱わなかった点を中心に補足しておく。“★”は、特筆すべきものを示す。

番号（No.）は、第1表からの通し番号である。表内の遺跡は、概ね北～南に並べている。

時期の欄。アルファベットは、土器型式名の略記である。晩期は、“初”、“前葉”等で示し、他の時期は、“後末”（後期末の意），“弥中”（弥生時代中期の意）のように二文字の組み合わせで示している。“～〇〇”は“〇〇までの時期”、“〇〇～”は“〇〇以降の時期”である。

残存率は、分数で示していても大雑把で、参考程度にお考えいただきたい。概ね1/10以下を小片、それより小さなものを細片としている。完形時の状態（大きさ）を推測できないものは、“欠損”“破片”等で示している。

接合欄の記号。△は、詳細は不明だが、接合していると思われるもの。○は、すぐそばの破片が接合したのではなく、廃棄後に割れたとは考えられないもの。◎は、それが3片以上接合したもの。●は、接合によって完形に近く復元されたもの。★は、遠距離（20m以上）接合。■は、以上が複合した特筆すべき接合で、詳細は備考欄に記した。

付着物の欄。表面に塗布する赤色付着物は、痕跡的なもの（不明含む）を○、多いものを◎、全面

塗布のものを●とし、漆とされているものなど特別な場合は★で記した。黒色付着物は、塗布箇所が割口か否かに注意した。

出土位置。原則として遺構出土の場合のみ記し、捨場や遺物包含層は基本的に削除した。遺構出土でも、混入の可能性が高いと判断されたものは削除した場合がある。堅穴住居跡の床の場合は、“住床”、覆土は“住覆”、不明の場合はただ“住居”、石囲炉は“石炉”などと略した。

遺跡の立地は、河岸段丘を“段”と略し、高位、中位、低位を、それぞれ“高”、“中”、“低”と略し、“高段”などと称す。海岸段丘は“海段”とした。

遺跡の評価・分類は、拠点、小規模（“小規”と略）、遺物散布地（“散布”）の三つに分けたが、多量の遺物が出土するが時期が限られる場合は、半拠点（“半拠”）とした。“拠？”は、“拠点？”、“小？”は“小規模？”の略である。

掲載箇所欄で文献名を引用する際、発行機関・発行年（西暦）で示しているが、発行年は下二桁のみを記し、発行機関は、次のように略称している。○○県の教育委員会→県教、○○県の埋蔵文化財センター→県埋、○○県立博物館（青森県立郷土館含む）→県博、○○市町村の教育委員会→○○（市町村名）、二文字以上の市町村教育委員会、それ以外の機関→機関名の最初の二文字（財團法人等は除いて）。例えば、いわき市→“いわ”である。

図番号は、通じて示されている場合には、「○図△」の「○図」は原則として省略し、そうでなくとも枠をはみ出す場合は略記した。備考欄で類例を引用した際の数字は、本稿(I)～の表番号である。

3. 「関連遺物」多出遺跡（2）—後期初頭～後葉の土器も多出する遺跡—

以下に掲げた関連遺物の点数は、概ね本稿の対象期に限ったもの（時期不詳含む）、後期後葉以前は原則として含んでいない。

・青森県青森市長森遺跡（第7表1125～1133）（青森市教育委員会 1985）

遊戯施設の駐車場建設に伴い1,000m²調査された。縄文時代晩期前半を中心とする集落跡（住居、墓）が検出され、前稿第6表に含めた方が良かったかもしれないが、少ないながら、後期初頭、中葉土器も見られ、弥生時代中期らしい土器も出土している。当該期は、後期末（瘤付IV？）～晩期末（大洞A’式古期）までは継続しているようだが、大洞A2式は見られないよう、大洞B1式新～B2式、C1式、A1式が目立つか。

関連遺物は、岩版類8点、土版1点だが、多時期にわたるようである。土偶2点？（後期？、晩期末）、石剣類16点、独鉛石4点、円盤状石製品27点（赤色付着2点）、土製耳飾3点（環状のみ）、菱形環状石製品（金子 2010b）1点、石製丸玉類44点（43点墓出土、ヒスイ2点）、土製勾玉1点出土した。

・青森県弘前市十腰内(1)遺跡（第7表1134）（青森県教育委員会 1999）

農道建設に伴い3,300m²（幅約20m）調査され、縄文時代晩期（前葉中心）の集落跡（大型住居、プラスコ状土坑、溝跡など）、平安時代以降の土坑などが検出された。縄文時代前、中期、後期前葉の土器、弥生土器、土師器なども出土しているが、ほとんどが晩期の土器で、前稿に含めた方が良かったかもしれない。当該期では、晩期前葉（大洞B2式）～後葉（大洞A2式？）が見られ、大洞BC2式が最も多く、次いでC1式で、他はあまり多くない（報告書：p.168）。

関連遺物は、大型住居から出土した岩版1点のみである。5点出土した土偶は個性が強く、一般的なものではない（金子 2014：p.10）。石剣類3点、石冠1点、円盤状石製品13点、土製耳栓3（鼓状1、C2ネジ形1）点（金子 2009a）、土製丸玉1、緑色凝灰岩製の玉（ほとんど丸玉）は官製

第7表 関連遺物多出跡2（後期多出含む遺跡）（＊註の内容は、本文註の後に）

No.	番	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	保存 状 態 率 cm	現 在 保 有 者	付属物	材質	出土 位 置 立 地	遺 物 評 価	施 設 館 所	備 考	
1125	青	高森	岩塗	不明	楕円形・斜K?	1/37 53	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.8cm。施中に横幅多。片面正中切欠?	
1126	青	高森	岩塗	不明	楕円形・斜K?	1/37 65 △	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.3cm。片面正中切欠。厚1.1cm。	
1127	青	高森	岩塗	BC2?	? - ? 線	小坪 42	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.5cm。[白土剥離]?	
1128	青	高森	岩塗	不明	楕丸形方型・斜K?	4/57 65	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.5cm。[白土剥離]?	
1129	青	高森	「前塗」	不明	? - ?	小坪 3	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.5cm。[白土剥離]?	
1130	青	高森	「前塗」	不明	楕丸形方型然縫	施	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.3cm。	
1131	青	高森	「前塗」	不明	自然壘・縫隙	不規 85	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.5cm。表面真面?	
1132	青	高森	「前塗」	不明	[自然壘・縫隙]	施	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚1.2cm。表面真面?	
1133	青	高森	土塗	A - G?	長方形 - 6型	6/7 63	石質不 ^明	段?	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1134	青	「十面内」?	岩塗	BC2?	長方形 - 2型?	施	9.57	施	施	施	施	施	厚2.4cm。556g	
1135	青	「十面内」?	岩塗	BC2?	長方形 - 2型?	2/3? 91	泥瓦?	五塊	施	施	施	施	厚2.9cm。	
1136	青	「十面内」?	岩塗	C - ?	楕丸形方型 - 3型	2/5? 67	施	施	施	施	施	施	厚2.4cm。	
1137	青	「十面内」?	岩塗	C 2.2	楕円形 - 4型?	1/5 46	施	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1138	青	「前塗」	岩塗	? - B1?	長方形 - 1型	不規 9	施	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1139	青	「前塗」	岩塗	BC2?	圓丸形 - 2型?	不規 57	施	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1140	青	「前塗」	岩塗	BC2?	方形 - 2型	小坪 48	施	施	施	施	施	施	厚1.2cm。	
1141	青	「前塗」	岩塗	B1?	方形 - 1型? K?	不規 45	施	施	施	施	施	施	厚1.2cm。	
1142	青	「前塗」	岩塗	BC1?	長丸形 - 1型?	不規 72	施	施	施	施	施	施	厚1.3cm。	
1143	青	「前塗」	岩塗	C 2.2	楕円形 - 4型?	2/5 5	施	施	施	施	施	施	厚0.9cm。	
1144	青	「前塗」	岩塗	C 2.2?	圓形 - 4型	2/3? 10	施	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1145	青	「前塗」	岩塗	BC2?	方形 - 2型	1/2 103	施	施	施	施	施	施	厚0.6cm。	
1146	青	「前塗」	岩塗	不明	楕丸形?	K?	不規 108	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1147	青	「前塗」	土塗?	BC2?	長丸形 - 2型?	不規 53	施	施	施	施	施	施	厚1.8cm。	
1148	青	「上部中央」?	土塗?	不明	楕丸形方型?	不規 52	石質不 ^明	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1149	青	「上部中央」?	土塗?	不明	楕丸形方型?	不規 53	施	施	施	施	施	施	厚2.1cm。	
1150	青	「上部中央」?	土塗?	A 1?	三角形 - 7型?	3/4? 27	楕圓形孔?	施	施	施	施	施	厚1.8cm。身幅7.1cm。	
1151	青	「内工」	岩塗	C 1?	圓形 - 3型?	2/5 62	施	施	施	施	施	施	厚2.3cm。	
1152	青	「内工」	岩塗	C 1?	圓形方型 - 3型	1/2 66	施	施	施	施	施	施	厚1.2cm。	
1153	青	「内工」	岩塗	C 1?	圓形方型 - 3型	不規 56	施	施	施	施	施	施	厚2.0cm。	
1154	青	「内工」	縫隙?	不明	長丸形 - 1型?	施	施	施	施	施	施	施	厚0.6cm。	
1155	青	「内工」	縫隙?	前塗?	不定形? - 音孔?	施	施	施	施	施	施	施	厚1.0cm。	
1156	青	「内工」	縫隙?	前塗?	不定形? - 音孔?	施	施	施	施	施	施	施	厚1.0cm。	
1157	青	「内工」	縫隙?	前塗?	長方形 - 音孔?	施	施	施	施	施	施	施	厚1.2cm。	
1158	青	「内工」	縫隙?	前塗?	圓形口?	1/2? 223	施	施	施	施	施	施	厚1.2cm。	
1159	青	「内工」	人土器?	後末?	圓形口?	1/2? 223	施	施	施	施	施	施	厚1.2cm。	
1160	青	「内工」	人土器?	美 - 中末?	大窓?	2/3 14	中空貫通孔?	施	施	施	施	施	正中貫通孔。山形文。	
1161	青	「内工」	人土器?	美 - 中末?	中空?	1/2 14	中空貫通孔?	施	施	施	施	施	正中貫通孔。山形文。	
1162	青	「内工」	人土器?	中 - 中?	不明?	圓形孔狀切欠?	7/10 74	貫通孔?	施	施	施	施	施	正中貫通孔。山形文。
1163	青	「下」	土塗?	前築?	「型」 - 舟形圓孔?	小坪 7.3	施	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1164	青	「下」	岩塗?	不明?	? - K 0?	小坪 3	船形孔?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1165	青	「下」	土塗?	縫隙?	圓丸形 - 4型?	不規 36	小小孔?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1166	青	「下」	土塗?	C 2.2	楕円形 - 4型	1/2 64	赤土?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1167	青	「下」	土塗?	C 2.2	楕円形 - 4型	1/5 6	赤土?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1168	青	「下」	土塗?	C 1?	楕円形 - 3型	不規 55	赤土?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1169	青	「下」	土塗?	C 1?	7型?	1/9 6.6	赤土?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1170	青	「下」	土塗?	A - 2?	小型圓孔 - 5型?	一? 4	縫隙?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1171	青	「下」	土塗?	中 - 中?	左丸?	右丸?	舟形文?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1172	青	「下」	動彌形?	不明?	不明?	中 - 中?	一?	4.5	「サル」?	施	施	施	施	舟形圓孔。
1173	青	「下」	土塗?	BC2?	圓形 - 2型?	螺旋状 12.1	施	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1174	青	「海綿」	土塗?	C 2.2?	「切」 - 楕圓形孔?	3.5 94	「土偶」?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1175	青	「海綿」	土塗?	C 2?	圓形孔?	0.9cm	施	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1176	青	「海綿」	土塗?	C 2?	楕円形 - 45度?	5.9 47	施	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1177	青	「海綿」	土塗?	C 2?	楕円形 - 4型?	1/6 48	施	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1178	青	「海綿」	土塗?	C 2?	楕円形 - 45度?	小坪 36	施	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1179	青	「海綿」	土塗?	C 2?	圓形 - 2型?	1/4 79	中空?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1180	青	「海綿」	土塗?	B 1?	椭円形?	1/2 73	中空?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1181	青	「大日向」	土塗?	C 1?	圓形孔?	2/11 ○	中空?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1182	青	「大日向」	土塗?	不明	楕丸形方型?	K?	不規 59	砂質圓形?	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1183	青	「大日向」	土塗?	C 2.2	楕円形 - 4型	1/7 57	砂質圓形?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1184	青	「大日向」	土塗?	C 2?	7型?	小坪 52	砂質圓形?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1185	青	「大日向」	土塗?	C 2?	7型?	1/6 41	砂質圓形?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1186	青	「大日向」	土塗?	C 2?	7型?	4/6	砂質?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1187	青	「大日向」	土塗?	~ A?	~ A?	4/9	砂質?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1188	青	「大日向」	土塗?	~ 不明?	砂質?	5	砂質?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1189	青	「大日向」	土塗?	C 1?	楕円形?	3/7 3?	1/67 46	微細?	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1190	青	「大日向」	土塗?	~ A?	長方形 - 5型?	1/67 38	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1191	青	「大日向」	土塗?	~ A?	~ A?	多邊形?	3	微細?	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1192	青	「大日向」	土塗?	~ A?	~ A?	多邊形?	35	微細?	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1193	青	「大日向」	土塗?	~ A?	~ 5型?	網片 28	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1194	青	「大日向」	土塗?	末築?	小明?	1/2 13.3	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1195	青	「大日向」	土塗?	末築?	~ 7型?	不規 64	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1196	青	「大日向」	土塗?	C 2?	長方形?	4/5?	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1197	青	「大日向」	土塗?	C 1?	~ 7型?	不規 6.7	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1198	青	「大日向」	土塗?	C 2?	長方形?	3/4?	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1199	青	「大日向」	土塗?	C 2?	半圓形?	4/5?	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1200	青	「大日向」	土塗?	C 2?	7型?	網片 3	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1201	青	「大日向」	土塗?	C 1?	~ 3型?	網片 4	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	
1202	青	「大日向」	土塗?	~ A?	~ 5型?	網片 4.4	微細?	施	施	施	施	施	舟形圓孔。	

No.	番	遺跡名	種	別	時	期	形態	系列	状	現存	根	根	付植物	材	質	出土	遺	跡	評	査	備	考		
										率	cm	合	高	(つり市)	位置	土地	評定	査	跡	所				
1203	番	大日向II	土塁	C2?	後	備円形突起?	4.5	2.5	7	剥	剥	剥	土	土	厚さ1.5cm	丘陵	航点	地理	95~5984	部分に葉付、多巣人組、C文字。深削。				
1204	番	大日向II	土塁	C?	前	裏?	7~1?	小	3.7	剥	剥	剥	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5985	不整な土壁。				
1205	番	大日向II	土塁	C 2?	備円形	4頭	1/3	6.6	剥	剥	剥	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5986	中空部瓦礫層、洞入組文2段、厚さ1.6cm					
1206	番	大日向II	土塁?	?	後期?	備円形?	-IKO	不明	3.1	剥	剥	剥	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5988	表裏不規則形文様、厚さ1.3cm				
1207	番	大日向II	土塁?	?	後期?	備円形?	-	井KO	不明	3.2	剥	剥	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5989	表裏不規則形文様、厚さ0.8cm				
1208	番	大日向II	土塁?	?	後期?	-	B1?	人面土器?	破片	6	中空	中空	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~7116	口面彫。				
1209	番	大日向II	土塁?	?	後期?	-	B1?	人面土器?	破片	4.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~7117	口面彫孔、椭円形底盤、口下移行				
1210	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	溝文突	?	?	破片	4.4	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~2697	土塗が崩壊?				
1211	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	溝文突?	?	?	破片	5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~2698	土塗が崩壊?				
1212	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	?	?	?	破片	4.7	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5987	楕円文彫刻、輪郭目1日目				
1213	番	大日向II	土塁?	C 2?	-	B1?	備円形?	鉢	6	板状	板状	板状	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5990	口面彫。正三字彫、豊乳彫、厚さ1cm				
1214	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	?	不明	5.4	○	中空?	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5994	中空? 7段落、輪郭文。厚さ3.5cm		
1215	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	2/7	6.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5995	圓窓等削除?				
1216	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	先端尖?	不明	4	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5996	圓窓等削除? 輪郭文?				
1217	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	1/8	6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5997	圓窓等削除?				
1218	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	1~2	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5998	圓窓等削除?					
1219	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	小	4.1	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~6121	圓窓文、独立三文彫。				
1220	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	小	7.7	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~80512	圓窓文。				
1221	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	1/4	6.8	土塁?	土塁?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~80513	圓窓文。正三字彫、壘石剥削、入文彫				
1222	番	大日向II	土塁?	C 2?	?	後期?	備円形?	圓窓?	小	5.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~80510	土塁? 土塁? 正三字彫、壘石剥削、入文彫				
1223	番	大日向II	美?	?	前戦?	?	?	?	小片	4.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~5999	表裏不規則形文?				
1224	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	- 3頭	小片	4.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~4925	山字彫文、厚さ2.2cm				
1225	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	- 3頭	1/4	3.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3512	表裏不二文字彫、厚さ1.1cm				
1226	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	- 3頭	小片	4.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3502	二重輪廓圓窓? 2列文?				
1227	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	圓窓?	盒	5.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3509	圓窓? 目1日目、表裏文彫文。	43 g			
1228	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	圓窓?	盒	5.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3602	圓窓? 目1日目、C文字?				
1229	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	圓窓?	盒	5.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3504	圓窓? 目3? 文?				
1230	番	大日向II	美?	C 1?	?	後期?	備円形?	圓窓?	盒	5.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3605	圓窓? 目3? 文?				
1231	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	2.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3506	方形基盤? 剥離削削、表裏丸孔。				
1232	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	2.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~3507	圓窓? 基盤? 剥離削削、表裏丸孔。				
1233	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.7	6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~20~42	方形基盤? 上文字? 表裏丸孔。			
1234	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.7	6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~12~61~97	中空? 破片? 多巣丸孔? 厚さ0.7cm			
1235	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.6	5.1	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~62~117	多巣丸孔? 破片? 多巣丸孔? 厚さ1.2cm			
1236	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.6	5.1	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~65~172	中空? 破片? 多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1237	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.6	5.1	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~70~25	片側多巣丸孔? 圆窓? 片側丸孔? 圆窓? 厚さ1cm			
1238	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.4	7.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~73~334	切り込み多巣丸孔? 厚さ1.4cm			
1239	番	川田A	美?	A?	?	?	?	?	?	1.9	2.9	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm			
1240	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1241	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1242	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1243	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1244	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1245	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1246	番	川田A	河原の橋	A?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1247	番	川田A	河原の橋	C 1?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1248	番	川田A	河原の橋	C 1?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1249	番	川田A	河原の橋	C 1?	?	?	?	?	?	3.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~76~389	表裏多巣丸孔? 厚さ1.6cm				
1250	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.4	5.2	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1251	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.4	5.2	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1252	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.4	5.2	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1253	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.4	6.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1254	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.7	4.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1255	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.5	5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1256	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.4	5.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1257	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.5	5.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1258	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.5	3.8	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1259	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.5	7.6	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1260	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.5	5.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1261	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	2.3	5.5	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1262	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.9	7.7	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1263	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.7	5.2	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1264	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.6	9.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1265	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.6	9.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1266	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.6	9.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1267	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.6	9.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1268	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.6	9.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1269	山	山美?	?	?	?	?	?	?	?	1.6	9.3	中空?	中空?	土	土	中空?	丘陵	航点	地理	95~13~42	多巣丸孔? 厚さ0.8cm			
1270	山	山美?	?	?	?	?</																		

No.	種	道府県名	種別	時期	形態・系列・形状	現存 座 標	現存 長 度	付生 長 度	材 質	出生 地	通 跡	現 在 所	備 考
1293	福	三重県伊勢	美中・中空	B2?	長脚内凹型? 開型	4/5-7.4			木	近中空?	地被	御前 88-233 号	茎葉の下の、茎葉、入文糸、文元等
1294	福	三重県伊勢	人足器	B1?	[付根] 口外	小片	7.6		木	口縁周囲	地被	御前 88-262 付根周囲	口縁周囲。細胞壁厚。葉状細胞。葉状細胞。葉状細胞。
1295	福	滋賀	土足	C 2?	脚形? 非 K 文様	1/3-4.2			木	厚さ 1.5mm	地被	御前 95-28	正中葉
1296	福	滋賀	動物形	付 9?	[イソシタテ型?]	実? 7.9			木	地被	御前 95-35	正中葉	
1297	福	滋賀	動物形	付 9?	[イソシタテ型?]	2/3-6.6			木	地被	御前 95-35	正中葉	
1298	福	滋賀	舌足?	A?	舌足? 5? 6?	不明	6		木	觸覚器	地被	御前 94-259	特異脚? 脚? 6.4cm
1299	福	滋賀	舌足	B1?	脚形? 非 K 文様	脚先 15			木	地被	御前 94-289	表皮細胞。脚状葉。葉乳。822 g, 約 10	
1300	福	滋賀	舌足?	A?	脚形? 5? 6?	脚先 10.6			木	地被	御前 94-289	表皮細胞。脚状葉。葉乳。24cm, 173 g	
1301	福	滋賀	正中?	C 1~2?	土足? 片足のみ	1/7-4.1			木	地被	御前 94-277	正中葉	
1302	福	滋賀	裏葉?	B1?	正中耳?	小片?	3		木	地被	御前 94-277	正中葉	
1303	福	滋賀	動物形	柱 11?	[イソシタテ型?]	一欠 10.2			木	口沈突刺	地被	御前 94-273	脚乳。其の乳。4.4cm。脚乳突起。脚乳突起
1304	福	滋賀	舌足?	A?	脚乳方形? 5? 6?	脚先 6.1			木	触覚器	地被	御前 95-161	正中葉の脚乳。脚乳。厚さ 1.5cm, 37 g
1305	福	滋賀	舌足?	C 2?	觸足?	不明 3.7			木	舌足孔	地被	御前 95-163	表皮細胞。脚乳。脚乳
1306	福	滋賀	舌足?	B1?	脚乳丸?	4/5-10.4			木	地被	御前 95-61	舌足表面。舌足。腹下円形	
1307	福	滋賀	裏葉?	B1?	*★頭部? 舌乳持?	6/7-6.6			木	地被	御前 95-63	舌足表面。頭部	
1308	福	滋賀	裏葉?	B-2?	*■開口脚乳持?	6/7-6.6			木	地被	御前 95-30	舌足表面。裏葉	
1309	福	滋賀	舌足?	B1?	脚形?	2/5-7.6			木	地被	御前 96-26	正中葉の舌足持。裏葉方。厚さ 2.3cm	
1310	福	南・鹿児島	土足?	A 1?	円? 非 K 文様	脚先 8.6			中段	半?	地被	91-151	赤褐色多角形。腹側表面と頂端。厚さ 2.8cm
1311	福	南・鹿児島	土足?	不明?	不明?	舌足? 小片?	3.2		中段	半?	地被	91-1143	脚乳。多角且? 刃状?
1312	福	南・鹿児島	土足?	不明?	不明?	脚形? 非 K 文様	脚先 7.2		中段	半?	地被	91-1144	多角且?
1313	福	南・鹿児島	土足?	不明?	不明?	舌足? 5? 6?	破裂?	4	中段	半?	地被	91-1145	赤褐色又? 中央に舌足孔。厚さ 1.7cm
1314	福	南・鹿児島	土足?	A 1?	脚形? 5? 6?	1/4-6.5			中段	半?	地被	91-1146	舌足表面。脚乳持。脚乳。厚 1.7cm, 文字?
1315	福	南・鹿児島	土足?	A 1?	脚形? 5? 6?	1/4-6.5			上段	脚乳	鹿児島 95-291	上段脚乳。脚乳持。脚乳。厚 1.7cm, 文字?	
1316	福	鹿児島	土足?	A 1?	脚形? 非 K 文様	脚先 8.7			上段	脚乳	鹿児島 95-291	上段脚乳。脚乳持。脚乳。厚 1.7cm, 文字?	
1317	福	鹿児島	土足?	A 1?	舌足? 5? 6?	3/10-3.6			上段	脚乳	鹿児島 95-292	上段脚乳。脚乳持。厚さ 1.3cm	
1318	福	鹿児島	土足?	B C 2?	脚掌彫? 破片?	不明 5.7			上段	脚乳	鹿児島 95-293	上段脚乳。脚乳持。厚さ 1.3cm	
1319	福	鹿児島	土足?	C 2?	不明?	脚形?	4/5-9.2		中段	脚乳	鹿児島 95-292	■中葉の舌足持。厚さ 1.3cm	
1320	福	鹿児島	土足?	B 1~2?	脚乳?	3/7-9.9			中段	脚乳	鹿児島 95-292	■中葉の舌足持。厚さ 1.3cm	
1321	福	鹿児島	土足?	C 2?	脚形?	1/5-5			中段	脚乳	鹿児島 95-293	正中葉の舌足持。厚さ 1.3cm	
1322	福	鹿児島	土足?	A 2~3?	脚形? 非 K 文様?	2/3-6.5			上段	脚乳	鹿児島 95-294	舌足表面。脚乳持。厚さ 1.3cm	
1323	福	鹿児島	土足?	B 2?	不規? 離基盤?	不規 4.6			上段	脚乳	鹿児島 95-294	離基盤? 舌足持。厚さ 1.3cm	
1324	福	鹿児島	土足?	B 2?	後脚? 小葉基盤?	9/10-7.3			中段	脚乳	鹿児島 10-193	舌足基盤。口開き。口開き。豎葉利便	
1325	福	鹿児島	土足?	B 2?	後脚? 舌足?	1/6-6			中段	脚乳	鹿児島 10-193	舌足基盤。口開き。豎葉利便	
1326	福	鹿児島	土足?	B 2?	不明?	脚形? 5? 6?	1/2-5.6		中段	脚乳	鹿児島 10-195-10	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1327	福	鹿児島	土足?	B 2?	不明?	脚形? 5? 6?	3/5-6		中段	脚乳	鹿児島 10-195-1	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1328	福	鹿児島	土足?	B 2?	脚形? 5? 6?	7/10-4.6			中段	脚乳	鹿児島 10-196-34	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1329	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 非 K 文様?	2/1-5.9			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1330	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	7/10-8.3			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1331	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 非 K 文様?	2/1-5.9			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1332	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	4/5-8.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1333	福	西・奈良	舌足?	B 1?	不明?	4/5-11.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1334	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	4/5-8.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1335	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	4/5-6.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1336	福	西・奈良	舌足?	B 1?	[後脚] 脚形? 5? 6?	4/5-6.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1337	福	西・奈良	舌足?	C 2~A	円? 人足 文様?	4/5-11.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1338	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-5.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1339	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-7.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1340	福	西・奈良	舌足?	C 2?	脚形? 5? 6?	2/3-9.2			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1341	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	2/3-7.8			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1342	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	6/10-7.1			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1343	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	7/10-8.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1344	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	4/5-11.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1345	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-10.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1346	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	9/10-7.3			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1347	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-12.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1348	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-12.3			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1349	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-13.9			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1350	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-9.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1351	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-6.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1352	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-7.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1353	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-8.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1354	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-9.1			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1355	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-10.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1356	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-11.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1357	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-12.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1358	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-13.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1359	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-14.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1360	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-16.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1361	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-17.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1362	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-18.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1363	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-19.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1364	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-20.3			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1365	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-21.2			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1366	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-22.1			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1367	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-23.0			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1368	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-23.9			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1369	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-24.8			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1370	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-25.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1371	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-26.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1372	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-27.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1373	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-28.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1374	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-29.3			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1375	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-30.2			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1376	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-31.1			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1377	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-32.0			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1378	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-32.9			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1379	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-33.8			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1380	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-34.7			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1381	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-35.6			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1382	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-36.5			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1383	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-37.4			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便。厚さ 1.9cm	
1384	福	西・奈良	舌足?	B 1?	脚形? 5? 6?	1/2-38.3			中段	脚乳	鹿児島 10-197	舌足基盤。口開き。豎葉利便	

No.	番	道種名	種別	時期	形態・系列・形状	残存 現存 率 %	根長 cm 合	付着物 部・葉	材質	出土 位置	遺跡 地主	評価	査定箇所	備考
1363	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	不明	7.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-175 号	良	ハツヒツ?	赤帯黒縞模様、厚さ 2.7cm
1364	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	9/10	12.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-175 号	良	ハツヒツ?、表裏共に	表裏共に、厚さ 2.7cm
1365	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	不明	7.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-175 号	良	ハツヒツ?	厚さ 3.2cm
1366	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鶴円形 - 形 K.O	不明	7.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	厚さ 2.7cm
1367	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	不明	6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	下面不整縫合あり、厚さ 2.9cm
1368	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鶴円形 - 形 K.O	形	8	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	下面不整縫合少し、厚さ 3cm
1369	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	3/7	8.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	片面丸み、バインズ痕?、不整縫合
1370	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	? - 形 K.O	缺片	7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	片面丸み、バインズ痕?、不整縫合
1371	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	形	12.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	厚さ 4.4cm
1372	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	不明	7.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	厚さ 2cm
1373	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	4/5	10.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	厚さ 2.8cm
1374	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	? - 形 K.O	缺片	11.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-176 号	良	ハツヒツ?	格子状縫合
1375	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	不明	12.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	ヒト?、表裏共に直縫合、厚さ 3.6cm
1376	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	? - 形 K.O	不明	8.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	不整縫合あり、厚さ 3.8cm
1377	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	不明	11.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	直縫合?、黄土色、厚さ 6.4cm
1378	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	缺片	8	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	格子状縫合あり、厚さ 2cm
1379	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	缺片	7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	厚さ 3.1cm
1380	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	缺片	9.3	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	赤帯黒縞模様、厚さ 4.8cm
1381	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	缺片	17.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-177 号	良	ヒト?	赤帯黒縞模様、★彌生文化?、厚さ 4cm
1382	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	形	15.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	厚さ 4.5cm
1383	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	? - 形 K.O	不明	9.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	厚さ 2.8cm
1384	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	4/5	10.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 4.8cm
1385	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	不明	5.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 2.6cm
1386	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	不明	7.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 2cm
1387	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	一次	14.1	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.7cm
1388	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	缺片	11.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 4.4cm
1389	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	不明	7.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 2.8cm
1390	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	形	8.9	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-178 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 2.9cm
1391	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	? - 形 K.O	不明	9.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-179 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.6cm
1392	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	5/7	9.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-179 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.8cm
1393	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	人型 - 形 K.O	不明	9.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-179 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.5cm
1394	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	不明	9	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-179 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.2cm
1395	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	缺片	16.8	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-179 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.6cm
1396	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	形	10	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.5cm
1397	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	不整形 - 形 K.O	不明	15	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、★彌生文化?、厚さ 3.8cm
1398	福	薄葉貝殻	岩礁	不明	鳥嘴円 - 形 K.O	不明	6.3	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.4cm
1399	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 形 K.O	文様	1.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	★彌生文化?、直縫合?、表裏共に円筒形、厚さ 3.4cm
1400	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	? - 形 K.O	不整	10	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.4cm
1401	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	? - 形 K.O	不明	7.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.2cm
1402	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	7/9	13.1	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 4.2cm
1403	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	完	8.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-180 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 4.0cm
1404	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	? - 形 K.O	不明	10.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.7cm
1405	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 形 K.O	9/10	10.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.5cm
1406	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 形 K.O	6/7	12.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 4cm
1407	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 形 K.O	一次	12	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.3cm
1408	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	鳥嘴円 - 形 K.O	1/2	7.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 6.5cm
1409	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	鳥嘴円 - 形 K.O	完	9.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 4.0cm
1410	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	9/10	9.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.7cm
1411	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	完	8.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.4cm
1412	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	9/10	7.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-181 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.7cm
1413	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	? - 形 K.O	不明	7.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.3cm
1414	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	8.3	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.3cm
1415	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 形 K.O	1/2	9.1	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.2cm
1416	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	4/5	8.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 3.0cm
1417	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	3.9	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.5cm
1418	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	6.3	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.3cm
1419	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	4.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.2cm
1420	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	10	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.0cm
1421	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	9.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.5cm
1422	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	8.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.4cm
1423	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	2/3	16.3	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.0cm
1424	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	3/4	13.9	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.5cm
1425	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	7.8	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.6cm
1426	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	9.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 4.4cm
1427	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	完	11.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-182 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.7cm
1428	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	5.8	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-183 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.3cm
1429	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	5/7	12.0	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-183 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.3cm
1430	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	12.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 2.0cm
1431	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	11.4	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.8cm
1432	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	小	7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.5cm
1433	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	小	8.2	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.4cm
1434	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	小	5.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.2cm
1435	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	小	11.6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.0cm
1436	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不完	6.5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-184 号	良	ヒト?	直縫合?、凸の輪郭部?、凸の輪郭部?、厚さ 2.2cm
1437	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	14.7	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-185 号	良	ヒト?	直縫合?、輪郭部?、輪郭部?、厚さ 2.0cm
1438	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	完	6	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-185 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 0.9cm
1439	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	7/10	17.0	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-185 号	良	ヒト?	直縫合?、板状?、厚さ 1.7cm
1440	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	完	5.3	福氏灰泥土?	土	五段 帆点	いわ 88-1-185 号	良	ヒト?	直縫合?、厚さ 1.7cm
1441	福	薄葉貝殻	岩礁	前歯?	不整形 - 鳥嘴円 - 形 K.O	不明	5	福氏灰泥土?	土	五段 帆点				

No.	番	道跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存 部位 cm	現 合 風	付着物	材質	出土 立地 位置	通 跡 評価	通 航 場所	備 考
1444	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	不整円? - 前K.O.	不明	8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面不整斜斜	
1445	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	不明	5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	なぞりによる円文? 便面到目時, 厚2cm	
1446	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	? - 前K.O.	不明	7.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。縫合多(押縫?)。厚さ1.7cm	
1447	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	不明	5.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	便面斜2列。厚さ2.3cm	
1448	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	不明	7.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割(隙縫)?	
1449	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	不明	8.9		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割	
1450	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	網片	3.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割	
1451	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	網片	5.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.7cm	
1452	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	小片	4.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。孔丸? 縫割? 厚さ2.4cm	
1453	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	網片	3.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割? 厚さ?	
1454	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	網片	6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割? 厚さ?	
1455	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	網片	4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割?	
1456	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	網片	5.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割	
1457	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	網片	5.5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面彌縫? 形面三角形	
1458	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	6.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.1cm	
1459	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円? - 前K.O.	不明	4.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ0.8cm	
1460	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整長円形 - 前K.O.	壳形	7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.5cm	
1461	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.1cm	
1462	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	14		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.4cm	
1463	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	小片	5.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.9cm	
1464	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形? - 前K.O.	壳形	8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.3cm	
1465	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	8.9		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.4cm	
1466	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	12.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ1.4cm	
1467	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	17.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.7cm	
1468	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	17.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.7cm	
1469	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形? - 前K.O.	壳形	9.9		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.4cm	
1470	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	11.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.7cm	
1471	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	椭形? - 前K.O.	4.5	14.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.7cm	
1472	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	17.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.3cm	
1473	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形? - 前K.O.	壳形	9.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.7cm	
1474	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	破片	12.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ5.2cm	
1475	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	14.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.8cm	
1476	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	16.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.5cm	
1477	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	椭形? - 前K.O.	壳形	7.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.6cm	
1478	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	11.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.5cm	
1479	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	14.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.5cm	
1480	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	15.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.3cm	
1481	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	17.5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.8cm	
1482	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形? - 前K.O.	壳形	12.1		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ5.8cm	
1483	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	13		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ4.5cm	
1484	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	10		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.5cm	
1485	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	12		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.9cm	
1486	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	15.5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ6.6cm	
1487	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	10.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.2cm	
1488	福	津波破貝塙	縫合傳?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	16		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.3cm	
1489	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	11.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ4.5cm	
1490	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	7.8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ4.5cm	
1491	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	10		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.8cm	
1492	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	10.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.2cm	
1493	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	18.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ4cm	
1494	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	12.5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.6cm	
1495	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	14.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ3.5cm	
1496	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	14.8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状。片面彌縫? 厚さ2.5cm	
1497	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	14.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	板状でいい。片面斜縫? 厚さ4.8cm	
1498	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	15.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割。孔丸? 片面のみ。	
1499	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	15		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割。孔丸? 厚さ4.8cm	
1500	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	21.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面彌縫。片面V字彌縫? 厚さ6.2cm	
1501	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	22.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面彌縫。片面V字彌縫? 厚さ5.9cm	
1502	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	19.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面彌縫。片面V字彌縫? 厚さ7.5cm	
1503	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	15		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	[片面V字彌縫(中間横縫)] 厚さ5.4cm	
1504	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	24.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	平面でいい。裏裏斜縫? 厚さ6.4cm	
1505	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	30.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? 片面斜縫? 片面孔丸? 厚さ5.7cm	
1506	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	29.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? 片面斜縫? 多重円弧。厚さ9.7cm	
1507	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円形 - 前K.O.	壳形	25.5		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割	
1508	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	20.8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割。耐久性? 厚さ6.5cm	
1509	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	24.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	裏裏斜縫。厚さ5.3cm	
1510	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	10.6		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面のみ。耐久性?	
1511	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	12.7		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	平らでいい。表面斜縫?	
1512	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円? - 前K.O.	壳形	17.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	縫割。孔丸? 耐久性? 厚さ4.4cm	
1513	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	不整円? - 前K.O.	壳形	16		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面一面彌縫? 厚さ6.5cm	
1514	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	11.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? ハイソウ? 耐久性? 孔丸? 耐久性? 厚さ2.7cm	
1515	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円形 - 前K.O.	壳形	11.8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? ハイソウ? 耐久性? 厚さ3.4cm	
1516	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	19		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? ハイソウ? 耐久性? 厚さ4.3cm, 62.0g	
1517	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円形 - 前K.O.	壳形	11.3		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	裏裏斜縫。耐久性? 斜縫? 厚さ4.8cm, 112.2g	
1518	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	5.2		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	片面のみ。耐久性? 厚さ2cm	
1519	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	長椎円形 - 前K.O.	壳形	7.9		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	裏裏斜縫。耐久性? 厚さ2.5cm	
1520	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	7.9		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? 孔丸? 厚さ5.6g	
1521	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	破裂? - 前K.O.	壳形	8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	壁石? S字彌縫。耐久性? 厚さ2.8cm	
1522	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	? - 前K.O.	不明	7.8		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	近天波波? 耐久性? 厚さ3.4cm	
1523	福	津波破貝塙	岩塙?	不明	楕円形 - 前K.O.	壳形	12.4		織紋灰瓦?	五疊 高点	いか86-186.2回	裏裏斜縫。中集合縫。厚さ3.0cm, 193.8g	

No.	番	遺跡名	種別	時期	形態・系列・形状	残存	現長	幅	寸法 cm	合	付箋物 高さ	材質	出土 位置	遺跡 地主	評価	施加部	備考
1524	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円内・非K.O	一次	17.7					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面10	片端削痕?	厚さ 5.8cm	519 g
1525	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	下半身のみ	破片	9					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面11	縞切刃自立	厚さ 2.3cm	
1526	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	圓丸方?	非K.O	破片	9.5				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面12	パンツ	厚さ 1.5cm	
1527	福	薄磚貝塚	縫斜縫?	不明	小穴	小穴	5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面14	難辨化	厚さ 1.5cm	
1528	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	?・舟K.O	破片	10.2					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面15	片端バッソ凹内	直角打削痕	厚さ 2.4cm
1529	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟方形?	非K.O	欠損	17				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面16	片端バッソ内凹多段	厚さ 5.9cm	
1530	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	?・舟K.O	欠損	8.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面17	パンツ	厚さ 3.3cm	
1531	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	?・舟K.O	破片	7.8					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→111面18	バッソ直立	厚さ 2.1cm	
1532	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	圓丸長方?・舟K.O?	舟形	16.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→112面1	舞森港田口状文	(正中腹)	厚さ 4.5cm
1533	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	縫狀?	非K.O	欠損	8.3				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→112面2	舟形物文	盤平ら	厚さ 5.6cm
1534	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形・非K.O	完形	24.1					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→112面3	舞森バッソ	舟形透子	厚さ 7.1 cm
1535	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	縫狀?	舟K.O	船形	14				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →113面1	丸内縫物	船形孔	厚さ 5.5cm
1536	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形・舟K.O	欠損	15.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→113面2	外側上?	船形孔	厚さ 4.4cm
1537	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形・非K.O	船形	16.6					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→113面3	片面上?	船形孔	厚さ 4.5cm
1538	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形・舟K.O	一次	23.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→113面4	片面上?	船形孔	厚さ 8.5cm
1539	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形?	非K.O	一次	16.5				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→113面5	片面上?	船形孔	厚さ 5.5cm
1540	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形?・舟K.O	破片	9.4					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→113面6	舞森直立?	舟形斜削痕	厚さ 3.2cm
1541	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形?	非K.O	完形	12.7				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→113面7	片面上?	船形孔	厚さ 3.2cm
1542	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形?	舟K.O	完形	17				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→114面1	舟形斜削痕	舟形孔	厚さ 4.5cm
1543	福	薄磚貝塚	縫斜縫?	不明	舟形円形・舟K.O	一次	14.1					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→114面2	舟形不規則?	厚さ 2.4cm	
1544	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形?・舟K.O	破片	8					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→114面3	舟形直立?	舟形孔	厚さ 2.6cm
1545	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	?・舟K.O	破片	7.9					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→114面10	舟形直立?	舟形孔	厚さ 3.4cm
1546	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	?・舟K.O	破片	4.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→114面11	舟形直立?	舟形孔	厚さ 3cm
1547	福	薄磚貝塚	若塚?	C 2.2?	舟形円形?・4.5?	舟形	8.2					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面1	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 2.8cm
1548	福	薄磚貝塚	若塚?	C 2.2?	4.5?	舟形	1.7					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面2	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 2.6cm
1549	福	薄磚貝塚	若塚?	C 2.2?	4.5?	舟形	6.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面3	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 2.6cm
1550	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形円形?・舟K.O	破片	7.5					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面4	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 5.7cm
1551	福	薄磚貝塚	若塚?	不明	舟形?	舟K.O	破片	4.2				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面5	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 2.1cm
1552	福	薄磚貝塚	縫斜縫?	不明	舟形?	舟K.O	破片	14				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面9	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 2.1cm
1553	福	薄磚貝塚	縫斜縫?	不明	不整形	欠損	19.9					縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面10	舟形斜削?	舟形孔	厚さ 7cm
1554	福	薄磚貝塚	縫斜縫?	不明	舟形?	舟K.O	欠損	10				縞灰質土器	丘陵	縞点 <small>いわ</small> →14→115面11	差込頭?	舟形孔	厚さ 4.6cm

品3点、未成品4点、原石30点以上出土している。

・青森県弘前市十腰内1遺跡（第7表1135～1137）（青森県教育委員会 2001）

農道建設の続きで、上記調査区の東側、南東側に隣接する。2,700m²（幅約15m）調査され、隣接区と同様の遺構が検出されているが、縄文時代の集落は後期後葉まで遡り、後期中葉土器も出土した。当該土器は晩期中葉が多く、大洞A'式が僅ながら出土している。

関連遺物は岩版3点である（第1図6）。11点出土した土偶の約半分は後期のようだが、やはり個性が強く（金子 2014 : p.10）、脚の屈曲が弱い北海道系の屈折像土偶B類が出土しているのが注目される（報告書：図88の8）。石劍類20点、環状石斧？1点、円盤状石製品153点、緑色凝灰岩製の玉は未成品を含み5点出土している。報告書図90の17の土製耳栓は、縄文時代後期前葉以前のものであろう（金子 2012）。

・秋田県旧鷹巣町藤野遺跡（第7表1138～1147）（秋田県教育委員会 1981）

国道バイパス建設に伴って8,000m²（幅約30m）調査された。整理が不十分な段階での報告で（報告書:p.143）、掲載遺物がどの程度実態を示しているか定かでない。縄文時代後、晩期の堅穴住居跡も検出されているが、前期も多い。87基の土坑（墓主）のうち時期の特定できたものは晩期だけだそうである（報告書:p.218）。後～晩期の掲載土器は、後期前葉～晩期中葉で、大洞C 2式以降は出土していないそうだ（報告書:p.219）、岩版にはそれらしきものがある。後期後葉～末の掲載土器が比較的少ない。大洞B1～2式が多いのは、実態と考えて良いようだ（報告書:p.219）。

掲載されている関連遺物は、岩偶？1点、岩版8点、土版？1点である。その他、土偶約15点、石劍類約11点、土製耳栓約7点、第三段階（大洞C 1式期）の弧状土製品（金子 2009b）2点、II b類（大洞BC2式期）？のボタン状石製品（金子 2010a）2点などが掲載されている。石製玉類は40点以上掲載されているが、時期を特定するのが難しい。

・秋田県秋田市上新城中学校遺跡（第7表1148～1150）（秋田市教育委員会 1992）

中学校建て替えに伴い3,834m²調査され、縄文時代晩期の集落跡（住居、櫛木列跡、墓多数）が検

出された。縄文時代後期前葉、後葉、弥生時代、平安時代の土器も出土しているが、大部分は後期末～晚期で、前稿で扱った方が良かったかもしれない。当該期の土器はほぼ全般出土しているようだが、大洞A1式が最も多く、後期末～晚期初頭は僅かで、晚期末、大洞C1式は比較的少ない。

関連遺物は、岩版1点、土版？2点で、土版？は、文様から判断したが、形と大きさが通常のものと異なっており、貫通孔の位置から装身具と考えた方が良いかもしれない（第1図12、13）。

土偶は29点出土し、大洞A1式期の結髪土偶を主体とする（金子 2011a : p.59）。石剣類33点（454は後期後葉）、石冠2点、独鉛石2点、円盤状石製品6点、石製玉類8（丸玉6、勾玉1）点、土製丸玉1点出土している。報告書第56図34は第六段階（大洞A1式期）の弧状土製品（金子 2009b : 第7図）か。

本遺跡は、林道（A地区。500m、幅約10m）と中学校小グランド（B地区。600m）造成の際にも調査され（秋田市教育委員会 1980）、A地区は中学校の西側、B地区は北側斜面上方に相当し、いずれも調査区の南側を中心に今回の土坑墓群の続きが検出されていたが、関連遺物の出土はなく、A地区から、土偶数点、石剣類、独鉛石、円盤状石製品が出土したのみで、当該期の土器はやはり全般認められるが、晚期前葉が比較的多い。

・秋田県旧山内村虫内I遺跡（第7表1151～1157）（秋田県教育委員会 1998）

秋田自動車道建設に伴って3,280m（幅約55m）調査された。縄文時代早期～後期中葉土器も出土しているが、大部分は後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晚期中葉（大洞C1式）で、晚期の方が多いようである。当該期の集落跡（墓主体）が検出された。

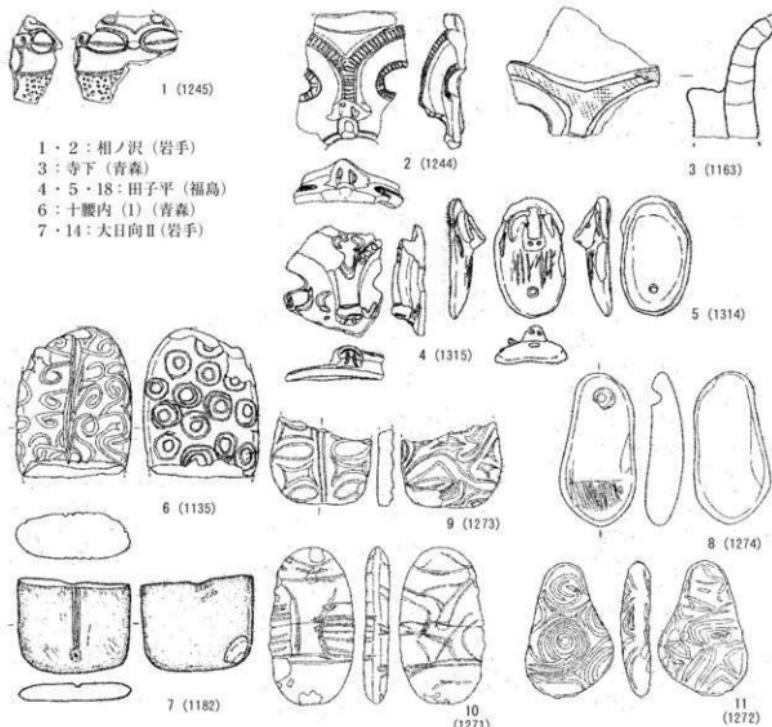
関連遺物は、岩版3点、線刻蹠多数、美々4型中空動物形土製品1点である。報告書では、線刻蹠が138点出土したとあるが（本文編p.196）、図示されたものは少なく、また図示されたものを見ても、不整形で磨石類等蹠石器との違いが不明瞭なものが多く、ここでは、図示されたもので比較的「線刻蹠」然としたものだけ表にした。写真（観察表あり）だけのものには、岩偶然としたもの（図版・写真編：写真124の2？、3、5、6ほか）や、パンツ状区画を持つもの（同：写真130の2、131の2）、岩版の未成品？らしきもの（同：写真132の1？、2）、片面に文様が線刻されたもの（同：写真128）などがあるが、割愛した。岩版は、図示されたものだけらしいが、なぜか出土土器が減少する時期のものしかない。

45点以上出土した土偶のうち図示された14点は、概ね土器の出土傾向を反映するが（金子 2011a : p.62）、後期の割合が多い気がする。鳥形突起2点は、文様や類例から後期後葉と判断して割愛した。報告書図版424の12は、美々4型中空動物形土製品の首の可能性もあるのかもしれない。石剣類は466点、円盤状石製品47点、石製玉類14（丸玉以外3、ヒスイ5）点出土している（報告書：本文編p.196）。土製耳飾は、62点以上出土し、無文環状のものが主体を占めるようで、図示されたものでは、クラゲ状のものを除けば、小型のものも含め晚期前葉と言えるものはほとんどなく、土器の出土傾向を反映していない。その他、石製耳飾が2点とある（報告書：本文編p.196）。

・秋田県湯沢市堀ノ内遺跡（第7表1158～1162）（秋田県教育委員会 2008）

国道バイパス建設に伴って3,250m調査された。縄文時代中期～後期前葉、弥生時代前期？の土器も出土しているが、縄文時代後期中葉末～晚期中葉（大洞C1式期）の集落跡（墓、遺物包含層）が主に検出され、僅かながら古代～近世の遺構・遺物も発見されている。掲載土器は大洞BC2式が比較的多い印象を受ける。櫛原式文様を持つ土器が出土している。

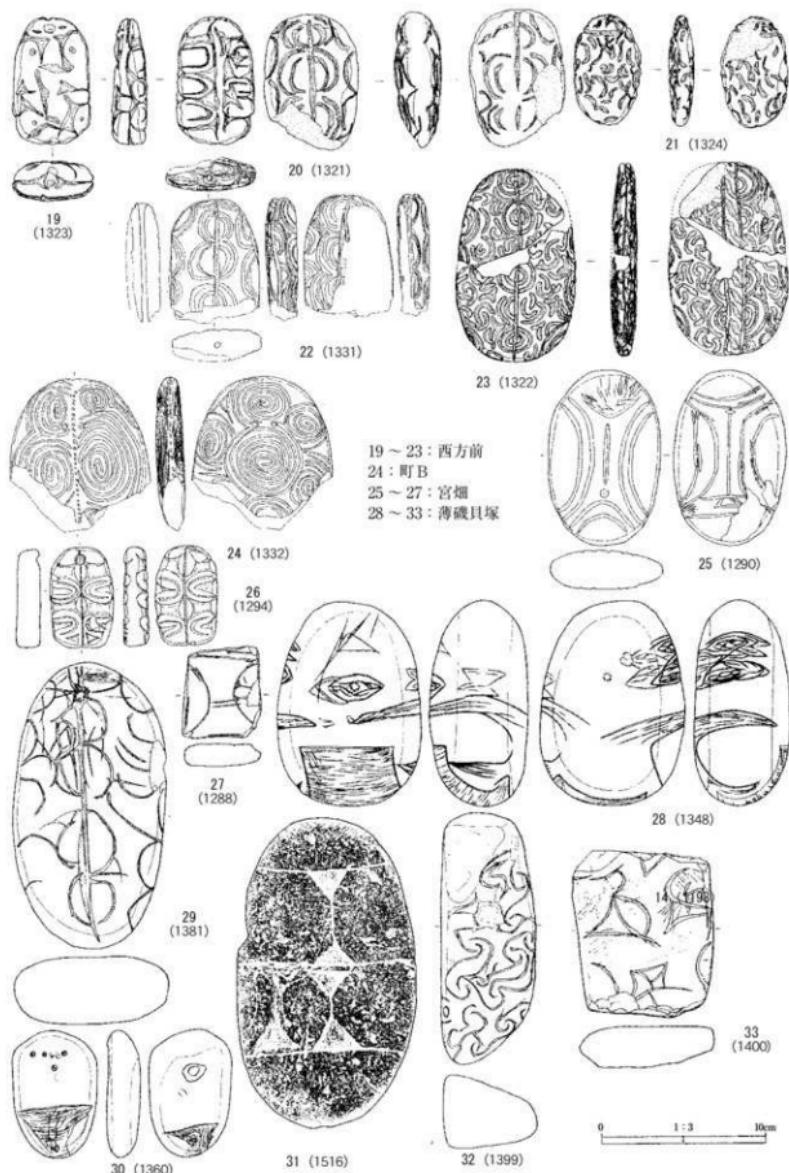
関連遺物は、人面付土器1点、美々4型中空動物形土製品4点？である。土偶は48個体出土し、43点掲載されているが、後期が多いようである。石剣類は170点出土したそうである（報告書第1分



8～11: 下叶水(山形)、12・13: 上新城中学校(秋田)、15～17: 羽白C(福島)



第1図 関連遺物 (括弧内数字が第7表の番号=国版出典)



第2図 福島県の土版・岩版（括弧内数字が第7表の番号=国版出典）

冊p.160）。岩偶が2点出土しているが、装飾と周囲から出土した土器から後期後葉以前と判断し割愛した。土製耳飾が252点出土し、78点掲載され（報告書第1分冊p.160）、環状無文のものが主体で、後期のものが大部分を占めると思われるが、クラゲ状や鼓状（大洞BC2式期？）のものも僅かに出土している。花弁丸玉が6点掲載され、全て第Ⅱ段階（瘤付土器第Ⅲ段階～大洞B1式期）のものである（金子 2011c）。その他、円盤状石製品が50点出土しているそうである（報告書第1分冊p.163）。

・青森県階上町寺下遺跡（第7表1163～1172）（階上町教育委員会 2007）

林道拡幅に伴って125m²（幅約4m）調査され、縄文時代後期後葉～末の集落跡と晩期中葉の貝塚が主として検出され、貝層から大洞C1式期と推測される多数の製塙土器が出土している。掲載土器は、僅かな縄文時代中期前葉、後期前葉土器片を除けば、後期中葉末（十腰内Ⅲ式）～晩期中葉（大洞C2式中期？）、弥生時代前期末？で、大洞C1～C2式古期、なかでも大洞C1式がほとんどを占める。

関連遺物は、土面1点（第1図3）、岩版？1点、土版6点？、美々4型動物形土製品？1点、動物形土製品？1点である。その他、土偶34点（大洞C1式期は少なく、その前後が目立つ）、石劍類9点、石冠？1点、土冠1点、土製耳飾12点（環状が主だが、クラゲ状1、鼓状1点）（金子 2009a）、第四～五段階？弧状（「ケムシ形」）土製品（金子 2009b）3点、石製玉類18点（勾2？、丸6、ヒスイ10）、土製玉類7点（勾2、丸4）、鹿角製腰飾1点、貝輪14点、猪牙製腕飾などが出土しており、石劍類、土冠、玉類には寄贈品が含まれている。

・青森県階上町滝端遺跡（第7表1173～1177）（階上町教育委員会 2000）

農道建設に伴って2,600m²（幅約8m）調査され、縄文時代後期後葉～晩期前葉の集落跡が主として検出された。掲載土器は、当該期では瘤付土器第I段階～大洞A1式が見られるが、多いのは晩期前葉までで、晩期中葉は少なくなり、大洞A1式は非常に少ない。

土偶を主体とする関連遺物は、調査以前の寄贈資料もまとめて報告しており、表に示したものでは、岩版以外全て寄贈資料であるが、以下では寄贈資料は除外して記載する。土偶約28点（後期後葉含む）は、土器の出土傾向を概ね反映しており、掲載されている晩期中葉のほとんどは寄贈資料である。岩版1点、石劍類4点、縄文のみの土冠1点出土し、装飾品では、第Ⅲ段階（大洞C2新～A1式期）の菱形環状石製品（金子 2010b）1点、第六段階（大洞A1式期）の弧状土製品？（金子 2009b）1点が出土し、土製耳飾は、晩期初頭らしきものが3点のほか環状のものが数点出土している。玉類も、石製（ヒスイ3点）、土製合わせて20点程度出土しているが、詳細な時期は不明である。なお、晩期中葉の残りの良い製塙土器が土坑底から出土し、時期は不明だが、水晶製の石錐が出士している。

・岩手県輕米町長倉I遺跡（第7表1178～1180）（財岩手県文化振興事業団 2000）

農道敷設のため3,346m²調査された。縄文時代早、前期の土器も出土しているが、後期前葉～晩期前葉がほとんどで、大洞C1式以降の土器は出土していない。晩期前葉の土器も比較的多く出土しているが、土・石製品の出土は、時期の特定できる種類から判断する限り、非常に少なく、例えば、313点出土した土偶でも晩期と推測されるものは15点程度に過ぎない。収集対象時期の可能性が高いと判断できた土・石製品は、正中線中空土版が約3点、土製耳飾3点、第二段階（大洞BC1～2式期）の弧状土製品（金子 2009b）1点、第I c段階（大洞BC2式期）の菱形環状石製品（金子 2010b）1点、第II a段階（突出型。瘤付土器第III段階？）の花弁丸玉（金子 2011c）1点のみである。時期を特定するのが難しい石劍類、装身具類も多数出土しており、この中に当該期のものがあ

るかもしれないが、上述の理由で割愛する。ただし、8点出土した内面渦状土製品は、ほとんどが深楕形で、晩期（大洞BC2式期？）としてよいかもしれない（金子 2011b）。

・岩手県輕米町大日向II遺跡（第7表1181）（財岩手県文化振興事業団 1986）

調査原因是、東北自動車道軽米インターチェンジ建設に伴って行われた国道340号拡幅工事で、調査面積は6,101m²である（第1次調査）。縄文時代前、中期、古代の住居も検出されたが、縄文時代後期後葉の集落跡が主体である。掲載土器は、上記のほか、縄文時代後期前葉、晩期があるが、一連の報告書の中で最も当該期土器が少ない。後期末（瘤付土器第Ⅲ段階）～晩期初頭（大洞B1式）は見られず、大洞B2式、大洞BC2式は僅かで、大洞C1～2式が比較的多く見られるだけである。

土偶7点、正中線中空土版1点、石剣類4点、石製勾玉1点掲載され、大洞C1式古期の大型遮光器土偶2点、正中線中空土版以外は、後期後葉の可能性が高い。

・岩手県輕米町大日向II遺跡（第7表1182～1219）（財岩手県文化振興事業団 1995）

国道395号の改良工事（上記南に平行する国道340号からの接続道路建設）に伴って4,735m調査された（第2～5次調査）。縄文時代後期後葉（後期中葉末含む）の集落跡を主体とし、弥生時代前期末の集落跡、さらに、縄文時代早期後葉、前期、中期前葉、中期後葉～末、晩期前～中葉、奈良時代の堅穴住居も検出されている。出土土器は、縄文時代早、前、中期のほか、後期では、初頭ではなく、前葉は比較的多いが、中葉はほとんどなく、中葉末に急増して後葉初め（瘤付土器第Ⅰ段階）にピークを迎える。その後の瘤付土器第Ⅱ段階も比較的多いが、後期末（瘤付土器第Ⅳ段階）～晩期初頭（大洞B1式）は少ない。晩期前葉（大洞B2式）以降は比較的多いが、晩期後葉（大洞A1式）に急減し、大洞A2式らしい土器は見えない。弥生時代前期末には再び増えるが、中期前葉は少なく、ここでいったん断絶し、次は後期末となる。

このような出土傾向は、土偶にも当てはまるため、時期不明な土・石製品は、後期後葉の可能性が高く、以下では割愛している。関連遺物は、岩版1点（第1図7）、土版25点、正中線中空土版約12点（後期含む）のほか、土偶約100点、石剣類約25点、土冠1点、装飾品の類では、菱形環状土・石製品（金子 2010b）14点、弧状土製品（金子 2009b）5点、鈎形土製品（金子 2011b）2点、ボタン状土製品（金子 2010a）1点、内面渦状石製品1点出土している。土製耳飾はクラゲ状系列（金子 2009a）2点で、その他に環状無文のものが多数出土しているが、後期後葉の可能性が高い。この他、弥生時代前期末のガラス玉1点が注目される。円盤状石製品は約300点出土している。

土器の出土量の割に、石製品が非常に少なく、特に通常の岩版が全く出土していないのは驚きである。

・岩手県輕米町大日向II遺跡（第7表1220～1223）（財岩手県文化振興事業団 1998）

国道395号の改良工事（軽米バイパス建設）に伴い5,600m調査され（第6～8次調査）、最も北側の調査区となる。これまでと異なり、縄文時代前期中葉～中期前葉、中期末、平安時代の集落跡を主体とし、縄文時代早期～前期初頭の集落跡、後期前葉の集落跡も検出されているが、前の調査区に隣接する南西側を中心として縄文時代後期後葉～晩期の集落跡も検出されている。出土土器の過半は円筒下唇式で（報告書第2分冊：p.619）で、本稿収集対象期の出土遺物は比較的少ないようである。

当該期の掲載土器では、後期末～晩期初頭、晩期後葉～末が非常に少なく、大洞C1式が多く、弥生時代前期も比較的多い。関連遺物の時期も概ねこの出土傾向に比例し、土版約1点、正中線中空土版約2点、美々4型中空動物形土製品1点？である。土偶が約14点、石剣類約35点出土し、このほか、広菱形（大洞C2式古期？）の菱形環状石製品（金子 2010b）1点、円盤状石製品約88点などが出土しているが、当該期の土・石製品の出土は少ない。

・岩手県盛岡市川目A遺跡第5次調査（第7表1224～1232）（（公財）岩手県文化振興事業団 2012）

国道106号の改良工事（軽米バイパス建設）に伴い6,406m²調査され、詳細な時期は不明だが、縄文時代の集落跡が中期後葉から晩期中葉にかけて継続的に営まれていたようである。中近世の土坑墓も6基検出されている。出土土器は、僅かな縄文時代前期、弥生時代後期、土師器を除き、縄文時代中期後葉～晩期後葉で、後期前～中葉が大半を占め、晩期前～中葉も比較的多いが、後期後葉～晩期初頭は少なく、晩期後葉は僅かである。

関連遺物。岩版1点、土版1点、正中線中空土版2点？、美々4型中空動物形土製品5点？出土しており、美々4型の多さは、同じ盛岡市の手代森遺跡に共通する（本稿第2表）。600点以上出土した土偶の大部分も後期前～中葉だが、後期後葉以降にも継続しており、当該期では35点の土偶が出土し時期の偏りはない（金子 2014 : p.14）。276点出土した石棒類は121点図示され、そのうち当該期の石劍類は30点程度か。59点出土し54点掲載された土製耳飾には、無文環状のものが8点、大腿骨状系列（金子 2009a）が1点あり、その他のほとんどは後期前～中葉と思われる。第I段階（大洞B2～C1式期）菱形環状石製品（金子 2010b）の未成品が1点出土している。円盤状石製品147点は当該期に属するものか。その他（イノシシ形土製品等）、土器・土製品の出土状況から、時期の特定できないものは後期前～中葉の可能性が高いので割愛した。石製装身具は少ないようである。

・岩手県旧大東町熊の平遺跡（第7表1233～1239）（大東町教育委員会 2000）

は場整備に伴う主に水路部分（幅約3m？）を調査した上で、面積はⅡ次322m²、Ⅲ次240m²である。縄文時代後～晩期と平安時代の集落跡が主として検出された。

掲載縄文弥生土器は、僅かな縄文時代早～中期の土器片を除けば、縄文時代後期前葉～晩期末がほとんどで、後期中葉と晩期後葉（大洞A1式）が多く、晩期初頭は見えないようである。

関連遺物は、土版7点である。土偶のほとんどは後期前～中葉で、当該期は約5点で晩期後半しかない（金子 2015 : p.15）。したがって、石劍類の判断は難しいが、3点以上は当該期と思われる。晩期末？の長い独鉛石が1点掲載されている。赤色土製丸玉1点は当該期と思われるが、石製玉類4点は定かではない。円盤状石製品6点も後期か。

・岩手県旧川崎村河崎の櫛擬定地遺跡（第7表1240～1243）（財岩手県文化振興事業団 2006）

北上川の洪水対策堤防建設に伴って行われた。調査面積は22,845m²だが、自然堤防上に各時代の生活面が積み重なっていて、詳細は不明だが掘削が及ばないことによる判断からか、縄文面の調査が途中で打ち切られ（報告書第3分冊 : p.2）、報告書は古代以降が中心となっており、当該期の調査面積は不明である。

このような調査のため、実態は不明だが、以下、報告書の掲載遺物と記載により概要を述べておく。縄文時代では、晩期中～後葉の堅穴住居跡2棟、土器埋設遺構1基、炉跡・焼土等を中心とする後期前～中葉の集落跡が検出されている。縄文・弥生土器は、僅かな中期のほか、後期初頭～弥生時代前期末（大洞A～式新期）まで継続して出土しているが、後期前～中葉が最も多く、統いて晩期中葉（大洞C1～2式）で、他は少ない。こうした出土状況のため、土製品は後期前～中葉が多く、石製品も同様と思われる。

関連遺物は、岩版4点（1点不掲載）、正中線中空土版？1点である。当該期と思われる土偶は、十点程度、土製耳飾は53点だが、鼓状5点の他は、断面く字形の環状がほとんどである。第II段階（輪付土器第III段階～大洞B1式期）と第IV段階（大洞C2～A1式期）の花弁丸玉（金子 2011c）が1点ずつ出土している。土製勾玉2点も晩期中葉ころか。当該期と思われる石劍類は約15点、B、C区から出土した円盤状石製品14点は当該期か。組み合わせ式腕輪の部品と考えられる三叉文施文の石製品が1点出土している。石製玉類6点は当該期か。

・岩手県旧藤沢町相ノ沢遺跡（第7表1244～1249）（財岩手県文化振興事業団 2000）

土地改良事業に伴って行われた道路拡幅により760m²調査され、縄文時代の集落跡が検出されているが、詳細な時期は不明であり、中近世の遺物も出土している。出土土器は、縄文時代後期前葉～晚期後葉（大洞A1式）で、後期前～中葉土器が最も多く掲載土器の半分以上を占め、次いで晚期前葉大洞BC2式前後だが、後期後葉～晚期初頭は非常に僅かである。

関連遺物。土面1点（第1図2）、人面付土器？1点（第1図1）、岩版2点？、土版2点出土している。201点出土した土偶の大部分は後期前～中葉で、晚期は十数点のみだが、時期は掲載土器の傾向と異なり、大洞C2式期が大半を占める（金子 2014：p.18）。その他、当該期の可能性が高い石剣類は十数点掲載され、独鉛石1点出土している。土製耳飾は、24点掲載されているが、当該期と言えるのはクラゲ状系列？1点、大腿骨状系列1点のみで（金子 2009a）、他は全て後期前～中葉と思われる。イノシシ形土製品も後期前～中葉と判断した。石製装身具は、時期を特定できないので割愛するが、丸玉が10点掲載されている。線刻繩も割愛した。円盤状石製品6点は当該期か。

・山形県真室川町釜淵C遺跡（第7表1250～1266）（財山形県埋蔵文化財センター 2003）

は場整備事業に伴って6,300m²調査。連続しない三地区に分かれ、A区（3,550m²）では縄文時代中期末の集落跡、B区（1,600m²）では縄文時代晚期の包含層、C区（水路予定地。幅約5mで1,150m²）では南半を中心にB区の続きの晚期包含層が主として検出されたが、中期末の遺物も出土したそうである。掲載土器は、中期以外はほぼ後期（縫付土器第IV段階）以降で、その他はA区から出土した後期前葉土器が僅かに掲載されているのみで、前稿で扱うのがふさわしかったが、動物形土製品（第7表1266）の時期に不安が残ったため本稿で扱った。

当該期土器は、後期末～晚期後葉（大洞A1式）で、晚期初頭まではほとんどなく、大洞B2式は掲載されていないよう、大洞BC2～A1式がほとんどである。関連遺物は、岩版4点、土版11点、美々4型中空動物形土製品1点、動物形土製品1点出土した。岩版が多時期にわたっているのに対し、土版の時期は偏っている。ただし、「大洞諸式の流れとおおよそ対応する」（稻野 1983：p.112）ので6類は概ね大洞A1式と対応するはずだが、今回大洞A2式以降は出土していないようなので出土土器の傾向と合わない。しかし、有名な大型の結髪土偶の時期は大洞A2式期と推測される（金子 2004）、調査区外にこの時期の土器が存在する可能性は高い。動物形土製品の時期は全く不明で、当該期とする根拠はない。

11点掲載された当該期の土偶は、概ね土器の出土傾向に合致する（金子 2016：p.28）。石剣類は36点掲載され、石冠3点、独鉛石4点出土し、独鉛石のうち2点は、晚期中葉以降の長いものである。21点出土した土製耳栓は、ほとんどが大洞C2～A1式期のC2ネジ形だが、大洞BC2～C1式期を主体とする鼓状も2点出土し（金子 2009a）、報告書第98図18は、後期後葉を主体とするスタンプ状系列（金子 2012）か。この他にも土製耳飾の可能性のあるものが指摘されている（報告書：p.42）、報告書第98図24は縄文時代中期末、31は後期前葉だろうか。その他、スプーン状土製品2点、円盤状石製品72点、土製丸玉1点、石製玉類数点（ヒスイ製含む）出土し、垂飾品と考えられる有孔石製品およびその未成品が二十点程度掲載されている。切目石錐が97点出土しているが、中期と判断し、大型石棒も同様である。

・山形県朝日村砂川A遺跡（第7表1267～1270）（朝日村教育委員会 1984）

は場整備事業に伴いトレチ式に1,576m²程度調査し、縄文時代後期後葉～晚期中葉の集落跡が主として検出された。出土土器は、縄文時代中期後葉～晚期後葉で、後期後葉～晚期中葉が主だが、後期が多く、晚期前葉は少なめか。

関連遺物は、岩版1点、土版3点である。報告書第70図3は、動物形土製品とされているが、不明瞭で時期を特定できないので割愛した。土偶は28点出土し、掲載品は後期が多くを占める。報告書第68図3は、大洞B1式古期？、8は大洞BC2式期、6は大洞C 2式古期の大型遮光器系列、11はx字形土偶である。4は、大型遮光器土偶の顔面とされているが、大洞B1式新期の人面付注口土器の可能性もある。

石剣類は147点出土し後期を含む（報告書第88図4）。石冠2点、独鉛石4点出土している。装身具類では、第五段階（大洞C 2式新期）の弧状土製品（報告書第71図24）（金子 2009b）が1点出土している。土製耳飾は9点出土し、環状無文が主体で、後期後葉～晚期初頭がほとんどだが、報告書第71図23は、晚期前葉の鼓状（金子 2009a）か。その他にも土製の装身具と考えられるものが出土している。石製玉類は、勾玉4点、丸玉（ヒスイ）5点出土し、その他にも石製装身具があり、図不掲載だがボタン状石製品も出土しているようである（報告書：p.148）。円盤状石製品は17点出土した。

・山形県小国町下叶水遺跡（第7表1271～1277）（鶴山形県埋蔵文化財センター 2009）

ダム建設事業に伴って5,900m²調査し、縄文時代後期後葉～晚期後葉の集落跡が検出された。掲載土器は、後期後葉（瘤付土器第1段階）～晚期初頭（大洞B1式）が多くを占め、晚期前葉以降（大洞A2式まで？）はあまり多くないが、大洞C 1式は粗製土器が主体ながら比較的多いと言えるかもしれない。

関連遺物は、岩版4点（第1図8～11）、土版1点、正中線中空土版？1点、美々4型中空動物形土製品？1点掲載されている。土版以外は、掲載土器の多い時期に合致している。

26点のうち20点掲載された土偶の時期も、晚期初頭までに収まると思われる。石剣類は28点出土し、独鉛石が2点掲載されている。円盤状石製品は12点出土した上で、Ⅲ a（大洞C 1式）期のボタン状石製品が1点掲載されている（金子 2010a）。東北地方北部で類例の少ない形の土製耳栓2点、ヒスイ製の勾玉1点やその他の石製装身具が数点掲載されている。

・福島県新地町三貴地遺跡（第7表1278～1281）（新地町教育委員会 1978）

ほ場整備事業に伴って田丁場B地点を540m²調査した。三貴地貝塚の指定範囲の南約50mに位置する。縄文時代晩期の捨て場が主として検出され、後期初頭の壺棺墓も発見された。当該期土器は、後期から晩期末まである由だが、大洞C 2式が主体で（報告書：p.118）、掲載土器には、大洞B1、BC2式と大洞A1式より後の土器は見られない。

関連遺物は、土版3点と正中線中空土版と推測されるもの1点である。土版はいずれも6類で、およそ大洞A'式期と推測されるものであり（稲野 1983）、上記土器出土傾向に合わない。当該期の土偶は2点で（報告書：図62の1、2）、福島県には珍しい屈折像B類土偶と、間接隆帶土偶で、どちらも大洞C 2式期の可能性がある。石剣類は3点出土していて、当該期の可能性がある。調査面積と土偶、石剣類の出土数に比して関連遺物の出土数が多いと言える。

三貴地貝塚隣接地のは場整備事業に伴う調査は、その後も行われたが、1979年の調査をまとめた報告書（三貴地遺跡発掘調査団 1981）には、当該期の土器や土偶、石剣類、土冠なども掲載されているが、関連遺物は見られない。

・福島県新地町三貴地貝塚（第7表1282～1284）（福島県立博物館 1988）

1952（昭和27）年に日本考古学協会縄文式文化の編年的研究特別委員会によって行われたトレント調査の報告であり、1954（昭和29）年に東京大学理学部人類学教室が行ったトレント調査の一部成果も盛り込まれている。両者は隣接地のようである。

1952年の調査では、夥しい数の入骨が発見された。掲載土器は、縄文時代中期～晚期後葉で、後期前葉が多い。当該期では、大洞A1式以降は僅かである。関連遺物は、岩版？1点、美々4型中空動物形土製品1点である。「土面？」と報告された土製品が4点あるが（報告書：第235図）、得心がいかなかつたので資料に含めなかつた。19点出土した土偶は後期がほとんどで、晚期と明確に特定できたものではなく、石剣類4点も同様である。晚期初頭と思われる箱蓋状系列（金子 2009a）や環状系列の土製耳飾が5点ほど掲載されており、蓋状系列（晚期中葉？）（金子 2009a）の耳栓が2点見られる（報告書：第327図2、3）。石製丸玉や孔垂飾（金子 2006）も數点見られるが、当該期かどうか分からぬ。骨角製装身具や貝輪についても同様である。

1954年の調査結果は、抄録のようである。掲載土器のほとんどは後期後葉だが、大洞BC2式土器もある。関連遺物は、人面付土器1点のみである。「土面」とされた土製品が1点掲載されているが（報告書：第264図6）、こちらも得心がいかなかつたので資料に含めなかつた。5点掲載された土偶のうち1点は、大洞BC1～2式期の大型遮光器系土偶だが、その他はやはりほとんど後期である。多頭石斧が1点掲載されている。その他の石製丸玉や骨角製装身具、貝輪については1952年調査と同様である。

・福島県福島市宮畠遺跡（試掘調査）（第7表1285～1287）（福島市教育委員会 1995）

工業団地建設に伴う試掘調査である。掲載土器は、縄文時代前期初頭、中期後半、後期前～晚期後葉、弥生時代中期後葉、土師器、須恵器などで、後期前～中葉が大半を占める。

関連遺物は土版1点で、動物形土製品2点も含めたが、類例と出土土器の傾向から、後期前～中葉とみなすべきらしい。当該期と特定できる土偶はなく、当該期と推測される石剣類は2点ほどである。

・福島県福島市宮畠遺跡（確認調査）（第7表1288～1293）（福島市教育委員会 2004）

工業団地建設に伴って調査が開始されたが、保存が決定し、史跡指定のために範囲確認調査が行われた（7,056m²）。縄文時代中期後葉、後期前～中葉、晚期中～後葉、平安時代集落を中心とした複合遺跡である。当該期の掲載土器では、大洞C2～A式が多く、後期末～大洞C1式は少なく、晚期末以降はないようである。当該期より、中期、後期前～中葉の土器が多く、土製品も、この時期のものが多くを占める。

関連遺物は、小片で写真もなく不明瞭なものを含むが、岩版3点（第2図25、27）、正中線中空土版？（土版？）1点、美々4型中空動物形土製品？（正中線中空土版？）1点で、動物形土製品1点は、当該期のものかわからぬ。

当該期の土偶は、約7点掲載され、全て大洞C2～A1式期である（金子 2016：p.28）。土冠2点、独鉛石1点掲載されている。当該期と推測される石剣類は9点程度か。円盤状石製品は4点掲載されている。土製耳飾のうち7点は、白状のもので時期を特定するのが難しいが、後期中葉の可能性が高い。1点大洞C2式期前半と思われるネジ前系列（金子 2010c）の土製耳飾が出土している（報告書第2分冊：図274の17）。報告書第1分冊図15の3は、後期後葉のものか。石製玉類7点（丸玉4、ヒスイ3）、土製丸玉1点は、当該期の可能性もある。

・福島県福島市宮畠遺跡（確認調査）（第7表1294～1298）（福島市教育委員会 2005）

史跡整備のための確認調査だが一部遺構の精査も行っている。掘立柱建物跡と埋甕の分布状況を確認することが主目的で、調査面積は520m²である。掲載土器は少ないが概ね上記傾向と同じで、少量の中世陶磁器片が出土したようである。遺構外出土遺物は、「整理作業途中であるため正式報告は次年度以降になるが、ここでは整理作業の過程で抽出した土製品・石製品のうち、以前の調査では見ら

れなかつたものを選んで図示した」そうである（報告書：p.40）。

関連遺物は、岩版1点、正中線中空土版？1点、美々4型中空動物形土製品3点？だが、東北地方北部のものに比べ変容が大きく、岩版は浮線網状文的な浮彫（第2図26）、美々4型は乳房を持つ。

当該期の掲載土偶は3点で、ほとんどが大洞A1式期である（金子 2016：p.28）。当該期と考えられる石剣類は3点掲載されている。写真がないので不明だが、報告書図30の1の大型土製耳飾は、東北系ではないが当該期か。報告書図31の3のサメ歯を模したような石製品（基部両端に貫通孔）は、当該期か。

・福島県福島市宮畑遺跡（第7表1299）（福島市教育委員会 2006）

工業団地建設に伴って調整池造成予定地および市道拡幅予定地の調査が行われた（5,000m²）。縄文時代中期後葉、後期前～中葉、晚期中～後葉、平安時代集落を中心とした複合遺跡で、掲載された縄文土器の大部分は中期後葉、次いで後期前～中葉で、それ以外は少ないが、中期中葉、後期初頭、後期後葉～晚期初頭（大洞B1式古期）、大洞BC2式～A1式が点々と出土している。そのため、関連遺物の出土はほとんどなく、岩版1点のみである。土偶の出土は多いが当該期のものはないようである。その他に当該期と言えそうなものは、ネジ前系列（金子 2010c）の土製耳飾1点（報告書第3分冊：図CBD-53の7）だけで、可能性のあるものとしても、石剣類数点、円盤状石製品1点だけである。

宮畑遺跡の調査は、その後も史跡整備に伴って行われ報告書も数冊刊行されている。遺構外出土遺物についてまとめた「福島市埋蔵文化財報告書第206集」（2010年刊行）には、当該期の土器も比較的多く掲載され土偶も出土しているが、関連遺物の掲載はない。

・福島県福島市南諫訪原遺跡（第7表1300～1305）（福島市教育委員会 1991）

小学校移転に伴い25,239m²調査された。後期の土器は「ほとんど出土していない。図示できたのは図317-287の堀ノ内式土器だけである」（報告書第2分冊：p.264）という出土状況だが、第6表の補遺ではなく、本表で扱った。縄文時代晚期後葉の環状集落、奈良～平安時代の集落、近世の墓域が主として発見され、縄文時代草創期の焼土、早期末～前期初頭の住居跡・土坑、中世の溝跡なども検出されている。

当該期の土器は、若干大洞C2式後半期の可能性があるものも見られるが、大洞A1式の単純相に近く、こうした意味では、第5表で取り上げるべき資料であった。関連遺物は、土版？6点で、土版然としたものは1点のみである。

当該期の土偶は4点（金子 2011a：p.66）、当該期と思われる石剣類は13点、石冠3点？、独鉛石2点である。ネジ前系列（金子 2010c：p.136）の土製耳飾1点、瓢箪小玉（金子 2006）1点、石製玉2点（1点丸玉）などの装身具が見られる。

・福島県飯館村羽白C遺跡第1次調査（第7表1306～1311）（福島県教育委員会ほか 1988）

ダム建設工事に伴い13,200m²調査し、1,700m²の下層部分を残した。縄文時代早期末～前期前葉、後期中葉～弥生時代前期末の集落跡が主だが、縄文時代中期の遺構なども検出されている。当該期の土器型式は満遍なく出土しており、弥生時代中期も見られるが。大洞B1～2式の掲載は比較的少ないようである。

関連遺物は、土版3？（第1図15・16）、正中線中空土版3？、当該期の土偶は5点で（金子 2011a：p.66、No.2222は第2次調査出土品なので除く）、土器と同様大洞C2～A1式期が多い。当該期と思われる石剣類約10点、独鉛石2点、その他、大洞B1～2式期と思われる箱蓋状（金子 2009a）土製耳飾1点、第I b段階（大洞B2式古期）のボタン状石製品（金子 2010a）1点などが

掲載されている。耳栓状の土製耳飾も出土しているが、当該期か不明である。

・福島県飯館村羽白C遺跡第2次調査（第7表1312～1313）（福島県教育委員会ほか 1989）

第1次調査で残した1,700m²の下層部分を調査したものである。概ね前回と同じ調査結果で、下層のためか古い方が多いが、晩期も多く出土している。

関連遺物は、土版の可能性のあるもの2点である（第1図17）。当該期の土偶は晩期中～後葉のものが2点掲載されている。石剣類は、遺物包含層から108点出土したそうだが（報告書：p.183）、掲載品が少なく詳細は不明である。なお、未成品の出土が多いことから、「石剣生産の中核的な存在だった」（報告書：p.215）とされる。土製耳飾の掲載が多いが、小型の耳栓が主で、大洞C2～A1式期のC2ネジ形3点？、晩期中葉を中心とする蓋状1点（報告書：図92の7）が見られる（金子2009a）。また、安行式の影響か、三叉文の施される箱蓋状なのに直径が2cmに満たないものが出土している（報告書：図143の6）。

・福島県浪江町田子平遺跡（第7表1314～1318）（福島県教育委員会ほか 2010）

常磐自動車道建設に伴い7,500m²（幅約70m）調査した。縄文時代後期後葉～末の集落跡が主として発見され、晩期前葉の集落跡、早期、後期前～中葉の土坑、平安時代の住居なども検出されている。出土土器は、後期後葉～末（瘤付土器第II～IV段階）、大洞B1式が多く、次いで大洞BC2式で、大洞B2式、大洞C1式は少なく、大洞C2～A1式は極わずかある。

関連遺物は、土面2点（第1図4、5）、土版2点（第1図18）、美々4型中空動物形土製品1点である。土版は弧線が顕著に施されていることから5類の仲間かと考えていたが、出土土器の傾向に合わず、後期後葉～末の可能性も高い。土偶は十数点出土しているが、ほとんど全て後期に収まりそうである。10点弱出土した石剣類、石製玉（ヒスイ1、碧玉製勾玉1点）も、同様であるが、報告書図214の11は晩期かもしれない。独鈷石1点も同様か。同じく10点弱出土した土製耳飾の中には、大洞B1式以降と思われるものもある（報告書：図44の16、図195の8、9）。

・福島県三春町西方前遺跡（第7表1319～1328）（三春町教育委員会ほか 1987）

第1次調査分（1,400m²）は別途報告され（三春町教育委員会 1985）、Ⅲ区からは晩期末を中心当該期の土器も出土していて、岩版1点も土坑から出土しているが、なぜか第2～4次調査分でも報告されている（No.1321）、そちらを引用した。Ⅲ区の当該期掲載土器は、大洞A'式～御代田式が多めで、次いで大洞C2式、瘤付土器II、III、大洞B2、BC2、C1式もある。

第2～4次調査の結果については、土製品・石製品篇（「西方前遺跡II」）、縄文時代中期末葉から後期前葉の集落跡篇（「西方前遺跡III」さらに本文篇、図版篇に分かれる）、縄文時代後期後葉から弥生時代初頭の集落篇（「西方前遺跡IV」）に分けて報告されているが、「西方前遺跡IV」の報告書が、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと岩手県立博物館のどちらにも送付されていないため、閲覧できなかった。調査面積についての記述も見つけることはできなかった。ここでは、「西方前遺跡II」を元に表にし、「西方前遺跡IV」と一体をなすとされる土器の考察篇（仲田茂司 1994）を元に出土縄文土器の概要を記すが、後期中葉～晩期中葉しかふれられていない。出土量にあまりふれていないのではっきりしないが、掲載土器を見る限り、この間の土器は、瘤付土器第II、III段階と大洞C2式が多く、その間は少ない。

関連遺物は、岩版2？、土版7（第2図19～23）、正中線中空土版？1点である。岩版・土版は、文様を持つが非K0系列がほとんどのため時期は特定しにくい。動物形土製品とされたもの1点は、その可能性が全くないとは言えないが、六本脚で、にわかには信じがたい。82点出土した土偶のうち当該期といえるのは、大洞A'式期の2点のみである。25点出土した石剣類には、当該期と言えそ

うなものも多い（報告書：Fig.50の14ほか）。独鉛石2点のうち、1点（報告書：Fig.52の37）は晩期後半以降だが、もう1点（報告書：Fig.52の40）は後期まで遡るか。土冠1点は晩期か。12点出土した土製耳飾のうち1点（報告書：Fig.24の1）は、形から機能を果たさないと思われる。白状のもののうち3点（報告書：Fig.24の2、4、5）は、後期前～中葉の可能性が高いが、1点（報告書：Fig.24の3）は晩期の可能性が高い。その他のクラゲ状や環状のものは後期末～晩期初頭の可能性が高い（金子 2009a：第1図）。土製丸玉2点、石製丸玉2点、その他の孔垂飾（金子 2006）は、時期を特定するのが難しい。

・福島県郡山市町B遺跡（第7表1329～1335）（郡山市教育委員会ほか 1985）

阿武隈川築堤工事に伴い1,700m調査され、縄文時代中期後葉、後期前～中葉、晩期初頭、中葉の集落跡が主として発見され、古墳時代の落し穴や中世の堀跡なども検出されている。縄文時代後期の埋堀から幼児の歯が、集石下の土坑から成人の歯が出土した。

当該土器は、後期から継続して大洞A1式まで見られるが、大洞C 2式が多く、次いで大洞B1式で、大洞C 1、A1式は少ない。

関連遺物は、土版5点？（第2図24）、美々4中空動物形土製品？2点である。当該期の土偶は9点で、ほとんどが大洞C 2式期である（金子 2016：p.28）。当該期と考えられる石剣類は40点程度か。独鉛石は1点である。土製耳飾は多いが後期前～中葉がほとんどで、晩期初頭らしい、クラゲ状1点（報告書：第336図910）、環状1点（同911）出土している。石製玉類が数点出土しているが、いつものかわからない。また、小型の鬲に似た四脚の花崗岩製石製品が出土している（報告書：第277図879）。

・福島県須賀川市一斗内遺跡（第7表1336～1340）（福島県教育委員会ほか 1984）

国営総合農地開発事業の水路部分工事に伴い900m程度調査し、縄文時代後期～弥生時代中期の遺物包含層、晩期前半を主とする土器埋設構造などが検出されている。縄文時代中期後葉、後期初頭～中葉、弥生時代中期の土器なども出土しているが、ほとんどが縄文時代後期後葉～弥生時代前期で、大洞C 2式が最も多く、次いで大洞BC2式で、晩期末以降は少ない。

関連遺物は土版5点の出土である。3類（大洞C 1式期）が1点出土し、その他は、弧線を主文様とすることから、報告者の所見とは異なるが、大洞C 2～A1式期を主体とする可能性があり、これは土器の出土傾向に合致する。報告書第179図4は、写真がないので不明瞭だが、土器の底面の可能性が高いので割愛した。

土偶は32点出土したそうだが、図示された25点は、後期が多く、晩期で時期が特定できるものはほとんどが大洞C 2～A1式期である（報告書：第176図1？、第177図2、9、第178図17、18）。石剣類は30点で、こちらも後期が目立つ（報告書：第183図1、第184図12、13）。装身具は、土製耳飾5点出土しており（報告書：第180図15～17、19、20）、1点晩期初頭～前葉の可能性があるが（20）、他は後期末を主体とする可能性が高い（金子 2009a、2010c）。土錘が18点出土している。

・福島県いわき市薄磯貝塚（第7表1341～1513）（いわき市教育委員会 1988）

土取り工事に伴い48m程度調査し、縄文時代後期末～晩期中葉、弥生時代中期の貝層が主に検出され、土壙墓なども確認された。縄文時代後期前葉、晩期後葉、弥生時代中期土器も出土しているが、後期中葉～晩期中葉がほとんどであり、晩期初頭～前葉が最も多く、次いで大洞C 2式前半、その後に後期末で、大洞C 1式やその他は少ない。

関連遺物は、「石製タブレットB群」とされた岩偶・岩版・線刻標が194点出土している（報告書：p.288）（第2図28～30・32・33）。人面付土器1点は、縄文時代後期後葉のため割愛した。

4点出土した土偶は全て後期後葉以前である。石剣類は20点出土している（報告書：p.288）。装身具は、晩期初頭～前葉と思われる文様のついた環状の土製耳飾1点、晩期前葉とされる土製丸玉1点、石製玉類は7点（滑石製主、丸玉4、勾玉1）、鹿角製腰飾1点、貝輪（ベンケイガイ・サトウガイ・イタボガキ）は成品60、未成品15点、骨角製垂飾品10点などが出土している。なお、晩期初頭～中葉とされる有溝土鍤18点、石鍤36点（報告書：p.288）も出土した。円盤状石製品は出土していないようである。

関連遺物の出土が限られる中、岩版類の出土数が際立つ。海まで数百mという立地に關係するものであろうか。岩版類の報告は、小杉康氏によるもので、自説の「変形行為」に基づいた詳細な記載がなされているが、本稿ではほとんど割愛した。確信が持てなかったことと「石製タブレットB群」の一部に礫石器とした方が良いのではないかと思われるものが含まれていたためである。氏の報告以後「変形行為」の指摘はほとんど見られない。報告書中でしばしば取り上げられる『薄磯貝塚』の研究編が刊行されていれば、今頃定着していたのかもしれない。

以下、表の補足。第7表1348（第2図28）のバント状文様（屈折像B類土偶に酷似）から、報告者の小杉康氏の位置づけは表裏逆の可能性が高い。正中線と円形文の重複あるいは正中線を挟んで弧線を対称に配置する意匠は東北地方北部には見られない。報告書第184～187、193～196図には、岩版や線刻縦と断定しにくいもの（磨石類とした方が良いと思われるものも）も含まれており一部削愛した。

・福島県いわき市薄磯貝塚（第7表1514～1554）（いわき市教育委員会 2014）

震災復興土地区画整理事業に伴って行われた試掘（トレンチ）調査の報告である。

2号トレンチは、2×10mの規模で、貝塚東端の台地に谷が入り込む部分に位置する。遺構も貝類も検出されなかった。掲載土器は、大洞C2式と弥生時代中期前半のみのようである。関連遺物は、岩版2点である（第7表1514、1515）。その他に掲載されている土・石製品は、蛇紋岩製丸玉1点、サメ椎骨製装身具1点のみだが、時期不明である。

2a、b号トレンチは、2号トレンチで確認された遺物包含層の範囲や性格を明らかにするために行われた追加調査で、当初はT字状に設定されるはずだったが条件が整わず2本に分かれたものである。2a号は、2号トレンチを西に4m、南に2m拡張して6×12mとしたが、包含層の範囲を確認するため、さらに南側に2×5m、東側に2×2mの拡張部分を設定している。2b号は、2a号から約12m離れ、2a号と直交する方向に設定した2×15mのトレンチである。2a、b号トレンチの出土遺物は一括して報告されている。

2a、b号トレンチ出土土器は、繩文時代後期後葉～晩期後葉（末もある？）、弥生時代前～後期、土師器、須恵器、かわらけで、当該期で出土量が多いのは、大洞C2式、次いで大洞B1式で、大洞B2式、A1式は少ない。関連遺物は、岩版類が多数出土しており（第2図31）、図化された56点のうち、砥石等の可能性が低いものを資料（表）とした。総数392点とあるが、このうち岩版と言えるものがどれだけ含まれているか不明である。「岩偶」とされたものも6点あるが、得心がいかないのですべて削愛した。土偶は1点出土し、大洞C2式期の可能性があるか。石剣類は6点、環状石斧の未成品？1点出土した。白状（貫通孔）の土製耳飾は当該期のものようである。蛇紋岩製の玉が6点（丸3、勾2、楕円形1）、サメ椎骨製装身具が2点出土している。

表の補足。No.1516（第2図31）は、平行線間のI字状の両端の三角形の部分だけ影去っているもので、関東系か。

4. 小括

今回、冒頭の見通しとは違って、土器が多出していても、あるいは土器とともに土偶や石劍類が多出していても、関連遺物が多出することは限らないことを痛感した。それどころか出土しない場合さえあった。特に、後期からの継続遺跡では関連遺物の出土はむしろ少ないと感じた。ただし、今のところは、関連遺物の絶対量が元々少ないとによる、その調査範囲でのたまたまの結果であり、調査範囲外には相応の関連遺物が含まれていると考えておきたい。土偶の場合ではあるが、青森県泉山遺跡では、調査範囲によって、0点と132点の違いが出来ているからである（金子 2001a : p.219）。

前稿（第6表）と比較して分かるように、東北地方北部（三県と宮城県も？）では、後期前半から継続する（土器）多出遺跡が少なく、数少ない該当例も晚期前半には途絶する。そのせいか、本稿での関連遺物の出土はいずれも後期末以降の多出遺跡（前稿）に比べ少なめである。これに対し、東北地方南部（特に福島県）の場合は、後期前半から継続して多出する（北部ほど多くはないが）のが一般的で、中期後葉からの継続遺跡も多く、関東地方と共に通るあり方である。ちなみに、秋田県は、米代川流域を除き、多出遺跡でも土偶や関連遺物の出土は少なく、米代川流域でも多いのは岩版のみである。

当該期の「関連遺物」の僅少多様→岩版主体→土版主体→動物形突起という時期的な組成の変化については、本稿でも概ね裏づけられた。

正中線中空土版については、前稿までに、晩期中葉の岩手県に多い傾向が注意されてきたが、岩手県大日向II遺跡の多さは特筆され、古い時期のものが多いことも含め、第2表で扱った青森県泉山遺跡にも共通し、青森県東南部～岩手県北部に起源があった可能性があろう。

美々4型中空動物形土製品も、晩期の岩手県に多いと前稿まで確認してきた。本稿でも概ね首肯でき、盛岡市川目A遺跡でも多数出土し、盛岡市では、第2表で示した手代森遺跡でも多出していた。ただし、大洞B1式期までは日本海側に多く、晩期前葉に「分布の中心が太平洋側に移り、それに伴い正中線中空土版が強い影響を受け、両者を区別しがたいものが出現する」（金子 2017 : p.110）。本稿でも、秋田県堀ノ内遺跡、山形県釜淵C遺跡などに該当例がある。今回、福島県にも美々4型中空動物形土製品が比較的多く、それも晩期初頭の例が多いことが分かった。関東地方にも同様の例が出土しているので、福島県を経由して関東地方に影響を与えた可能性がある。正中線中空土版も福島県に比較的出土しているが、明瞭なものは大洞C2式期ばかりである。ただし、同じく関東地方にも同様の例が出土しているので、本例の場合も福島県を経由して関東地方に影響を与えた可能性があろう。

福島県の土版には地域性が認められ、4類の渦巻文が通常の楕円ではなく正円に近いものがあり（第2図24）、該期の土偶に共通する（金子 2011a : 第2表2279ほか）。弧線が多用され縁にも施されるため5類かと推測した類型（第2図22ほか）は、この地域に顕著に見られるが、土器の出土傾向から後期後葉～末に位置づけられるのだろうか。特徴的な小型の土版もある（第1図16）。

岩手県北部の大日向II遺跡に通常（K-O類）の岩版が出土していないのは、位置および遺跡の格からも不思議である。本節冒頭に述べたように撗点集落の出土状況も単純ではないのだろう。福島県薄磯貝塚の岩版の出土状況は特異で、その後も類似遺跡の発見はないが（前稿青森県川原平I遺跡は近い？）、最近行われた復興関連の試掘調査でもやはり同じように出土している（表1514～1554）。なお、1点だけだが、岩手県大日向II遺跡からも類例が出土している（第1図7）。薄磯貝塚からも岩版に一般的な幾何学的文様を持つ例が出土していないわけでもないが（第2図32、33ほか）、パンツ状表現に特に執着している点から、むしろ岩偶の仲間と捉えた方が良いのかもしれない。

註

- (1)流派型土面は、縄文時代後期後葉～晩期前葉に存在するものと思われ（金子 2001b）。この相ノ沢遺跡例の場合は、その特徴から晩期前葉まで下ると思われる。しかし、調査では、後期後葉～晩期初頭は、僅かな瘤付土器第Ⅲ段階、大洞B1式土器しか出土しておらず、時期を特定するのが難しい。調査区外に、この時期の遺物が出土する地点があるのだろう。
- (2)沈線はほぼ表裏連続。端側面剥離多。
- (3)縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけては明らかに拠点集落だが、掲載土器は、大洞B2式以降明らかに減少する。ただし、その後も大洞A2式までは確実に出土しており、存続期間の長さでは晩期も拠点集落に値する。26点出土した土偶のほとんどは、晩期初頭までに収まると思われるが、それ以降の土版やボタン状石製品も出土している。晩期の土器（土偶も）が減少するのはこの地域の特徴で、十分拠点集落に値するのか、あるいは未調査区に晩期の土器が埋もれているのか、見極めるのは難しいが、晩期も拠点集落と見做して良い可能性は高い。
- (4)人面付や龍面の弧線などの共通点から、有名な宮城県沼津貝塚の岩版（福野 2004：第1図1）の組形の一つに相当するかも知れない。
- (5)禮は板状だがやや反っている。片面渦巻文、片面入組帶状文？
- (6)表の文様意匠は、晩期初頭の東北地方南部例（福野 2004：第1図2、第2図4）に似ており、定型的なものなのであろう。
- (7)板状だが表側に反る。未貫通孔の対称性に横方向に直線が引かれ、その下に細かい線刻が充填されているので、パンツ状表現の可能性が高く、おそらく未貫通孔は口で、人体を表現しているものと思われる。
- (8)「表面と裏面は別バーツを接合して作られて」いる。「上部と両側面には剥がれた痕跡があり」、「おそらくヒレ状の突起が付いていたものと推定される」（以上、報告書：p.63）とあり、美々4型中空動物形土製品の可能性を窺わせるが、文様から後期後葉～末の正中線中空土版と推測され、両側面から剥がれたのは表裏を接着する目張り状の隆帯と考える。
- (9)時期を特定できる特徴がない。東北地方北部では、イノシシ形土製品が縄文時代後期前～中葉に比較的多く見られるが、福島県のこの時期の代表的な遺跡を見ても（例えば、郡山市柴原A遺跡＝福島県教育委員会ほか（1989）、いわき市番町地遺跡＝いわき市教育委員会（1993））、あまり顯著ではないので、念のため資料に含めた。ただし、いわき市愛谷遺跡からは似たものが出土している（いわき市教育委員会 1985：V-564の10）、やはり後期前～中葉と考えた方が良いかもしれない。
- (10)摩耗で文様の一部不明。厚さ6.5cm。前面、正中線交差点直角。
- (11)文様は施されているが時期を特定する的是難しい。註9のように、イノシシ形は、後期前～中葉に比較的多いが、櫛歯状沈線から、後期後半以降の可能性もあると判断した。
- (12)石英安山岩質凝灰岩（白河石）。「この石材は三春周辺に広く認められる」（報告書：p.111）。
- (13)出土した土坑は、土器が出土した土坑と重複し、そこから晩期中葉以降と推定されており（報告書：p.20）。文様から推測される時期と合致する。
- (14)パンツ表現が大洞C2式期の屈折像B類土器に非常によく似ていて、パンツ端の組状表現が認められるが、もし同じだとすると、表裏対応ということになる。本稿では報告者の小杉康氏の位置づけどおりに扱い、裏の方が絶じてパンツ表現が弱いと表に記載しているが、逆と考えた方が良さそうである。木の葉状あるいは指円形の眼のような文様を重ね描きしているが、その位置は、上記に従えば、背面では中央、正面では左上隅（右上隅も？）と一致していない。正面の位置からは腕あるいは肩バット状にも見える。表裏中央の小さな円形の陰刻は何を意味するのだろうか（背面では木の葉状文と重複している）。他に比べて著しく厚い。
- (15)裏の直孔は、回転穿孔による。パンツ内には「横位の短沈線を丁寧に充填」（報告書：p.164）。重さ690g。
- ## 参考文献
- 青森県教育委員会 1999 「十勝内1号遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 青森県教育委員会 2001 「十勝内1号遺跡II」 青森県埋蔵文化財調査報告書第364集
- 青森市教育委員会 1985 「長森遺跡発掘調査報告書」 青森市の埋蔵文化財
- 秋田県教育委員会 1981 「藤林遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第85集
- 秋田県教育委員会 1998 「虫内1号遺跡」 秋田県文化財調査報告書第274集
- 秋田県教育委員会 2008 「堀ノ内遺跡」 秋田県文化財調査報告書第432集
- 秋田市教育委員会 1980 「上新城中学校遺跡」
- 秋田市教育委員会 1992 「上新城中学校遺跡」
- 朝日村教育委員会 1984 「砂川A遺跡発掘調査報告書」 山形県東田川郡朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 福野彰子 1983 「岩版」 「縄文文化の研究第9卷 縄文人の精神文化」 雄山閣
- 福野彰子 2004 「岩版の周辺」 「慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集 時空をこえた対話」 六一書房
- （福島県）いわき市教育委員会 1985 「愛谷遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告書第12番
- （福島県）いわき市教育委員会 1988 「薄磯貝塚」 いわき市埋蔵文化財調査報告書第19番
- （福島県）いわき市教育委員会 1993 「久世原館・番町地遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告書第33番
- いわき市教育委員会 2014 「震災復興土地地区画整理事業地内試掘調査報告書2（薄磯地区）」 いわき市埋蔵文化財調査報告第

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 100 集
- 1995「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 225 集
- 1998「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 273 集
- 2000「相ノ沢遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 332 集
- 2000「長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 336 集
- 2006「河崎の構擬定地発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 474 集
- (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012「川目A遺跡第5次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 589 集
- 金子昭彦 2001a「遮光器土偶と縄文社会」ものが語る歴史 4 同成社
- 金子昭彦 2001b「東北地方北部における縄文時代の土偶」「縄文時代」第 12 号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」「古代」第 114 号 早稲田大学考古学会
- 金子昭彦 2006「東北地方北部における縄文晚期の『装飾品』(1)」「紀要」X X V 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2009「縄文晚期・東北北部の土製耳飾」「縄文時代」第 20 号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2009b「東北地方・縄文晚期における弧状土製品」「物質文化」87 号 物質文化研究会
- 金子昭彦 2010a「日本北・縄文晚期のボウ状製品」「岩手考古学」第 21 号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2010b「東北北部・縄文晚期の菱形環状製品」「青森県考古学」第 18 号 青森県考古学会
- 金子昭彦 2010c「縄文晚期・東北北部の土製耳飾(続)」「縄文時代」第 21 号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2011a「東北地方・縄文晚期の土偶(2)」「紀要」X X X 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2011b「北日本・縄文晚期の三角玉ほかの装飾品」「岩手考古学」第 22 号 岩手考古学会
- 金子昭彦 2011c「北日本・縄文晚期の花弁丸、平玉」「縄文時代」第 22 号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2012「東北地方北部の縄文土製耳飾」「縄文時代」第 23 号 縄文時代文化研究会
- 金子昭彦 2014「東北地方・縄文晚期の土偶(4)」「紀要」第 33 号 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2015「東北地方・縄文晚期の土偶(5)」「紀要」第 34 号 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2016「東北地方・縄文晚期の土偶(6)」「紀要」第 35 号 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 2017「東北地方「亀形土製品」の一類型」「縄文時代」第 28 号 縄文時代文化研究会
- 郡山市教育委員会 1985「阿武隈川榮堤開通町 B 遺跡」
- 三貫地遺跡発掘調査団 1981「三貫地遺跡」
- 新地町教育委員会 1978「三貫地」新地町埋蔵文化財調査報告書
- 大東町教育委員会 2000「熊の平遺跡Ⅱ・Ⅲ次発掘調査」大東町文化財調査報告書第 23 集
- 中田茂司 1994「西方前遺跡の縄文土器」三春考古学研究会(三春町歴史民俗資料館埋蔵文化財整理室内)
- 階上町教育委員会 2000「流域遺跡発掘調査報告書」
- 階上町教育委員会 2007「寺下遺跡・釜塚遺跡発掘調査報告書」
- 福島県教育委員会ほか 1984「母烟地区遺跡発掘調査報告書 16 一斗内遺跡」福島県文化財調査報告書第 132 集
- 福島県教育委員会ほか 1988「真野ダム開通遺跡発掘調査報告書Ⅱ 羽白 C 遺跡(第 1 次)」福島県文化財調査報告書第 194 集
- 福島県教育委員会ほか 1989「真野ダム開通遺跡発掘調査報告書Ⅲ 羽白 C 遺跡(第 2 次)宮内 A 遺跡(第 1 次)宮内 B 遺跡(第 2 次)」福島県文化財調査報告書第 210 集
- 福島県教育委員会ほか 1989「三春ダム開通遺跡発掘調査報告書 2」福島県文化財調査報告書第 217 集(柴内 A 遺跡)
- 福島県教育委員会ほか 2010「常磐自動車道遺跡調査報告書 58」福島県文化財調査報告書第 461 集(田子平遺跡)
- 福島県立博物館 1988「三貫地貝塚」福島県立博物館調査報告第 17 集
- 福島市教育委員会 1991「南源訪原遺跡」福島市埋蔵文化財報告書第 44 集
- 福島市教育委員会 1995「宮畠遺跡(岡島)」試掘調査」福島市埋蔵文化財報告書第 76 集
- 福島市教育委員会 2004「宮畠遺跡(岡島)」確認調査報告書」福島市埋蔵文化財報告書第 173 集
- 福島市教育委員会 2005「史跡宮畠遺跡 史跡整備発掘調査報告 1」福島市埋蔵文化財報告書第 180 集
- 福島市教育委員会 2006「宮畠遺跡 3(岡島)」福島市埋蔵文化財報告書第 183 集
- 三春町教育委員会 1985「三春ダム開通遺跡発掘調査報告書Ⅱ(西方前遺跡第一次調査)」三春町文化財調査報告書第 5 集
- 三春町教育委員会 1987「西方前遺跡Ⅱ 土製品・石製品篇」三春町文化財調査報告書第 8 集三春ダム開通遺跡発掘調査報告書Ⅲ
- 山形県埋蔵文化財センター 2003「釜淵 C 遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集
- 山形県埋蔵文化財センター 2009「下叶水遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 177 集

岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（3）

米田 寛・高橋静歩・河本純一

本稿は、当センターの紀要36・37号掲載論文の続編で、古墳時代～平安時代の赤彩土器の集成を行い、遺跡分布、土器編年、顔料塗布観察、胎土観察を検討し、資料蓄積を目的とした論考である。今回は昨年度末に観察した盛岡地区及び奥州地区の資料について観察結果を報告する。

1.はじめに

筆者らは、当センター紀要36・37号掲載の「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（1）・（2）」（米田・高橋・河本・佐々木・酒井2017、米田・高橋・河本2018）において、遺跡分布、土器編年、顔料塗布観察、胎土観察、顔料分析・顔料製作実験を行った。本稿は、引き続き更なる資料蓄積を目的とする。今年度の観察資料は盛岡市志波城跡及びその周辺遺跡（零石川流域）と奥州市胆沢扇状地（胆沢川及び北上川流域）を中心とする。本稿はこれまでと同様に分担執筆し、2節分布論・編年の位置づけ及び訂正事項を米田、3節色調・顔料塗布面の検討を高橋、4節胎土観察を河本が担当した。まとめは意見調整し、米田が執筆した。

2-1. 分布と編年の位置づけ及び訂正事項（第1・2図）

分布と編年については、紀要37・38号に大枠を公表しているので参照されたい。なお、編年については岩手県沿岸部中部の土器様相（米田・佐藤2016）を基準としている。

（a）岩手県内陸部

前稿で示した分布図に追加する資料は、奥州市今泉である。今泉は近年7世紀前半に位置付けられ（高橋千2016）ているが、詳細な観察をまだ行っていないので第1図の遺跡分布図への掲載に留める。本稿では、以下の資料を取り上げる。

内陸中央部の零石川下流域

志波城跡、新堰端、台太郎、向中野館跡、野古A、薬師社脇、永福寺山

内陸南部の胆沢扇状地～北上川合流点付近

勝性、石田、杉の堂、佐野原、北鶴ノ木

赤彩土器の時期

4世紀前半 : 薬師社脇、永福寺山

6世紀前半 : 勝性

7世紀後半～8世紀前半 : 志波城跡、台太郎、向中野館跡、石田

8世紀後半～9世紀 : 志波城跡、新堰端、台太郎、杉の堂、佐野原、北鶴ノ木

4世紀の永福寺山資料は後北C2・D式と墓壙内で共伴する。勝性はB-2住出土資料が7世紀前半の指標となっているが、赤彩土器として報告された壺資料（報文16図-4）は摩耗が著しく顔料塗布面とは判断できなかった。火色の可能性も否定できない。本稿では器形から6世紀前半と判断したG-15住出土資料を取り上げている。

7世紀後半～8世紀前半は、これまでの成果から彩色線文について「ハケもしくは太筆描」、「等間隔太継条線文＝格子文」等の特徴が抽出された。台太郎と向中野資料には、壺に「格子多段」の

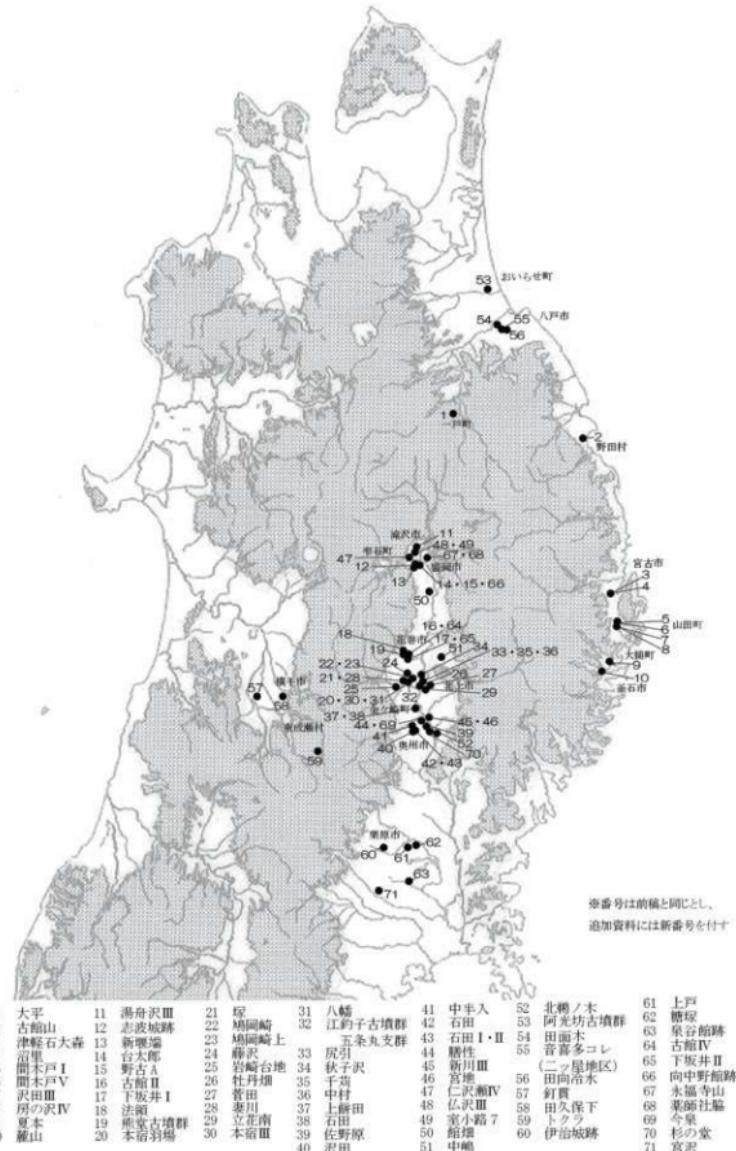
彩色線を描く資料が含まれる。格子多段資料は、前稿での分布・編年の検討では八戸市二ツ屋・秋田県東成瀬村トクラ、北上市江釣子古墳群五条丸支群などでの出土状況を明らかにした。いずれの遺跡でも1点出土している。一方、500棟近い古代堅穴建物調査の結果、台太郎は3点、隣接する向中野館跡で1点出土している。台太郎は遺跡範囲のほぼ全域が調査された珍しい事例である。また、台太郎資料の中で最も特徴的なのが台太郎55次RA613カマド煙道部出土の赤彩壺（第2図）（報文28図-28）で、カマド廃絶時に壺破片を煙道部に差し込んでおり、カマド祭祀の痕跡と判断される。RA613は現在、県下で行われた飛鳥～奈良時代の堅穴建物調査事例の中でも最大級の床面積規模で、集落の支配層の建物あるいは集会場的機能を持つ建物と推測される。RA613資料は、土師器壺が丸底と平底がほぼ同数程度存在する7世紀後半の様相で、須恵器壺が8世紀の特徴をもつことから、長期に渡って集落の中心に存続したと考えられる。

8世紀後半～9世紀では、志波城跡に隣接する新堀端で、複数本組細縦位条線＝格子文間に円文を配置する壺が出土している。前稿での検討から、円文の配置は7世紀後半～8世紀前半の大槌町夏本資料と花巻市古館IIにも認められる。内陸南部の奥州市杉の堂、佐野原、北鶴ノ木は、北上川を眼下に望む立地条件を有する。杉の堂資料は破片資料のため顔料塗布状況の全容解明には至らないが、推定個体数は多い。佐野原では格子状の組条線+斜位条線様の壺が出土している。北鶴ノ木では3本組細縦位条線の壺が出土している。胆沢扇状地はこれまでの集成結果から、角塚古墳周辺に中半入や石田I・II等大規模な集落の形成が認められ、5世紀以降、伝統的に外面全面塗布の赤彩土器が制作されているが、7世紀以降の彩色線文赤彩土器は少ない。しかし、本稿の集成作業によって8世紀後半～9世紀に杉の堂、佐野原、北鶴ノ木等の北上川河岸段丘面上、あるいはその付近での彩色線文赤彩土器の様相が明らかとなった。胆沢扇状地から北上川河岸段丘面へと人々の活躍の場が移っていったのだろうか。前稿で取り上げたように、赤彩土器が大量に制作された北上市千刈、中村等の大規模集落は8世紀中葉に成立するが、奥州市域の北上川河岸段丘面上の集落も同時期に形成される。当該期は三十八年戦争の勃発という史実との関係性が常に問われる。近年の八木（2018・2019）の成果によれば、集落構造が特大建物を中心とした8世紀中葉までと、特大建物の減少する8世紀後葉では集落構造が異なり、墓制にも変化が生じているとされる。集落・墓制・土器製作技術の変化（特に複数本組細縦位条線文の成立）の背景にどのような集団の動態を見出すことができるか今後の大きな課題である。

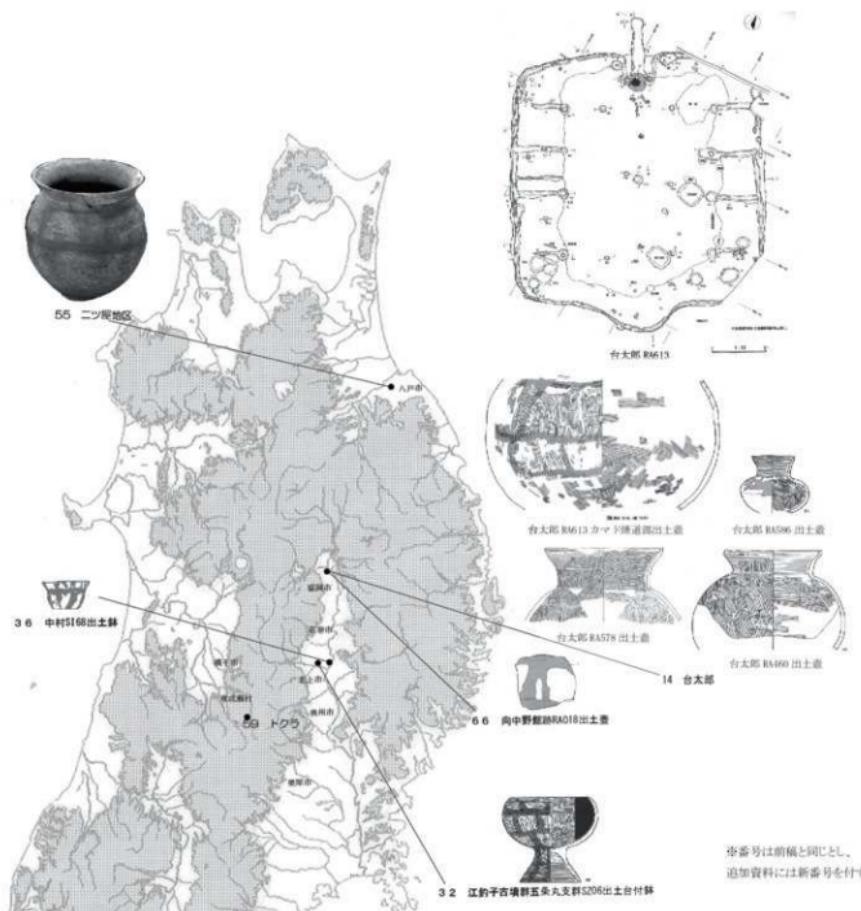
さて、今後の歴史的追及を行う上で、北鶴ノ木は極めて重要な遺跡の一つである。北鶴ノ木は外延溝を伴う堅穴建物群が大溝に囲まれた遺跡として注目され、それら建物群は工房的性格を有することが山川（2018）によって指摘されている。北鶴ノ木は胆沢地区の8世紀集落の中でも特に須恵器の保有量が多く、土器編年の検討にも有効な資料群である。また、8世紀中葉に位置付けられる常陸型壺と類似する資料が豊富に出土していることが早川麗司氏によって指摘された（高橋千2017）。なお北鶴ノ木出土常陸型壺の類似資料については、早川（2018）の検討によって北鶴ノ木のほかに本宿迎畑、林前、杉の堂、寺領、胆沢城跡、後田でも確認され、在地粘土で製作された壺であり、「常陸系壺」と呼称された。編年的位置づけや関東からの移民を含む南北交流史を語るうえで今後大いに注目される資料である。

（b）岩手県沿岸部

追加報告はない。現在整理中の山田町沢田III、間木戸I等の報告書刊行後に観察成果を公表する。



第1図 東北地方北部の主な古代赤彩土器出土遺跡



第2図 「格子多段」彩色線文赤彩土器の分布

(c) 岩手県外の主な赤彩土器

宮城県大崎市宮沢がある。筆者ら全員での観察は未実施であるが、既に高橋（2007）で観察結果の一部を公表済みであり分布図に加えた。

訂正事項としては、前稿2018の赤彩土器出土遺跡分布図上において、参考資料とした宮城県上戸遺跡の位置が誤っていた。第1図のとおり正しい位置に訂正する。

(d) 遺跡分布

前稿までの河川流域別の成果に大きな変更はない。前稿2017・2018を参照されたい。

3. 色調・顔料塗布面の検討

本節では、赤彩土器の観察結果から顔料色調と質感について検討する。今回は、岩手県盛岡市と奥州市の資料を観察した。観察した資料は、盛岡市志波城跡・新堀端・台太郎・薬師社脇・永福寺山・向中野館跡・野古A、奥州市杉の堂・膳性・石田・佐野原・北鶴ノ木において出土した赤彩土器である。なお、資料観察の方法は、前稿をご参照されたい（前稿2017）。

(a) 顔料色調

顔料色調の分類は表1のとおりである。これまでの検討で顔料色調は、4世紀～6世紀は赤色主体→7世紀～8世紀前半は赤色～赤褐色主体→8世紀後半～9世紀は赤褐色～明赤褐色主体というように、時期が新しくなると色調が明るくなる傾向を確認している。また、6世紀頃まで広範囲に分布する赤彩土器の色調のほとんどがア類赤色であるのに対し、

おおむね7世紀以降、色調が多様になることが判明している。このような色調変化について、同時期における遺跡間の明確な違いは見られないため、色調は遺跡間の違いよりも時期差が大きいと考えた。また、赤彩土器赤色顔料のX線回折分析で赤色顔料候補として赤色酸化鉄（ヘマタイト）と褐色酸化鉄（マグヘマタイト）が想定され、古い時期はヘマタイトを拘って利用したが、新しい時期ではマグヘマタイトも積極的に利用した可能性を指摘しており、色調変化の傾向からもその可能性を想定できた（前稿2017、2018）。

以下に顔料色調の観察結果を時期別にまとめ、各地域の顔料色調の状況を第3図に示した。

【4C前半】 薬師社脇の鉢1点、永福寺山の壺1点の計2点があり、全てア類赤色である。

【6C前半】 膳性の壺1点があり、ア類赤色である。

【7C後半～8C前半】 台太郎の壺2点・壺7点、向中野館跡の壺1点、志波城跡の壺1点・壺7点、石田の壺1点の計19点があり、その内訳はア類赤色2点、イ a類赤褐色14点、イ b類明赤褐色3点である。

【8C後半～9C】 新堀端の壺1点、台太郎の壺1点・壺1点、杉の堂の壺7点、佐野原の壺2点、北鶴ノ木の壺1点・須恵器鉢1点の計14点があり、ア類赤色1点、イ a類赤褐色7点、イ b類明赤褐色6点である。

観察の結果、顔料色調は6世紀前半まで全てア類赤色で、7世紀後半～8世紀前半になるとイ a類赤褐色が増加する。そして、8世紀後半～9世紀になるとイ b類明赤褐色が増加することを確認した。よって、これまでの傾向と同様の結果が得られた。

表1 色調分類

分類	色調
ア	赤色 (7.5R 赤～10R 暗赤、赤、赤褐色)
イ	赤褐色 (2.5YR 暗赤褐色、赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色)
	明赤褐色 (5YR 赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色)
ウ	橙色 (2.5YR 橙～7.5YR 橙、にぶい褐色)



第3図 各地域の顔料色調状況

(b) 顔料質感

質感の分類は表2のとおりである。分類は顔料質感の特徴から3項目を設けている。項目1では、赤色顔料に混ぜ合わされた粘土と水分の割合からカ～ケに分類し、カ：粘土と水分ともに多い。キ：粘土多く、水分少ない。ク：粘土少なく、水分多い。ケ：粘土少なく、水分多い。ケ：粘土

と水分ともに少ないとした。具体的には、カは粘土と水分の割合が程よいため濃厚な質感で、塗布面は顔料の伸びが良好である。キは粘土が水分よりも多いので土っぽく、伸びは不良で擦れも認められる。クは水分が多いためさらりとした質感で、伸びも良好である。ケは粘土と水分ともに少ないので擦れおり、摩耗の可能性もある。

以上、項目1の質感イメージを第4図に示した。項目2では、顔料に含まれるベンガラや粘土粒といった含有物質の細かさにより、I：粗いもの、II：細かいものに分け

た。項目3では、顔料塗布された厚さを、a：厚いもの、b：薄いものに分けた。なお、前稿で各項目の例とした資料写真を紹介しているのでご参照されたい（前稿2017）。

これまでの検討で顔料質感は、4世紀～6世紀頃までは全てクII b類（さらさら・細粒・薄塗り）であるが、7世紀以降はクII b類に加えて、カII b類（とろろ・細粒・薄塗り）が主体に加わり、その他の質感も遺跡ごとに様々認められるようになることから、7世紀以降には質感に多様性が生まれることがわかっている（前稿2017、2018）。

以下に顔料質感を観察できた資料の観察結果を時期別にまとめ、各地域の顔料質感の状況を第5図に表した。

【4C前半】 薬師社脇の鉢1点、永福寺山の壺1点の計2点があり、全てクII b類である。

【6C前半】 膜性の壺1点があり、クII b類である。

【7C後半～8C前半】 台太郎の壺1点・壺7点、向中野館跡の壺1点、志波城跡の壺1点・壺5点、石田の壺1点の計16点があり、その内訳はカII a類2点、カII b類4点、キII a類明3点、キII b類1点、クII a類2点、クII b類4点である。

【8C後半～9C】 新堀端の壺1点、台太郎の壺1点、杉の堂の壺7点、佐野原の壺2点、北郷ノ木の壺1点・須恵器鉢1点の計13点があり、その内訳はキII a類1点、キII b類7点、クII a類1点、クII b類4点である。

表2 質感分類

項目1	粘土と水分の割合	項目2	含有物質粒の細かさ	項目3	顔料塗布の厚さ
カ	粘土、水分ともに多い	I	粗い	a	厚い
キ	粘土多く、水分少ない				
ク	粘土少なく、水分多い	II	細かい	b	薄い
ケ	粘土、水分ともに少ない				

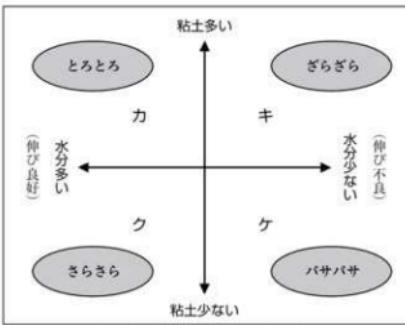
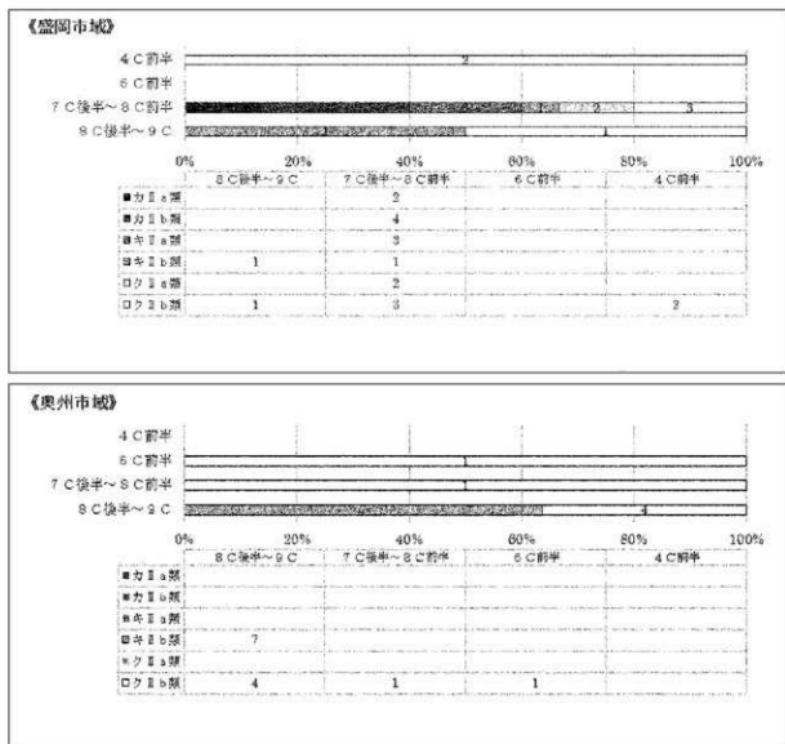


図4 項目1の質感イメージ

観察の結果、資料数が少ないものの6世紀前半まではクⅡb類が主体とみられ、7世紀後半以降はクⅡb類のはかにカⅡb類など様々な質感があることを確認した。よって、これまでの傾向とおおむね同様であることがわかった。



第5図 各地域の顔料質感状況

(c) 小結

今回、観察した盛岡市域と奥州市域の資料検討の結果、これまでの顔料色調・質感の傾向と同様であることを確認した。これまでの成果から、色調と質感は6世紀頃までどの地域でも、色調はア類赤色、質感はクⅡb類が主体となり地域差はほとんど見られなかった。しかし、7世紀頃を境にして色調は徐々に明るくなり、質感も遺跡ごとに多様になることがわかった。やはり色調と質感の変化は、7世紀以降における彩色文様の出現や赤彩土器の増加に相関関係があると考えられる。平成28年度からの検討によって、未実見資料がいくつかあるものの、色調と質感の変化の様相をおおむね明らかにすることができた。今後、顔料の色調と質感の変化を岩手県における古代赤彩土器の在り方を探る手がかりの一つとできるのではないかだろうか。

4. 胎土觀察

(a) 觀察資料

今回は、盛岡市および奥州市に所在する遺跡から出土した資料を実見した。

盛岡市では志波城跡・新堀端・台太郎・向中野館跡・野古A・薬師社脇・永福寺山、奥州市では勝性・石田・杉の堂・佐野原・北鶴ノ木から出土した土器について胎土の観察を行った。今回観察を行った資料の多くは赤彩土器であるが、一部それ以外の土器も比較資料として観察している。

(b) 觀察方法および胎土分類

①観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファーブル（倍率20倍）を用いて、土器胎土を観察した（註1）。観察の際には、土器の断面だけでなく器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは、観察面積が少なく、含まれる砂粒の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

②胎土分類（表3・4）

表3・4に示したように、A～H類という土器の胎土に含まれる砂粒・混和材の種類による分類と、0～1類というその大きさによる分類を設けた。

前稿・前々稿と同様に、赤彩土器の製作に用いられた材料について、それを概括的に把握することをまず第一の目的として、大半の資料については含まれる砂粒の種類だけを情報として抽出するという、簡易な観察を行い、その結果を表7に記載した。そして、一部の資料についてのみ、含まれる砂粒の大きさや含有量も詳細に観察し、その結果は表6に記載した。

表3 砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B類	雲母を一定量含む土器。
C類	頁岩・チャートを一定量含む土器。
D類	火成岩を一定量含む土器（凝灰岩を含む土器についても当分類に含める）。
E類	腐泥を一定量含む土器。
F類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器。
G類	海綿骨針を一定量含む土器。
H類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色結晶（石英・長石）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに一定量含めばAB類、チャートと火成岩をともに一定量含めばCD類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏に含有されており、少なくとも2cm²中に1粒(10.5mm以上)での存在が認められる量を指す。

表4 砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
1+類	1.5mm～2.0mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0mm以上のものはほとんど含まれていない。
1-類	1.0mm～1.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
0類	1.0mm未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

※ 今回観察した資料中には、2.0mm以上の砂粒・混和材を一定量含む土器は認められなかつたので、上記の基準で全ての土器を分類できた。

(c) 観察結果（表5～7、写真1・2）

観察した遺跡数が多いため、以下2つの地域に分けて観察結果を記す。

①内陸中央部の零石川下流域

志波城跡と新堀端で出土した赤彩土器は、いずれも少なからず凝灰岩を含んでおり、D類の存在が顕著である。D類は内陸南部の千苅や中村（ともに北上市に所在）でも見られるが、これらの遺跡で出土した赤彩土器にはチャートを伴うものが比較的多く、その点で志波城跡で出土したものとは、胎土がやや違っている。

表5 砂粒・混和材の含有状況

胎土	遺跡名 時期・断面	志波城跡		台太郎遺跡		繩性遺跡		杉の堂遺跡	
		7世紀後半～8世紀前半		6～7世紀		8～9世紀		8～9世紀	
		赤彩壺	赤彩壺	赤彩壺	非赤彩土器一括	赤彩壺	赤彩壺	赤彩壺	赤彩壺
A類：黒色光沢粒を含む	○/○	—	—	—	—	—	—	—	—
白堊・雲母を含む	—	—	—	—	—	—	—	—	—
C類：真珠・チャートを含む	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D類：火成岩・凝灰岩を含む	—	—	—	—	—	—	—	—	—
E類：凝り殻を含む	—	—	—	—	—	—	—	—	—
F類：その他有機材料を含む	—	—	—	—	—	—	—	—	—
G類：海綿骨針を含む	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H類：石英・長石のみ	—	—	—	—	—	—	—	—	—

※ 同一の陶器で5点以上複数できたものを当量にて表示。()内の数字は、1つの土器中に一定量含むとは評価できないが、1・2粒と極少量でも確認できたものも合計した點数。また、1つの土器中に赤彩壺とチャートをともに含めた。それぞれで1点ずつ記入しているので、総列の合計は統計點数より多くなる。

台太郎で出土した赤彩土器には、このD類(写真1-1)の他に、黒色光沢粒と長石を主体とするものが見られる(写真1-2)。他の地域でも黒色光沢粒と長石を主体とする赤彩土器は存在するが、それらは、チャートや海綿骨針など他の砂粒を伴うことが多く、台太郎で出土した土器のように、ほぼ花崗岩に由来すると考えられる砂粒だけからなるものは少ない。台太郎出土の非赤彩土器も、黒色光沢粒と長石を主体としており、加えて雲母も含むB類が多く見られる(写真1-4)。つまり、これら台太郎で出土した赤彩土器は搬入品ではなく、当地域で製作された可能性が高いと考えられる。

また、台太郎では特筆すべきものとして、2種類の素地を用いて製作された赤彩土器を確認できた(写真1-1)。使われた素地の違いが、内面・断面ではその色調として著しく現れており、頭部だけが橙色(7.5YR6/6)を呈している。頭部は、他の部位と比べて0.5mmの大黒色光沢粒が多いという違いが見られる一方で、1mm以上の石英・長石・凝灰岩等を含むという他部位との共通点も併せ持つ。それゆえ、混和材とした砂粒は同じものであるが、粘土については違うものを使った可能性が考えられる。なお、このような器の本体部に2種類の素地を使う土器は、東北では仙台市西台畠遺跡で出土したものに類例が知られている(仙台市教育委員会2010)。

向中野館跡で出土した赤彩土器の胎土は、石英を主体とする(写真2-5)。同様のものは、台太郎の9世紀の坏にも見られる(写真1-3)。

薬師社脇で出土した赤彩土器の胎土は、海綿骨針を含むG類であった。同遺跡では、非赤彩土器にも海綿骨針を含むものが2点確認できた。

永福寺山で出土した赤彩土器の胎土は、黒色光沢粒と凝灰岩を主体とする。なお、同遺跡で出土した統繩文土器には、海綿骨針が含まれていた。

②内陸南部の胆沢扇状地～北上川合流点付近

胴性で出土した赤彩土器の胎土は、石英と黒色光沢粒を主体とし(写真2-6)、非赤彩土器にも同様の胎土がみられる(写真2-7)。石田で出土した赤彩土器の胎土は、石英と長石・酸化粒を主体とする。杉の堂で出土した赤彩土器の胎土は、黒色光沢粒と石英または長石を主体とするものが多く、チャートや凝灰岩・酸化粒を少量含むものも見られる(写真2-8)。

佐野原・北鶴ノ木で出土した赤彩土器の胎土は、黒色光沢粒・石英・長石の他に、チャートや凝灰岩等も一定量含まれている(写真2-9・10)。

胴性・石田・杉の堂で出土した赤彩土器の胎土は、およそ石英と黒色光沢粒を主体とし、海綿骨針が極僅かながらでも含まれているものが存在するという点で、奥州市に所在する沢田や石田I・IIと大きく変わることはない。一方、佐野原・北鶴ノ木で出土した赤彩土器の胎土は、チャートや凝灰岩の含まれる量がやや多く、奥州市出土の赤彩土器よりは、千苅や中村等、北上市出土の赤彩土器に近

(参考) 前編で扱った赤彩土器での事例

沢田遺跡	中村遺跡
5～6世紀	8～9世紀
赤彩壺	赤彩壺
—	—
—	0.63
—	—
—	25.63
—	10.63
—	0.63
—	—
—	7.63
—	0.63
—	—

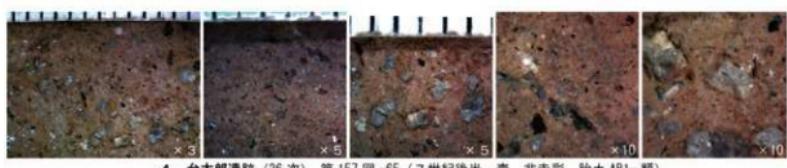
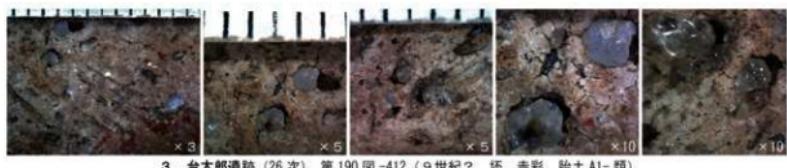
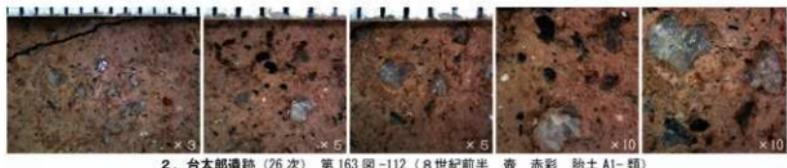
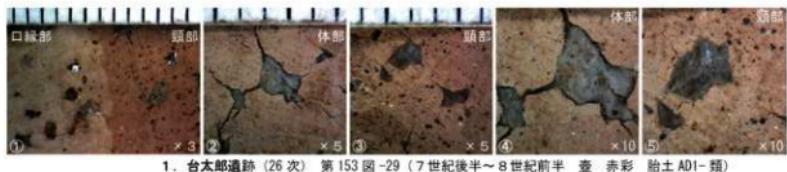
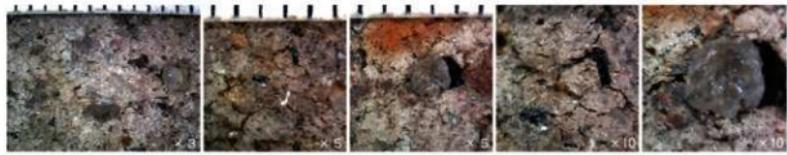


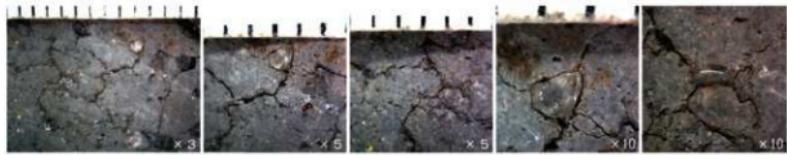
写真 1 土器胎土写真 (1)



5. 向中野館跡 (10次) 第61図-19 (7世紀後半～8世紀前半 壺 赤彩 胎土 A1- 頬)



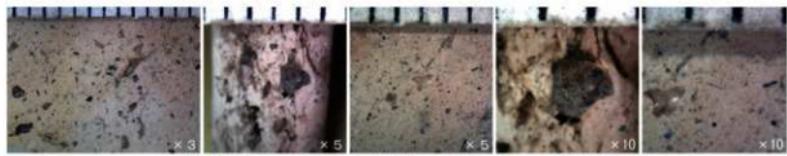
6. 脊性遺跡 167図-513 (6世紀前半 壺 赤彩 胎土 A1+ 頬)



7. 脊性遺跡 167図-515 (6世紀前半 壺 非赤彩 胎土 A1+ 頬)



8. 杉の堂遺跡 (29次) 26図-20 (8世紀後半～9世紀 壺 赤彩 胎土 AC1- 頬)



9. 佐野原遺跡 第19図-57 (8世紀後半～9世紀 壺 赤彩 胎土 ACDO 頬)



10. 北鶴／木造跡 第19図-4-26 (8世紀後半～9世紀 壺 赤彩 胎土 ACDF1- 頬)

写真2 土器胎土写真 (2)

表6 土器胎土觀察表

い印象を受ける。

(d) 小結

以上、今回はこれまでに扱っていなかった盛岡市出土の赤彩土器の胎土について資料化するとともに、奥州市出土の赤彩土器についてさらなる資料の蓄積をすることができた。特に資料数を多く得られた台太郎の調査成果は大きい。前稿・前々稿までに、たとえば奥州市域では海綿骨針を含む赤彩土器が比較的多く、北上市域ではチャートや凝灰岩を含む赤彩土器が多いといった、胎土の地域的特徴を捉えてきたが、今回新たに盛岡市域ではほぼ花崗岩由来する砂粒だけを含む土器が比較的多いという、胎土の地域的特徴を捉えることができた。また前稿で指摘したように、赤彩土器の多くは各地で生産されており、どこか局地的に生産されたものが移動していると積極的に言える事例の少ないことが、今回も同様に確認できた。

加えて、今回は2種類の素地を用いて製作された土器を確認できたが、これは土器を製作する際に用いる材料粘土が必ずしも1種類に限定されているわけではないことを示しており、当時の土器生産の在り方を考える上で貴重な資料となろう。

5.まとめと課題

本稿は前稿2017・2018年の記載を踏襲して執筆した。各節でまとめられた成果を総括する。

分布論では、古代集落密集地区である半石川下流域と奥州市城胆沢扇状地～北上川流域の様相が明らかにできた。編年的位置づけでは前稿記載どおりである。7世紀後半～8世紀前半の彩色線文赤彩土器の様相は今回の集成作業でほぼ把握された観がある。今後は地区別の検討や遺跡内あるいは建物内出土状況の検討を行い、いよいよ彩色線文の出自についても検討に入りたい。

顔料論では、色調が6世紀前半まで全てア類赤色、7世紀後半～8世紀前半になるとイa類赤褐色が増加し、8世紀後半～9世紀になると今度はイb類明赤褐色が増加する。質感では7世紀を境に多様性をもつようになる。いずれも前稿で確認した傾向と同結果が得られた。

胎土観察では、半石川下流域で花崗岩由来と考えられる黒色光沢粒や雲母が顯著であることや、台太郎で一個体に2種の胎土を使用・製作された資料が確認された。胆沢扇状地～北上川流域の資料は、前稿2017・2018で観察結果を公表した石田I・IIや沢田等の胆沢扇状地低位段丘面に位置する遺跡資料と類似するものの、北上川流域の佐野原・北鶴ノ木では北上市千刈・中村に近いと判明した。河川流域等の小地域において、土器胎土構造に僅かながら差が生じていることを明らかにした。人々の移動・交流を語る上で欠かせない基礎データが揃いつつある。

さて、本稿は昨年度末に実施した資料観察結果の公表に主眼を置いたため、読者には目新しい成果が少なく感じられたかもしれない。この点についてはご容赦願いたい。筆者らの職場異動、相次ぐ展示会の準備、復興支援派遣の期間終了等もあり研究のピッチは鈍った。しかし、今後も着実な歩みを続けていく予定である。いわゆる「移配シンポ」以降、特に彩色線文赤彩土器については再注目されており、平野（2013・2017）や杉本（2017）により再評価されている。なお、昨年度末に赤彩土器研究の先駆者である杉本良氏が赤彩球胸窓の文様に関する論考を提出され（杉本2018）、筆者らにとって大いに刺激を受ける内容となっている。本稿では触れる機会を逸したが、今後筆者らのこれまでの成果と上記研究を対比していくことになるであろう。

最後になりましたが、本稿執筆に際し、多くの方々に資料閲覧等の便宜を取り計らっていただき、また様々な御教示を賜りました。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

註

(1)土器胎土を観察し評価するまでの作業内容の詳細、および表6として提示した土器胎土観察表の記述内容については、旧稿（河本2011）を参照されたい。

引用・参考文献

<報告書>

岩手県教育委員会 1981 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ（石田遺跡）」岩手県文化財調査報告書第61集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1982 「勝性遺跡発掘調査報告書」第34集

1986 「古館II遺跡発掘調査報告書」第103集

1989 「夏本遺跡発掘調査報告書」第134集

1999 「佐野原遺跡発掘調査報告書」第327集

奥州市教育委員会 2008 「杉の堂遺跡（第29次）」「市内遺跡発掘調査報告書」奥州市埋蔵文化財調査報告書第2集

奥州市教育委員会 2016 「北側ノ木遺跡」奥州市埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第13集

仙台市教育委員会 2010 「西古畠遺跡第1・2次調査」仙台市文化財調査報告書第359集

宮城県教育委員会 1980 「1. 宮沢遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第69集

盛岡市教育委員会 1997 「永福寺山遺跡」昭和40・41年発掘調査報告書

盛岡市教育委員会 2005 「台太郎遺跡第55次調査」盛岡市内遺跡群平成15年度・16年度発掘調査報告書

盛岡市教育委員会 2011 「新堀端遺跡第11次」「盛岡市内遺跡群平成20・21年度発掘調査報告書」

盛岡市教育委員会 2012 「台太郎遺跡」「盛南地区遺跡群発掘調査報告書Ⅴ」

盛岡市教育委員会 2016 「台太郎遺跡（第71・72・74～76次調査）」「盛南地区遺跡群発掘調査報告書Ⅸ」

<論文・研究報告>

河本純一 2011 「泉南地域における繩文土器胎土の時期的变化」「大阪文化財研究」38 財团法人大阪府文化財センター

集落遺跡検討会 2004 「薬師社脇遺跡」「岩手県土器師集成（4～8世纪）」

杉本 真 2017 「赤彩球胴窯とは何か」「停修・夷停」とよばれたエミシの移配と東国社会」帝京大学文化財研究所・山梨考古協会

杉本 真 2018 「蟹夷（エミシ）の赤い窯－赤彩球胴窯の成立と変遷－」「北上市立埋蔵文化財センター紀要」第6号 北上市立埋蔵文化財センター

高橋静歩 2007 「東北地方北部の赤彩土器から蟹夷集団の動向を探る」「岩手考古学」19 岩手考古学会

高橋千晶 2016 「胆沢城の集落遺跡と墳墓」「アテルイと東北古代史」高志書院

高橋千晶 2017 「岩手県における古代墓制の展開」「停修・夷停」とよばれたエミシの移配と東国社会」帝京大学文化財研究所・山梨考古学協会

早川麗司 2018 「考古資料からみた古代の陸奥国と常陸国一岩手県南部地域と茨城県を中心にして」「鎮守府探訪講座 2018 第3回 講座資料」奥州市埋蔵文化財調査センター

平野 修 2013 「東京都多摩市上つ原（うわっぱら）遺跡（多摩市No1遺跡）出土の東北系土器について」「東京考古」31 東京考古談話会

平野 修 2017 「甲斐と武藏における作因・夷作痕跡」「停修・夷作」とよばれたエミシの移配と東国社会」帝京大学文化財研究所・山梨考古学協会

八木光則 2018 「盛南地区的村落構造」「第81回 蟹夷研究会発表資料」蟹夷研究会

八木光則 2019 「北上盆地の古代村落」「北奥羽の古代社会」高志書院

山川純一 2018 「整穴建物に伴う外延溝（2）－古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡城の在り方－」「紀要」37（公財）岩文振埋

米田 寛・佐藤 刚 2016 「岩手県域の太平洋沿岸中部地域における6世紀から8世紀の土器様相について」「紀要」35（公財）岩文振埋

米田 寛・高橋静歩・河本純一・佐々木あゆみ・酒井野々子 2017 「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（1）

－石田I・II遺跡、古館II遺跡、千賀遺跡資料を中心に－」「紀要」36（公財）岩文振埋

米田 寛・高橋静歩・河本純一 2018 「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（2）－東北地方北部の赤彩土器を探る－」「紀要」37（公財）岩文振埋

米田 寛・高橋静歩 2018 「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器について」「第81回蟹夷研究会発表資料」

蟹夷研究会

表7 赤彩土器觀察表（平成30年度分）

植物名	通称	别名	学名	形态		花果特征		用途	产地	种子含有物	参考
				外型	内型	颜色	花型			分属	
太白红山楂	Rubus coreana	7786-76	红	八、十、 二、三	八、十、 二、三	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	1886-69赤色 1886-70黄色	ア ア	“十”→“五”或“四” A	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	7786-77	红	九、 十二	九、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	1886-69赤色 1886-70黄色	ア ア	“十”→“一”	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	7786-84	红	十、 十二	十、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	1886-69赤色 1886-70黄色	ア ア	“十”→“一”	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	8865-264	红	八、 十二	八、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	1886-69赤色 1886-70黄色	ア ア	“十”→“一”	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	9186-19	红	八、 十二	十、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	1886-69赤色 1886-70黄色	ア ア	“十”→“一”	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	9186-16	黄	七、 八	七、 八	黄色 白色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	9186-202	黄	八、 十二	八、 十二	黄色 白色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	9186-203	黄	八、 十二	八、 十二	黄色 白色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-1	绿	八、 十二	八、 十二	绿色 白色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-2	绿	九、 十二	九、 十二	绿色 白色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-3	绿	九、 十二	九、 十二	绿色 白色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-4	红	十、 十二	十、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-5	红	九、 十二	九、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-6	红	八、 十二	八、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-7	红	七、 十二	七、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-8	红	六、 十二	六、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-9	红	八、 十二	八、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-10	红	九、 十二	九、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-11	红	八、 十二	八、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-12	红	七、 十二	七、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-13	红	八、 十二	八、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-14	红	八、 十二	八、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-15	红	九、 十二	九、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科
太白红山楂	Rubus coreana	2786-16	红	十、 十二	十、 十二	红色 黄色	(口)一裂齿 (茎)单生	2,5818-88白色 2,5818-89黄色	ア ア	内外玉树 深绿色	单子叶目 蔷薇科

標本名	雄性	尾幅	尾端番号	近側	外側	變形特徵		(1) 頭部：黑色，頭頂：黑色；側面：黑色；尾部：黑色；分佈	體長	鰓孔數目	備考資料
						頭部	內凹				
科氏變2號 頭側外	16尾-13	坪	2	△口子~	△口子~	(1)六點？	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
科氏變2號 頭側外	16尾-14	坪	2	△口子~	△口子~	(1)六點？	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
科氏變2號 頭側外	16尾-21	淡	2	△口子~	△口子~	(1)六點？	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
科氏變2號 頭側外	16尾-22	淡	2	△口子~	△口子~	(1)六點？	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
科氏變2號 頭側外	16尾-23	坪	2	△口子~	△口子~	(1)六點？	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性	16尾-14	淡	2	△口子~	△口子~	(1)六點？	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性	16尾-15	要	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性	16尾-16	要	2	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性 C-9型上	16尾-170	要	2	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性	16尾-513	坪	2	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性 G-1型	16尾-515	要	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
雄性 G-10型	16尾-517	紙	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
石田	16尾-2-24	淡	2	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
石田	16尾-2-7	坪	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
石田	16尾-2-8	坪	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
佐野原	16尾-56	淡	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
佐野原 頭側外	16尾-57	淡	2	△	△	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
元柳／木	16尾-4-26	淡	2	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~
元柳／木	5-103	26尾-1-69	要	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~	△口子~

岩手における土師器製作技術の研究

福島 正和

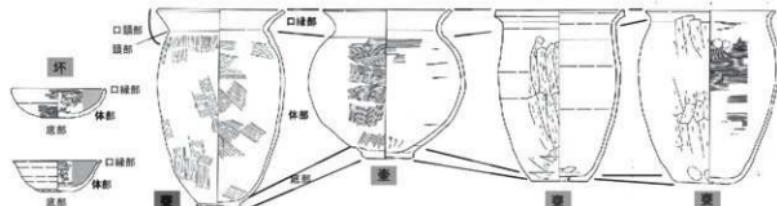
岩手県内において、古代（おもに7～10世紀）に生産された土師器は、土器を詳細に観察すると製作技術が判読できる痕跡が数多く認められる。これらのうち、技術的な特徴を抽出すると、製作に関する技術的な伝統・変化・革新が浮かび上がる。製作技術の各工程を「素地絹土作り」・「成形」・「変形・調整」・「乾燥・焼成」と想定し、分析・整理した結果、器種による粘土の違い、煮沸具等にみられる粘土絆巻き上げ成形など土器製作工程初段階は伝統的に継続するが、細部をみると「成形」や「調整」に時代的な変化が生まれている。また、9世紀にはヨクロの回転技術が導入されるという革新が加わっており、技術体系に変動が生じている。さらに製作技術の変遷を追うと、いくつかの画期が想定でき、画期的契機となる事象について考察した。革新的な技術の発現としては政治的な情勢の影響が想定される。

1 はじめに

土器製作に限らずモノ作りには、国や地域を境界としない普遍的な技術が広がり、時代をも越えて連続と続くことがある。古今東西、シンプルなモノほど、基本的な製作技術に普遍性が認められるものである。そして、連続と続く技術は「伝統的技術」として長い時間保持される場合がある。その一方で、モノ作りには技術的な変化が生まれるのも世の常である。時として伝統的技術に変化が加わり、時として革新的な技術が旧来の伝統を駆逐する。土器製作についても同じようなことが繰り返されたに違いないと推測される。縄文時代以来、時代を超えて続いた土器文化という伝統の中で、継承される技術も多くあり、継承される技術の中には、地域を越えて普遍性を持つものも存在する。そこにもやはり、幾ばくかの技術的な変化が訪れたに相違なく、現在の我々は出土した土器を分類し、呼称するにあたり、その技術的な変化を常に意識しているのである。

本論では、岩手県内で出土する古代（7～10世紀）の土師器を対象とし、その製作技術の分析と整理をおこなう。製作技術の分析は、これまで筆者がおこなってきた肉眼観察によって得られた知見をもとに再度、確認・整理したものである。詳細に土器を観察すれば、その製作痕跡から製作技術の差異や共通性が認められ、これらは時代性や地域性を背景にしている可能性がある。その結果から導き出される土師器製作における技術的な特徴を抽出し、考古学的な検討を加えたい。また、その中から地域的な特質、技術的な伝統、技術的な変化、技術的な革新を素描することを目標とした。その時間的な変遷や地域的特色を考察することで将来的には型式学的な編年研究の一助としたい。

なお、土師器の製作技術を詳述するに際して、土師器の部位名称を本文中に統一した（第1図参照）。



第1図 土師器の各部名称

2 土器製作の諸段階

土器製作の工程を大まかに分けると、「素地粘土作り」→「成形」→「変形・調整」→「乾燥・焼成」の諸段階が想定される（註1）。成形から調整までの工程については、一連の作業であるため厳密な区分は難しい。特に、変形と調整は、工程上互いに前後することが常である。

土器製作において素地粘土作りは、考古資料から復元することは難しい。採取された粘土を寝かせ、捏ね、練り、混和材の混合などの作業によって、土器の胎土として適切な状態の粘土に仕上げる作業である。土器の胎土観察によって混和材の混合が推定される。混和材の混合は、成形時の崩壊、乾燥・焼成時や使用時の温度上昇による破損の危険性を回避するために必要な手段と解釈され、混和材の種類・分量・サイズは製品の別によりそれぞれ適宜選択されるものと考えられる。

成形は、古今東西土器作りに共通する土器製作の初期作業である。成形は、文字通り素地となる粘土を大まかな器の形へと近づける作業工程である。本稿では、紐状または帯状の粘土を巻き上げる、あるいは紐状または帯状の粘土を輪状に一段毎に積み上げるなどの作業をこの成形段階と規定し、前者を巻き上げ成形、後者を輪積み成形と分類し呼称する（註2）。ただし、この段階の痕跡はその後の製作工程によって消されることが大半であり、完成した土器では観察できない場合も多い。器表面や破断面に残る粘土単位の境界などに着目することとなる。時には、調整の方法によっても接合痕が推測されることもある。

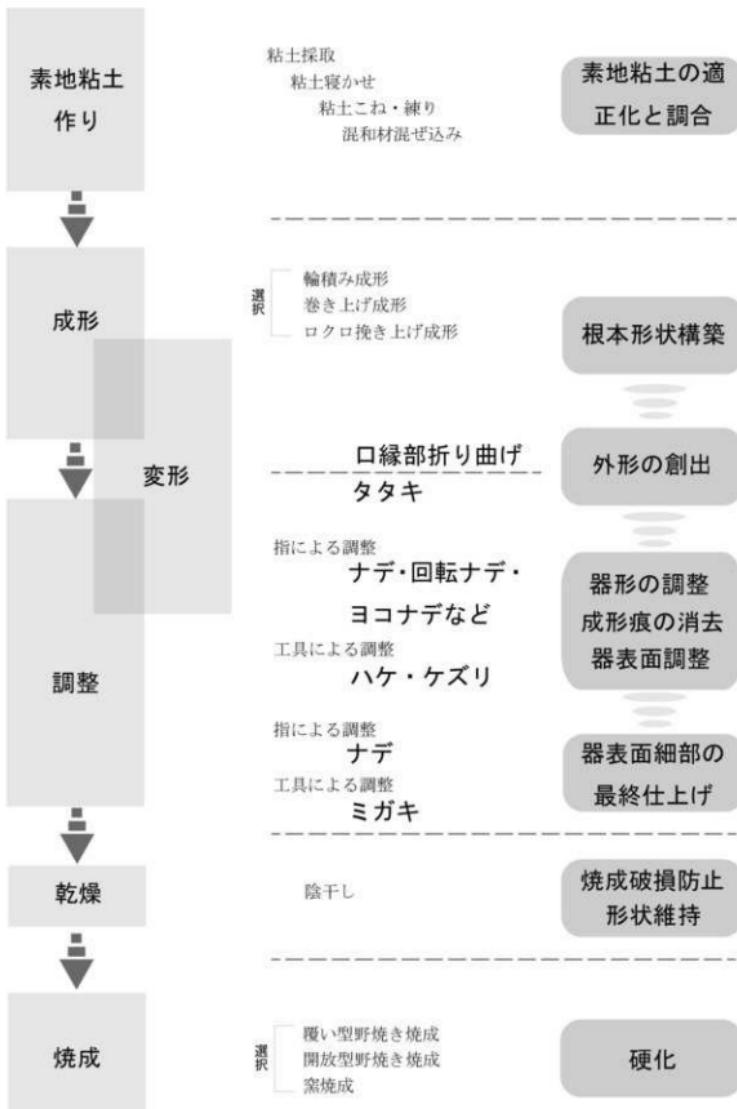
変形は、成形された大まかな形から部位を変形させることによって土器らしいフォルムへと変化させる作業である。例を挙げると、口縁部の折り曲げなどがこの作業に該当する。当然のことながら、素朴な形態の土器では、この変形作業の比重は低く、複雑な形態になるにしたがい変形作業の比重は高くなる。

調整は、より完成形に近い細部の作りや、土器の器表面を整える作業を示す。おもに指や工具を駆使して器表面を整えることを主眼としている。指のみを使う調整については明瞭な痕跡を残さないことが多いが、工具を用いた調整については完成・使用後もその痕跡を残していることが多い。本稿では指でおこなうナデ調整は「ナデ」とする。工具を用いた調整は、ハケ・ミガキ・ケズリなどが想定される。ただし、変形は調整と相俟っておこなわれるため両者の工程順序は決し難く、変形作業以前、あるいは変形作業中におこなわれる調整は、より成形に近い目的を有しており、「第一次調整」、「整形」などと呼ばれることがある（註3）。このように規定した場合、本稿で示す変形にはタタキなど器表面に痕跡を残すような作業も含まれる。タタキは調整痕跡として一括して呼称されることがあるが、厳密に言うと器表面をタタキによって敲き出し、土器の膨らみを追求し、器形の変化をもたらす成形から連続する変形作業であると位置付けられる。同時にタタキには、粘土の圧着痕を内外面からより強固にする効果や素地粘土中に含まれる余分な空気を抜く効果もあったものと想定される。

乾燥は、器面調整がおこなわれた後の工程である。乾燥については考古資料より判読できない工程であるが、一般的な理解として土器が焼成される直前には必要不可欠な工程である。また、ミガキなどの調整においてその効果を最大限に引き出すためには、一定の乾燥が必要であると推測される。したがって、製作途中にも適宜乾燥時間を挟んでいることは容易に想像できる。

焼成は、野焼きや窯などで土器を焼き上げる工程である。土器は一般的に酸化焰による焼成で、野焼きあるいは簡素な焼成施設で焼かれる。野焼きについては閉塞方法の違いにより、開放型野焼きと覆い型野焼きに分類される。

以上のように、製作の諸段階を経て土器は完成する。



第2図 土器の製作工程

3 素地粘土と成形

ここでは土師器の製作工程で最初期段階の素地粘土作りと成形について、土師器の器種毎に概観する。土師器の素地粘土作りは、縄文土器以来の伝統的な粘土作りと混和材の混合がおこなわれていたと考えられる。素地粘土を用いて大まかな器形を作り出す成形は、器種によって異なるが、基本となるのは輪積み成形である。

(1) 素地粘土

岩手県で出土する7・8世紀の土師器坏にみられる胎土は、同時期の土師器壺・壺類よりもわずかに砂粒の粒径が小さい傾向である。しかし、両者の砂粒の粒径差は比較的小さく、同一器種であっても一定のばらつきがある。これが9・10世紀の供膳具と煮沸具を比較すると、器種間における砂粒の粒径差は大きく開いている。すなわち、土師器の素地粘土は伝統的に、小形器種である供膳具と大形器種壺など煮沸具とは砂粒等の混和材を使い分けているが、9世紀以降は壺類の砂粒が小粒化し、壺類の砂粒が大粒化する変化が認められ、土師器胎土に明確な粗粒化が起こるようである。なお、両者の中間器種である鉢に関しては、9世紀前半に登場するロクロを用いた土師器鉢は坏と共に通する胎土であり、壺類との共通の素地粘土が使用されたと考えられる（註4）。

(2) 成形

土師器坏

岩手県で出土する7・8世紀の土師器坏については、2段ないしは3段の輪積み成形である。輪積みの根柢となる痕跡として、坏外面の接合痕に着目したい。坏内面はミガキ調整によって消失している場合が大半だが、外面には接合痕が残っている場合がある。粘土紐巻き上げ成形ならば、螺旋構造となるため上下の接合痕が斜め方向に走ると思われるが、継ぎ目痕跡は概ね水平方向であるため輪状粘土の重なりであるとみられる。深さや口径に応じて、積み上げ段数を調整しているようである。

一方、9・10世紀の土師器坏は成形痕跡が不明瞭である。これは製作に際してロクロの回転力が利用されることに起因する。ロクロ盤面上の粘土塊から回転力を得ながら挽き上げられる（水挽き成形）可能性もあるが、これを証明することは難しい。現時点では、輪積み成形・水挽き成形のどちらとも決し難く、両者併用の可能性も視野に入れる必要があるかもしれない。ただし、これらロクロが用いられた壺類のロクロによる調整痕跡からみて、水挽き成形可能な回転力は得られていたものと推測される。さらに、基部から底部切り離しの痕跡があるため、いずれの成形技法であった場合でも底部はロクロ盤上に基部が存在することは容易に想像できる。9・10世紀の土師器坏は成形痕跡が不明瞭だが、ロクロ盤上での作業痕跡から同形の須恵器坏と通有の成形技法であると考えるのが妥当であろう。

土師器壺・壺

岩手県で出土する7・8世紀の土師器壺・壺などの大形器種は、輪積み成形が基本である。同時期の坏と同様、輪状粘土の上下にみられる粘土接合痕は水平方向に走っているものが大半である。この時期の輪積み痕跡として注目されるのは、積み上げの工程で休止を挟んでいる点である。この休止は7世紀から8世紀前葉に多くみられ、器形と密接に関連する。変化に富む器形であるため積み上げに際しての制約を受け、休止を挟んでいると思われる。この休止は積み上げ方向の変化点と、器形の変化点という形で土器に現れる。最も顕著な休止点は、体部下半にある。底部から斜め外方へ順次積み上げをおこなった後、真上へと積み上げ方向が変化する。この時期の土師器壺・壺に共通の積み上げ方法であり、体部下半に膨らみが生じる（註5）。壺の場合は、体部が大きく膨らむ器形の特性上、この変化点が顕著にみられ、その後に施される調整もこの変化点のみ方向をヨコ方向に変えるなどの工夫が凝らされるようである。また、積み上げの休止を挟むことで、底部と体部の内面接合部を丁寧

に調整することが可能となり、その結果この部位表面が非常に滑らかである。しかし、休止を挟む積み上げ方法は、一気に上部まで積み上げられない点で、作業上やや非効率であることは否めない。複数固体を同時に製作し、積み上げの休止中には別固体の製作に当たっていたのかもしれない。

一方、9世紀には器種として土師器壺が消え、土師器の大形器種は壺のみになり（註6）、さらにロクロを用いる壺が新たに加わる。9・10世紀の土師器大形器種も輪積み成形を基本とする。ロクロを用いない壺の成形は、前代の成形の延長線上にある。これは9世紀初頭段階、8世紀代の壺と成形上大きな違いはないことからも窺い知ることができる。しかし、その後9世紀前半以降、休止による変化点が完全に失われることとなる。9世紀以降の非ロクロ壺は、底径が大形化し、体部の器形変化に乏しい直線的で寸胴な器形となる。体部下半と頸部に器形の変化点はあるものの、前代の壺よりも変化に乏しい。これは、積み上げの休止を挟まず、一気に最上部まで積み上げられた結果であると考えられる。それを裏付けるように底部外表面は調整がおこなわれず、作業台と底部の間にある木の葉や砂粒の痕跡をそのまま残すものが大半を占めるようになる。土器がほぼ完成するまで、持ち上げられることがない状況を示している。また、底部と体部下端との密着は弱く、特に内底面に目を遣れば明らかに前代に比べて粗雑な接合である。体部を一気に積み上げるため、正置された状態で上部から土器内部に手を差し入れて内面調整をせざるを得ないことも一因であろう。さらに底部の形態に目を移すと、前代に比べ底部が外方へ突出する個体が多い点が注目される。水分を多く含む状態の粘土が上まで積み上げられるため、その影響でこの形態となった可能性が想定される。積み上げられた体部は休止を経ないため水分を多く含み、自重が過大であると推測される。底部を外方へ突出させることによって、体部の加重を分散させている可能性と、加重を受け止めてその圧によって外方へ突出した可能性の2通りが考えられる。いずれか決し難いが、一気に体部を積み上げる副産物としてこの突出形態が生まれた可能性が想定される。以上のように、壺の成形が9世紀以降粗雑化することは明らかである。しかし、前代に比べると、1固体の製作作業速度は上がったものと推測され、これに土器製作に関わる省力化・時短化の実現を垣間見ることができる。

土師器ロクロ壺

次に、土師器ロクロ壺の成形について若干の私見を述べる。土師器ロクロ壺は、非ロクロ壺と同様に大きく分けると大小の2形態が存在する。土師器ロクロ壺はしばしばロクロ成形と表現されることもあるが、厳密に言うとロクロ盤上で成形から一貫して製作されるのは、土師器壺以外では小形の壺と浅めの土師器鉢のみである。通常、大形のロクロ壺には底部の回転糸切り痕が認められないが、これら的小形品では回転糸切り痕が確認できることがその証拠である。さらに、体部下端から口縁部まで全面的に回転ナデが施されているのも小形ロクロ壺の特徴であり、ロクロ盤上で底部から口縁部まで終始製作されたことを如実に示している。では、大形ロクロ壺はどのように成形されたのであろうか。大形ロクロ壺についての成形痕跡は、その後の調整によって不明瞭であるが、破断面には輪積みの痕跡が認められる場合がある。土師器大形ロクロ壺の底部には切り離しの痕跡が認められないことが常である。このことから土師器大形ロクロ壺については、非ロクロ壺と同様の成形がおこなわれたと考えるのが妥当である。しかし、上半部はタタキの後回転ナデが施されることを考えると、上半はロクロ盤上で成形された可能性もあり、もっと言えば須恵器の壺や壺類のように上下別成形で製作された後、上下を接合して仕上げられている可能性も視野に入れる必要がある。少なくとも下半部については回転力を必要としない製作方法である。伊藤博幸は、奥州市杉の堂坂口遺跡住居出土ロクロ壺に上半と下半の外面タタキ痕跡が異なる個体があることを指摘している（伊藤2006）。これによると、下半が「格子文叩き目」、上半が「平行線文叩き目」というようにタタキ工具が異なっている。

伊藤は上半のタタキは口縁部を「外反させた好例である。」として掲げた。確かにタタキ技法を製作上の「調整」ではなく、「変形」に求めたことは大きな成果である。しかし、このように一つの土器において上下で別工具のタタキ痕跡が認められるということは、そもそも上下が別々に成形されたことを示唆しているのではないだろうか。土師器ロクロ甕は、須恵器生産と密接に関連して成立したと考えられ、そのため変形や調整に際し、須恵器と土師器に共通する手法が用いられるることは周知の事実である。したがって、須恵器大甕のような口頭部と体部の別成形のような手法が採用されていたとしても不自然ではない。ちなみに須恵器と土師器の一部未分化のまま発展するのは、岩手の特質であり、土器生産とその社会情勢を反映していると考えられ、非常に重要である。

(3) 成形技術の一端

土師器を成形するうえで、通常は調整等で消されて確認できない痕跡の中に特殊な痕跡がみられることがある。ここでは特殊な成形技術について紹介する。

輪積み接合補助痕跡（写真1）

成形時の輪積み接合部分をより強固に密着させるために補助的な作業がおこなわれる場合がある。そのような痕跡を有する土師器甕に稀に見出されることがある。痕跡は、工具による刻みが連続して接合部に認められるものである。このような处置は、特に土師器甕の積み上げの休止を挟む場合にはしばしば施されるようである。接合不良が原因で接合部内部まで焼成時の火が回り、この接着部分が剥がれたように破損している出土品もある。土師器甕の成形には、球胴化を実現するために休止ラインでの接合において入念な注意を払ったことを示している。同時に、この休止位置は土師器甕以上に乾燥を進め、自重によるヘタリを軽減したものと考えられ（註7）、土師器甕以上に個体単位の製作時間および労力を要したものと推測される。ただし、省力化のためか、8世紀も半ばを過ぎると次第に体部の張り出しも弱くなる。

口縁部切り揃え（写真2）

7・8世紀の土師器甕・壺の中には、成形の最終段階に口縁部を切り揃えている個体が一定量存在する（註8）。これらは口縁部がきれいな水平に保たれており、なおかつ口縁端部には切り揃えられた端面が認められる。切り揃えに際しては、鋭利なヘラ状の工具などの使用が想定されるが、切り揃え後は、必ずヨコナデによって丁寧に仕上げ調整がおこなわれるため、その工具等の痕跡が残存することはないと考えられる。切り揃えられた口縁端部には切断による端面のみならず、しばしば切断の圧力によって生じる粘土のわずかなみ出しがみられる場合がある。このわずかなみ出しあは、その後のヨコナデによって整えられるため独特の端部形状を生み出すこととなる。はみ出しあは、極端に表現すると断面「T」の字形となり、内外両面に端部がわずかに突出する。その後のヨコナデで内外両面から挟み込まれて整えるため、このわずかな突出は上方へ収斂し、上部がかなり閉塞した断面「Y」の字形となる。出土した甕口縁端部にわずかな沈線状の凹みが巡っているものは、このような切り揃えと強く丁寧なヨコナデによって生じた形態であると推測される。

甕の基底部成形（写真3～5）

7世紀から8世紀前半の甕や壺の底部には底部輪台技法（註9）を想起させる底部形態がみられる。これら甕・壺は高い器高にも関わらず、非常に小さな底径である。一見するとアンバランスともみえるこの形態は東北地方特有のフォルムであり、北進すればほどそのアンバランスな形態に拍車が掛かる。岩手県域において出土するこの時期の甕・壺底部を観察すると、外底面の中央部にわずかな円形の凹みを有する個体が多いことがわかる。また、この円形凹み部分のみが剥脱した個体もしばしば目に触れることがある（註10）。さらに内底面は滑らかな「U」の字形を呈している。縄文土

写真1 8世紀頃の土師器壺成形痕跡

積み上げ痕跡が明瞭で、なおかつ積み上げ休止線では、密着度を高めるために接合面に刻みを施す工夫がなされている。『岩理文第503集向中野館跡第5・6次』より転載。



写真2 土師器壺口縁部切り揃え痕跡

口縁部の切り揃え後のヨコナデによって口縁端部が、沈線状に凹んでいる。非常にシャープな端部。



写真3 7世紀頃の土師器壺底部破断面

底部の中央部が剥離した土破断面がしばしば認められる。成形時に底部中央部・底部側縁部・体部下端部が別単位の粘土の組み合わせで成形されている。



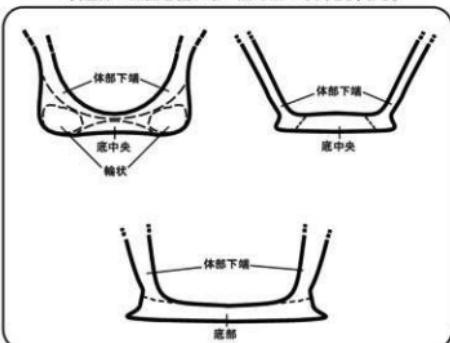
写真4 8世紀頃の土師器壺底部破断面

写真の底部破断面は、小径の円盤状粘土外周から体部下端粘土が接合されている。そのため、外周端部は、外方へわずかに突出している。体部内面下端の粘土は円盤状基部の上面を覆わない点で上の写真と異なる。



写真5 9世紀頃の土師器壺底部破断面

写真の底部破断面は、底径と同じ円盤状粘土の上に体部下端の粘土を積み上げた状態が観察される。体部下端部と円盤状基部との境には明瞭な接合痕が認められる。



第3図 基底部成形の諸類型

器以来、底部成形は円盤状の基底部上に順次粘土を積み上げて、体部を成形するという手法が想定され、伝統的な手法である。形態も体部下端から底部の断面形態は単純な「凹」の字形を呈する。一方、外底面の剥脱事例や丸みのある内底面の形態から考えて、当該土師器甕・壺基底部は、伝統的で単純なものではない、特殊な成形方法が想定される。これら特殊な基底部は、大きく分けて底外周部、底中央部、体部下端部の3パートが組み合って成形されていると考えられる。底外周部と底中央部が成形後の底部となり、この上に体部下端部の粘土が乗る。底外周部と底中央部の先後関係は不明であるが、安定性を考えると外周部が先にあり、その内部を中央部と体部下端粘土で充填する方法が考えられ、「U」の字形内底面になると見込まれる（写真3）。当然のことながら底部外面の接合を密にするために、この基底部を持ち上げ、ひっくり返して調整する必要がある。その結果、接地部分である外縁輪状基底部と組み入れられた丸碗形粘土塊との間にわずかな段差が生じるものと考えられる。やはり、この時期は成形技法面で非効率であったようである。このほかに、底外周部と体部下端が一連の基底部も存在する（写真4）。これらは後出する基底部成形であると考えられ、底中央部の外周から直接体部が立ち上がるような成形である。その後、8世紀後半以降には伝統的で単純な基底部成形に移行するとみられる（写真5）。現段階では、基底部成形の技術的な変化を想定している。基底部成形の変化は、当然のことながら器形の変化を同時にともたらすことが想定される。

4 变形と調整

ここでは、土師器に認められる製作上の変形過程と調整過程について詳述する。変形は形をえることを主目的とした作業、調整は形や器表面を整えることを主目的とした作業と規定する。

（1）変形

土師器壺の場合、口縁部の折り曲げや体部の敲き出しが不必要であるため基本的には目立った変形作業はおこなわれないと想定される。一方、甕や壺のような大形製品は様々な変形を重ねて、器形が作り出される。

口縁部の折り曲げ

土師器甕・壺の大きな変形は、口縁部の折り曲げ作業である。7・8世紀の甕・壺はある程度直線的に成形された後、外方へ折り曲げられて作られると考えられる。口縁部折り曲げの根拠は、口縁部内面ヨコナデの下にみられるヨコハケ、体部外面から連続するタテハケが手掛けりとなる。内面のヨコハケは、内側から強く伸ばしつ力を加え、外方へ曲げられるため内面に強いヨコハケ痕跡が残存するものとみられる。体部外面に残存するタテハケは、これもその後のヨコナデで消されることが多いが、その痕跡を残している場合は、タテ方向ではなくやや斜め方向になることが多い。これは折り曲げやヨコナデによって口縁部外面がヨコ方向へ引っ張られたためであると考えられる。また、先述したように、7・8世紀の土師器甕の中には口縁端部を鋭利な工具などで切り揃えられている個体があり、それらは口縁部の切り揃えられた端面が必ず斜め上面に向いている。以上のように、7・8世紀の甕・壺類の多くは、直立気味に成形された口縁部を大きく折り曲げられることによって作り出される。しかし、口縁部が短く作られる9世紀以降の甕はその折り曲げの労力がより軽減されたとみられる。

タタキ

本来、タタキは球形のものを作り出すために有効な技法である。主として須恵器の甕や壺に用いられるのが列島では一般的である。これはタタキによって器壁を縮め、伸ばし、丸い器体を作り出す変形の一技法である。このような作用を生むタタキは、県内出土の須恵器甕類にあっても通有の技法で

ある。しかし、県内の土師器でもタタキ痕跡の残るものも存在する。タタキ痕跡を残す土師器は9世紀以降に登場する土師器ロクロ窯・鉢に限られる。しかし、これらは総じて球形を指向しないのが岩手では一般的である（註11）。このタタキは、器体を丸くする変形に重点を置いた技法ではなく、敲き縮め効果に重点を置いたものと考えられる。さらに言うと地域的にも限定的で、県南で出土する土師器ロクロ窯に多く認められる。県南の土師器ロクロ窯は、他地域の窯に比べ器壁が薄く、焼成が非常に良好である。高温焼成に耐えうるよう器壁内の空気や水分をタタキによって減じるために採用された可能性が高い。このことは、器壁が直線的に立ち上がる土師器ロクロ窯の体部上半にもタタキ痕跡が認められることからもわかる。

（2）調整

土師器坏にみられる主たる調整はナデ、ケズリ、ハケ、ミガキなどである。また、9世紀以降の土師器坏についてはロクロの回転力を用いたヨコ方向のナデがおこなわれる（回転ナデ）。

口縁部ヨコナデ（写真6・7）

土器の口縁部は一般的に丁寧で強いヨコナデが施されるのが通例である。このヨコナデは外表面を指で挟み込んで水平方向に連続して施される。その他の部位に残るナデと異なり、器表面がきれいに整っており、布や皮革（パックスキン）等が媒体として用いられるものと考えられる。供膳具のように直接口を付ける可能のある器種、直接口を付けることのない窯などの器種も同様に口縁部のヨコナデは施される。これは口縁部がひび割れなどの破損が生じやすい部位であること、口縁部は土器の形状の優劣を直接左右する部分であることなどの理由で、丁寧なヨコナデが施されたと考えられる。この口縁部のヨコナデに関して、当該の土師器に注目される点が2つある。1点目はヨコナデの幅である。ヨコナデの施される幅に注目すると、7・8世紀の土師器は幅が広く、9世紀以降の土師器は幅が狭い。古段階の幅広のヨコナデは、人差し指と親指で大きく挟み込み、2本の指股に口縁端部が接触するようにヨコナデが施された結果とみられる。一度で困難な場合は、上下で複数回施される場合もあると想定され、複数回重ねられる場合は、ヨコナデ回数分口縁部の形態に変化が生じる。幅の広いヨコナデ範囲内において立ち上がりの変化点が認められる場合は、複数回ヨコナデが重ねられた結果であろう。一方、新段階の幅の狭いヨコナデは、人差し指と親指の指先の方だけで挟み込み、施されたものと考えられる。この際、人差し指の関節は曲げられた状態にあると思われる。2点目は口縁部ヨコナデによって残存する条線痕跡である。7・8世紀の土師器口縁部のヨコナデを観察すると明瞭な条線が認められることが多い（写真6）。この条線は、9世紀以降の土師器口縁部にはほとんど認められない（写真7）。口縁部のこの条線の変化は媒体とする布や皮革表面の材質差によるものと考えられる。7・8世紀に目の粗い媒体が使用されたのに対し、9・10世紀においては、条線を残さないような目の細かい媒体が使用されたと想定される。

回転ナデ

土器をロクロ盤上で回転力を与えながら水平方向に挽きながらナデを施す調整技法である。9世紀以降のロクロが使用される土師器に用いられる。土師器坏および小形土師器ロクロ窯は全体的に回転ナデが施される。回転ナデは基本的に指によって施される（写真8）が、時折工具が用いられる（写真9）場合があり、注意を要する。この場合、工具は外表面から当てられ、工具の端部が明瞭な段差を生じさせている。このような工具による回転ナデが施される土器の分布および時期について偏りが見出せないため、時間・空間を特定することは現段階では困難である。

ハケ

木目の条線が土器の器表面に痕跡として残る木製工具を用いた調整技法である。主として土師器

壺・壺に認められる調整である。土師器壺・壺の外面はタテ方向のハケ、内面はヨコ方向のハケである場合が多い。ただし、7・8世紀の土師器壺は成形で述べたように、積み上げに休止を挟むためより圧着させるための調整としてハケが器形変化点のみ方向を変えて何度も繰り返されることがある。先述した口縁部切り揃えとも関わるが、成形時の粘土継ぎ目を消しながら、継ぎ目を密着させるハケ調整もあり、この場合は成形と一体化した調整であると考えられる。ハケ調整は基本的には内外面同一工具が用いられているようである。内面にヨコ方向のハケをおこなうためには工具は比較的短く、両端部のエッジが弱い形態が想像できる。当然のことながら工具は、木目が痕跡として残るような木取りがなされているはずである。土器の器表面に残された木目の痕跡は多種多様であるが、木目の特徴から広葉樹が中心であるとみられる。岩手県内では、7・8世紀の土師器壺下半にもハケが認められる（写真10・11）。この時代の土師器壺は、東北地方南部では基本的に下半がケズリ調整であるが、宮城県北部や岩手県内はハケで代替されることがしばしばある。特に関東や東北地方南部はケズリ痕跡が面取り傾向で鋭利であることから金属器の使用が推測される。岩手県の土師器壺は、木製工具で同様の調整を施した結果、木目を残す土器が仕上がるのであろう。

ケズリ

一般的には土器の器表面を削り、器壁を薄く仕上げることを目的とした工具を用いる調整技法である。土器胎土中に含まれる砂粒の動きが器表面に痕跡として認められる。一般的にはと断ったのは、岩手県内の土師器にはケズリによって器壁を薄くする効果はほとんど認められないからである。しかし、砂粒が動くのは、器表面の乾燥が進んだ状態で強く工具を引きすることによって生じる痕跡であると考えられる。すなわち、調整の用法としてはハケとミガキの中間的な位置付けである。9・10世紀の土師器壺の中には乾燥のより進んだ下半はケズリ痕跡だが、乾燥の進んでいない上半はハケ痕跡を示していることがある。これは同一工具で同じ作業をおこなったにも関わらず、乾燥度合いによって、器表面に痕跡差が生じたとみるべきである。つまり、ハケとケズリの調整作用として明確な区分はできないということになる。一方で、器壁が薄くなるケズリも存在する。これは、金属器と思われる工具が用いられている場合である。このあたかも鋭利な刃物で木を削るようなケズリは9世紀以降、しばしば土師器壺に用いられている。前代ではみられないケズリの痕跡であり、おそらく岩手県内で土師器製作に金属器が使用される最初の事例である。

ミガキ

土器の乾燥が進んだ段階で施される器面調整である。最終的な仕上げの調整であるため最も器表面に残りやすい。土師器の様々な器種で認められる調整であるが、その痕跡には違いがある。9世紀以降の土師器鉢、土師器壺などには内面に（時には外側にも）ミガキが施される。ミガキは黒色処理される部分に施され、基本的に壺など中小形製品のミガキと黒色処理とはセットの関係にある。土師器壺に施されるミガキは先端の丸い棒状工具が想定される。これはミガキ痕跡に非常に細かな筋状の擦痕が認められることが多く、硬い植物質のものであると推定される。ミガキの痕跡は、7・8世紀の土師器壺と9・10世紀の土師器壺とで異なる。古い時代の土師器壺はミガキの単位が大きく、方向も決して一定ではない傾向にある。ミガキの方向が不安定であるため、同じ場所に何度も作用している場合がある。器形の規格性の乏しさにも原因があるのかもしれない。しかし、9世紀以降のロクロ土師器壺になるとミガキの単位は細くなり、方向にも規則性がみられる。

7・8世紀の土師器壺・壺にはミガキが用いられることがある。器表面にハケ痕跡の上から施されている。ミガキはタテ方向を基本とし、内外面に施されるもの、密に施されるもの、間隔を空けて施されるもの様々であり、壺よりも幅広である。



写真6 8世紀頃の土師器壺口縁部のヨコナデ



写真7 9世紀頃の土師器壺口縁部のヨコナデ



写真8 指を媒体とする通常の回転ナデ



写真9 工具を媒体とする回転ナデ



写真10 7世紀頃の壺底部にみられるケズリ



写真11 7世紀頃の壺底部にみられるハケ

その他の調整

これまで挙げた調整はその痕跡から使用媒体を推測するものであるが、明瞭な痕跡を留めない無数の調整も存在することを指摘しておきたい。これら痕跡不明瞭な調整の大半は指によるナデ調整であると推測する。また、工具を用いた調整の中にも、痕跡不明瞭なものがある。これらは、工具端部の当たりのみ残存する場合が多い。工具を木口の木目に沿って用いるハケと、板目方向で用いる調整の2種が存在する可能性がある。痕跡の差を考慮するなら板ナデやヘラナデと呼ぶべきかもしれない。

5 土師器の焼成

成形・調整を経た土師器は適宜乾燥がなされ、焼成によって完成する。残念ながら焼成前の乾燥については、その時間や土器の置かれた環境などについて土器観察のみでは明らかにできない。ただ、土師器製作者は土器の歪みやひび割れを経験則的に想定し、急激な乾燥を避けていたと想像される。

(1) 黒斑と火色

焼成は、土器の素地粘土が高温によって硬化することで最大の目的を果たす。土師器は酸化焰焼成であることは周知の事実であり、酸化焰焼成特有の痕跡を残す。土器表面に現れる焼成の痕跡は、黒斑や火色といった焼成環境によって生じる色調変化や硬化具合である。大別すると黒斑は火回りが悪く燃り傾向を示し、火色は土器と密着したイネ科の草本類が高温で燃焼したことを示すサインである。黒斑の有無は、しばしば焼成方法の違いを示していると考えられている（註12）。黒斑は黒～灰褐色の円形や梢円形、火色は明黄褐色～橙色の筋状や長梢円である。黒斑は土器を直接火に掛けると2次酸化が起り、範囲の縮小、場合によっては消失することもある。

このような土師器の焼成による色調変化を観察すると、器表面における黒斑の占める割合に違いがあることがわかる。当然のことながら土器一点毎で異なるが、7・8世紀の非ロクロ製品ほど器表面に出現する黒斑の占める割合が多くなる。特に、土師器壺類は土師器甕類に比べ全体の表面積が小さいためその差異がわかりやすい。7・8世紀の土師器壺外面に認められる黒斑は、底部に該当する部分まで広がっている場合が多く認められる。しかし、9・10世紀のロクロが使用された土師器壺は黒斑の出現頻度がかなり低い。この時期の土師器壺では外表面の半分以上を覆う黒斑はきわめて稀であり、黒斑が認められる場合でも底部にわずかな筋状の黒化部分がみられる程度では無黒斑と言ってもいい。土師器甕においても黒斑の出現頻度および黒斑の面積は、壺類と同様の傾向を示している。土師器甕の場合、ロクロ甕の大半は無黒斑で、白色・硬質のロクロ甕にあっては必ずと言っていいほど黒斑は認められない。以上のように、岩手における古代の土師器には、9世紀を境に黒斑が減少・縮小する事象が起こっており、伝統的な焼成方法が9世紀に刷新されたと考えられる。

(2) 黒色処理

土師器壺などにみられる黒色処理は、意図的に器表面に炭素を吸着させることによって黒くする手法である。この処理は、ヘラミガキ調整と併用され土器表面の緻密度を上げ、液漏れ等を防ぐ効果があったと想定される。内面のみを黒色処理された土器の破断面を観察すると、単に表面を煤が覆っているのとは違い、器壁内部の半分程度まで炭素が入り込んでいる様子がわかる。さらに、表面を擦っても煤が落ちない。現段階では、当該地域での黒色処理の具体的な方法は解明されていないが、草本類などが燃る状況を作り出し、その燃りで生じた炭素が吸着することで黒色処理が実現したと考えられる。内面のみの黒色処理ならば天地逆向きにし、伏せた状態で内面側を燃らせて炭素の吸着が可能である。内外面黒色処理の場合は、外面でも同じように燃る状況を作ればいいのだろうが、方法は未だ不明である。また、この器種の機能や目的についても同様に不明である。

今回、黒色処理で注目したいのは、内面黒色処理される土器の煤漏れ現象である。黒色処理における煤漏れは、内面を黒色処理された土器の口縁部外面に認められる黒化である。すなわち、内面の黒色処理予定範囲をオーバーして外部まで黒化範囲が及んでいる状況がそれである。7・8世紀の内面黒色処理された土師器坏類は大半でこの大幅な煤漏れが認められる（写真12）。しかし、9・10世紀の内面黒色処理された坏類には煤漏れ度合いが軽微な特徴がある（写真13）。当初、筆者は口縁部の水平度合いによって煤漏れ度合いが変わることも想定したが、丁寧なヨコナデによって水平な口縁部が作り出されている7・8世紀の土器であっても、9世紀以降の土器よりも煤漏れ度合いは大きい。これも9世紀に起きた黒色処理の技術的な革新であると考えられる。

（3）焼成方法

岩手県における古代の土師器焼成は、基本的に野焼きであると考えられる。黒斑のところで触れたように、黒斑が生じる焼成方法であることからも広く野焼きがおこなわれたことの証左となる。また、土器器表面には黒斑以外に火色の発生が認められ、火色の発生は珪酸質を多く含むイネ科草本類によって上部に覆いがなされて焼成された結果とみられる。これらの痕跡を残す土師器については草本類の覆いを有する覆い型の野焼き方法が採用されていたと考えられる。

黒斑の観察から得られた知見より、土師器は黒斑の生じやすい焼成から、黒斑の生じない焼成へと焼成方法が変化したとみられる。北上市立花南遺跡では非ロクロの土師器が焼成された遺構が検出されており、8世紀後半の土器焼成遺構と報告されている。また、同市八幡遺跡でもこの時期の土器焼成遺構の存在が推定されている（君島2018）。盛岡市野古A遺跡第30次（岩埋文第594集）の発掘調査でも焼土を作う土坑が0基以上検出されており、筆者は土師器の焼成遺構であると推測している。報告書では、奈良時代とされており、剥離した土器片の出土から土師器焼成遺構の可能性も示唆している。それ以前の焼成遺構の類例は現在確認できていないため、北上市域の2例と盛岡市域の1例が土坑状の掘り込みを作う焼成遺構の県内最古例であると思われる。その後9世紀以降、北上市域では多数の焼成土坑が展開する。他地域ではみられない異常なほど土師器焼成土坑が集中する地域となり、一小地域の消費量を遙かに超えているものと推測される。周辺地域あるいは北上川流域の広域エリアを供給先に据えている可能性が考えられる。特に、土師器坏類も焼成している可能性が高いため、やはり他地域とは大きく異なる様相である。これは、特に北上川流域を中心に9世紀以降、土師器坏類に小地域差が認められなくなり、器形や技術変化も一定である。このことから少なくとも供給具類に関しては、集落内生産を脱し、専業的生産体制に移行した可能性を指摘しておきたい。

以上のように、岩手県では8世紀後半に、土師器焼成方法に発展の萌芽がみられた。土師器ロクロ製品の登場前夜に閉塞度の高まる焼成土坑が採用され始め、その後の焼成方法に受け継がれる様子が浮かび上がり、北上市域では特に焼成土坑が集中する。その後9世紀には加速度的に焼成技術が向上することが考えられる。ただし、焼成土坑の分布は、北上川流域のみに限定され、その他地域には波及しない。須恵器の焼成窯も北上川流域以外には認められないことからもわかるように、9世紀に起きた土師器の焼成方法の変化は、須恵器生産の開始と土師器へのロクロ技術導入と密接な関係があったことは想像に難くない。

（4）色調と地域相

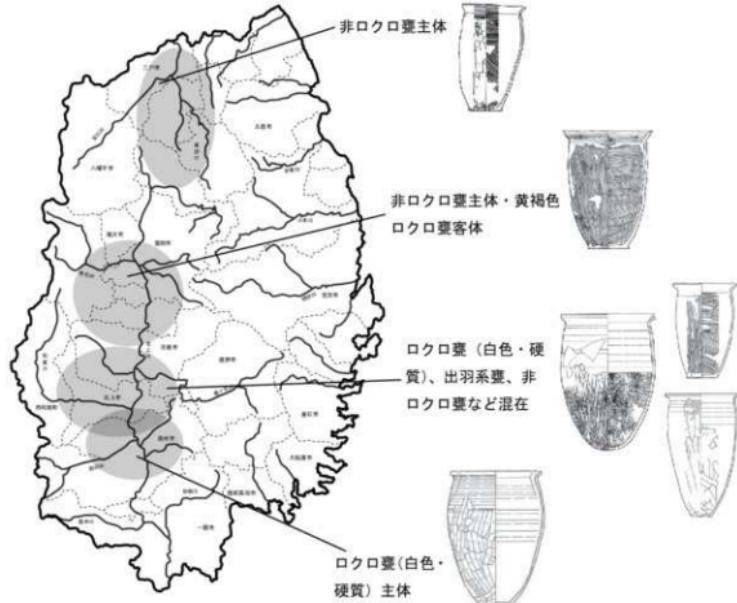
土師器の色調は岩手県内において一様ではない。最初に大まかに区分すると、県北部は暗い色調であり、県南部は明るい色調を帯びている。この色調の南北差は内陸部のみならず、沿岸部でも概ね同傾向である。東北地方南部や関東地方も岩手県南部と同傾向であるため、岩手県北部が列島内において異質な存在であると考えられる。この原因は当然焼成に関わる因子に差を求める必要があると考え



写真 12 8世紀土師器壊にみられる口縁部外面煤漏れ



写真 13 9世紀土師器壊にみられる口縁部外面煤漏れ



第4図 9世紀前半における土師器の地域性

られる。焼成施設の違い、焼成燃料の違いなどの要因が考えられる。

また、県南の胆江地区では、9世紀前半の土師器ロクロ壺において黒斑がみられず、白色・灰白色を基調とする色調である場合が多い。この白い壺は焼成不良による軟質の製品ではなく、むしろ高温で焼成された金属的な乾いた音がするような硬質の製品である。須恵器の焼成窯に似た閉塞性の高い状況下で焼成されたとみられる。これらは破片であっても一見するだけで、県南の土師器ロクロ壺であると推測できる。白色・硬質の土師器ロクロ壺については、奥州市江刺区瀬谷子窯跡群など9世紀の須恵器生産地を波及の源として考えられる。瀬谷子窯跡群足下に位置する集落では、土師器ロクロ壺などロクロが用いられた土師器が卓越する事象が顕著にみられる。

伝統的に暗い色調でロクロ壺の少ない県北部と県南の土師器類とは対極に位置する（註13）。また、焼成土坑のような半地下構造の焼成施設は盛岡以北では検出されていない。これは県北地域が、伝統的に閉塞度の低い焼成方法が採用された地域であることを強く示唆している。同時に、燃料材は薪燃料を主とし、稲藁をあまり用いない焼成が想定される。野焼き焼成において稲藁よりも森林資源を主として活用する地域的な特徴が現れている。これは当時の稲作農耕とも関わる可能性があり、今後注意が必要である。

6 変化と画期

土師器製作技術について素描を試みたが、伝統的な製作技術に加え、いくつか製作技術上の変化が生まれたことを確認した。また、時には、それまでの伝統を一新するような革新的な技術が登場することにも触れた。ここでは、製作技術上の変化や革新とその要因について考察し、画期を見出したい。

（1）技術と器形変化

製作技術の変化と土器の器形変化は密接に関わる例が多いことは本稿で再三触れてきた。ここではその関係性に着目し、今一度整理する。

土師器壺は、概ね9世紀を境に非ロクロのものからロクロのものへと置換される。これは大きな革新である。7・8世紀代の土師器壺は、伝統的な輪積み成形でおこなわれ、調整には金属器の使用がほぼ認められない。9世紀以降になると大半の土師器壺類はロクロ盤上で製作される。このような技術的な変化は、完全なる平底の器形を生み出し、伝統的な手持ちに馴染んだ形態から平置きにも向いた器形となる。さらに、規格性の高い器形へと変化しており、土師器と須恵器の器形差が縮小する。ただし、黒色処理の施される土師器壺は内面のミガキ調整のためか、体部下半が外方へ張り出し、幾らか膨らみを持っている点で須恵器壺とは微妙に器形が異なる。

土師器壺は、壺よりも段階的な製作技術の変化と器形変化を見出すことができる。土師器壺の器形は外方へ大きく張り出した球胴形であったものが、張り出しが弱くなる傾向である。成形時の休止が複数回挟まれ、特に体部下半と体部上半などに大きな休止ラインがみられる。張り出しが弱くなるにつれ、この休止が短時間となったと考えられる。あるいは、休止の短縮が器形の張り出しの縮小をもたらしたのかもしれない。多くの労力を費やしていたはずの壺製作も8世紀末から9世紀初頭には下火となり、9世紀半ばには完全に消滅し、土師器の器種構成から姿を消す。その代替品が須恵器壺や壺類の貯蔵具であることは言うまでもない。

土師器壺も丁寧で手間暇をかけた成形技術から徐々に脱却し、変化に富む流麗な器形から寸胴で無骨な器形へと変化する。この脱却には、やはり成形時における休止の短縮化と密接な関係がある。8世紀半ば以降は、積み上げの省力化が図られ、底部の平坦化と単純な輪積みによって器形も単純化す

る。特にこの頃は、体部下半の膨らみが失われており、底部から体部へと外方に開きながらもその器壁は直線的である。これと連動するようにミガキ調整もみられなくなり、未乾燥状態で施されたハケが器表面に残るのみとなる。成形途中の乾燥を挟まないことで、器表面が湿潤な状態で焼成前の乾燥へ移行するものと考えられる。最早、器表面をより緻密にする作法は忘れ去られたかのようにも見える。7世紀の甕に比べると幾分か安定感のある器形に変化するが、小さめの底径は、依然として継続しており、伝統は完全には払拭されていない。この漸移的な技術変化は、ロクロ技術導入以前に認められることから、須恵器生産の開始とは無関係であると考えられる。

その後、9世紀には土師器甕も伝統的な非ロクロ甕にロクロ甕が加わる。前者は9世紀初頭には、未だ前代の器形を保持した形態であるが、9世紀半ばにはベタ底基調のものへと器形も変化する。口縁部の屈曲も弱くなり、その長さも短くなる。底端部のわずかな丸みは損なわれ、接地面の大きな底部となる。これらは口縁部まで一気に積み上げる成形であり、そのため調整も粗い調整へと変化する。成形時の休止をほぼ経ていない分、成形終了時には乾燥が進んでおらず、最終的な調整はケズリ調整が主体となる。なお、胎土に含まれる砂粒の粒径も9世紀半ば以降は大きくなるため、ケズリ調整による砂粒の動きが前代よりも顕著となる。坏類と甕類の胎土の差が大きくなる現象は、土師器製作が大小の器種それぞれ製作背景に共通性があった時期から、完全に両者の製作背景が分離した結果とみることも可能である。特に、ロクロの使用有無においても差がある土師器同士は、製作上完全に分離したのかもしれない。

(2) ロクロ技術の展開

岩手県では9世紀には新たに土師器にもロクロ技術の導入が認められる。特に供膳具である坏類においては非ロクロ製品が次第に消滅する。土師器坏は、製作技術は大きく転換することになったのである。しかし、伝統的な技術的側面も残している。内面のミガキと黒色処理である。このあたりにロクロ技術が導入されても、伝統的な土師器文化のアイデンティティの名残を感じることができる。ただし、ロクロ技術の導入には、技術的発展性も垣間見ることができた。内面黒色処理されたロクロ坏のミガキは非常に細かく、規則的なものに変容し、黒色処理の変化は煤漏れが生じなくなった。第一にロクロを使うことで規格性の高い製品をより多く生産できることになり、結果として地域間での量の多寡はあるが、製品毎の差異がなくなったと考えられる。土師器坏生産は、より集約的な生産体制へと移行したものとみられる。

9世紀は土師器甕にもロクロを使用した製品が登場し、土師器の煮沸具にバリエーションが増えることになる。これは土器様式における革新的な事象である。このように煮沸具の甕は製作手法の異なる2種が存在することとなる。北上川流域では基本的に両者併用となるが、県北・沿岸地域では非ロクロ甕が依然として主体を占めており、大まかな地域差が生じている。しかし、ミクロな視点に立てば、必ずしも完全に色分けできるわけではない（註14）。加えて筆者は、県北・沿岸地域でもロクロ甕を擁する集落が存在することから、集落間の性格差も考慮する必要性を感じている。すなわち、地域の拠点的な集落にあっては、城柵の設置された北上川流域と同様の土師器甕2種併用が可能となっている場合も想定している。土師器坏生産が、より集約的な生産体制へと移行したと考えられる一方で、土師器甕には未だ地域差が認められる生産体制であった可能性が考えられる。

(3) 土師器生産の画期

製作技術上認められる変化が様々な要因によってもたらされていることを想定した。ここでは、その変化に画期を見出し、その背景との関係性をより明確にする。また、製作技術の変化は何らかの要因を求める必要がある。伝統的な技術に漸移的な変化が加わることで推移している7・8世紀の土師

製作初段階	器種	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
成形・初期調整	素地粘土	全器種	器種間砂粒の粒径差大・中に分化	器種間砂粒の粒径差大・小2極化	
	坏類		粘土紐輪積み成形		
	甕		基底部成形の漸移的変化		
	壺		基底部成形の漸移的変化	器種の消滅	
	ロクロ甕 大			ロクロ・輪積み併用?	
	ロクロ甕 小			ロクロによる初期調整	
	ロクロ製 土師器坏				
	坏類		底部ケズリかハケ 内面ミガキ		
	甕		体部内外面ハケ主体 体部外面ミガキからケズリに漸移的変化	粗雑化の進行	
	壺		体部内外面ハケ主体・仕上げはミガキ		
変形・調整	ロクロ甕 大			体部タタキ 体部外面下半ケズリ	
	ロクロ甕 小			体部内外面回転ナデ	
	ロクロ製 土師器坏			内面ミガキ	
	非ロクロ製 土師器		野焼き (低閉塞度) → 野焼き (高閉塞度)		
	ロクロ製 土師器			焼成土坑や窯など	
焼成	黒色処理 土器		黒色処理の煤漏れ大	黒色処理の煤漏れ小	

第5図 土師器製作の変遷

器は、製作効率の向上が徐々に進むようである。これは技術的な推移をみると省力化が進んでいることに起因すると考えられる。

第1の画期は、8世紀中頃から後半あたりにある。7世紀から続く土師器壺・壺類の成形に用いられた基底部成形技法が8世紀後半には完全に消えてしまう時期である。従来から指摘されている土師器壺の平底指向もこのタイミングであると思われる。次なる9世紀の大革新を予兆させる漸移的な移行期である。この時期は土師器製作、特に壺製作の省力化が進むことは先にも触れた。あたかも新しい文化が徐々に眼前に迫っているかのようである。技術上の省力が図られた要因は、需要増による生産性の向上もその一つであると考えられる。

第2の画期は、9世紀の大革新期である。ロクロ製品の波及や土師器壺の消滅、土師器は城柵の相次ぐ設置によって大きな転機を迎えることとなる。土師器製作技術は前代より省力化が一層図られ、量産を指向したものと考えられる。土師器焼成方法についても9世紀を境に土器の痕跡が異なることを指摘した。この9世紀に起こった焼成に関する技術革新は、土器生産の大きな画期である。土師器生産は伝統的で地縁的な地場生産から集約的な生産・供給体制にシフトしたとみるべきである。ただし、その集約的な生産体制もその中身は地域的な濃淡や器種間格差があり、城柵の土器生産および供給システムも広い岩手県域の地域社会を完全にグリップするところまで及ばなかったものと捉えることができる。このような変革は、単なる技術の伝播に留まらず、土器生産体制が政治的な主導を背景に展開すると考えられることから、社会的な変革が在地の土器製作技術にも影響を及ぼした結果とみることができる。9世紀前半の胆沢城・志波城・徳丹城など城柵設置は、北上川流域の土師器に影響を及ぼすこととなる。ただし、城柵の設置は土師器製作における革新の遠因の一つに過ぎないと筆者は考える。直接的な成因の一つは、北上川流域に展開した須恵器生産であると考えられる。

第3の画期として、10世紀前葉頃から、徐々に須恵器生産の後退があり、伝統的な黒色処理土師器生産も縮小する傾向であると考えられる。器種構成も単純化の一途を辿ることとなる。

7まとめ

岩手県で出土する7~10世紀の土師器について製作工程とその製作技術について素描をおこなった。その結果、土師器各器種の製作技術の整理ができ、その特徴が浮かび上がった。さらに、器種間の技術的な相違と共通性も改めて明らかとなった。時代の経過とともに土師器製作の技術的な変化や革新を捉えることができ、これら技術的な変化・革新がもたらす製品の形態的な変化について考察した。一方で、長期間継承される伝統的な技術も認められる。

7世紀代には、時間と労力を費やして土師器が製作されたことが認められたが、地域差はあるものの8世紀も半ばを過ぎる頃には、製作の省力化が進むことを土師器壺・壺などの製作技術の変化から追認された。この背景は土師器の需要増とひとまず認識した。これには、生業の変化や社会情勢の変化も加味しなければならないが、今回は関連性について詳述することはできなかった。今後の検討課題である。7・8世紀では土師器各器種の製作上差異が小さいことから在地集落では、土師器各器種ともに横並びで生産されたと考えられる。そして、消費も小地域単位でおこなわれたとみられる。これは土師器の特徴にも地域差が顕著にみられる点から考へても妥当であろう。

次に、9世紀には土師器製作において大きな転機が訪れる。これは器種構成も変化するため生産と消費について大きな変革であると評価できる。9世紀、在地社会の土師器にも導入されるロクロ技術は、須恵器生産の開始がなければ成立しないものである。土師器生産に大きな地域差が生じるのもこれが直接的な成因であることを示している。新技術到来に伴い、旧来の伝統的な土師器壺製作の省力

化はさらに加速的につみ、新たな製作技術は地域間格差、集落間格差を生み出す。土師器各器種とも在地集落で地場生産的に製作されていたものが、おそらく土師器非クロクロの壺以外は、集落外で製作されていたものを入手して消費していたものと想像される。9世紀以降、特に北上川流域諸地域では土師器製作の専業化が進み、その結果土師器製作技術の大半は、集落構成員の手から離れ、時間の経過とともに技術そのものの衰退が起こるのではないかと考えられる。しかし、一方で、それ以外の地域では伝統的な技術が細りながらも継続していくことも想定される。

縄文土器以来継続する伝統的な土器製作は、7世紀の土師器で多種多様な製作技法が駆使され、手工業生産の精華とも言える時期を経験する。9世紀の社会変化は、これら伝統的な土器製作技術をどこかに追いやってしまう。このような現象をみれば、今一度さらなる観察が必要であることを痛感する。今後も継続して、土器に触れ、目を凝らしてみよう改めて感じるに至った。同時に、今回明らかにできなかった部分にも光を当てることを目標として掲げたい。

註

- (1)筆者は平安時代の土器についての諸工程や製作技法については花巻市中嶋遺跡の発掘調査報告書でも若干整理したことがある(岩手県文化振興事業団 2013)。
- (2)このような観点から、クロコ成形という表現は粉らわしい言い回しである。成形時からクロコの回転力を用いる土器は、せいぜい环頸など小形製品に限定されると考えられる。これは、須恵器=ロクロ成形ではないからで、例えば須恵器大壺が粘土組巻き上げ成形されることと同じことである。
- (3)「整形」という用語は、「形を整える」という意味があり、実に目的を射た表現ではある。しかし、前工程の「成形」と同音であるため混同する恐れがある。音の混同はまだいい方だが、「成形」と「整形」を同義的に使用するのは土器製作工程を考えるうえで弊害となる可能性がある。よって筆者はこの用語の使用を日常的に避けている。
- (4)これら土師器鉢の胎土については、以前の別の論考(福島・高橋 2010)で紹介した。現段階でも大きく変更はないと思われるでのこれを参照されたい。
- (5)東北地方南部の栗圓式壺の特徴である下彫れ器形とも共通するが、岩手県域の壺類において栗圓式壺のような極端な下彫れ器形は稀である。
- (6)貯蔵具である土師器壺が器種構成から外れる事象は、地域的な土器模式の大きな転換である。これは貯蔵具である須恵器壺・壺の一般的な充足を契機としていると考えられ、土器生産体制およびその受容と供給面において重要な事象である。
- (7)7世紀代の土師器壺の多くは、体部の張り出しが大きく、体部下半の接合部付近で自重によるヘタリがみられ、その影響がしばしば器形にも現れている。
- (8)ここでは口縁部の切りえ込みは成形段階としたが、実際には素地粘土組み上げ後の一次的な器面調整を施した後に切りえられるようである。
- (9)底部輪台技法とは、畿内の弥生後期(第V様式)の煮沸用壺における底部成形技法として都出比呂志によって紹介され(都出 1974)、知られている。これはドーナツ状の基底部に内底面部分を充填しながら底部および体部下半を成形する方法である。時代も地域も大きな隔たりがあり、偶然の一一致であると思われ、筆者は当然、系譜をこれに求める意図もない。とは言え、底部の形態は非常によく似通っている。
- (10)出土資料の壺底部中央部のみ剥離した個体は、遺物整理作業において石膏が充填されることが多いため破断面の観察が困難な場合が多い。
- (11)ただし、北上川流域で出土する日本海側発祥の丸底の土師器ロクロ壺は、タキによって球胴化が図られている。
- (12)川西宏幸は、古墳時代の円筒埴輪にみられる黒斑の有無で野焼き焼成段階と窯焼成段階に時期区分し技術的な発展を見出した。黒斑から編年や生産体制にまで言及した非常に優れた論考である(川西 1978)。
- (13)地域間での器種構成に関しては今回詳細な分析はおこなわないが、器種構成と土師器生産が密接な関係にあり、この様相は同時に地域によって異なることを物語っている。
- (14)木光則は瓶壺(ロクロ)壺の生産や供給と関連して、「城柵支配や須恵器供給にバラツキがあったこと」を指摘している点で重要である(八木 2006)。

引用・参考文献

- 岩手県文化振興事業団 2013 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 607 集 中嶋遺跡発掘調査報告書」
福島正和・高橋静歩 2010 「岩手県における土師器鉢に関する研究—岩手県内出土資料を中心に—」『紀要XXIX』(財)
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 福島正和 2015 「岩手県北の土師器生産」「北東北の土師器生産」 岩手考古学会第47回研究大会資料
- 小林正史 2017 「使い方から読み解くモノと技術」「モノと技術の古代史 陶芸編」 小林正史編 吉川弘文館
- 望月精司 2017 「壺・甕 一貯藏具一」「モノと技術の古代史 陶芸編」 小林正史編 吉川弘文館
- 小林正史 2017 「使い方との関連からみた土器の製作技術」「モノと技術の古代史 陶芸編」 小林正史編 吉川弘文館
- 木立雅則 2017 「回転運動を利用して成形」「モノと技術の古代史 陶芸編」 小林正史編 吉川弘文館
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団關係—淀川水系を中心に—」「考古学研究」20巻4号 考古学研究会
- 辻秀人編 2007 「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」 東北学院大学文学部
- 伊藤博幸 2006 「陸奥型壺・出羽型壺、北奥型壺—東北地方の平安期の製作技法論を中心に—」「陶磁器の社会史」吉岡康暢先生古希記念論集 桂書房
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪乾燥」「考古学雑誌」64-2
- 菅原耕夫 1997 「東北北部—古代陸奥の土師器生産体制と焼成窯」「古代の土師器生産と焼成遺構」 窯跡研究会編 真陽社
- 北野博司ほか 2006 「上田面遺跡（岩手県）の8世紀の土師器の野焼き方法」「黒斑からみた縄文・弥生土器・土師器の野焼き方法」 平成16・17年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 北上市教育委員会 2007 「北上市埋蔵文化財調査報告書第82集 立花南遺跡（2005年度）」
- 君島武史 2007 「古代聚落から検出される焼成遺構—立花南遺跡の再検討を元に—」「北上市立埋蔵文化財センター紀要 第4号」
- 君島武史 2018 「北上川・和賀川流域における土器工入集団の動向—明神Ⅱ遺跡の再検討から—」「北上市立埋蔵文化財センター紀要 第6号」
- 岩手県文化振興事業団 2002 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集 細谷地遺跡第4・5次発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団 2004 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第454集 細谷地遺跡第8次発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団 2005 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第503集 向中野遺跡第5・6次発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団 2005 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第465集 中平入遺跡第4次発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団 2010 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第548集 羽黒田遺跡発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団 2004 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第427集 飯岡林崎Ⅱ遺跡第1・3次発掘調査報告書」
- 岩手県文化振興事業団 2012 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第594集 矢盛遺跡第27次・野古A遺跡第30次発掘報告書」
- 大川 清はか 「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群」「窯業史研究所編 共立印刷
- 伊藤博幸 2007 「陸奥・出羽の須恵器系土器・あかやき土器小論」「古代蝦夷からアイヌへ」 天野哲也・小野裕子編 吉川弘文館
- 八木光則 2006 「陸奥北半における轆轤土師器の導入」「陶磁器の社会史」吉岡康暢先生古希記念論集 桂書房

江戸の南部屋敷（2）

- 盛岡藩南部家江戸上屋敷の研究2 -

中村隼人・滝尻佑貴・野田尚志

本稿は陸奥盛岡藩南部家が所持した江戸屋敷の建築空間について考察を行ったものである。連作の二本目となる本稿では前稿に続き盛岡藩が近世を通じ江戸桜田門外に所有した陸奥盛岡藩南部家江戸上屋敷については検討を行った。本稿では各絵図を作図する際に用いた基準尺に関する検討と、切絵図上に記載された構地の家名の変遷などについて考察をおこなった。結果、陸奥盛岡藩南部家江戸上屋敷の空間構成の具体とその変遷について概略を整理することができた。

3. 4 江戸上屋敷 基準尺

1) 江戸屋敷と基準尺

第一稿でも触れたとおり、中近世移行期の列島内には田舎間（江戸間=六尺間）、中京間（六尺三寸間）、京間（六尺間）など、それぞれの広域圏内で共有される複数の基準尺が存在していた。また同一の基準尺を用いる文化圏であったとしても建築の尺度の場合、柱芯から柱芯までの寸法を重要視する芯々制と、柱と柱の内面の寸法を重要視する内法制が混在しており、様相は一様ではなかった。本稿では絵図上に描かれた記載内容や図上の表現などから、図示された各種内容がいかなる基準尺によって規格されていたのかについて検討を行いたい。

江戸大名屋敷の建築群で用いられた基準尺についての先行研究は豊富である。絵図面や工事記録を記載した資料類を対象とする建築史分野の研究の他に、発掘調査で得られた遺構の情報によっても建築群の基準尺を検証することができる。

一般に大名屋敷内の御殿など、格式が高く、精度の求められる建物群を江戸で建築する場合には、当時の建築文化の先進地であった西国の大工集団が登用された。このため御殿空間などの建物群は京間によって建てられ、以外の詰人空間の建物群は田舎間で作られる例が多い。しかし大名屋敷を例に話を進めるならば、大名が国許から呼び寄せた職人集団が工事を主導するのか、あるいは江戸で新たに雇い入れた職人集団が工事を主導するのかによって、そこで用いられる基準尺が異なるなどの場合も想定できる。また御殿新築時の大工集団と改築時の大工集団が異なる場合も多くあり、複数の異なる基準尺を混用して御殿が作られる場合もある。津軽藩江戸上屋敷の御殿建物は田舎間、中京間、京間が混在していたということが発掘調査の結果明らかになっている。江戸という都市が様々な地域文化を融合させて極めて短期間に造られ、そして拡大していくという様相が、これら基準尺の混用の具合からも読みとれる。

敷地測量時に用いられた基準尺についての先行研究も豊富である。これらの成果についてもここで簡単に触れておきたい。近世初期の江戸町人地の町割りは京間で町割されている。近世初期の資料類では、個々の屋敷地の間口・奥行・坪数などについては、京間によって表示している。これが一七一〇年代以降に新たに成立した町は田舎間を基準尺として測地されたことが知られている。近世中期以降の江戸町人地では京間による寸法表記が一般的であったが一部においては田舎間による表記も混在する様相であった。武家地の場合、近世初頭からその大半が田舎間によって地割されていたと考えられており、事実十七世紀前半の大名屋敷絵図なども田舎間によって地割されている例が多い。普請奉行所に残された十七世紀後半以降の押領屋敷受記録も全て田舎間で記載されている。

2) 測地に際して用いられた基準尺

九枚の絵図面のうち敷地形状が描かれているものは絵図①・②・④=⑥、⑤・⑧の六点である。このうち絵図②を除く絵図①・④=⑥・⑤・⑧の五点は、図中に敷地寸法が記載されている（図24）。

五点中、絵図⑤・⑧の二点に関しては図中に測地時の基準尺が明記してある。絵図⑤は図中の記載内容から測地に際し用いられた基準尺が田舎間（六尺間）であったということがわかる。同様に絵図⑧も記載内容から測地に際し用いられた基準尺が六尺間（田舎間）であったということがわかる。

なお両図を比較すると、同一の基準尺によって測地を行ってながらも、記載された敷地寸法に多少の誤差があるということが確認できる。例えば敷地西側の寸法を記載した箇所については、絵図⑤に「田舎間六拾毫間毫尺五寸」、絵図⑧に「北条様御境六尺間六拾毫間毫尺五寸」とあり、全くの同一の寸法が示されている。一方で、例えば敷地南側部分の寸法などでは、絵図⑤が「田舎間百三拾間」であるのに対し、絵図⑧では「六尺間百三拾毫間五寸」となるなど各所で寸法が異なる。当然ではあるが、現在のように隣地境に境界杭のようなものが打たれ、屋敷境が明示される環境ではなかつた近世の江戸においては、江戸幕府から押領された屋敷地であっても、その境界は曖昧で多少の誤差を含むものであったということが理解できる。

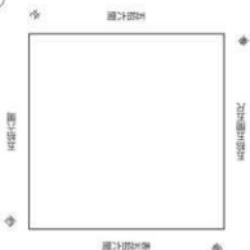
測地の際に用いられた基準尺を考えるうえで、絵図⑤と⑧に次いで検討すべき資料は絵図④=⑥であろう。絵図④=⑥と絵図⑤・⑧を比較すると、そこに記載された寸法が同一ないしはほぼ同一であるということがわかる。例えば敷地西側の寸法が絵図⑤では「田舎間六拾毫間毫尺五寸」、絵図⑧では「北条様御境六尺間六拾毫間毫尺五寸」と同寸法となることについては上述したが、絵図④=⑥も同様に同所の寸法は「六拾毫間毫尺五寸」である。他にも絵図④=⑥では、各所において「式拾間」「四拾式間毫尺五寸」「百三拾毫間五寸」という寸法が記載されているが、絵図⑤では「田舎間拾九間三尺四寸」「田舎間四拾式間毫尺八寸」「田舎間百三拾間」、絵図⑧では「六尺間二拾間」「六尺間四拾式間毫尺五寸」となるなど、やはり同一ないしはほぼ同一の寸法が示されている。これら寸法の整合性から考えるならば、絵図④=⑥の敷地測量時の基準尺も、絵図⑤・⑧と同様に田舎間（六尺間）をであったと考えるべきだろう。

問題は絵図①である。絵図①には他図にはみられない複数の異質な情報が示されている。例えば、敷地形状が描かれている絵図は六点あるが、この中で絵図①のみ敷地形状が異なる。絵図①を除く、絵図②・④=⑥・⑤・⑧の五点はいずれも敷地形状を横長のL字型として描いている。またいずれも敷地西半には御殿空間を描き、敷地東半には詰人空間を描くなど、全体の構成については一様のものと評価して良いだろう。しかし絵図①のみは敷地形状を正方形とし、図中には御殿空間のみを描いている。この他にも、図中に記載された敷地寸法が他図と比べ極端に小さいなど、他図ではみられない特異性が確認できるわけだが、ここではまず敷地形状が他図とは異なるという問題について整理を行いたい。

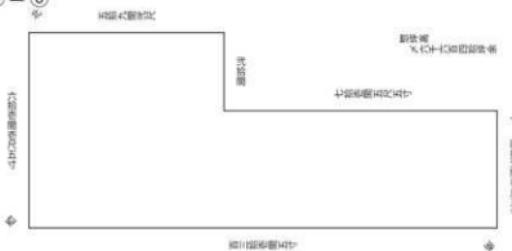
絵図①はもりおか歴史文化館の所蔵資料である。同図は絵図②とともに『江戸上屋敷図』の名称で登録されており、正徳六年甲四月十六日の日付が書かれた絵図と同質の和紙袋に同封されていた。和紙袋中には絵図①・②の他に、未製品の貼絵図の素材であろう紙片や（図5）、絵図①との相関が予想される横長方形の敷地中に詰人空間のみを描いた書絵図二点も同封されていた（図6・7）。資料の梱包状態や、絵図①に貼紙された番付と書絵図に描かれた番付が整合する点などから考えると、絵図①は同封されていた未製品の紙片や書絵図との相関性を持つ一連の資料として理解すべきものであることがわかる。

また図中に描かれた敷地形状や、建築空間の内容から考えるならば、絵図①は横長L字型の敷地の

絵図①



絵図④ = ⑥



絵図⑤



絵図⑧

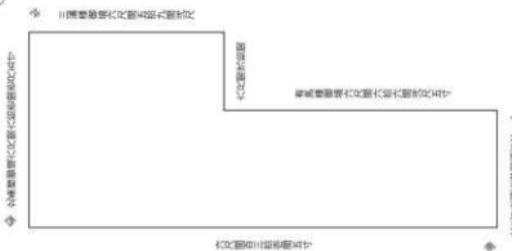


図24 各絵図における敷地形状と寸法

うちの西半の御殿空間のみを図化したものであり、未製品の紙片や書絵図はこれと連続する敷地の東半部分に展開した詰人空間のみを図化したものであるという解釈ができる。つまり絵図①に描かれた敷地の寸法や形状について他図と比較する際には、これらの一連の資料状況に対する理解を前提とする必要性がある。以上の資料状況を踏まえたうえで、絵図①成立の背景について考えるならば、絵図①は宝曆三年（1706）に東接する三春藩の屋敷地を入手した直後に描かれたものである可能性が高い。敷地東半部分を描いた絵図①には御殿空間と詰人空間が共に存在するほか、表御殿の玄間にほぼ正対する位置に表御門と比定しうる大型の門が位置するなど、狹小な敷地内にありながら、大名屋敷として最低限の体裁を整えている。絵図①を屋敷地拡張以前の図として考えるならば、同図とともに同封されていた未製品の紙片や書絵図の性格も類推が可能になる。前述したとおり、これら同封の図はいずれも屋敷地東半と想定しうる横長の敷地内に詰人空間のみを描いたものである。いずれの図にも異同があるところから考えると、これら同封の図は屋敷地東半の詰人空間の設計に際して作られた複数の計画案を提示する段階に造られた図面群である可能性が高い。

また同様に、同封された一連の資料の状態から考えるならば、絵図②は絵図①の後年に造られたものであり、かつ工事内容の決定後に造られた図面であるという推論も可能だろう。絵図②は全国中唯一の貼絵図であり、製作には手間が掛けられているなど、古段階に分類した絵図の中では最も見栄えが良い。また界線が引かれ方眼が切られていることから図の精度も高い。試作品の図面にここまで手間をかけるとは想定はし難い。絵図①では未定の状態であった敷地東半と西半の連続部分の図内容についても詳細が描かれているところなどと合わせて考えても、絵図②は絵図①の後年に造られたものであり、かつ同図こそが正徳六年（1716）に成立した図であるという推論は無理がない。

絵図①測地時の基準尺の検討に論旨を戻したい。絵図①が横長L字型の敷地のうちの西半のみを描いたものであるとするならば、敷地寸法について他図と比較を行うに際し、有効性を持つのは敷地北側部分の寸法と西側部分の寸法に限定されることがわかる。絵図①の敷地北側と敷地西側に描かれた寸法はいずれも「五拾六間」である。対して、絵図④=⑥では「五拾九間武尺」と「六拾七間毫尺五寸」、絵図⑤では「田舎間五拾九間毫寸」と「田舎間六拾七間毫尺五寸」、絵図⑧「三浦様御境六尺間五拾九間武尺」と「北条様御境六尺間六拾七間毫尺五寸」となる。一見して分かる通り、絵図①の寸法のみが例外的に小さく、他図と異なる基準尺が用いられていることが理解できる。

次いで絵図①測地時に際して用いられた基準尺の特定を行いたい。ここでは敷地西側に示された寸法値を例として話題を進めるが、同所の寸法は絵図④=⑥・⑤・⑧とも、田舎間（六尺=1.818メートル）で「六拾七間毫尺五寸」と同一である。これをメートル換算すると111.35メートルとなり、同所の敷地寸法がこの値であったということがわかる。

絵図①に描かれた「五拾六間」を中京間（六尺三寸=1.890メートル）で試算すると、メートル換算値が106.31メートルとなり、誤差が大きく整合しない。次に京間（六尺五寸=1.970メートル）で試算すると、メートル換算で110.81メートルとほぼ近似値となる。これら試算の結果から考えると、絵図①は京間（六尺五寸）で測地されたものと理解できる。

3) 建築群の設計時に用いられた基準尺

前節の検討において絵図①・④=⑥・⑤・⑧に記載された測地時の基準尺が明らかになったわけだが、これと屋敷地境内に描かれた長屋部分の建物間数を比較することにより、測地時に用いた基準尺と長屋部分を設計した際に用いた基準尺の異同を比較することが可能になる。また同様に測地時に用いた基準尺と、詰人空間設計時の基準尺が明らかになることにより、これと御殿部分設計時の基準尺を

比較することが可能になる。本節では以上の手順によって各絵図に描かれた建物群の設計時に用いられた基準尺の特定を行いたい。

絵図①はここで挙げる五図中唯一、測地時に京間を用いた図面であるが、敷地寸法として記載された間数と詰人空間の柱間間数が基本的には一致する。このことから考えると、詰人空間の建物群もまた京間を基調として設計されていたということがわかる。なお敷地境南側に造られた長屋空間は京間五十六間で割り切れるが、敷地西側境に造られた長屋空間はこの限りではない。敷地南側境の長屋空間や御殿空間の一間の間隔と比較すると、敷地西側境の長屋の一部には京間よりも小さい基準尺が用いられていたと考えなければ整合しない部分が多い。同所の一部では京間以外の基準尺や、ないしは現場合わせの間尺によって設計されていた可能性があることも指摘しておきたい。

絵図④=⑥・⑤・⑧の四点は、測地時の基準尺を田舎間とする一群の資料である。測地時の基準尺と図示された内容の比較を行うと、いずれも詰人空間は田舎間を基調とし、御殿空間はこれよりも小さい寸法の基準尺に用いていることがわかる。四図とも図面縮尺が小さく、図中の一間同士の対比によってその基準尺を推定するよりほかに検討手段がない。このため検討の精度は低いと言わざるを得ないわけだが、御殿空間の間尺は京間を基調としていた可能性が高い。なお、御殿空間中の一部では、京間とは異なる変則的な間尺を用いていたと解釈しなければ整合しない部分も確認される。京間以外の基準尺が用いられた可能性や、現場合わせの寸法が用いられた可能性も十分に考えられる。

4) 絵図②で用いられた各種基準尺

次に絵図②に用いられている各種基準尺についても検討を行いたい。絵図②は図中に敷地形状が描かれていながら、敷地寸法が書かれていない唯一の図である。同図は全図中唯一の貼絵図であるが、貼絵図を貼る際の補助線としたためか、図全体に算線が引かれている。これら算線によって造られた方眼は、当然いずれかの基準尺を単位としたものであろうから、絵図②の図中に敷地寸法が明示されていないとも、他図との比較によって、この方眼の単位となった基準尺を特定することができる。ここでも同様に敷地西側部分の比較によって、この問題について考えていく。前節までの検討で明らかのように、敷地西側の敷地寸法は田舎間で六十一間一尺五寸、京間で五十六間である。絵図②敷地西側の算線を数えると方眼が五十六間分あることがわかる。つまり絵図②の方眼は京間を単位として作られていることがわかる。

次に同図の御殿部分の基準尺についても検討を行いたい。絵図②を一見すれば明らかなように、御殿部分の一間と同図全体に引かれた方眼の一間は一致している。つまり御殿部分の基準尺もまた京間であるということがこの比較からわかる。なお連続する御殿空間であっても、一部では京間を用い、一部では田舎間を用いるなど、異なる基準尺を混用した可能性も当然想定できるわけだが、絵図②の方眼の一間とそこに貼られた貼絵図の一間を比較すると、表・中奥・奥の全ての空間がいずれも京間によって規格されていたということがわかる。

なお、詰人空間設計時の基準尺も御殿空間と同様に京間である可能性が高い。絵図②は全ての建物の間取りを詳細に記載した絵図ではなく、一部を簡略化し図示している。具体的に説明するならば敷地西半中央にある御殿部分のみは間取りを詳細に書き込んでいるが、これをとりまく長屋部分など詰人空間に関しては建物の輪郭を描くのみで柱割など間取りの詳細は描いていない。しかしこれら建物輪郭が図中の方眼と一致するところなどから考えると、詰人空間もまた京間を基調として設計されていた可能性が高い。

表1 各絵図で用いられた各種基準尺

図名	測地	長屋空間	御殿空間	算線	三章三節で行った年代比定
絵図①	京間	京間	京間	なし	A. 正徳六年（1716）前後
絵図②	なし	京間	京間	京間	A. 正徳六年（1716）前後
絵図⑧	田舎間	田舎間か	京間か	なし	A. 正徳六年（1716）前後
絵図④=⑥	田舎間	田舎間か	京間か	なし	B. 文化三年（1806）前後
絵図⑤	田舎間	田舎間か	京間か	なし	B. 文化三年（1806）前後

5) 全体の傾向

次に本節でここまで検討した各図で用いられた測地時の基準尺と建物群の設計時に用いられた基準尺について整理を行いたい。ここまで検討を整理すると表1のようになる。表1には本節中で検討を行った基準尺に関する情報の他に、三章三節において行ったおおまかな年代比定の検討結果も併記した。三章三節では、図中に描かれた空間構成の類似性から、絵図①・②・⑧は正徳六年（1716）に前後して作図された一群の絵図であり、絵図全体の中では古段階の状態を図示した絵図であると比定した。同様に、絵図④=⑥・⑤は文化三年（1806）に前後して作図された一群の絵図であり、絵図全体の中では新段階の状態を図示した資料であると比定した。

これら大まかに比定された絵図の成立年代に合わせて各図をみていくと六点の絵図中でも古段階に分類できる正徳六年（1716）前後の絵図群（絵図①・②・⑧）は基本的には測地時・長屋空間・御殿空間のいずれにおいても京間を基準尺としていたことがわかる。対して新段階に分類できる文化三年（1806）前後の絵図群（絵図④=⑥・⑤）では、御殿空間設計時の基準尺のみは京間基調を継続するが、以外においては田舎間基調へと変化する傾向が読み取れる。

なお古段階に分類した三点の絵図中、絵図①・②は御殿空間と長屋空間のいずれをも京間にによって設計しているのに対し、絵図⑧のみは長屋空間を田舎間基調としている点で異例である。三章三節においては絵図中に描かれた空間配置の中でも、表御門の位置、御殿内の表の空間の形状、御殿空間北東の能舞台の有無、御殿と内長屋間に土蔵が築かれる、などの要素を基準とし、古段階（A. 正徳六年（1716）前後の資料）と新段階（B. 文化三年（1806）前後）に大別した（図23）。これら各絵図でみられる諸要素を整理すると表2のとおりになる。絵図⑧は表門の位置と御殿・内長屋間の土蔵の有無という項目については古段階の絵図の特徴を持つが、表の空間の形状や能舞台の有無といった項目については新段階の絵図の特徴を持つという点で異例である。表1において整理を行った基準尺のありようと合わせて考えるならば、絵図⑧は古段階に分類した絵図の中でも最新のものと考えることが可能であろうし、あるいは新段階の絵図の中で最古のものという評価を与えることができる。

以上本節では、盛岡藩江戸上屋敷絵図の中でも敷地寸法と敷地地形を記載した六点の絵図を対象に、図示された各種基準尺の整理を行った。結果、御殿空間設計時の基準尺のみは京間を踏襲し続けるが、長屋空間設計時の寸法は京間から田舎間へと変化すること傾向が読み取れた。また、測地時の基準尺も、古段階においては京間を用いるのに対し、新段階では田舎間を用いていることが明らかになった。

分析の結果、盛岡藩江戸上屋敷内に造られた建築群は、御殿空間を京間にによって設計し、詰人空間を田舎間にによって設計していた期間が長いということが明らかになった。この傾向は、他の江戸大名屋敷でも多く確認されるものであり、江戸大名屋敷全体の傾向から考えれば妥当性が高い。盛岡藩江戸上屋敷の固有の特徴として特筆すべきは、古段階とした絵図①・②の詰人空間が田舎間ではなく京間で設計されている可能性が高いという点であろう。

表2 各絵図に描かれた面内内容と年代

図名	表門の位置	表の形状	能舞台の有無	御殿・内長屋間の土蔵	資料に明示された年代	三章三節での分類
絵図①	西	小	有	不明	正徳六年（1716）	古
絵図②	東	東西に長い	有	無	正徳六年（1716）	古
絵図⑧	中央	東西に長い	有	有	不明	古
絵図③=⑦	不明	北に広い	無	不明	文化三年（1806）	新
絵図⑤	中央	北に広い	無	有	文化三年（1806）	新
絵図④=⑥	中央	北に広い	無	有	文化三年（1806）	新
絵図⑨	不明	北に広い	無	不明	不明	新
	西=最古か 東=古 中央=新	小・東西に長い=古 北に広い=新	有=古 無=新	無=古 有=新		正徳六年前後=古 文化三年前後=新

3. 5 屋敷地周辺の変遷

盛岡藩江戸上屋敷地は当初の正方形に近いものから、宝曆三年（1706）に東接する陸奥三春藩秋田家屋敷地を対替することにより、横長L字型となった。当初は南面のみが街路に接していたが、横長L字型となってからは南面と東面が街路と接するようになった。本節では、切絵図から上屋敷周辺の変遷と、唯一隣接する屋敷について記載がある絵図⑧の成立年代について考察する。

まず、上屋敷周辺の変遷として、上屋敷と同一区画内において屋敷地を所持していた家を、江戸の切絵図を元に考察していく。表3は、切絵図のうち屋敷所持者の名前に変化があったものを抜き出し作成した表で、提示している切絵図は、すべて国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧することができるものである。

1) 三春藩屋敷相対替まで

上屋敷周辺が記されている絵図で古いものは、寛永九年（1632）作成とされる「武州豊嶋郡江戸庄図」である。上屋敷部分には「南部しなの（信濃）」とあり、二代藩主南部利直を示している。周辺を見ると、東面に「秋田河内」とあり、後に相対替する三春藩に移る前の常陸宍戸藩二代藩主秋田俊季が記されている（三春藩に秋田氏が入るのは寛永二十一年（1645））。北面に「真田伊つ（豆）」として松代藩初代藩主真田信之、西面に「よこ（横）山右近」が記されている（横山右近については未詳・前田家老か）。この両氏は、長く同所に屋敷地を持っており真田は五十年近く、横山は六十年近く切絵図に名前が見える。

このような「武州豊嶋郡江戸庄図」であるが、写本が多く現存している。本旨に関連する部分で他の写本と比較してみると、上屋敷西面に記されている「浅野又六（長治）」（備後三次藩初代藩主）の範囲が空欄になっている写本が多い。これは、三次藩立藩が制作年代と同じ寛永九年であるためと考えられるが、このことから今回取り上げた「武州豊嶋郡江戸庄図」は寛永九年の後年に加筆された写本と考えられる。情報の真偽には慎重な検討が必要であるが、情報量としては後年記された本書の方が多かったため今回は本書を提示した。



図25 武州豊嶋郡江戸庄屋図（下が南）

以降、同一区画内の周辺屋敷地は基本的に北面二家、西面三家、東面二家で構成されている。ただし、元禄十一年（1698）作成の「新板江戸大絵図」においては、北面の家が一家分無く、まるで南北の街路に「南部信濃」（五代行信）の屋敷地が接しているかのように記されている。しかし、これより前の貞享四年（1687）作成の「ゑ入江戸大絵図」や、翌元禄十二年作成の「江戸大絵図元禄十二年」には、両方とも「酒井（サカイ）石見」（出羽松山藩）が記されており、元禄十一年段階で上屋敷の屋敷地が広がっていたわけではなく、「新板江戸大絵図」において記載漏れがあったと考えられる。

2) 三春藩屋敷地相対替後

宝暦三年（1703）に東面にあった三春藩秋田家の屋敷地を相対替によって入手する。表3では、それまで上屋敷から見て北東にあったため「東」に記していた家を、以降は「北」に記している。

相対替後の一一番近い時期のものは正徳二年（1712）作成の「分間江戸大絵図」である。北面には、それまで北東にいた「池田帶刀」（旗本か）、新たに登場する「青山ビセン（備前）」（旗本か）、以前より引き続いている「酒井石見守」、そしてまた新たな「松平兵庫頭」（岩村藩）がいる。西面には、新しい二家「松平エチコ（越後）」（美作津山藩）と、「アヘヒタ（阿部飛驒）」（忍藩）が見える。

表3では、正徳二年「分間江戸大絵図」の次に正徳五年（1715）の「新板分間江戸大絵図」を提示している（図26）。内容は正徳二年のものと同一であるが、これは正徳六年（1716）の記載のある絵図①・②と一番近い年代のため、あえて掲載した。藩主は「南部信濃」で七代利幹である。ただし、利幹は正徳二年に官途を大膳亮に変えているため、資料の記載は誤っている。

また、文化三年（1806）の記載のある絵図③・④・⑥・⑦に関しては、同年作成の「分間江戸大絵図」がある（図27）。藩主は「南部大セン（膳）」十一代利敬で、北面には「アリマビンコ（有馬備後）」（下野吹上藩）、「丹羽式ブ（部）」（播磨三草藩）、「朽木トサ（土佐）」（丹波福知山藩）、「小笠原サド（佐渡）」（備前唐津藩）、西面は「北条サガミ（相模）」（河内狭山藩）となっている。

以降の切絵図は、ほとんど区画内に記載されている家が同じで、違いは人物による官途名の異同がみられる程度である。万延元年（1860）になって朽木家に替わって「牧野備前守」（越後長岡藩）が入り、同所が慶応三年に「松平大セン（膳）」（讃岐高松藩一門か）へと替わっている。

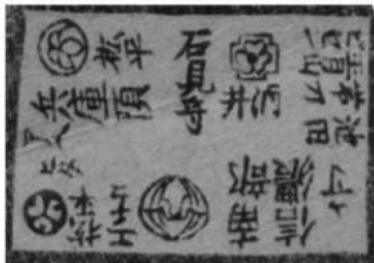


図26 正徳五年新板分間江戸大絵図（下が南）



図27 文化三年新板分間江戸大絵図（下が南）

3) 絵図⑧の年代比定

これら切絵図にみる区画の屋敷配置から、唯一周辺屋敷について記載がある絵図⑧の年代比定を行う。まず、絵図⑧における記載では、北面に「三浦」と「有馬」、西面に「北条」となる。「有馬」「北

表3 屋敷地周辺の変遷

No.	資料名	和暦	西暦	南部氏	北	西	東	南
1	武州豊崎郡 江戸庄図	寛永9年	1632	南部しなの	真田伊つ 戸さね右京	よこ山右近 浅の又六 丹羽五郎左	秋田河内 松下石見	街路
2	新板江戸大 絵図	寛文 10年	1670	南部大ゼン	真田右馬 松平大和	ヨコ山内記 水谷左京 アキタアワチ	アキタアワ 本田ホウキ	街路
3	延宝二年江 戸全国	延宝3年	1675	南部大膳	真田伊豆 松平大和	横山内記 水谷左京 秋田侍従	秋田安房 本多伯耆	街路
4	新板江戸大 絵図絵入	延宝4年	1676	南部大膳	真田伊豆 戸沢能登	横山内記 水谷左京 秋田侍従	秋田安房 本多伯耆	街路
5	増補江戸大 絵図絵入	延宝9年	1681	南部大膳	真田伊豆守 松平大和	横山内記 水谷左京 秋田侍従	秋田安房 本多伯耆	街路
6	増補江戸大 絵図正月 改御紋ゑ入	天和3年	1683	南部大膳	真田伊豆 本多土佐	横山内記 松平主殿 秋田信濃	秋田安房 本多伯耆	街路
7	新改御江戸 大 絵図	天和4年	1684	南部大膳	真田伊豆守 本多土佐守	横山内記 松平主殿 秋田侍従	秋田信濃 本多伯耆守	街路
8	ゑ入江戸大 絵図	貞享元年	1684	南部大膳	真田伊豆守 松平大和	横山内記 水谷左京 秋田侍従	秋田安房 本多伯耆	街路
9	ゑ入江戸大 絵図	貞享4年	1687	南部大膳	酒井石見 松平大和	横山内記 水谷左京 秋田信濃	秋田シナノ 本多伯耆	街路
10	新板江戸大 絵図	元禄 11年	1698	南部信濃	街路 酒井伊与	横山内記 酒井石見	秋田信濃 土井甲斐	街路
11	江戸大絵図 元禄十二年	元禄 12年	1699	南部シナノ	サカイ石見 サカイイヨ	本多中務 石川美作	秋田信濃 イケタタテ ワキ	街路
12	分間江戸大 絵図	元禄 13年	1700	南部シナノ	サカイ石見 サカイイヨ	ヨコ山内キ 水ノヤトノモ	アキタシナ ノ イケタタテ ハキ	街路
13	分間江戸大 絵図	正徳2年	1712	南部信濃守	池田帯刀 青山ビセン 酒井石見守 松平兵庫頭	松平エチコ アヘヒタ	街路	街路
14	分間江戸大 絵図	正徳5年	1715	南部信濃	池田帯刀 青山ビセン 酒井石見 松平兵庫頭	松平エチコ アヘヒタ	街路	街路
15	分間江戸大 絵図	享保3年	1718	南部大セン	有マ兵コ 青山ビセン サカイワミ松平ノト	松平エチコ ヲカサハラサト	街路	街路

No.	資料名	和暦	西暦	南部氏	北	西	東	南
16	分間江戸大絵図	享保7年	1722	ナンフ大セン	有マ兵コ ニワノシキフ サカイワミ松平ノト	松平エチコ ヲカサハラサト	街路	街路
17	分間江戸大絵図	享保9年	1724	ナンフ大セン	有マ兵コ ニワノシキフ サカイワミマス山カ ワチ	松平エチコ ヲカサハラサト	街路	街路
18	江戸図(分間江戸大絵図)	元文5年	1740	ナンロシリ	□□ヒンコ ニワロイツミ サカイヤマシロ マスヤマカワチ	ホウシロサカミ □□□□□イキ	街路	街路
19	分間江戸大絵図	明和9年	1772	南部大セン大 夫	アリマ常吉 丹羽カン助 朽木テハ 増山ツシマ	北条トヨ吉 小笠原ノト	街路	街路
20	分間江戸大絵図	文化3年	1806	南部大セン	アリマビンコ 丹羽式ノ 朽木トサ 小笠原サド	北条サガミ	街路	街路
21	分間江戸大絵図	天保4年	1833	南部信濃	アリマビンゴ 丹羽長ト 朽木フキ 小笠原佐渡	北条サガミ	街路	街路
22	天保改正御江戸大絵図	天保9年	1838	南部信ノ	有馬ミツ丸 丹羽ナカト 朽木フキ 小笠原佐渡	北条トツフミ	街路	街路
23	外桜田水町絵図(江戸切絵図)	嘉永3年	1850	南部信濃守	有馬備後守 丹羽若狭守 朽木近江守 小笠原佐渡守	北条相模守	街路	街路
24	増補改正趣町永田町外櫻田絵図	万延元年	1860	南部信濃守	有馬兵庫頭 丹羽長門守 牧野備前守 小笠原佐渡守	北条美濃守	街路	街路
25	慶応改正御江戸大絵図	慶応3年	1867	南部ミノ	有馬ビンコ 丹羽ナガト 松平大セン 小笠原佐渡	北条ミノ	街路	街路

条)に関しては、元文五年(1740)以降はすべてに該当する。しかし問題は「三浦」である。表3の通り切絵図からは三浦氏について一切知ることができない。この三浦氏が年代比定の鍵となるが、残念ながら現状一切手がかりがない。

絵図⑧の年代比定は、元文五年から慶應三年(1740~1867)までの広い範囲となっているが、一つの可能性として、三章三節において空間構成の観点から絵図⑧は、文化三年(1806)の絵図③=⑦・④=⑥よりは、正徳六年(1716)の絵図である①・②に類似していることが指摘されている。また三章四節においては、基準尺の観点から絵図④=⑥に近い資料であることが指摘されている。絵図⑧

は、正徳六年と文化三年の両方に類似点をもつ資料であり、この間の時期に作成されたものと考えられる。

さらに、この間において「北条」が登場するのは元文五年（1740）の「江戸図（分間江戸大絵図）」からであるため上限が狭まり、最終的には元文五年頃～文化三年（1740～1806）の間に作成されたものと考える。これ以上に比定幅を狭めるためには、やはり三浦氏が鍵となるだろう。

3. 6 江戸上屋敷 各絵図成立の背景と新旧関係

本節では、ここまで本章中で行った考察の成果を前提としたうえで、各絵図の成立の背景と順番について検討を行いたい。盛岡藩江戸上屋敷が外桜田に建設されたのは南部史要の記載から慶長五年（1600）と考えられる。この後、明暦三年三月（1657）の明暦大火で盛岡藩江戸上屋敷は一度全焼する。今回の資料とした九点の絵図はいずれもこの焼亡後に再建された御殿を対象としたものである。年代が確定的な資料のうちで最古の絵図が絵図①と②であることについては三章四節で考察したところである。資料状況から考えると絵図①は宝暦三年の三春藩屋敷地購入後から正徳六年までの期間（1706～1716）に制作された現状図であり、同封された紙片や書絵図はこれに付随する計画案図である可能性が高い。

絵図⑧は年代不明の絵図であるが、三章四節及び三章五節の検討によって、元文五年頃から文化三年（1740～1806）の期間に作成された可能性が高いことが明らかになっている。

絵図③～⑦は新段階（文化三年（1806）前後）の絵図である。絵図③・④・⑤は同封された一連の資料である。これら一連の資料群は絵図④の端書の年代から文化三年七月前後の成立が想定されているわけだが、図面内容から考えると絵図③＝⑦→絵図⑤→絵図④＝⑥の成立順を想定して問題ない。

文化三年三月には文化大火が起きている。盛岡藩江戸上屋敷も何らかの被害を受け、これを契機として被害状況を記録した絵図や、被害部分の改修案の計画図、あるいは工事内容決定後に制作された実施案の設計図などが造られた可能性が高い。

以上の背景を踏まえたうえで各図成立の背景と成立順について検討を行いたい。絵図の精度や図面表現の緻密さから考えると絵図④＝⑥は三月の大火後を受けて造られた実施工事図であった可能性が高い。絵図④の端書の内容から考えると同図は、実際に工事内容が決定していることが前提となっている。このことと合わせて考えても、両図は文化大火後の再建状態を示した図と推論できる。

絵図④＝⑥と多少内容の異なる絵図⑤は、絵図④＝⑥作成とほぼ同時期に造られた計画図の一つであった可能性が高い。

残る絵図③＝⑦は文化大火の被害状況を記録した絵図とみて良いだろう。両図の端書には御殿部分の破損状況の概要が書き込まれている。記載内容から考えると、改修工事に先立って制作された図面としての性格を持つことが明白である。絵図③＝⑦は、絵図④＝⑥や絵図⑤に先行して造られた図面として理解して良い。

以上を踏まえたうえで絵図③＝⑦を読み直すと、文化大火の被害の程度が読み取れる。新段階と想定される絵図③～⑦の絵図では表・中奥・台所の空間はほぼ同一の内容である。対して奥の空間のみは各図で大きく内容が異なる。図面内容から考えると文化大火で盛岡藩江戸上屋敷が受けた被害は全焼ではなく部分焼であり、その被害は奥御殿を中心としたものであったということがわかる。

絵図⑨も年代不明の絵図であるが、図面内容はほぼ絵図③＝⑦と同一である。文化三年三月直後の状態を描いたと考えられる絵図③＝⑦の方が絵図⑨に比べ、建物が大型化かつ複雑化しているところから考えると、絵図⑨は文化三年三月よりも前の段階を描いた絵図と考えてよい。また絵図⑧・⑨と

表4 盛岡藩江戸上屋敷絵図の成立年代

和暦	西暦	変遷
慶長五年	1600	江戸上屋敷屋敷地拝領か
明暦三年三月	1657	明暦大火 江戸上屋敷全焼
宝暦三年	1706	東接する三春藩屋敷地を入手
宝暦三年～正徳六年か	1706～1716	絵図①成立（現状図か、絵図②の成立より古い可能性が高い、同封の書絵図は詰入空間の計画図か）
正徳六年	1716	絵図②成立（実施図か）
元文五年頃～文化三年	1740～1806	絵図⑧成立か（現状図か）
元文五年頃～文化三年三月	1740～1806	絵図⑨成立か（現状図か、絵図⑧の成立より新しい可能性が高い）
文化三年三月	1806	文化大火 江戸上屋敷部分焼か
文化三年三月直後か	1806	絵図③=⑦成立か（文化大火による被害状況の記録図）
文化三年七月	1806	絵図④=⑥成立（実施図）
文化三年七月頃か	1806	絵図⑤成立か（計画図か）
明治四年	1871	江戸上屋敷破却、陸軍操練所建設

絵図③=⑦を比較すると、絵図⑨に描かれた空間構成の方がより絵図③=⑥に類似していることもわかる。これらの比較から考えると絵図⑨は絵図⑧よりも新しい図面と比定して問題ないだろう。

なお松方1999にも示されているように、江戸上屋敷はここで挙げた以外にも幾度も火災や地震の被害を受けている。これら罹災の記録は多くの文献中に記録されているわけだが、本稿で検討の対象とした九点の絵図の成立順を考えるうえでは表4の整理で過不足ないと判断し、詳述はしない。

3. 7 東都桜田御上屋舗御数寄屋御路地之図

本章ではここまで九点の盛岡藩江戸上屋敷絵図について検討を行ってきわけだが、検討の対象に含めなかった絵図が一点ある。ここで合わせて紹介しておきたい。

『東都桜田御上屋舗御数寄屋御路地之図』（図28・29）

所蔵：岩手県立図書館 所蔵先が示す資料年代：不明 範囲：部分図

作図：書絵図 彩色：淡彩多色 方位：有 敷地寸法：無 端書：有

資料状態：本図は岩手県立図書館収蔵資料である。縦54cm×横157cmの横長の折図であるが、一枚の横長の台紙に、本来は独立した横長方形の絵図を二枚貼り付けられている。このため絵図の左右で異なる内容が描かれている。絵図右上に「東都桜田御上屋舗御数寄屋御路地之図 但天明年中御普請御再興」とある

内容：一枚の台紙の左右に異なる内容の二枚の絵図が貼り付けられている。左半の図は堀に囲まれた建築群を描いている絵図だが絵画性が強く、他の九点の絵図とは図表現の系統が異なる。図面内容は、横ないしは堀に囲繞された空間内に口の字型に配置された建物が建つというものである。囲繞空間内に詰入空間が描かれていないことから考えると、仮に同図が盛岡藩江戸上屋敷の一時期について描いたものであったとしても、部分図であったという想定ができる。口の字型に配置された建物内に

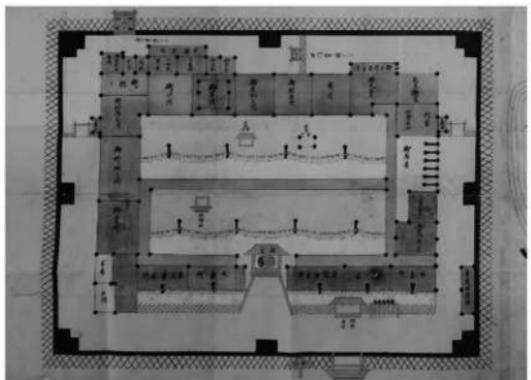


図 28 絵図⑩『東都桜田御上屋敷御數寄屋御路地之図 左



図 29 絵図⑩『東都桜田御上屋敷御數寄屋御路地之図 右

れていても問題はない。端書の内容を信じるならば同図もまた江戸後期以降の盛岡藩江戸上屋敷の一時期を描いたものということになるのだろうが、一見してわかるとおり、あまりにも絵画性が強く、他図との比較は不可能であった。また右図・左図ともに記載された図中の内容が他図とは大きく異なる。そもそも同図が本当に盛岡藩の江戸上屋敷を描いたものであるかについても疑わしい。以上の理由から、本論文ではこれ以上の検討を控えることとした。

3. 8 江戸上屋敷 小結

本章では九点の江戸上屋敷絵図を対象に、そこに描かれた空間構成などについて分析を行った。

一節から三節では、資料概要の説明と、基本的な空間構成の把握、各資料の成立年代のおおまかな比定までを行った。絵図中に描かれた空間構成の検討の結果、九枚の絵図は正徳六年（1716）前後の成立が予想される一群と、文化三年（1806）前後の成立が予想される一群とに大別されることが明ら

は「御寝間」、「御床机之間」、「御對面所」などの部屋名が並ぶが、建物の形状も部屋名称の連続性もここまで検討してきた九枚の絵図とは類似しない。

右半の図は池庭と数寄屋の一部を描いたものである。同図もまた絵画性が強く、九点の絵図とは図表現の系統が異なる。飛石・待合・腰掛・蹲と解釈しうる記載がみられることから考えると、図中に描かれた空間は茶室とこれに付随する路地である可能性が高い。なお庭に面した居室には「花月楼」という部屋名ないしは建物名称が書かれているが、同じ名称は九点の絵図中では確認できない。

本図の成立年代は未詳であるが、端書の内容から考えると天明年間以降（1781～1789）の成立が想定される。同じく端書に書かれた「東都」は江戸の雅称である。絵図面などではあまり確認することができない表現ではあるが、近世段階の資料で使用さ

かになった。

四節では、図中に敷地形状と寸法が記載されている絵図六点を対象とし、測地時に用いた基準尺と建物群設計時に用いられた基準尺について分析を行った。検討の結果、盛岡藩江戸上屋敷内に造られた建築群は、御殿空間を京間によって設計し、詰入空間を田舎間によって設計していた期間が長いということが明らかになった。この傾向は、他の江戸大名屋敷でも多く確認されるものであり、江戸大名屋敷全体の傾向から考えれば妥当性が高い。

五節では、切絵図を資料とし、盛岡藩江戸上屋敷とその周辺地域の変遷について検討を行った。検討の結果、資料中に成立年代の描かれていらない絵図⑧が元文五年頃～文化三年（1740～1806）の期間中に作成された可能性が高いことなどが明らかになった。

六節では、各絵図の制作順の検討を行った。検討の結果、九枚の絵図は、絵図①→絵図②→絵図⑧→絵図⑨→絵図③=⑦→絵図④=⑥・絵図⑤の順に成立した可能性が高いことや、宝暦三年（1706）の屋敷地拡張に伴う敷地内の変化や、文化大火（1806）の被害とこれを受けた改修工事の内容などが明らかになった。

以上、断片的な考察はあるが、資料中に記載された情報の検討から盛岡藩江戸上屋敷に関する建築文化の諸相について多面的な知見を得ることができた。

謝辞

本稿執筆に際し、下記機関及び個人よりご協力を賜りました。ここに記し深甚の謝意を表します。

もりおか歴史文化館、船場昌子氏、松澤香理氏（五十音順）

執筆及び作業分担・図版出典

本稿の執筆分担は以下のとおりである。三章四節・六節・七節＝中村、三章五節＝滝尻。

資料調査・資料翻刻・写真撮影・作図などの作業は共著者で分担した。

資料調査及び写真撮影に際しては松澤香理氏にご協力いただいた。作業分担及び図版出典は以下のとおりである。

図24 中村作成

図25 武州豊崎郡江戸庄園 滝尻編集

図26 正徳五年新板分間江戸大絵図 滝尻編集

図27 文化三年新板分間江戸大絵図 滝尻編集

図28・29 岩手県立図書館蔵「東都桜田御上屋舎御敷寄屋路地之図」中村撮影

表1・2・4 中村作成

表3 滝尻作成

県内出土の縄文土器胎土について（5）

河本純一

当紀要の34号以降、岩手県内における縄文土器の胎土研究を進めるための基礎作業として、県内各地の遺跡から出土した土器の胎土観察をおこなってきた。今回もその作業を進め資料を図るとともに、これまで5年分の成果を一度概説し、縄文土器の胎土について明らかになってきた内容や、今後に残された課題を整理する。

1.はじめに

前号までに、県内各地の遺跡から出土した縄文土器について、極めて断片的ではあるが、その胎土の様相を探ってきた。この作業の蓄積によって、縄文土器の胎土にみられる地域的および時期的な特徴が少しずつ明らかになりつつある。とは言え、岩手県が南北約189km・東西約122kmという広大な面積を持ち、縄文時代が1万年以上もの長きにわたり続くことを鑑みると、これまでのデータをもって事足りることはおこがましく、今後もさらなるデータの蓄積が図られるべきであろう。

そこで今回は、山田町に所在する浜川目沢田I遺跡で出土した縄文土器の胎土について、データの



（国土地理院「盛岡」S=1/200,000
2013年6月1日発行を縮小・加筆）

第1図 浜川目沢田I遺跡の位置

2.観察資料

今回は、浜川目沢田I遺跡（第1図）から出土した土器で、報告書（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018）に実測図が掲載されているものの一部を観察資料とした。観察した土器およびその観察結果は、附表1に示した。

3. 観察方法および胎土分類

（1）観察方法

ニコン社の携帯型实体顕微鏡ファーブル（倍率20倍）を用いて土器胎土を観察した（註1）。観察の際には、土器の断面だけでなく器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは観察面積が少なく、含まれる砂粒・混和材の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

（2）胎土分類

土器に含まれる砂粒・混和材の種類および大きさによる分類を設けた。今回取り扱う資料に対しては不要である分類項目も存在するが、先に刊行された報告書と一連で浜川目沢田I遺跡における土器胎土の時期的変遷を分かり易く示すため、あえて以下の分類を用いた。

第1表 砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B類	雲母を一定量含む土器。
C類	頁岩・チャートを一定量含む土器。
D類	結晶片岩を一定量含む土器。
E類	凝灰岩を一定量含む土器。
F類	火山ガラスを一定量含む土器。
G類	酸化粒または腐り縛を一定量含む土器。
H類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器。
I類	土御片を一定量含む土器。
J類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず。ほぼ無色鉱物（石英・長石）だけからなる土器。

* 黒色光沢粒と雲母をともに含めればAB類、頁岩と結晶片岩をともに一定量含めればCD類と、上記の分類記号を見合せた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも2mm²cm⁻²に1点(2.5mm前後)でその存在が認められる量を指す。

第2表 砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
2-類	2.0mm～2.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
1+類	1.5mm～2.0mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0mm以上のものはほとんど含まれていない。
1-類	1.0mm～1.5mmの砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm以上のものはほとんど含まれていない。
0類	1.0mm未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

a) 砂粒・混和材の種類（第1表）

観察した土器の胎土に含まれていた主な砂粒としては、黒色光沢粒（角閃石または輝石）・雲母・チャート・結晶片岩・凝灰岩・火山ガラス・石英・長石があり、砂粒以外にも海綿骨針・植物質などの存在が確認できた。

今回は、これらの砂粒・混和材のあり方に基づき第1表に示すA～J類という、含まれる砂粒・混和材の種類による分類を設けた。

b) 砂粒・混和材の大きさ（第2表）

含まれる砂粒・混和材の大きさについて、第2表に示す0～2-類という分類を設けた。

今回は2.5mm以上の砂粒・混和材を一定量含む土器は認められなかったので、第2表に示した基準で全ての土器を分類できた。

4. 観察結果

(1) 前期初頭～前葉（早稲田6類～大木2a式期）

当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・チャート・腐り縛・植物質を確認できた。第3表に示したように、A類（黒色光沢粒を含む土器、写真1-1～1-3）が26点中26点と最も多く、次に多いものはB類（雲母を含む土器、写真1-2）であり10点存在している。このほかG類（酸化粒または腐り縛を含む土器、写真1-1）が3点、C類（頁岩・チャートを含む土器、写真1-3）・H類（その他有色砂粒を含む土器）が各1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。長石を主体とするものが26点中16点と多く、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが9点、石英を主体とするものが1点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは第2図に示したが、0類57.7%、1-類38.5%、2-類3.8%と、1mm以下のものが多く認められる。

第3表 砂粒・混和材の含有状況

歴史 時期・式名	A類 基色光沢を含む	B類 裏面を含む	C類 裏面+手毛	D類 絹品底面を含む	E類 基底面を含む	F類 火丸ガラスを含む	G類 黒毛・白毛を含む	H類 その他の毛を含む	I類 土器片を含む	J類 石英・長石のみ
初期 内壁一層	26/26	10/25	1/26	—	—	—	3/26	1/26	—	—
中期 内壁二層	26/26	3/11	1/11	1/15/11	—	—	2/11	—	—	1/11
大木7a式	28/28	24/28	—	17/28	—	1/28	2/28	2/28	—	—
大木7b式	8/8	3/8	—	2/8	—	—	—	—	1/8	—
大木8a式	8/8	8/18	8/18	2/18	3/18	4/18	—	2/18	—	4/18
大木8b式	20/20	7/21	2/21	3/21	3/21	—	—	2/21	—	8/21
大木9式	15/17	9/17	—	1/17	1/17	—	1/17	—	3/17	1/17
大木10式	24/24	15/24	1/24	4/24	1/24	—	4/24	—	1/24	—
後期前葉	9/9	19/19	1/19	—	4/19	2/19	—	2/19	—	—
後期中葉	3/3	16/16	—	—	—	—	—	—	1/13	—
後期後葉	8/8	10/10	5/10	1/10	3/10	1/10	—	—	2/10	—
大洞B式	24/23	20/23	—	—	3/23	—	18/23	—	1/23	—
大洞BC式	36/36	10/10	—	—	1/15	—	18/15	—	—	—
大洞C1-C2式	5/12	3/12	1/12	—	—	—	2/12	—	—	—

専時期・型式の太字部分が今回新たに提示した綴り結果。以下綴字部分は、先に刊行された報告書で提示済み。また、1つの資料中に黒色光沢紙と雲母とともに含めば、それぞれで1点ずつ集計しているので、種類の合計は綴り部数より多くなる。

(2) 前期末葉～中期前葉、円筒系土器（円筒下層 d～円筒上層 c 式期）

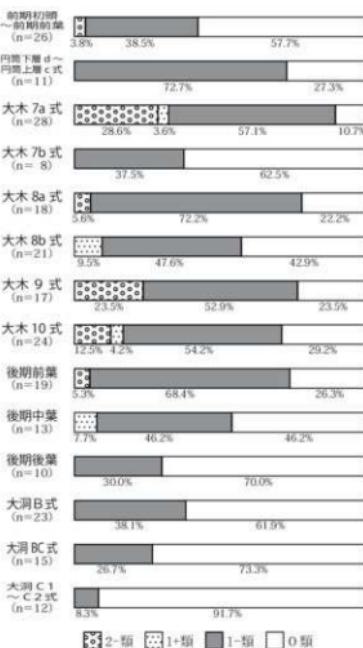
当時期の土器胎土に一定量含まれる特徴的な砂粒・混和材としては、黒色光沢粒・雲母・チャート・結晶片岩・酸化粒・植物質を確認できた。A類(写真1-4～1-6)が11点中10点と最も多く、次に多いものはD類(結晶片岩を含む土器、写真1-4～1-6)であり5点存在している。このほかB類(写真1-4)が3点、G類(写真1-6)が2点、C類(写真1-6)・J類(ほぼ石英・長石だけからなる土器)が各1点存在している。

無色鉱物の含有状況をみると、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものと、石英を主体として長石が少量伴うもの、長石を主体として石英が少量伴うものの3種類が存在している。長石を主体とするものが11点中7点と多く、石英を主体とするものが3点、石英と長石の量がほぼ同じ程度のものが1点存在している。

含まれる砂粒・混和材の大きさは、0類27.3%、1-類72.7%と、1mm前後のものが多く認められる。

(3) 小結

前期初頭～前葉の土器および前期末葉～中期前葉の円筒系土器は、いずれもA類が多くB類も少なからず存在している。これは報告書で示した中期以降の様相と共通している。しかし、



第2図 含まれる砂粒・混和材の大きさ

前期初頭～前葉の土器については、黒色光沢粒と雲母以外の特徴的な砂粒が極めて少なく、中期以降ほとんどの時期に確認できるD類もみられない。前期の土器には植物質を混和させるという特徴が広くみられ、当遺跡で出土した土器にも同様の特徴が認められたものの、これら以外の特徴的な砂粒・混和材は極めて少なく、ほぼ黒色光沢粒・雲母・石英・長石・植物質だけを限定して混和させているようである。

前末葉～中期前葉の円筒系土器については、観察できた資料数が少なく、加えて時期幅をもった括りもある。そのため、不確かさを残してはいるが、同時期の大木7a～8a式の土器と比較すると、ともにB類・D類が一定量みられるという共通性をもつ。しかし、円筒系土器にはE類・I類がみられないという違いもある。これが資料数の少なさゆえの結果なのか、円筒系土器と大木系土器とで材料の選び方に共通性もある一方で、違いも存在していたことに由来する結果なのか、現時点では判断できない。円筒系土器の胎土について、今後資料を充実させていく必要があろう。

含まれる砂粒・混和材の大きさについて、先に刊行された報告書では言及できていなかったので、ここで前期から晩期までを通してその様相について述べる。前期初頭～前葉の土器は0類が多く、含まれる砂粒・混和材は比較的小さいのに対し、中期の大木7a式期には1類を主体として2類も3割程度存在しており、含まれる砂粒・混和材は大きい。大木7b式期は0類が多いが、資料数の少なさゆえの結果である可能性も考えられる。以後、後期前葉までは1類を主体としており、2類が1～2割程度存在する時期もみられるなど、含まれる砂粒・混和材は比較的大きい。円筒系土器も1類を主体としており、同様である。後期中葉頃からこの傾向に変化が生じて0類が多くなり、後期後葉以降はこれが主体となる。つまり、おおまかな流れとして、土器胎土に含まれる砂粒・混和材は、前期から中期にかけて大きくなり、後期以降漸移的に小さくなってくるという様相が窺える。

5. 岩手県における縄文土器胎土の様相（概括）

以上、今回は山田町に所在する浜川目沢田Ⅰ遺跡で出土した縄文土器の胎土について、先に刊行された報告書の内容を補足しつつ、データを提示した。今回を合わせ、当紀要で計5回にわたり縄文土器の胎土に関する検討をおこなってきた（河本2015～2018）。まだまだ不足の感はあるものの、ここで一度これまでの成果をまとめ、岩手県における縄文土器胎土の様相を概括する（第3図）。

（1）地域的特徴が反映されている土器胎土

その存在が特定の時期に限定されず、立地する地質条件とも矛盾しない土器胎土は、地域的特徴が強く反映されているものと考えられよう。これに該当するものとして、海綿骨針を含む土器が挙げられる（写真2-7・8）。二戸市米沢遺跡では、早期中葉および中期末葉～後期初頭の土器について、どちらにも海綿骨針を含む土器が一定量みられた。岩手県における海綿骨針を含む土器の研究は、井上雅孝によってなされており（井上1995）、このような土器材料（粘土）の採取地として、飯岡層を候補として示した。米沢遺跡は飯岡層の極めて近くに位置しており、地質条件とも矛盾しない。

また、地質条件との十分な対照作業はできていないが、米沢遺跡でみられる軽石を含む土器（写真2-9）や、山田町浜川目沢田Ⅰ遺跡の結晶片岩を含む土器などは、その存在が特定の時期に限定されないようであり、これらも地域的特徴が反映された土器胎土である可能性が高い。

（2）土器胎土の時期ごとの様相

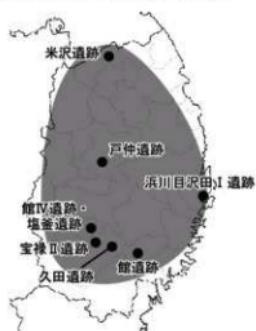
a) 草創期～早期

草創期の土器については現時点で実見できておらず、早期の土器についてもまだ十分な資料数は得られていない。盛岡市山王山遺跡、二戸市米沢遺跡にて早期中葉の土器を観察してはいるが、時期的

地域的特徴が反映された土器胎土
海綿骨針を含む土器



土器製作流儀が反映された土器胎土
中期後葉～後期、雲母を含む土器の分布



土器製作流儀が反映された土器胎土
中期前葉～後葉、土器片を含む土器の分布



土器製作流儀が反映された土器胎土
晚期前葉～末葉、火山ガラスを含む土器の分布



第3図 土器胎土にみられる地域的・時期的特徴

な特徴を示す何らかの砂粒・混和材は見出せていない。

b) 前期

前期の土器には、植物質を混和させることが知られており、この状況は県内広域に確認できた。当該期の土器を北上市館IV遺跡、山田町浜川目沢田I遺跡、住田町館遺跡・小松I遺跡等で観察したが、植物質以外にこの時期の特徴となりそうな意図的に選択され混和された砂粒・混和材は一見認められない。ほとんどの遺跡で黒色光沢粒と石英・長石が胎土の主体となっている。しかし、もし意図的な材料の選択行為が全く無いのならば、各遺跡の位置する地質背景の違いが胎土の違いとしてより顕著に現れてよいようにも考えられる。つまり、この時期についても植物質および上記の砂粒以外は原則使用しないといった、材料の選択行為が存在していた可能性が考えられる。

c) 中期

第3図に示す、県内各地の遺跡にて当該期の資料を観察した結果、県央部から県南部、沿岸中央部にかけて土器片を含む土器が確認できた（写真2-10、註2）。土器片を混和させる縄文土器については、新潟県での事例がすでに西田泰民によって示されている（西田2002・2005等）。西田によると、土器片の混和は中期前半の大木7b式期に多く、以後地域による多寡はあるが後期初頭まで続き、後期前葉以降はみられなくなるとのことである。

岩手県でも、土器片の混和は大木7b式期から大木8b式期にかけて顕著であり、後期以降はほとんどみられず、その時期的動態は新潟県での様相とおよそ共通している。つまり、材料選択の共通性が県央部から北陸地方という広い範囲にわたって存在している。しかし、現時点では県北部の円筒土器分布圏にて土器片を混和させた土器は確認できておらず、大木式分布圏との文様の違いとともに材料選択にも違いが存在するようである。

d) 後期

第3図に示す、県内各地の遺跡にて当該期の資料を観察した結果、県内の広い範囲で雲母を含む土器が確認できた（写真2-11）。雲母を含む土器は中期後葉頃から増え始めている。中期中葉までは、岩手県の南北で型式学的に大木式・円筒式と顕著に文様の異なる土器が分布していたが、中期後葉からは、県の南北を通じて比較的似通った文様の土器が分布するようになる。

つまり、単に文様だけを共有したのではなく、材料選択という土器製作の極めて初期の工程から製作流儀を共有するまでに至る関係性の深化が中期後葉に生じ、後期を通じて維持されるようである。

e) 晩期

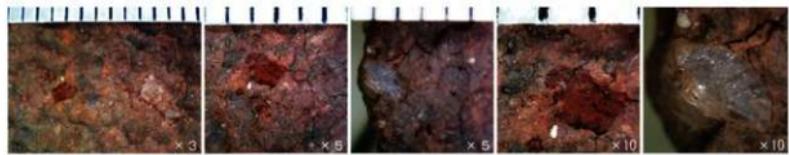
第3図に示す、県内各地の遺跡にて当該期の資料を観察した結果、県内の広い範囲で火山ガラスを含む土器が確認できた（写真2-12）。火山ガラスを含む縄文土器については、秋田県での事例がすでに西田によって示されており（西田1996・1998）、近年では柴正敏や閔根達人らによって研究が進められている（柴2014、柴・閔根2015）。晩期にこのような土器が出現し、さらに周辺に顕著な火山灰層がない遺跡でも出土していることから、土器または原材料の移動が指摘されている。

岩手県でも晩期に火山ガラスを含む土器が出現し、秋田県や青森県と同様の状況がみられる。なお、火山ガラスとともに含まれる砂粒には、地域ごとに違いが認められる。それゆえ、土器または原材料の移動があったとしても広域なものではなく、各地域単位で製作されていたものと考えられる。

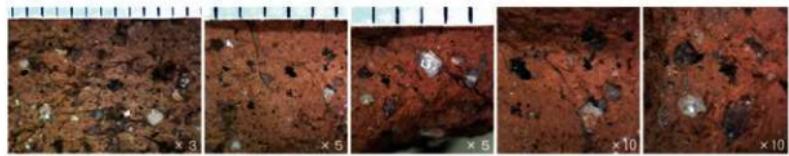
土器胎土には、その材料が採取された場所という地質的背景だけでなく、その材料を選択したという当時の土器製作流儀も反映されている。縄文時代には上記のような土器胎土の様相がみられるが、弥生時代以降と比べ、地質的背景よりも製作流儀に由来する時期的な特徴が強く反映されている印象を受ける。縄文土器は、本来機能的に不要であるはずの文様に対し労力を費やし、他の時代の土器よりも装飾的な姿を呈しているが、この製作に対する拘りは材料選択にまで及んでいたようである。

6.まとめ

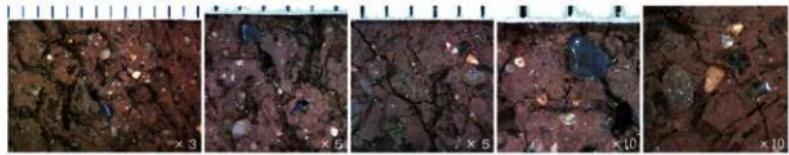
これまでの検討作業の蓄積により、以上のような岩手県における縄文土器胎土の様相を具体化させることができたが、まだまだ資料不足している点も浮き彫りになったといえよう。特に、草創期・早期の土器および円筒系土器については資料不足が大きい。これらを補填することに加え、文様や調整など土器が持つ他の諸属性や各地域における遺跡の動態など、胎土だけでなく別の視点からのアプローチも合わせておこなうことが、縄文時代における土器製作の実態や遺跡間・地域間の関係を追究する上で必要になってくるだろう。今後の課題である。



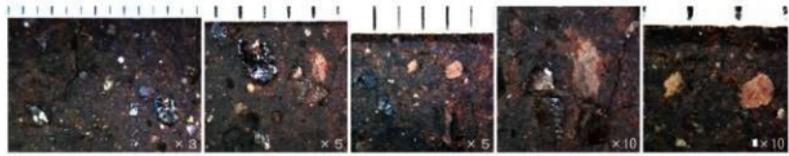
1. 浜川目沢田 I 遺跡 掲載番号 796 (観察No.217 前期初頭? 胎土 AGO類)



2. 浜川目沢田 I 遺跡 掲載番号 946 (観察No.228 前期前葉 (大木 2a式) 胎土 AB1-類)



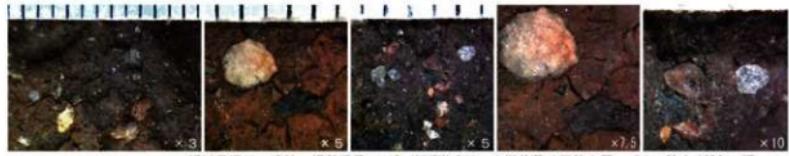
3. 浜川目沢田 I 遺跡 掲載番号 951 (観察No.232 前期前葉 (大木 2a式) 胎土 AC1-類)



4. 浜川目沢田 I 遺跡 掲載番号 1010 (観察No.235 前期末葉 (円筒下層 d式?) 胎土 ABD1-類)

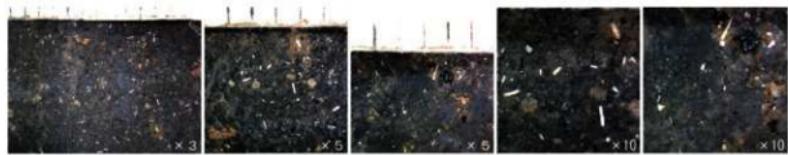


5. 浜川目沢田 I 遺跡 掲載番号 1012 (観察No.237 前期末葉 (円筒下層 d式) 胎土 AD1-類)

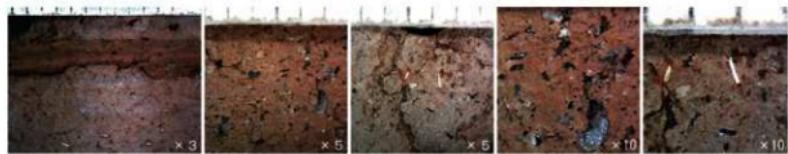


6. 浜川目沢田 I 遺跡 掲載番号 1112 (観察No.244 中期前葉 (円筒上層 c式) 胎土 ACDG1-類)

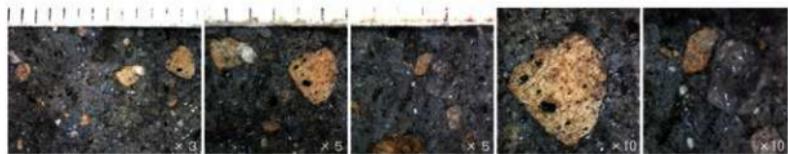
写真 1 繩文土器の胎土写真 (1)



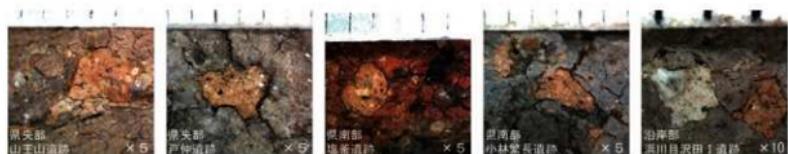
7. 海綿骨針を含む土器（米沢遺跡 第82図-175 早期中葉）



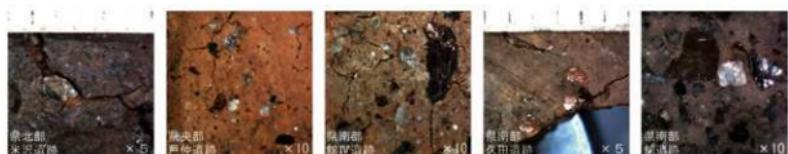
8. 海綿骨針を含む土器（米沢遺跡 第92図-324 後期初頭）



9. 絆石を含む土器（米沢遺跡 第81図-158 早期中葉）



10. 中期前葉～後葉 土器片を含む土器



11. 中期後葉～後期 雲母を含む土器



12. 晩期前葉～末葉 火山ガラスを含む土器

写真2 繩文土器の胎土写真（2）

附表 1 土器胎土觀察表

註

- (1)土器胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および附表1として提示した土器胎土観察表の記述内容については、旧稿（河本2011）を参照されたい。
- (2)写真2-10～12の多くは、過去の当紀要等すでに提示したものだが、一部に初出の写真もあるので以下に示しておく。
- 写真2-10 左端 山王山遺跡出土資料 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第316集 第82図-107
- 写真2-11 左端 米沢遺跡出土資料 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第376集 第91図-308
- 写真2-11 左から2番目 戸仲遺跡出土資料 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第559集 第34図-104
- 写真2-12 左端 野尻Ⅲ遺跡出土資料 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第389集 第20図-167

参考文献

- 井上雅孝 1995 「海綿骨針を含む続縄文土器について・胎土から見た後北C2・D式土器の一視点-」『みちのく発掘』著原文也先生還暦記念論集刊行会
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018 『浜川日沢田1遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第689集
- 河本純一 2011 「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」『大阪文化財研究』38 財團法人大阪府文化財センター
- 河本純一 2015～2018 「県内出土の縄文土器胎土について（1）～（4）」「紀要」34～37（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 河本純一 2016 「立花地区出土縄文土器の胎土観察（1）・塙釜遺跡・館IV遺跡-」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』5
北上市立埋蔵文化財センター
- 柴 正敏 2014 「津軽の地質と縄文土器原料」『第四紀研究』53-5 日本国第四紀学会
- 柴 正敏・岡根達人 2015 「胎土分析からみた亀ヶ岡式土器の製作地・土器胎土に含まれる火山ガラスの帰属について-」
『考古学と自然科学』67 日本文化財科学会
- 西田泰民 1996 「付編I：片野I遺跡出土の海綿骨針含有土器」「秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I」
-片野I遺跡- 秋田県文化財調査報告書第265集 秋田県教育委員会
- 西田泰民 1998 「第6節 虫内I遺跡出土縄文土器・土製品の胎土」「虫内I遺跡」秋田県文化財調査報告書第274集
秋田県教育委員会
- 西田泰民・マーク ホール 2002 「II 馬高遺跡出土の火焔型土器などの胎土分析」「馬高・三十幅場遺跡・史跡「馬高・三十幅場
遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査報告I -〈遺構遺物概要編・自然科学分析編〉」長岡市教育委員会
- 西田泰民 2005 「付編6. 胎土への土器片混入について」「道尻手遺跡」津南町文化財調査報告第47編 津南町教育委員会

堅穴建物に伴う外延溝（3）

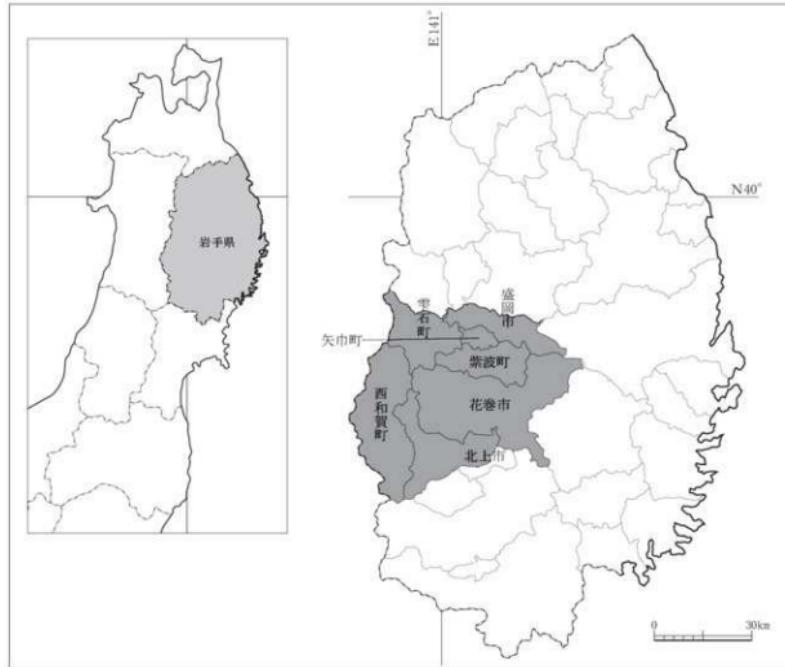
－古代陸奥国和我・蔵縫・斯波郡域の在り方－

山川 純一

古代陸奥国和我・蔵縫・斯波郡で調査された堅穴建物に伴う外延溝の集成を行い、属性（堅穴建物の時期・規模・構造、外延溝の構造など）ごとにまとめた。11遺跡12例が認められ、そのうち9棟が9世紀代のものであり、志波城・徳丹城の造営、運営に伴う集落の再編成(工人工集団の集約も含む)に起因すると考えた。

1.はじめに

前稿では、古代陸奥国磐井・胆沢・江刺三郡における堅穴建物に伴う外延溝を集成・検討した（山川2018）。結果、確認した18棟のうち9棟(50%)が、壁柱穴を伴うもの、堅穴・掘立柱併用建物、鍛冶工房など、つまり一般的な居住に利用されたものではなく、漆生産・土器（土師器・須恵器）生産、鍛冶に関わる工房であった可能性が高く、さらにそこから産業排水を流下させていたことを想起させた。また、外延溝が堅穴建物の一隅から建物外に延びるもの、8世紀（奈良時代）・9世紀（平安時代前期）のものが、ともに8割以上と多くを占めることを明らかにした。



第1図 本稿の対象とした地域

本稿では、古代陸奥国和我・薄綿・斯波三郡における堅穴建物に伴う外延溝を集成し、若干の検討を加える。現在の行政区画で、岩手県北上市（相去町・大堤東・大堤西・大堤南・大堤北・稻瀬町・口内町を除く）、西和賀町、花巻市中笠間・北笠間・南笠間・轟木・柄内・横志田・尻平川・成田およびいわゆる平成の大合併以前の東和町が古代和我郡域、花巻市（上記を除く）が古代薄綿郡域、盛岡市（北上川西岸の零石川以北および北上川東岸の築川・柄沢・岩神山以北を除く）、紫波町、矢巾町、零石町（零石川・竜川・荒沢・大焼砂沢・横岳以北を除く）が古代斯波郡域にあたるものと考え、3市4町（ただし北上市、盛岡市、零石町は一部を除く）を対象とした（第1図）。

古代和我郡に南接する古代胆沢郡には、延暦21（802）年正月、律令政府による征夷の拠点である胆沢城、さらに翌年、のちの和我郡・薄綿郡を一足飛びに志波村（のちの斯波郡）に志波城が造営された（註1）。つづく延暦23（804）年には、志和城・胆沢郡間の交通路が整備され、新たに駅が設けられ、これらが契機となって弘仁二（811）年正月、和我・薄綿・斯波三郡が建郡された。同年閏12月、志波城が零石川による水害に遭い、弘仁五（814）年11月までに徳丹城に移遷した。

2. 堅穴建物に伴う外延溝の構造

今回集成したのは、11遺跡（第2図、第1表）12棟（第3～11図、第2・3表）である（註2）。

北東北古代集落遺跡研究会により刊行された「9～11世紀の土器幅年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究」によれば、今回の集成範囲から141遺跡2624棟の堅穴建物が確認されている。そのうち、外延溝を伴うものは（8世紀代の1棟を除いた）11棟ということになり、僅か約0.4%を占めるにすぎない。

12棟のうち10棟（約83%）が外延溝が堅穴建物の一隅から建物外に延びるもの、2棟（約17%）が外延溝が堅穴建物の一辺の途中から建物外に延びるものである。また、外延溝に瓦や土器片を敷設・架構して暗渠状施設としているものはみとめられない。

3. 外延溝を伴う堅穴建物の規模・火処・性格・年代

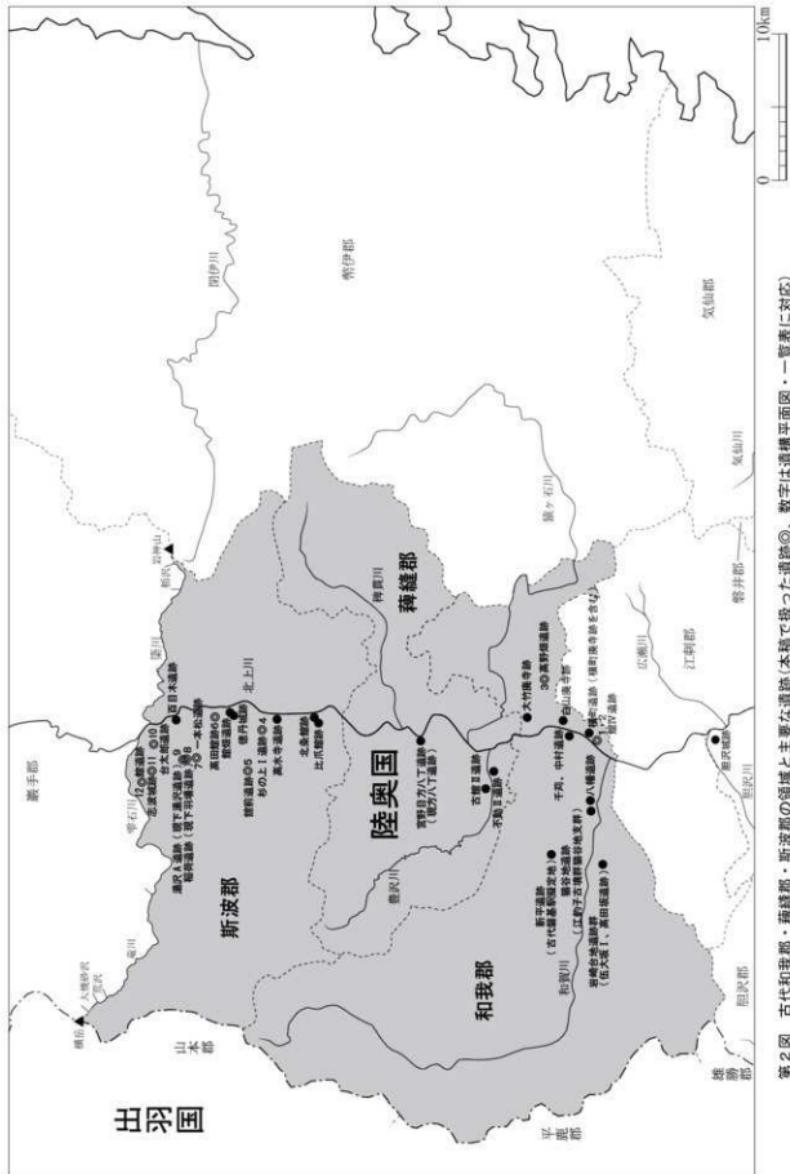
規模：長辺2m台のもの1棟、3m台のもの1棟、4m台のもの3棟、5m台のもの5棟、6m台のもの1棟、7m台のもの1棟である。4～5m台にピークがある。

火処：カマド10棟、炉？1棟、不明（あるいは、なしか？）1棟である。

性格：壁柱穴を伴うもの4棟（高野畑遺跡例を含む）、土器製作工房1棟（高野畑遺跡1号住居跡+MB3溝跡、MB4溝跡：第4図）がある。

年代：三郡内での初源は、8世紀中葉の台太郎遺跡R A141堅穴住居跡+R D122土坑跡（第8図10）である。その後、若干の空白期を挟み、9世紀代に9例、10世紀に2例がある。なかでも9世紀前半～中葉の高野畑遺跡例は、ロクロビットが伴い、床面上に粘土塊が遺存していることから土器製作工房であると考えられる。また、大きく2時期（旧期・新期）に分かれるが、その双方に外延溝が伴っており、その接続位置も壁面やや中央から隅（コーナー）に変遷が追える事例である。土器製作に伴って水を用いた作業を行いう際、そのまま斜面下に排水される構造だったと思われる。

9世紀代に9棟（75%）が集中することは、志波城、徳丹城の造営、運営にともない集落内に工人集団が集約され、その集団の流儀として外延溝による排水が行われたことに起因するのであろう。



遺跡名	所在地	立地	種別	時代	古代の都城
館IV遺跡	北上市 立花	低地	集落	縄文・平安～近世	
高野畠遺跡	花巻市 東和町上浮田	扇状地	集落	縄文・平安	和我郡
杉の上I遺跡	紫波町 陣ヶ岡字幅	段丘	集落	古代	
鍾前遺跡	北伝法寺字長橋	扇状地	集落・城館	縄文・古代・中世	
高田城跡	矢巾町 高田字北田	盛岡市	集落・城館	古代・中世	
一本松遺跡	赤林字一本松		集落・狩獵場	縄文・平安	
稚荷（現下羽場）遺跡	湯沢字間渡・羽場字新田		集落	古代（平安）	斯波郡
湯沢A（現下湯沢）遺跡	湯沢字間渡・新田		段丘	集落	古代（平安）
台太郎遺跡	向中野字向中野・台太郎		集落	古代	
志波城跡	下太田字方八丁ほか		城柵	古代	
館遺跡（太田館跡）	上太田字館		集落・城館	古代（平安）～近世	

第1表 古代陸奥国和我・薄継・斯波郡域における竪穴建物に伴う外延溝が確認された遺跡の概要

4. 後の課題

今回の集成作業では古代薄継郡での類例を確認することが出来なかった。このことは何を意味するのか。「分布は現状（調査されていないだけ）」ということなのか。引き続き周辺地域の資料の集成を進めていきたい。特に古代薄継郡に隣接する磐伊郡のうち南西部（現在の遠野市）エリアに分布するか否かは非常に気になるところである。

謝辞

本稿を草するにあたって、次の方々や関係機関から御指導・御協力を戴きました。記して感謝の意を表します（50音順・敬称略）。

金子佐知子 君島武史 今野公綱 斎藤邦雄 濑浩二郎 西澤正晴 西野修 橋本征也

福島正和 光井文行 村田淳

北上市埋蔵文化財センター 花巻市総合文化財センター 盛岡市遺跡の学び館

最後に、同僚である古川健氏には、万丁目遺跡発掘調査遺構計測の激務のなか、文献収集に多大なお力添えを戴きました。明記して深謝いたします。

註

(1)西野修は、その要因を「阿豆流為等の死後、胆沢勢力の沈静化にともない、胆沢以北のいくつかの勢力が一気に服属したため」（西野修 2008）としている。

(2)筆者が古代薄継郡とした地域からは、管見では1棟も確認できない。

引用・参考文献

<論文等>

北東北古代集落遺跡研究会 2014 「9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究」

津嶋知弘 2013 「古代「斯波（志波）郡北部の土器群変遷（その1）－零石川南岸所在遺跡の盛岡市教育委員会発掘調査資料を中心に－」 盛岡市遺跡の学び館学芸レポート vol2（盛岡市ホームページ）

津嶋知弘 2014 「古代城柵の城内竪穴建物－志波城内竪穴建物の集成とその性格の検討－」 盛岡市遺跡の学び館学芸レポート vol3（盛岡市ホームページ）

津嶋知弘 2015 「古代「斯波（志波）郡北部の土器群変遷（その2）－零石川南岸所在遺跡の盛岡市教育委員会発掘調査資料（②）－」 盛岡市遺跡の学び館学芸レポート vol4（盛岡市ホームページ）

西野修 2008 「志波城・徳丹城跡」シリーズ日本の遺跡 31 同成社

村田淳 2018 「盛岡市「盛岡地区遺跡群」における平安時代竪穴建物」 「岩手考古学」 第29号 岩手考古学会

山川純一 2018 「竪穴建物に伴う外延溝（2）－古代陸奥国磐井・胆沢・江刺郡城の在り方－」 「紀要」 第37号 岩手県埋蔵文化財センター

<報告書> 宗埋蔵文化財センター：「埋文」 教育委員会：「教委」と省略 報告書シリーズ名省略

岩手県教委 1979 「湯沢A遺跡」・「稚荷遺跡」・「一本松遺跡」 「東北震災復興事業関連遺跡発掘調査報告書一Ⅱー」 第32集

岩手県教委 1979 「杉ノ上I遺跡」 「東北新幹線開業埋蔵文化財調査報告書一Ⅲー」 第35集

岩手県埋文 1993 「館IV遺跡発掘調査報告書」 国道107号新灘湖橋整備関連遺跡発掘調査 第187集

岩手県埋文 2001 「台太郎遺跡 第18次発掘調査報告書」 盛岡新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査 第369集

東和町教委 1997 「高野畠遺跡発掘調査報告書」 1996（平成8年度）－ 第16集

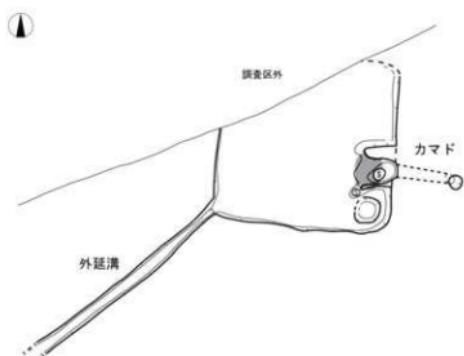
盛岡市教委 1982 「志波城跡－昭和56年度発掘調査概報－」

盛岡市教委 1992 「館・松ノ木遺跡－古代の遺構編－」

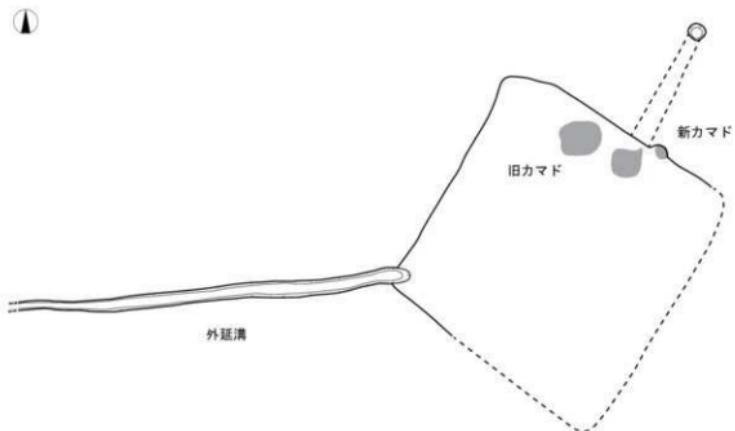
- 盛岡市教委 2016 「志波城跡－平成 23・24・25 年度発掘調査報告書－」
- 矢巾町教委 1998 「高田前跡－墓地並びに宅地造成工事に伴う事前の緊急発掘調査－」 第 27 集
- 矢巾町教委 2000 「町内道路発掘調査－藤沢竹森古墳群（民家新築）・館前道路（個人農家土壤改良）－」 第 26 集

追記

脱稿後、北東北古代集落遺跡研究会 2019「北奥羽の古代社会－土器要容・堅穴建物と集落の動態－」高志書院 が刊行され、所収の 2 篇の論文に接した。八木光則「北上盆地の古代村落」は、盛岡市南西部の集落遺跡を 5 地域（太田、向中野、飯岡、羽場、三本柳の各遺跡群）、時期を I～IV期（7世紀前葉～10世紀後葉）に区分し、主に堅穴住居の規模（面積）によって詳細に分析している。斎藤淳「集落・堅穴建物動態から見た北奥古代史」は、北奥（陸奥国・出羽国北部、現在の岩手県・秋田県・青森県である北東北 3 県）を大きく 16 地域、時期を 7 世紀前半～10 世紀後葉の 10 期に区分し、集落の分布・推移、規模、立地、継続状況について検討を加えている。



1 館IV遺跡
IV C - 1 住居跡



2 館IV遺跡
IV D - 1 住居跡

S=1/80

第3図 古代和我郡における竪穴建物に伴う外延溝(1)

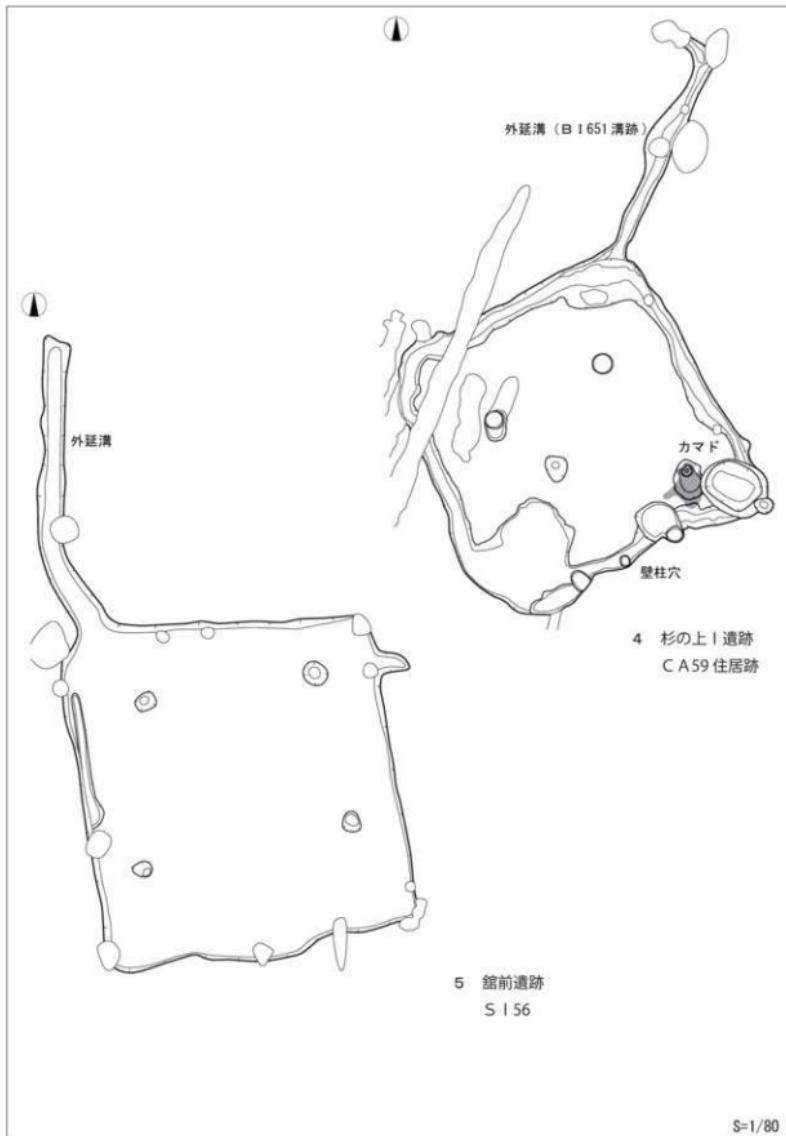
①



3 高野畠遺跡
1号住居跡

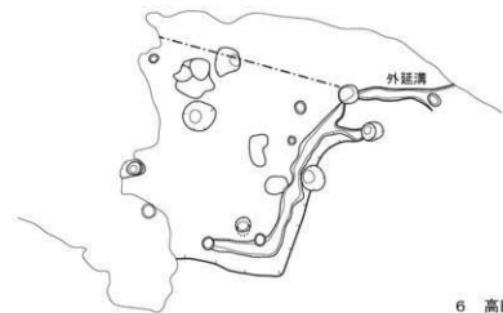
S=1/80

第4図 古代和我郡における竪穴建物に伴う外延溝 (2)



第5図 古代斯波郡における竪穴建物に伴う外延溝(1)

①



6 高田館跡
S 1151 ?

②

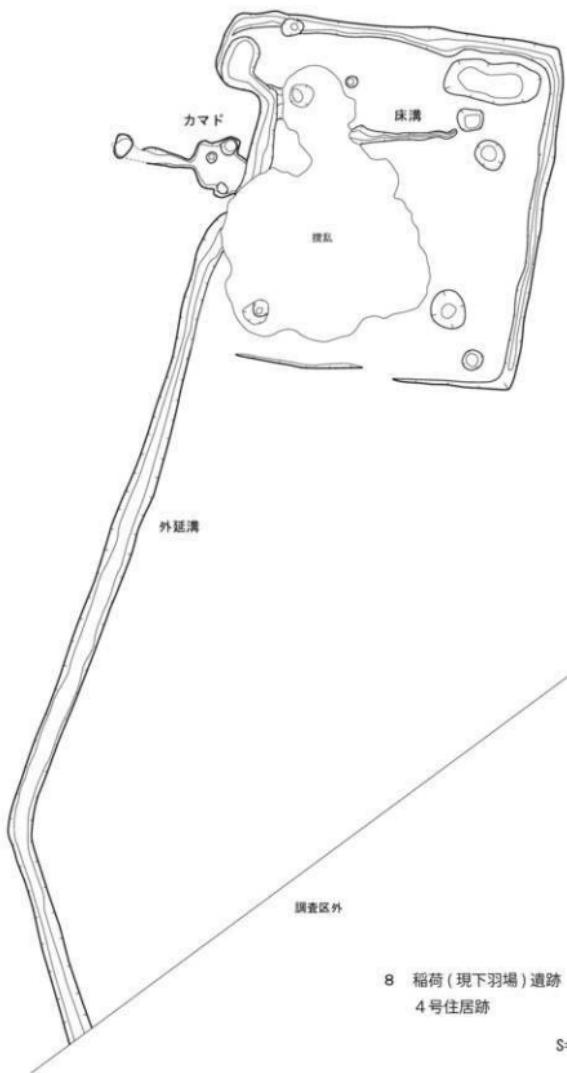


7 一本松遺跡
1号住居跡

S=1/80

第6図 古代斯波郡における竪穴建物に伴う外延溝 (2)

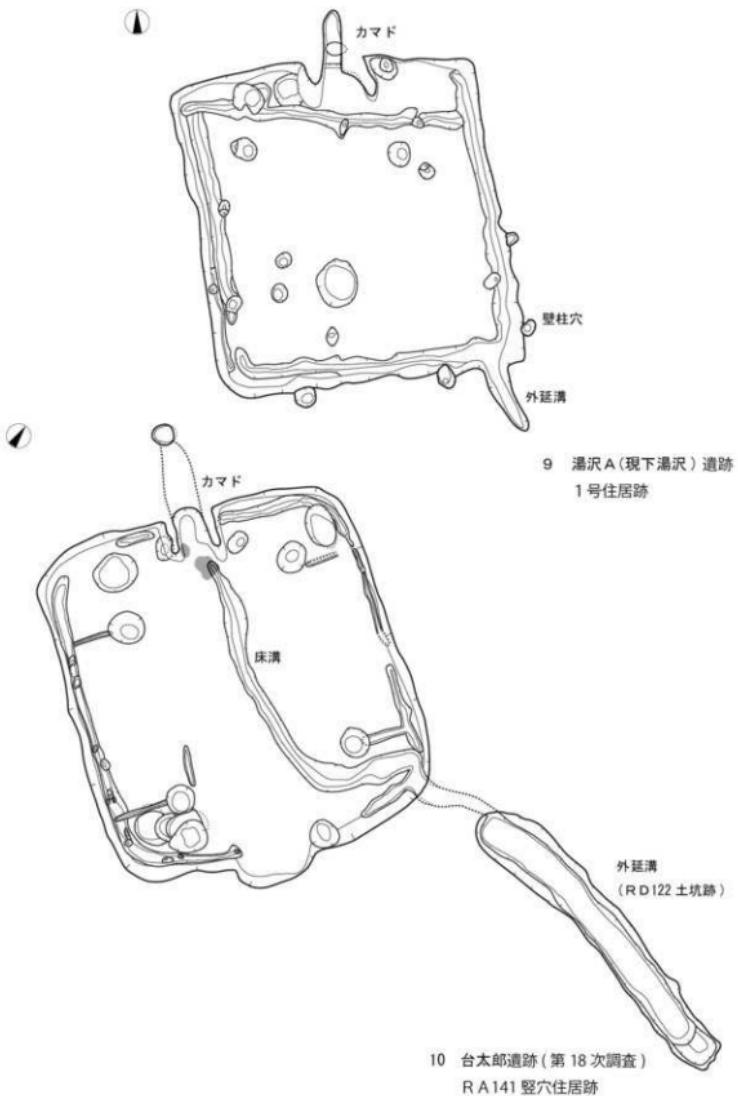
1



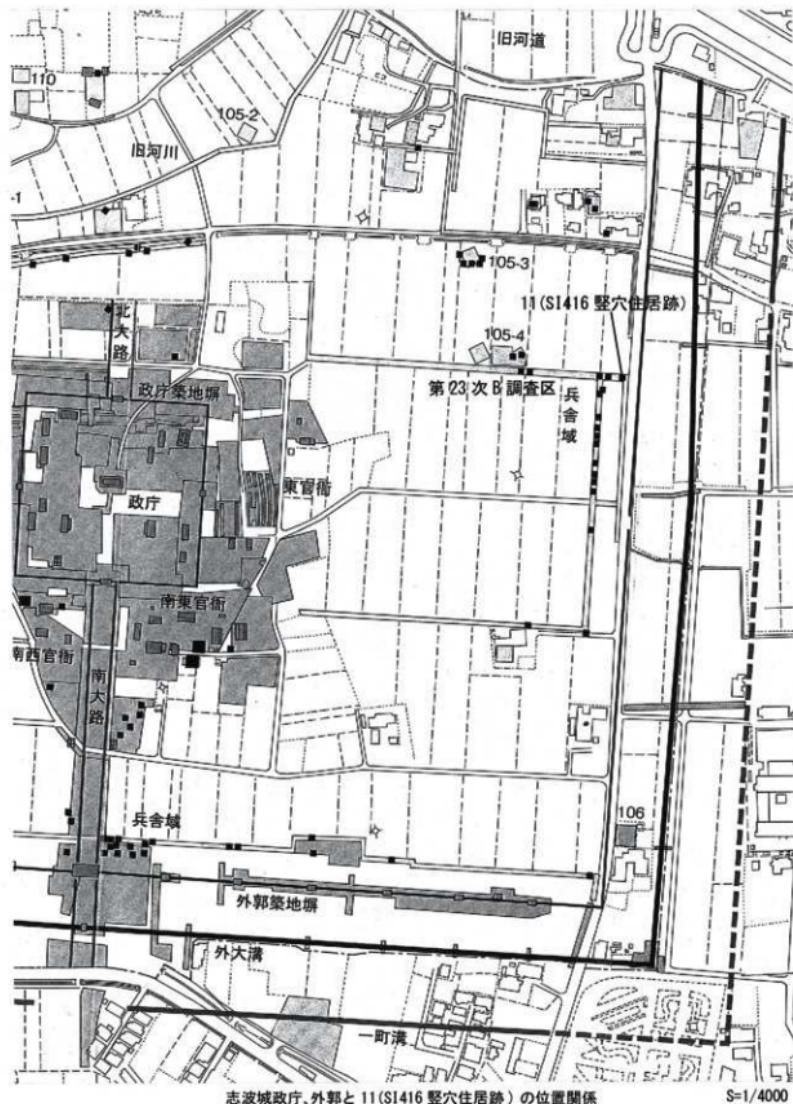
8 稲荷(現下羽場)遺跡
4号住居跡

S=1/80

第7図 古代斯波都における竪穴建物に伴う外延溝 (3)



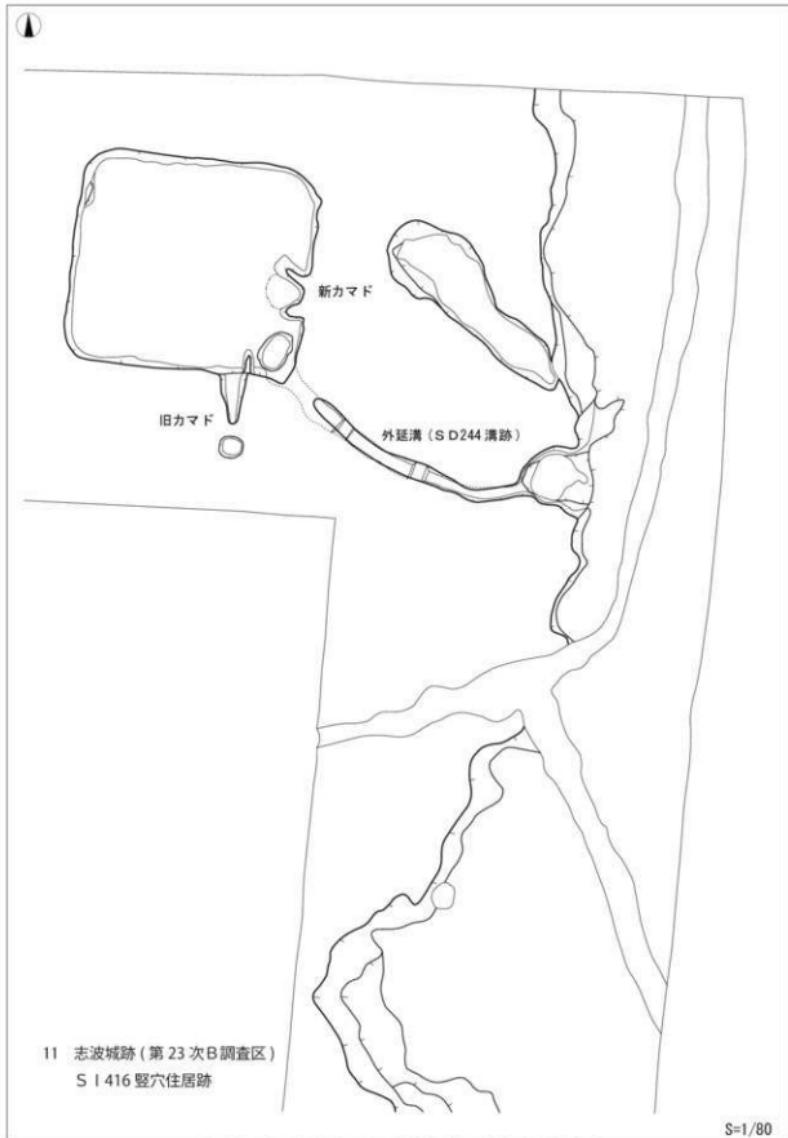
第8図 古代斯波郡における竪穴建物に伴う外延溝(4)



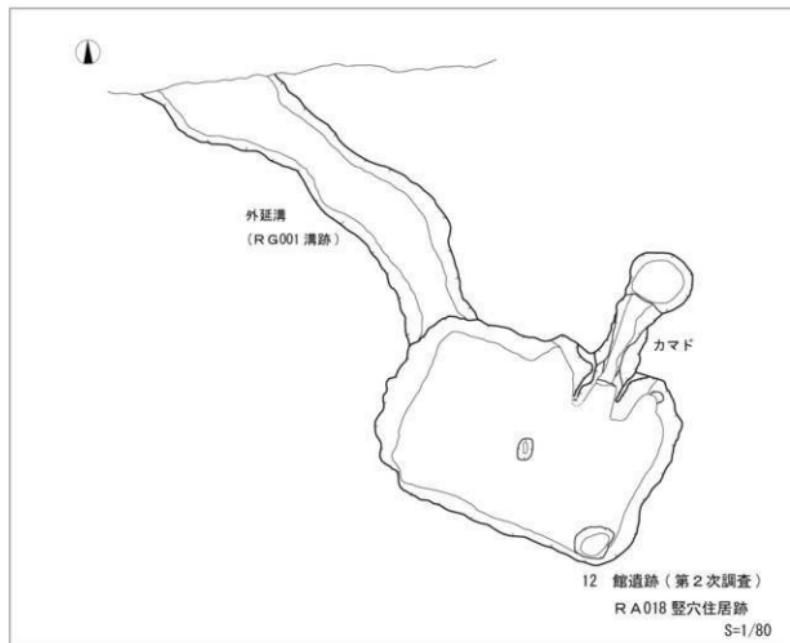
志波城政庁、外郭と 11 (S1416 壓穴住居跡) の位置関係

S-1/4000

第9図 古代斯波郡における堅穴建物に伴う外延溝 (5)-1



第10図 古代斯波郡における竪穴建物に伴う外延溝(5)-2



第11図 古代斯波都における竪穴建物に伴う外延溝(6)

地図番号	道路名	遺構名	長辺 (約m)	短辺 (約m)	平面形	壁高 (約cm)	底面	柱穴・ ビット	火壇	周溝	外縁	備考	文献
1 仙台道跡	WC-1 生居跡	2.9	2.7	隅丸方形	10～25	平坦で堅く 輪郭に向かって てやや屈斜。	カマドなし	カマドなし	9世紀中	床面全体に炭化物・焼 岩手 県文 化がつており、焼 岩手 県文 化がつたものとみられ る。南東隅に土壠あり。	1993		
2 *	WD-1 生居跡	4.5	4.2	隅丸方形	10～20	平坦で堅く 輪郭に向かって	カマドなし	カマドなし	15	床面全体に炭化物・焼 岩手 県文 化がつており、焼 岩手 県文 化がつたものとみられ る。南東隅に土壠あり。	1993		
3 高野通路跡	1号生居跡+ MB3講跡、 MB4講跡	7.0	5.9	隅丸方形	45	18個(主 柱穴8、 腰柱穴 6、ログ 柱穴 1、そ の他3)	點床なし。 門凸が著し い。	カマドなし	15	円柱中に炭化物・焼 岩手 県文 化がつており、南東隅に炭 化がつたものとみられ る。東和町 白色彩石塊出土。土 坑6基あり。	1997		
4 杉の上1道跡	CA59作原跡 + B1 651講跡	4.8	4.7	隅丸方形	30	北壁際、東西7個(主 柱穴4、 腰柱穴 3、その 他の1)	全周する。上 幅20～40cm、下 幅10～ 30cm、深さ5 ～10cmの 貼床あり。	柱穴4、 腰柱穴 3、その 他の1)	25～ 30cm、下幅約25～ 35cm、深さ約5 ～15cm、断面形状複数。	10世紀中	北東隅から北東に 延びる。長さ40m、上幅約25～ 30cm、下幅約10～ 35cm、深さ約5 ～15cm、断面形状複数。	岩手 県文 化がつたものとみられ る。南東隅付近か ら白色粘土層付近 に延びる。長さ5m、 上幅30cm、 下幅20cm、深さ10cm。 底面の高低 差約10cm。	1979
5 筒前道跡	SI56	5.6	5.2	隅丸方形	20	—	—	カマドなし	—	—	—	—	矢巾町 教委
6 高出創跡	SI151?	6.0	6.0	か	隅丸方形?	5～10	—	柱穴4 個	柱穴2 個	—	—	—	矢巾町 教委
7 一本松道跡	1号生居跡 (Ah 56 生居跡)	5.3	5.0	隅丸長方形	20～25	貼床なし。 南北間が高く、 柱穴1、カマドなし	16個(主 柱穴4、 腰柱穴 4、その 他の7)	—	—	—	—	岩手 県文 化がつたものとみられ る。北側と東側との高低差 7cm、ビット No.17北側とビット No.13から遊び るものとの交点との高低差 11cm、東 側と段丘街との高低差 20cm。	1979

第2表 古代和我郡・梅森郡・斯波郡における堅穴遺物に伴う外縁溝(1)

番号	遺跡名	遺跡名	長辺 (約m)	短辺 (約m)	平面形	高さ (約cm)	底面	柱穴・ ピット	火災	周溝	外延溝	時期	備考	文献
8場(現下羽) 8場)遺跡	4号住居跡		5.8	5.7	隅丸方形	5～10	堅床なし。	8個(主 柱穴4、 その他の 4)	角壁以外に めぐらす。	北西隅の土坑から東壁周溝を経て、 P2のすぐ西側でP1付近から西に延 びてきた床跡と合流し、カマド前面 を通した後、南西隅から外側に向きを変 じた後、緩やかに相間に向きを変 じた後、長さ約12.0m 以上、幅30～50cm、深さ20cm前後	9世紀中 上坑1基あり。	岩手県 農林省 1979	岩手県 農林省 1979	
9湯沢A(現下 9湯沢)遺跡	1号住居跡		5.3	4.9	隅丸方形	20～30	堅床なし。 12(ば平出だ 壁柱穴 がある。 7、その 他の 6)	17個(主 柱穴4、 その他の 13)	全固する。た だし、北壁は カマドの前面 をめぐる。	土坑3基あり。床面に 多量の炭化材・焼土が 岩手県 農林省 1979	9世紀中 上坑2基あり。土 坑3基あり。床面に 多量の炭化材・焼土が 岩手県 農林省 1979	岩手県 農林省 1979		
10(第18次 調査) 台太原遺跡 RA 141号穴住居 付R 122上坑 含む)	5.7(張 き出し含ま ず)	隅丸方形 (南東壁に 張り出しあ 持つ)	40～60	平坦	堅床 柱穴4、 その他の 3)	7個(主 柱穴4、 その他の 3)	南東壁の中 央付近や西 側面から南側壁間に向かい、腰 コナー付近 の手前で床跡まで伸びる。 そこからトンネルとなり外延溝(R D 122上坑跡)となる。 幅10～30cm、深さ66cm、廣 さ120cm、深さ88cm、外延溝 140cm程度差5cm。	9世紀中 上坑2基あり。土 坑3基あり。床面に 多量の炭化材・焼土が 岩手県 農林省 2001	南東壁の張り出しの現 在は140×40cm、土 坑6基あり。北コー ナーのものは北戸内 で生じた地盤上、炭化切 削された状態の土坑6基 が発見される。開仕切 削の主柱穴 からそれぞれ北東壁・ 南西壁にかけて1条 ずつ、さらにはP 3から P 4にかけて1条 ずつ、さらに間がつて1条 ずつ、幅5～15cm、 深さ5～10cm程度。	岩手県 農林省 2001				
11(23次 B調査 (X))	志波城跡(第 SD1416堅穴住居 付SD244溝跡)		3.4	隅丸方形	10～15—	なし	カマドなし	SU244溝跡：南東隅の土坑から東 をめぐる。外部東側 にひろがる。長さ 56cm、幅20cm、 深さ15cm。	9世紀初 頭	豊國郡 農林省 1982				
12(前調査) 12次調査)	RA 018堅穴住居 付RG 001溝跡		3.3	隅丸方形	65～80	やや凹凸が あるものの 2個	カマドなし あり。	北西隅付近から北西へ伸びる。 上幅90～150cm、下幅 60～140cm、深さ25cm程度。	9世紀前 半	豊國郡 農林省 1992				

第3表 古代和我郡・藤琴郡・斯波郡における堅穴建物に伴う外延溝(2)

近世南部藩を襲つた幾多の災禍は、領内に惨憺たる爪痕を残した。そのたびに憂き目にあつた領内の酒造家は、藩による厳しい統制下で生き残りをかけて、自身の正当性を担保する由緒が必要になつたのではないだろうか。同時に、仁政による社会不安の払拭をねらつた藩主らは、盛岡松尾社を手厚く保護し、遷宮や修復といったハード面の復興とともに、由緒などをソフト面の整備をすすめたとしてもおかしくはない。いずれにせよ、一八世紀の厄災は、南部藩における基幹産業・酒造りの由緒を再確認させる天運があつた。

最後に、盛岡松尾神社の調査に際して、快く協力くださつた山口重法氏に深甚の謝意を表する次第である。また本稿執筆にあたり、黒田智氏（金沢大学）に史料翻刻をはじめとするご指導・ご協力を賜つた。さらには小西洋子氏（金沢大学大学院人間社会環境研究科）からご助言をいただいた。この場をかりて厚く御礼申し上げる。

註

- (1) 史料によつては宝永三年（一七〇六）九月とする記述もある。
- (2) 一例として石川県金沢市の松尾神社は、越加能の酒造業者の信仰の拠点となつてゐる。
- (3) 金沢松尾社については別稿を準備中である。
- (4) 史料二の翻刻は、岸昌一「御領分社堂 南部領宗教關係資料」岩手書院より引用した。
- (5) 法輪院は寛文二年（一六七二）広福寺から院号を転じたとされている。（篤寫家調十二之巻「寺院之旧記」岩手山法輪院之事）
- (6) 盛岡中央公民館「一九三八」「盛岡に於て難波後廢止せられたる寺院並特許調査」
- (7) 「南部杜氏」編纂委員会「一九八三」「南部杜氏」石鳥谷町
- (8) 史料の翻刻は、岩手県神社庁「一九八八」「岩手県神社名鑑」岩手県神社庁より引用した。
- (9) 「史料四」「史料五」の史料翻刻は、岸昌一「一〇〇六」「史料四」「史料五」岩手書院より引用した。

(10) 清水克行 二〇〇八「大丸屋、室町社會を襲う！」吉川弘文館

(11) 神戸市文書館蔵「柴田家文書」

(12) 日本山海名所団会「江戸職人歌合などにみえる。」

(13) 江原恒治「一九六五」「近江商人中井家の研究」雄山閣

(14) 日野町教育会「一九三〇」「近江日野町志」滋賀県日野町教育会

(15) 谷野憲司・武田祐吉「一九五八」「日本古典文学大系」一

(16) 佐藤直市「一九八六」「近世松尾社領の成立」「天手前女子短期大学・天手前榮養文化学

(17) 「曹臣秀吉文書集」「岩手県史」「盛岡市史」「岩手県中世文書」を参照した。

(18) 堀内和明「一〇一二二」「河内金剛寺の中世の世界」和泉書院

(19) 史料の翻刻は、名古屋市博物館編「二〇一八」「曹臣秀吉文書集四」吉川弘文館より引用した。

参考文献

- 池田市史編纂委員会「一九九九」「新修 池田市史 第二巻」
- 池田史談会「一九二〇」「池田酒史」池田史談会 岩手県「一九六一」、「六三」、「六六」「岩手県史 第三卷、第五卷、第十二卷」
- 小野晃嗣「一九四一」「中世酒造業の発達」「日本産業発展史の研究」法政大学出版社
- 加藤三郎「一九七七」「日本の酒の歴史」研成社
- 滋賀県蒲生郡役所「一九八三」「近世蒲生郡志 卷五」
- 谷川健一「一九八二」「日本庶民生活史料集成 第三十卷 諸職風俗図鑑」一八西ヶ谷恭弘「一九八九」「戦国期の酒漬生産と川酒」『戦国氏族考』一八
- 花巻市教育委員会「二〇一二」「花巻市文化財調査報告書 第六集」花巻市
- 文化庁文化財部「二〇〇六」「民俗資料選集34 酒造習俗 I」国土地理情報会
- 室山孝「二〇一五」「中世加賀菊の社会史」「北陸史学」六二
- 盛岡市史編纂委員会「一九五六、六八、九九」「盛岡市史 第三分冊一」「二、三」盛岡市
- 森高昇南「一九六六」「南部杜氏」「日本醸造協会雑誌」六一、一〇
- 森高昇南「一九七八」「東洋社会経済史の研究／平泉文化論」法政大学出版局
- 森木学「二〇〇五」「酒造りの歴史」雄山閣

た。やがて、朝廷内で培われてきた醸造技術や職人が外部に流出、その受け皿になつたのが寺院であった。寺院で醸造された酒は僧坊酒とよばれ、

は畿内だけでなく、全国各地の街道沿いや寺院でみられた。室町後期成立

である。たとえば天野山金剛寺でつくられた天野酒は、鎌倉中期にはすで

に寺院の重要な財源に位置づけられていた(註18)。こうした酒造りの興隆

の「尺素往来」には、越前・豊原酒、伊豆・江川酒、博多・練貫酒などが

みえる。やがて、京都に販路を拡大したこれら「国酒」は京中の造酒屋

「柳」を脅かし、また天野酒も幕府の式酒として重宝された。

一方で、僧坊酒は寺院が有する莫大な資本を暗喩するものでもあった。

すなわち、莊園から得られる米(経済力)と、僧坊らの豊富な労働力は戦

乱の世の脅威にもなり得たのである。寺院の力を恐れた武将たちは彈圧を

開始、僧坊酒は一気に衰退した。そのころ、貨幣経済の発達と街道の整備

とともに、町場の商人らが財をなしていた。僧坊酒で培われた技術や職

人らを雇い入れた商人らは専業的な酒造りを開始した。これまで、ハイカ

ルチヤーな人々に流通する酒は朝廷・寺院の酒造集団によってつくられて

いたが、市井の人々が口にする酒は、もっぱら自家製の濁り酒であった。

酒造技術の発達による大量生産体制が整うとともに、民衆にも清酒を嗜

む文化が醸成されていったのである。(史料六・七)の舞台である天正期

は、まさに僧坊酒の衰退と商人による酒屋が勃興する過渡期であり、杜

氏という職能が通俗的に認知されはじめた時期だったである。

書に天野山金剛寺でつくられた天野酒が登場する(註19)。

二 史料の位置づけ

室町期に一世を風靡した天野酒は、戦国時代にはいつてからも戦国武将らに嗜まれていた。たとえば、天正二八年(一五九〇)の豊臣秀吉発給文書に天野山金剛寺でつくられた天野酒が登場する(註19)。

〔史料一〇〕御牧勘兵衛尉朱印状「御牧文書」

天野博志何、遠路到来、細々思志、悦思食候、(中略)

八月廿四日 (朱印)

御牧勘兵衛尉とのへ

〔史料一二〕金剛寺三綱宛朱印状「金剛寺文書」

為御開陣之祝儀、櫛式荷舟卷數到来、悦思食候也、

九月四日 (朱印)

金剛寺三綱

この年秀吉は、二月から七月ごろに小田原征伐、七月から八月にかけて奥州仕置をおこない、天下統一を成し遂げた。つまり、「史料一〇・一二」は、天正二八年(一五九〇)に秀吉が奥州入りするとともに、天野酒が奥州に流通していたことを示している。こと南都藩に限れば、上方に由緒をもつ酒造業者の領内入りを慶長期後半としていたが、奥州仕置をおこなつた天正期末以降のかなり早い段階で、南部藩入りを果たして

いたとしてもおかしくはない。すなわち、「史料六・七」が盛岡周辺の酒造家に伝来したと仮定すれば、天正二八年(一五九〇)に奥州仕置と時を同じくして、秀吉の朱印状をもつ上方氏族が南部藩にやつてきたとよみとれるのだ。

またこれら秀吉の施策には、近江国日野の蒲生氏郷が大きく関与していた可能性も想定できる。氏郷は、近江国日野から天正二年(一五八四)に松坂へ、そして天正二八年(一五九〇)には奥州仕置のため会津若松へと移つた。氏郷が転封をくり返すたび、氏郷を慕う町人らがともに移動をくり返し、町場をつくつたといわれている。氏郷は南部氏とのつながりもある。文禄元年(一五九二)氏郷の娘・武姫は、盛岡藩初代藩主・南部利直と婚約、慶長三年(一五九八)には正室に迎えられている。日野に由緒をもつ酒造業者が、氏郷とともに奥州入りし、盛岡までやつてきた可能性も想定できるだろう。

錆」とはすなわち「鳴錆」のことではないだろか。

とはいへ、京都松尾大社の祭神・大山祇神を、なぜ連ねて書く必要があるのだろうか。ひとつは、「笠太山唯命」が、寺社の山号と僧坊名を指している可能性がある。しかし、笠太山を山号とする寺院で、かつ近世以前から存在しているものは管見の限り、見当らない。明治維新をへて廃絶した寺社の可能性も高く、当時の山号による追跡は困難である。

社領についてみてみよう。「史料七」には「御神領御朱印七百五拾石也」とある。京都松尾大社の社領は、中世以前からたびたび寄進を受け、近隣のみならず遠隔地にも多数の社領を抱えていた。たとえば、三河設楽荘、越中松永荘、甲斐志摩荘、遠江池田荘、根津山本荘、伯耆竹田・三朝両郷、伯耆東郷荘などがある。

具体的な社領高の記録は、時代はくだつて天正二年（一五六八）一一月豊臣秀吉の朱印状にみえる。これによれば「西七条内 四四五石、谷山田之内九三三石」とあり、計一〇七八石が安堵された（註16）。その後元和元年（一六一五）七月、幕府は松尾大社社領として計一〇七八石を安堵し、これは幕末まで保証された。つまり、天正三年（一五六八）から松尾大社の社領は一〇七八石のままであり、「史料七」の七五〇石はあきらかに見當違いといわざるを得ない。

V 「杜氏職」と秀吉の朱印状

一般的に「杜氏」は酒造りに携わる人を総称することが多いが、酒造業においては酒造工程のすべてを監督・司る職人のことをいう。近世史料をみてみると、人倫調査団案（一六九〇）「酒屋（中略）酒造の男を杜氏流弱といふなり」、浮世草子（一二一五）「弟は（中略）大勢人をつかへど且那顔せず、朝から晩迄胸前垂をかけて、どうぢなみにはたらき」、東雅

（一七一七）「夫妻（中略）世に酒造りて商ふ者の家にて、酒造る事をし

るものをどうじといふもまた刀目也」とあり、どうじという職能が一般的に認知されていたことがわかる。史料上の字句はさまざまで、「杜氏」のほか「頭司」とかかれることも多いようだ。一方、南部藩内では酒司とよばれており、「杜氏」と記される事例はかなり多くはない。中世史料には、酒杜氏（史記抄）、酒作（七十一番職人歌合）、または造酒司となり、南部藩内での呼称はこうした中世的な表記を受け継いだのだろう。

そもそも杜氏の語源は、中世以前の酒造りを女性（＝刀自）が担っていたことから、とじが変化してとうじになつたとする説がある。「杜氏」また、「史料六・七」の、天正八年（一五九〇）に秀吉が杜氏らに朱印状を与えた特権的な技能労働者として身分証明なく、国をまたいで活動していくことを認めた、という記述についても、管見の限り同年発給の秀吉文書には確認することができない（註17）。つまり、「史料六・七」における杜氏らの出身地以外、ほとんどが誤りか、裏付けを得られないのである。すなわち、「史料六・七」を作成するにあたつて重要なのは、畿内への醸造地、それも江戸積酒造家とも関係があるという、技術的由緒の正当性を主張することだったとみられる。京都松尾大社の祭神や社領高等の誤りを鑑みるに、畿内というよりむしろ、畿外の酒造家が後世になつてつくった由緒書と考えるのが妥当である。

しかし、史料にかかる史実はまったくの嘘偽りなのだろうか。

第三章 酒造史上における史料の位置づけ

中世までの酒造りは、朝廷のお抱え職人集団・造酒司によるものであつ

とができる。文禄三年（一五九四）の検地帳によれば、「氏神は伊丹にあり、耕作のはか伊丹酒屋で日用」とある。
また当地の酒造業者・小西家に伝わる「酒株之寄帳」には、稻寺屋の屋号がみえる。この稻寺屋は現在の剣菱酒造のルーツとされ、嘉永二年（一八四九）「二千年袖鑿」によれば永正二年（一五〇五）に伊丹で創業したことが記されている。稻寺屋の酒もまた、江戸積酒として流通し、時代を幅広く人々に嗜まれていた。剣菱の印章は、さまざまな絵画史料で確認することができる（註12）。

III 近江国蒲生郡松尾清兵衛

近江国蒲生郡は、現在の滋賀県竜王町・日野町・近江八幡市・東近江市にまたがって存在していた。史料に登場する天正期前には、觀音寺城や中野城、そして天正四年（一五七六）には安土城が築城され、城下町が形成された。しかし、信長から秀吉の世になると、中野城主であった蒲生氏郷は伊勢国松ヶ島城（現・三重県松阪町）へ転封、羽柴秀次が蒲生郡を治めることになる。このように蒲生郡内の支配体制がめまぐるしく変わる一方、郡内には北陸・関西・東海へとつながる街道が交差し、在郷町として町場空間が形成された。また交通の利を味方に、日野商人や八幡商人といつた多くの近江商人が活躍した。

特に、蒲生氏郷が城主をつとめた中野城の周辺に展開した城下町・日野には「松尾」という地名がある。史料をみると、当地に松尾神社が存在した記録はないものの、氏郷の転封に際して、日野の松尾から松ヶ島に杜氏印兵衛を呼びつけた、という記録が残されている（註13）。さらには、日野を中心とした松尾参拝の講があり、近江日野町志には次のようにかれている（註14）。

〔史料九〕 日野商人と五社講
宝曆五年五月日野、猶田、十津寺五反田、鎌掛、北畠、小谷等の村々商人仲間に醸酒の守神といはる松尾社參拝を目的とする松尾社講企て、各自掛金を出し松尾社と愛宕山と妙義山とへ年々代参人を参拝せしむる事を約したるに始まり。当時の仲間は一九人なるが其中日野町にて内池町外池太右衛門、栗原町矢野新右衛門、岡本町久野久兵衛、松尾町田伊右衛門、清雲町井上喜兵衛、松尾高井作右衛門の六人なり。然るに天明三年には中井源左衛門加入し、寛政四年には野田金平加入したる等（略）

つまり、日野地域には天正年間に杜氏が存在しており、少なくとも一七世紀の終わりごろまでは当地にいたものとみてまちがいない。

なお、日野から北に一五キロの距離に、湖東三山のひとつ天台宗百濟寺がある。百濟寺は「百濟寺酒」とよばれる僧坊酒を製造し、室町期には幕府や朝廷にも献上していた。ところが、天正元年（一五七三）信長による焼き討ちにあい、以来百濟寺酒の再興はみられなかつた。一方で、醸造技術をもつた者たちは在野にくだり、商人主導の酒造業へと合流していった。日野に展開していた酒造業者らも、その流れを汲んでいる可能性が高い。

IV 祭神と社領

〔史料七〕 の文末には、京都松尾大社の祭神と社領が記されている。まず「笠太山唯命」であるが、大山唯神をあらわしているようみえる。ただし、文頭に笠がつくことや、「昨」を「唯」としている点は、文字の異同關係だけでは説明がつかない。

また「鴻鏡大神」も表記の誤りとみられる。「古事記」における大山唯神の説明をみると、「亦の名は山末の大主神。此の神は近淡海国の日枝の山に坐し、亦葛野の松尾に坐して、鳴鏡を用ひ神ぞ」とある（註15）。「鴻

寺酒とも称された。ところが、明和八年（一七七一）の記録では醸戸一七と半減しており、これは寒造りによる量産化に成功した揖津伊丹酒や、

一九世紀にはいって水車精米により品質を格段に向上させた西揖津灘酒へ

と生産拠点がシフトしたのである。

この池田村にも天明三年（一七八三）の年紀をもつ酒造由緒書が残されている（註11）。

〔史料八〕酒造り始之由来

抑從古

大内裏之御時

上様奉始御公家様方御先祖神々等御祭之節御酒奉獻候御事

禁裏御官人江被仰付是方始り候由、酒造り候者を造酒

之寮と申、唯今と造酒沢山二者出来候事二而者無之勿

論商売ニハ不仕御由、尤御入用之節酒造之寮江御米被

遣其程々ニ酒造り指上來り候所、足利公御代之節専酒

多ク御入用、造酒之寮兩三人ニ而者出来兼造酒寮縁家

之者段々造り候御事ニ御座候、就中攝州表は酒出来柄

相應之土地之由右造酒寮江被仰出、依之攝州表二者未

葉之者多相残り申候、池田村酒造家石子孫之者共ニ御

座候、外鄉も左様可有御座候哉と奉存候、依之酒株之

儀譲渡し等於唯今代物を取不申請渡し仕候、右者造酒

之寮右相傳候故歟と奉存候、

すなわち、中世以前に朝廷で酒造りをしていた者が、室町期に町場で酒造りをはじめ、その子孫が池田村で酒造りをはじめた、とある。さらに、宝暦一四年（一七六四）の満願寺書上に「二三百年来酒造」とあり、室町後半には酒造りがおこなわれていたことが推察される（史料六・七）中

にある重左衛門は特定できないものの、池田村に天正三年以前の由緒をもつ酒造技術者がいてもおかしくはない。

II 満願寺・稻寺・喜左衛門

江戸精酒において、池田とともに名声をとどろかせたのが、伊丹であつた。「祇陽統落總集」によれば、「伊丹池田の造り酒は生諸白といふ。元

米水のわさにや、造り上たる時は酒の氣甚だからく、鼻をはしき何とやら

んにがあるやうなれ共、遙の海路を経て江戸に下れば、満願寺は甘く稻寺

には氣あり」とある。満願寺は池田酒を、稻寺は伊丹酒を指していると思

われるが、それぞれについて詳しく述べみよう。

II-(A) 满願寺

大阪府池田市の西方、兵庫県伊丹市の北方に隣接する兵庫県川西市満願寺町に、真言宗寺院・満願寺がある。神龜年間（七二四～二九）に千手觀音像を祀ったのがはじまりとされ、のちの文献や仏像・発掘調査から平安後期には寺が存在していたことが明らかになつてている。以来中世・近世文書にも寺社名が断続的に登場し、寺院の周りを満願寺村と称した。慶長国絵図にも「万願寺」とある。前述の池田村で千石造だつた満願寺屋も、この満願寺村を由緒としている可能性が高い。

II-(B) 稲寺

〔史料六・七〕において、稻寺喜左衛門（由緒）と稻守喜右衛門（書写）の異同がみられる。史料上ではいずれの人名も確認することができないものの、名字については稻寺（または猪名寺）が正しい表記と思われる。満願寺と同様に、猪名寺という地名が兵庫県尼崎市に存在し、伊丹市と隣接している。中世史料にも猪名寺がみえ、慶長国絵図にも確認するこ

由緒有之、酒造方御用相勤、御出入二被

仰付候様願書差上候處、同十八庚寅年御聞済之上、

諸国酒造之儀者身分請等無之候共抱一相成候旨、從

太閤様御朱印御證文被下置、先規之通二而

杜氏職者諸国一統證文無之相勤來候、諸國

御聞所通行之節も、手形無之共右御免許之

申立也、於尔今差支無之事

杜氏職行事

一、禁裏御所於御公儀も、酒造・神祇官

統領白川伯王御殿官名装束御免之

上、可相勤職方二候處、近年酒造家并二杜氏之

面々祭拝之式茂不弁、罪ニ松尾大明神奉、

勤請注連より等都而背神慮、異變等有之旨、

歎和敷者也、依之杜氏職者松尾大明神

祭之日者齋服淨衣可着用也、御免許

頂戴、神押傳受之上、面々職方隨分可

相勤者也

笠太山唯命

松尾大神也

山城国葛野郡松尾山ニ鎮座

御神領御朱印七百五拾石也

(史料七) 杜司諸書寫

杜司諸書寫

一、抑酒造杜司之儀者、天正三年

池田村重左衛門、満願寺村福守

喜右衛門、近江国蒲生郡松戸

清兵衛由緒有之、酒造方

御用向相勤始、出入頭被

仰付候様、凡書差上候之處、天正十八年

願之通被仰付、諸国一統酒造杜司

之儀者、請人等無之授ニ可相成旨、

太閤様御朱印御證文被下置候、

依杜司職者、諸国一円證文無之相勤

三 「杜氏職由緒」を読む

まず(史料七)の杜司諸書寫(以下書写)について、「史料六」杜氏職

由緒(以下由緒)のおおよそ九行目までを書き写しているものの、それ以降は欠損している。史料を比較してみると、①稻寺喜左衛門(由緒)と稻

守喜右衛門(書写)、②蒲生郡松尾清兵衛(由緒)と蒲生郡松戸清兵衛

(書写)などに異同が見受けられる。その他は字句違いはあるものの、内

容はほぼ同一である。

次に登場人物についてみてみよう。

I 池田村重左衛門

池田村は全国各地にあるものの、こと酒造りに限れば根津池田村(現・

大阪府池田市周辺)を想定するのが妥当である。池田村の酒造業は元禄

一五年(一七〇二)に酒造高一万二二三三石余、醸戸三八との記録があ

り、畿内最大規模を誇った。これは、慶長一九年(一六一四)に徳川家康

が池田郷に朱印状を与え、江戸積酒の産地として急速な発展を遂げたため

である。なかでも、満願寺屋は一三五石株を有しており、池田村満願

松尾御宮修復仕候付入用材本不足仕候、境内過ぎ六尺八寸廻より五尺廻迄四本酒屋共願出候間被下度之旨願書・繪図相添申出、御勝手縣僕役人共え為遂吟味候處、御山帳二も無之移故被下置可然旨申出候間、願之通申渡、尤本剪相済候ハ、改極印之儀可申出旨寺社御奉行え申渡之

〔史料二〕によれば盛岡松尾社は、元文五年（一七四〇）六月一五日に再興したとかかれており、〔史料四〕には、五月晦日（即ち六月一日）に段階で盛岡松尾社が完成し、来月中にも遷宮するある。このあたりの日付はおおよそ整合性が保たれている。

また〔史料五〕は、盛岡松尾神社の修復に関する文書である。ここで注目したいのは、天明八年（一七八八）にこの文書が発給されている点である。列島を襲った「天明の大飢饉」は南部藩も例外ではなく、天明三年（一七八三）には南部藩八戸領六万人のうち半数が飢饉に罹れ、天明七年（一七八七）には痘瘡によって二五〇〇人あまりが亡くなつた。米を原料とする酒造業は食糧米確保のため、因作が発生するたびに厳しい統制が敷かれた。領民の生活もままならないなか、酒造業者も酒造禁止令によつて開店休業状態であった。この時期になぜ、酒の神を祀る松尾社を修復したのだろうか。飢饉をはじめとする社会不安の発生と寺社復興が同期するロジックは、清水克行氏が精説している（註10）。清水氏は足利義持の禁酒令を例に、中世の政治理想「徳政」が大きく関係していると指摘する。世の中が災禍に見舞われるのは、為政者の所業や人々の不徳を見かねた神仏が厄災をもたらしているからであり、人々は神仏を篤く敬うことで災いを祓うことができると考えられていた。すなわち、幕府による「徳政（令）」は、債権の帳消しはもとより、寺社の復興をめざすものであった。

近世南部藩下における盛岡松尾社も、同じ文脈でよみとることはできな

いだろうか。事実、盛岡松尾社の遷宮がおこなわれた元文年間は、元文元年（一七三六）に因作、翌二年（一七三七）も四分作の因作を記録している。そして、〔史料二〕〔史料四〕の傍線部をみてみると、南部藩主の関与がよみとれる。〔史料五〕の天明八年（一七八八）とあわせて、大飢饉のさなかに仁政をめぐる南部藩の意向で、盛岡松尾社の遷宮・修復が執りおこわされた可能性がある。

第二章 史料紹介「杜氏職由緒・杜氏職行事」「杜司諸書写」

一 史料の来歴

平成三〇年（二〇一八）一〇月二七日、盛岡松尾社について神主・山口重法氏からお話を伺つた際、三枚の文書をご紹介いただいた。もともと盛岡松尾社に伝来したものではなく、いわく、文書中に「松尾大明神」とかかれていることから、盛岡松尾社に関連する文書ではないかと、あるとき個人の方から譲り受けたらしい。管見の限り南部藩内、畿内の酒造関連史料にはなく、新出土史料とみられる。史料は紙片三枚で構成され、杜氏職由緒と杜氏職行事を書いたもので三枚、異同は多いものの杜氏職由緒を踏襲したとみられる杜司諸書写が一枚（後闇）となつてゐる。これらはいずれも約四七×三三センチで、和紙の規格・小奉紙とおおよそ合致しており、切り取り等の加工は見受けられない。

二 翻刻

〔史料六〕 杜氏職由緒・杜氏職行事

（一）抑酒造杜氏之始者、天正三乙亥年池田村重左衛門・

満願寺寺種寺喜左衛門・近江国蒲生郡松尾清兵衛

ら七都を安堵されて、実質的な南部藩が成立した。盛岡城の築城開始は慶長三年（一五九八）のことと、寛永二〇年（一六三三）に完成した。史料による裏付けはないものの、慶長期後半（一六〇六・一五）には、すでに酒造業が興つていたらしい（註7）。藩内において本格的な商業醸造がはじまつたのは、近江商人とともにたらざれた桓州・池田流の酒造技術の影響が大きい。

南部藩領内における近江商人の先駆けは、村井新兵衛といわれている。新兵衛は近江国高島郡浅井出身で、慶長五年（一六一〇）に遠野入りし、慶長一八年（一六一三）四月に盛岡に移つた。以来、後続の近江商人らを世話をしたと伝えられている。その一人には、近江国高島郡大溝出身の近江商人村井権兵衛がいる。権兵衛は村井新兵衛を頼つて寛文二年（一六六二）に盛岡入りし、のちに志和を拠点として一大財閥を成した。権兵衛は延宝六年（一六七八）に酒造業をはじめ、大阪の三池から杜氏を招請した記録が残されている。水田單作地帯であった志和は、冬期になると人的資源がありあつて、一方で、寒造りが主流となつた酒造業者は、冬場に働き手がほしい。両者のニーズが一致したことと、酒造業はますますの発展をみた。次に、一七世紀の盛岡藩内の酒造軒数と酒造高をみてみよう。

〔表一〕一七世紀における南部藩内の酒造軒数と造高

寛文元年	（一六六一）酒造軒数	三三軒（盛岡六軒）	五〇石右造
天和元年	（一六八一）酒造軒数	一八九軒（盛岡六二軒）	約三五六六石右造
元禄七年	（一六九四）酒造軒数	三〇三軒	約四万八二四八石右造

〔表二〕一七世紀における南部藩内の酒造軒数と造高

寛文元年	（一六六一）酒造軒数	三三軒（盛岡六軒）	五〇石右造
天和元年	（一六八一）酒造軒数	一八九軒（盛岡六二軒）	約三五六六石右造
元禄七年	（一六九四）酒造軒数	三〇三軒	約四万八二四八石右造

世紀にはいるとたびたび凶作にみまわれ、食糧米確保を目的とした酒造制限・禁止令が出されたことで、酒造軒数は元禄期の半数に減少した。盛況を誇った南部藩内の酒造業と盛岡松尾社の関係を示す史料として、文化十三年（一八一六）に御城下酒屋年月番から御國中酒屋年行事に宛てられた書状がある（註8）。

〔史料三〕御城下酒屋年月番から御國中酒屋年行事宛の書状
御上の御沙汰に依り当社御守札を領内酒造家に頒布するに付、神職代理者各方面を廻る際、従前通り献金せられ、宿の事、送馬の事宜敷御配慮願ひたし

盛岡松尾社が酒造業者の信仰をあつめ、手厚くもてなされていたことが窺い知れる。また、藩政史料にも盛岡松尾社にかかる記述が見受けられる。そのうち「寺社記録」は、寛永二年（一六四三）から天保八年（一八三七）までの藩内の寺社動向を、一二冊に分けて記録したものである（註9）。

〔史料四〕元文五年五月晦日 松尾大明神本社・前殿造営、遷宮

一 五月晦日
法輪院
先達て酒屋之者共依頼被 仰付候松尾大明神本社・前殿共ニ出来
付来月中ニも遷宮仕度候、其節参拝も可有御座候之間、警固御足
軽二人被 仰付候下度旨申上、願之通寺社御奉行え申渡之

〔史料五〕天明八年五月五日 松尾別当法藏院、御宮修復入用材願い
造業を財源の一部としていた南部藩も、さすがに酒造統制に動いた。一八

一 松尾大明神（岩手郡在東中野館）

松尾社ハ元文五年庚申六月十五日再興也、中野山法藏院（松尾社脇に在法輪院ノ末寺松尾社ノ別當也）祭神聖德太子也 宝永四丁亥年□丁に勤請後數年を経て元文五年六月、利親公奉移宮ヲ中野館酒神堂ト唱、毎年祭礼六月十四日より十六日迄

これによれば、宝永四年（一七〇七）に京都・松尾大社から勤請したとされ、盛岡松尾社は紙町（現・盛岡市上の橋町周辺）にくられた。紙町は奥州街道に接した町人町で、現在も付近には酒造業者が存在している。元文五年（一七四〇）には中野館（現在地）に移つたとされるが、それには南部藩第七代藩主南部利視の関与がよみとれる。

また盛岡松尾社の別當として、中野山法藏院がみえる。〔史料二〕の宝藏院と〔史料二〕の法藏院は、同じものとみてまちがいない。〔史料二〕から法藏院の開山は豪志で、別史料によれば社領三〇石との記述もあるが、詳しい由緒は残っていない。また、「元文盛岡城下図」には、盛岡松尾社の南並びに法藏院が確認できる。ただし、この城下図は元文三年（一七三八）の様子をあらわしているとされ、絵圖の年紀が正しいとすれば、史料よりも二年はやく盛岡松尾社が造営されていたことになる。（史料二）によれば、法藏院は法輪院の末寺とかかれていた。法輪院は法輪院広福寺といわれ、盛岡市愛宕山一帯に展開していたとされる（註5）。明治の廢仏毀釈によって衰退したものの、藩政期には南部藩天台宗の惣隸として二寺を束ねていた。

天台宗寺院が松尾社を管理していく背景には、祭神である大山姉神がかわっていたと考えられる。〔古事記〕には、近江の日枝山（現・比叡

山）、および京都の松尾に鎮座する神としてかかれしており、比叡山に天台宗・延暦寺ができるからは、大山姉神が天台宗の守護神として崇められてきた。すなわち、大山姉神を祭神とする松尾神社もまた、天台宗の守護神とよみかえることができ、盛岡松尾社においても、南部藩下における天台宗の惣隸・法輪院が積極的に関与するのも頼けるのである。

ところが、昭和一三年（一九三八）の調査によれば、明治期に廃絶した寺院として法藏院が挙げられている（註6）。盛岡松尾社の別當であった法藏院は、明治政府による神仏分離令に抵触し、廃寺となつた可能性がある。近代以降の盛岡松尾社の動向は、明治一七年（一八八四）の社殿焼失もあって、追うことができる。一方で、明治二六年（一八九三）には南部杜氏の郷とよばれる花巻市石鳥谷町内に酒造関係の石碑が建てられ、大正九年（一九一〇）には松尾社がつくられている。すなわち、明治期にはいつて廃藩になると盛岡松尾社の焼失も相まって、酒造業者の手によって南部杜氏の拠点である石鳥谷に遷宮を遂げたと考えられる。

焼失した盛岡松尾社は大正二三年（一九二四）に再興した。現在も再興当時の神具が残されている。神主の山口重法氏によれば、現在の氏子團は盛岡市・紫波郡（矢巾町・紫波町）、および岩手郡（零石町・葛巻町・岩手町）とのことで、花巻市以南は含まれていない。藩政期には紫波町の一部（紫波郡志和村）が八戸領の飛地となつており、酒造米とともに杜氏を供給していた記録もある。こうした地政学的な影響も受けつつ、氏子團がどのような変遷をたどってきたのか、さらなる検討が必要である。

二 南部藩内の酒造り

本節では、南部藩内における酒造研究や、南部杜氏にかかる先行研究をもとに、藩内における近世酒造史を概観してみたい。

南部藩は天正一八年（一五九〇）に豊臣秀吉によって岩手・志和・稗貫

盛岡松尾神社所蔵『杜氏職由緒』を読む

吉岡由哲

盛岡松尾社でみつかった新出土資料二点には、秀吉の朱印状を得た上方杜氏が全國展開していく経緯がかれている。近世後期につくられた由緒書とみられ、秀吉の奥州仕置とともに畿内の酒坊酒が東北に展開し、一八世紀になると其云々安定期に至る。災禍を免れない領主の思惑が交錯して、盛岡松尾社の保護や由緒の整備がすすめられたと考えられる。

第一章 盛岡松尾神社と酒の神

一 神社の由緒

岩手県盛岡市茶畠一丁目に鎮座する松尾神社（以下盛岡松尾社とする）は、宝永四年（一七〇七）に南部藩内の酒造業者が、酒の神として信仰をあつめる京都・松尾大社より勧請した社である（註1）。

京都・松尾大社は、山城国葛野郡（現・京都府西京区嵐山宮町）にある

社で、平安中期に編纂された「延喜式」には「松尾神社二座並名神大、月

次相嘗新嘗」との記録が残されている。

祭神は大山咋神・市杵島姫命の二柱で、酒の神として信仰をあつめはじめたのは、中世以降といわれている。その起源には諸説あり、①社殿を造営した秦氏は渡来系で酒造技術に長けていた、②祭神である大山咋神は醸造の技をもち、また市杵島姫命も酒造神として信仰されていた、などが挙げられる。史料上で、松尾大社が酒神として語られるのは、南北朝期に成立したとされる狂言「福の神」で、「神々の酒奉行」として松尾の名が登場する。以来、畿内酒造業のみならず、全国の酒造業者から信仰をあつめ、各地の酒どころに勧請された（註2）。こうした分霊社は現在知られて

いるだけでも一三〇〇以上にのぼる。

盛岡松尾社も藩内酒造業者から篤く信仰されてきたと伝えられているが、明治十七年（一八八四）の大火によつて社殿を焼失しており、詳しい由緒はわかつてない。わずかながら、当時の盛岡松尾社を知る史料として、宝暦十三年（一七六三）に藩によってつくられた「御領分社堂」、文化（天保年間に市原篤焉によつてかかれた「篤焉家訓」がある。「御領分社堂」（史料一）は宝暦九年（一七五九）から数年の調査期間をへて、南部藩領内の二三八四社におよぶ社堂の規模や由緒などを詳細に記録したものである（註3）。また「篤焉家訓」（史料二）は、南部藩士で記録方をつとめた市原郡右衛門忠寄が南部藩内で見聞した逸話全二二冊にまとめたもので、文化一四年（一八一六）から天保元年（一八三〇）の作とされる（註4）。

〔史料一〕御領分社堂

上田通御代官所 東中野村

一 松尾大明神 三間二間小榜葺 天台宗別當 宝蔵院持

拝殿 七間半三間萱葺

右ハ宝永四年御領内惣酒屋京都え奉願松尾より御神跡奉勅請、其後元文五年六月一五日開山豪志代紙町より東中野館え奉遷造宮仕候

執筆者（論稿掲載順）

須原 拓（すはら たく）	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子 昭彦（かねこ あきひこ）	(公財) 岩手県文化振興事業団博物館
米田 寛（よねた ひろし）	(公財) 岩手県文化振興事業団博物館
高橋 静歩（たかはし しづほ）	花巻市博物館
河本 純一（かわもと じゅんいち）	(公財) 大阪府文化財センター
福島 正和（ふくしま まさかず）	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
中村 华人（なかむら はやと）	八戸市博物館
滝尻 侑貴（たきじり ゆうき）	八戸市博物館
野田 尚志（のだ たかし）	三戸町教育委員会
山川 純一（やまかわ じゅんいち）	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
吉岡 由哲（よしおか よしあき）	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

紀要 第38号

（平成30年度）

印 刷 平成31年3月15日

発 行 平成31年3月25日

発行 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 有限会社ジロー印刷企画

〒020-0066 岩手県盛岡市上田2丁目17-4

電話 (019)651-6644

BULLETIN OF THE
RESEARCH INSTITUTE
FOR CULTURAL ARTIFACTS
VOL. 38

CONTENTS

Articles

- A study of Daigi8a pottery from coastal area in Iwate Prefecture
- A case of Hamakawamesawada I site -

SUHARA, Taku

- Artifacts in Relation to Clay Figurines in the Tohoku Region of the Final Jomon Period(4)

KANEKO, Akihiko

- A Study of Red Colored Pottery from Kofun Period to Heian Period in Iwate Prefecture(3)

YONETA, Hiroshi TAKAHASHI Shizuhiko KAWAMOTO, Junichi

- A Study of techniques for making Hajiki earthenware in Iwate

FUKUSHIMA, Masakazu

- Nanbuyashiki in Edo(2)

- A Study of Morioka Clan Nanbu Family Edo Kamiyashiki (2) -

NAKAMURA, Hayato TAKIJIRI, Yuuki NODA, Takashi

Notes

- Pottery Paste of Jomon ware Excavated in Iwate Prefecture(5)

KAWAMOTO, Junichi

- A Drain Connected Dwelling Pits(3)

- On the Waga, Hienui, Shiwa County of Ancient Mutsu Province -

YAMAKAWA, Junichi

-
- An Introduction to Historical Material entitled "Touji Shiki Yuisyo" which is held at Matsuo shrine, Morioka

YOSHIOKA, Yoshiaki